宗教

合本第壹册

（自第一號至第六號）

U. S. L. DUPLICATE SOLD.

From Rev. Clay MacCauley. 1901
VII I–IX

主義之宣言

宗教は上帝を知覺し、自ら神意と信ずる所に從ひ、生活の方向を決する所のものなり、

「宗教」はユニテリアン弘道會に於て發行し、其目的は純正宗教の智識を明にし、實踐を勵まし、之れが改良進歩を計るにあり、元來ユニテリアン教は、宗教上の一運動にして、其本源と歴史とに於て基督教たり、然れども「宗教」は、決して表題に掲げたる潤大包容の名目に背き、一宗一派に偏するものにあらざるなり、

ユニテリアン教は、基督教の自由及び進歩的發達にして、普及倫理及び普及宗教と、異名同義たらしめんとの希望を有す、故に曰く世界の宗教は、千差萬別各其形狀を異にすと雖ども、均しく是れ圓滿なる一大宗教の一面に過ぎざるなりと、されば、ユニテリアン教徒は、誠實に上帝を尊崇し、宗教的智識と生活とを探求するの徒に向つて同情を表し、交友たらん事を希望するものなり、

日本ユ[illegible]教徒は、[illegible]上帝の天父なる事及び人類の同胞なる事を信じ、此雜誌を奉じて以て完全なる至眞と正道との本領を、世界に擴張せんとす、

余輩は「ユニテリアン」教の何者たるを一層明瞭にせんが爲め、左に該教徒基本の主義及び其普通信仰を記せん、

ユニテリアン教
基本の主義

一基礎　ユ教は口碑の教權によらず、合理的大道、科學的眞理を以て基礎となす、

二方法　ユ教は全く自由討究を以て方法となす、

三目的　ユ教は個人的及び社會的たる人類の德性を最も高尚に發達せしむるを以て目的となす、

ユニテリアン教徒
普通の信仰

一ユ教徒は信ず、宗教は人類の上帝に關係する所以及び人類の義務（上帝の意志とも稱すべき義務）に關係する所以を自然に表明するものなり、

二ユ教徒は信[illegible]の教理に於て上帝[illegible]人類を同胞となすの[illegible]

三ユ教徒は信ず、上帝[illegible]の權力、智惠、慈悲に[illegible]界、精神界の源泉、教導者なり、

四ユ教徒は信ず、人類は神造[illegible]最も高大なる生産なり、人類[illegible]發達すべき智力と精神とを賦[illegible]せられ、宗教的及び道德的感情[illegible]を有し、併せて上帝を知覺し、生命無窮の希望を有す、故に曰く人類は上帝の子なりと、

五ユ教徒は信ず、舊新約全書は人類幾多の著書を蒐集せるものにして誤謬の存するあるも人類の宗教的性質を表明せる最良の書籍なり、

六ユ教徒は信ず、基督は精神界の最大なる豫言者なり、宗教上の發達に於て人類を導きたる諸師の最高なるものなり、

七ユ教徒は信ず、諸宗教は皆優劣の差あるべきも、其本源同一にして、其目的も實際同一なるを以て互に敎友なり、

X 288.11
S1 v.1

宗教 第七號（明治廿五年五月五日）

社説

上帝の信仰

クレイ、マッコーレー

何如なる宗教も、其適當なる定義の基礎に於て、上帝の信仰を有せざるはなし、野蠻人が自己を助け自己を害する不可思議なる無數の權力的生物、其身邊を圍繞せるありとの不完全なる信仰を有するも、近世哲學者が「考ふれば考ふる程、不可思議なるもの丶中に一箇の絶對的確然たるものありて存ず、蓋し人類は常に萬物の因りて流出する所の無窮悠遠なる勢力の面前にあるなり」との高尚なる信仰を有するも、同じく上帝の信仰に外ならざるなり、されは宗教の確信は自然に上帝の信仰を以て初まり、上帝を以て基礎となし源泉となすや明なり

人若し余輩の宗教は何如なる信仰を基礎とするか、簡單に述べよと謂ふ者あらば、余輩は謂はんとす、余輩の信仰は、宇宙の最も明確なる智識と原理とに因りて説明せられ、最も發達したる道德的感情によりて要求せらるゝものなるを要すと、請ふ余輩をして少しく論ずる所あらしめよ、人心に於ける上帝の知覺は、設令ひ默示なりとなすも、公明正大の心を以て人類の歴史を闡究せば、此の知覺なるものは、常に世界の輿論と其現象とに關し、人類の道德的要求に關係するものなるを知るを得ん、神學の歴史は人類の智識及び希望の漸次に生長せる歴史なり、近世に於て宗教と科學との衝突を論するもの少からす、然れとも決して二者の間に眞正の衝突あるにあらざるなり、時に此の如きの觀ある所以のものは、唯、世界及び其權力に就きて未開人の意見より發達したる宗教上の組織と、一層成熟したる哲學及ひ科學との衝突たるに過ぎざるなり、宗教の組織は其性質上保存的たるを免れず、進歩的の科學と衝突する者は實に此の宗教的組織なり、否此衝突に於て戰沒する者も亦た此の宗教的組織なり、然とも宗

敎的組織の戰沒は未だ宗敎的智覺其れ自身を戰沒せしむる所以にあらざるなり、夫れ宗敎の運命は明確なる學術より結果する宗敎的智覺の如何によるものにして此智覺や智識の進步に伴ふて、益々其光輝を發し、人をして上帝の智覺以外にあるを得ざらしむ、請ふ其理を語らん

遠く古代に遡りて之を見るに人類なるものが小團躰をなし山に圍まれ河に隔てられ沙漠に限ぎられ海に制せられ全く小天地に割居せるの時に當り彼等の世界的智識は穴居の周邊及び獵野より得たる小經驗に過ぎす其相傳の口碑は最も簡單に最も神聖なり此の原人時代に於て余輩が今日呼びて以て上帝となす所の高等不可思議なる現躰の思想彼等の中に存在せしとなすも余輩は其然る所以を發見する能はざるなり今日余輩の想像をして信ならしめは原人は不可見の空中に自己に類似せる無數の現躰住居せりと思へるもの丶如し原人其狀恰も小兒に類し其思想に宇宙なく若しくは又た之を支配する權力なく創世なく造物主なく自然界なく自然界の主宰者なく世界なく將た又た上帝なかりき原人は日々唯露命を繼ぎて生活せるのみ彼等は暴風怒濤の其意に從つて制す可からざるを見るも其何故なるかを說明するとなかりき否其是れありとなすも是等の現像は自己に類似せるもの丶所作なり人目に觸れざる諸人の働きなりと思へり彼等の解釋は善く彼等の思想感情に適せしなるべし彼等の同輩甚た多く世界の事件亦た甚た多しされば彼等は見へざる現躰も亦た甚た多く其事業も亦た甚た多かるべしと思へり彼等及び其同輩には善をなすものあり惡を行ふものあり故に彼等は空中の鬼神にも善をなすものあり惡を行ふものありと思へり何となれは彼等の思想には人類と鬼神との間たに特別の差あるを發見する能はざればなり故に原人は慈愛なる鬼神を愛し猛獰なる鬼神を惡めり是れ原人の鬼神に感謝して其愛を請ひ又た之を欺きて之を破壞せんと企てし所以なり然とも此等の隱れたる現躰は常に原人の見る能はざる所に見るの能力を有し原人をして終に鬼神の勝服し難きを知らしめ鬼神の權力の恐るべきを覺らし

め終に人類をして漸次に鬼神に從順なるの習慣を造らしめ其心性をして後世の崇拜を形成するに至らしめしや必せり茲に人類古代の思想と感情とに就きて多辯を費やすは無用なるべし唯余輩をして人類の小兒的時代に於ては萬事萬物皆小兒的解釋なりしを理解せしめば則ち可なり

原人時代を經過して人類の思想稍發達し世界の思想神の思想に到着せんには其間た幾多の年月を經過せざるべからず又た幾多の經驗を積まざるべからず種族の大結合なからざるべからず山海を越へ沙漠を橫ぎるの移住なからざるべからず特に口碑ありて過去の出來事を保存せざるべからず、茲に於て社會初めて組織せられ、法律の思想、秩序の思想稍發達し、周邊の智識、明確なるに從ひて、世界の觀念其萌芽を發し、種族は組合となり、同盟となり、離兒的國民となるに至れり、人界此の如く秩序の整頓するに從ひ鬼神界にも亦た秩序、階級及び法則を要し古代の酋長死して尚ほ鬼神界に長たりとの口碑より此等の酋長一躍して超自然の現躰となり終に諸神となり其生出は現世界に起りしものにあらずとなすに至れり

年月の經過と共に人類漸次に其智識を進め古代に於ける口碑のみを記憶し實際の出來事は是を忘却し地球に就きて蒼穹に就きての智識大に進み或は想像すらく某處に一大世界あり是れ見ざる所なく萬方を管理せる唯一神の住所なりと斯の如きはヘブリウ人が唯りカナーンを以て耶和華の地となし、他の諸神は他の陸地を支配するものなりとの古代の信仰より一躍して「地球及び其中に滿てる諸物は皆耶和華の物なり」と謂へる一大思想を顯はせるものなり、此信仰は歷史的に人類の宗敎的實驗を示すものなり、換言せば人類は其何たるを問はず、槪して唯一の上帝を信ずるか若しくは又諸神の王を信ずるか二者の一に達すべきは人類各種族の歷史に於て明瞭なる事實なり、其信仰茲に至れば、優劣の差こそあれ、實際の唯一神敎、數代の間だ、宗敎上に超然たりしなり

故に余は宗敎の基礎たる上帝の信仰を告白するに當り

云はんとす余輩は唯一の神を信ずるものなりと然ども余輩の一神信仰は如何なる形躰をなせる？是に對へんには先つ從來人類は如何なる信仰を有せしかを追跡せざるべからず歴史的一神論は人類が世界及び其希望に就きて有せし思想なり今人類が原人時代より進んで自然界を以て天上に生活せる一神の領分となせし時代の神學を觀察せよ此時代の神學は皆地上の物を以て上帝の性質を解釋せり人類社會は凡て地上の王の制御する所たり故に神學に於ても上帝萬物を支配せり地上の王は其敵を有せり故に神學に於ても上帝其敵を有せり地上の王は勅令を發せり故に神學に於ても上帝勅令を發せり地上の王は其領分を觀察せり故に神學に於ても上帝其領分を觀察せり地上の王は軍人なり故に神學に於ても上帝は軍人なり地上の王は其愛族の爲めに戰へり故に神學に於ても上帝は選民の爲めに戰へり地上の王は嫉妬、寛恕、復讐、慈愛の性質あり神學に於ても上帝又た斯の如き性質を有せり地上の王は宮殿を出で丶時に其領分を巡廻す故に神學に於ても上帝は時々天國なる住屋より下りて地上を巡廻せり上帝の政治は三四年以前の埃及王の政治と異なるとなかりき

數百年の經過に因りて人類の思想廣濶となり其理想も亦高尚となり從つて神學も漸次に之れが反射を受くるに至れり見よ社會一段の平和を進め生命の苦難稍除去するに及び神學も亦た其影響を受け此れが發達の順序も、稍精密に、談話に於て保存せられ、書術の發明と使用とは口碑に新勢力を與へ數代の間蓄積せられたる古代陳腐の上帝の思想は數々信仰者中に分離を生じ時々新智識の練磨によりて新成せし新信仰と共に聖書として後世に殘るに至れり設令ばヘブリゥ經典に於て耶和華は或は戰神として記せられ或は平和の主として戴かれ此處には嫉妬深き上帝として書かれ彼處には堪忍、寛容の神として記せられ或は選民の勇者をして敵軍の赤兒をも殺さしるの上帝と記せられ或は慈母すらも其兒子を忘るべき場合に尚ほ其選民を記憶するの神として表はさる、實にヘブリゥの聖書は人類が年代の經過に伴ひ漸次に其確證、希望、及び理想を高尚にせ

し記念文なり而して此等幾種の信仰は今日尚ほ人類多數の中に存し數百萬の人民に與ふるに上帝に於ける信仰の形躰を以てするものなり

余輩をして一歩を進め歷史の他面を觀察せしめよ此宇宙に就きての思想最も非常なる變化を受けしは三百年以前なりきコパーニカス地球運動說を唱へ太陽及び諸星は決して地球を中眞として回轉するものにあらず却つて地球は太陽を回轉しつゝあるものなりとの新說を主張し、ガリレオは望遠鏡を製して天空を窺ひ、古人の諸恒星諸遊星を以て天圈の各處に排列せりと想像せし迷語を破り、天空は斯の如く狹隘淺近のものにあらざるを明にし、ケプラーは遊星運動の法則を發見して蒼穹の古說を打破し、ニユートンは重力の法則を明にして理學的勢力の本性に關する新思想を與へ、三千世界勢力の同一なる所以を明にし、地球一周せられて淨土の山地獄の窟あるべしと想像せし古人の迷を解き、上帝の玉座あり、天使の領地ありと想像せし天國も消失し去れり、是れ豈開化人の思想に起りし古來未曾有の智力的變化にあらずや

新科學の進步に伴ふて各自の信仰大に古代と其趣きを異にし、何の處にも中眞あり何の處にも周邊なき宇宙に於て神獨り其中眞に位し玉座に在すの謂れなきを思ひ、自然界は何れの處にも際涯なきを見て、神力神威の實現せざるなきの信仰を生じ、此の在らざる處なき、能はざる處なき、神の新思想と共に、舊一神論の王統神學は實に其根底を弱め、數々左の疑問を生ずるに至れり、曰く口碑的上帝は之を合理的に思考し得る？上帝と世界との間だ確然たる分界ありて存する？と明確の心識を有する者は皆口碑的宗敎を排擊し人類墮落說、惡魔の信仰、神人降生の說、贖罪の理、耶蘇の救職、天國及び地獄、現世界に於ける上帝の王國等の敎理を以て悉く上帝の權力を有限となすより起り、人類及び世界を以て空間に於ても精髓に於ても遠く上帝と隔絕せりとの、語想より起りしとなせり、此の神學今日と雖も多少存せざるにあらず、然ども過去二百年の歷史は舊組織と新宗敎的智覺との爭鬪にして舊信仰漸

次に勢力を失ひ新信仰漸次に勢力を得るの時なりき余は今信仰に就きて對ふる處あらんとす余は初めに於て上帝に於ける信仰は宇宙の最も明確なる智識と原理とによりて説明せられ最も發達したる道德的感情によりて要求せらるゝものなるを要すと述べり今若し余輩は「萬物の源泉たる無窮永遠の勢力」に於て信ずと云はゞ是れ唯上帝に於ける信仰の科學的表號にして漠然たるを免れず余輩は大自在力者たる上帝に於て信し、到る處に存ぜざるなき完全なる現躰に於て信じ、宇宙の源泉たる生命たる上帝に於て信じ、自己の創造たる表顯たる宇宙を自己の中に包含せる上帝に於て信ずるものなり、余輩の見る所を以てすれば、上帝は宇宙に於ける根原的直接的の權力及び動力なり、上帝は萬物の實質及び生命なり、上帝は代理的の權力を用ゐず、自ら一切の權力となり動力となり、小は日光に於ける小塵より、大は虚空の雲霞に至る迄、其創造を指揮するものなり、設令ば「光線分拆機を以て之を撿し、地上に於ける分子も、諸星に於ける分子も、其振動の步調異なるなきを知り、若くは又た空間の各點に於ける一打は、凡ての方向に分派する無窮の振動に音響を傳へざるべからざるを知らば、此宇宙を以て一箇の死塊にあらず無窮の生命なるを知るに足らん」然り人類の住する此の小遊星の運動も望遠鏡の達し能ふ最遠の空間に懸る小點の運動も共に完全なる諸勢力の組織躰をなすとせば余輩は驚愕して眼目を閉ぢ萬能の權力萬物に充滿せりと謂はざらんと欲するも得べけんや人若し一粒の砂礫も、一人の小兒も無究の生命、無究の勢力以外に出つる能はざるを知らば、何人か永遠無究の現躰、吾人を包圍せるを曉らざらんや、余輩は凡て諸太陽、諸星と其實質を分有するものなり、余輩は諸分子、諸星宿、其他萬物と結合せらるゝものなり、斯くして宇宙なる語は新鮮光榮なる意義を顯はし、世界の法則及び秩序は上帝其意志を動かさしむる所以にして百年も一瞬も共に神聖なるを知るに足らん

上帝に於ける新信仰人類經驗の舊問題及び不可思議に對して新解釋を要するに至れり、今茲に上帝の世界及

び人類に關係する所以を詳述するは問題外に渡るを以て之を論ぜざるべし、然ども余の信する所を以てすれば此の新信仰は古人の心情、智力を痛めし不幸、難澁、罪過等の舊問題に就きて高尚なる解釋を與ふるものなり、余は信ず「然ども上帝は善なり」との過去の喚びは最も高尚なる意味に於て未來の宗教より發するなるべし、今日は廣大なる解釋の來らんことを望むの時なり、余輩は實に古代野蠻人の上帝を以て猛惡なり、復讐的なりとなせし所のものを以て正實となす能はざるなり、何となれば若し之をして眞ならしめば、今日發達したる人類の高尚なる德性は、上帝を以て人類の靈性に劣るとなすべければなり、然ども余輩は叉た新信仰に於て其反對に出で、上帝を以て最も温順なる人類の理想となし、温和、柔順、慈愛となす能はざるなり、何となれば若し此をして眞ならしめば余輩は自然界の猛獰及び死に對して、人類の罪過及び苦難に對して、恐るべき衝突を見ざるべからざればなり、新信仰に於ては、罪惡、苦痛及び死を以て上帝の意志の如何に關はらず、世界に成立するとなすも然も此れ却つて正義平和をして、一層勢力を得せしめんが爲めの方便たるに過ぎすとなすものなり、過古に於ては世界の悪事を以て悪魔の謀叛となし、遠地の上帝之を管督する能はずとせり、然ども余輩の決論は斯の如くなる能はず、余輩はカルヴヰンより嚴密なる意味に於て、宇宙は絕對的に上帝のものなりと決論せざるを得ざるなり、而して宇宙を以て上帝のものなりとせば如何ん？然り自然界と人類とを造り之を管督するの現躰は必ず其性質に於て被造物より小なるべからず、若しある動物にして慈愛、仁惠、純粹のものなりとせば造物者は其他に幾多の如何なる性質を具ふるとなすも被造物より小なる能はざるや明なり余輩の信仰は此の謹慎にして奪ふべからざる倫理的道理の上に確然たる希望を置くものなり、余輩の生命には罪過、苦難ありて、不可思議の觀をなすと雖ども、充分の時と充分の觀察とを與へば萬物は宇宙の部分若しくは分秒にして各自皆最良の標的に到着すべきものなるを知るを得ん、余輩にして僅

か一生の經驗により、神謀全躰の批評をなすあらば愚の極とや云ふべき、余輩にして人類及び凡ての生活を以て無窮に此の世界及び他世界に群起せる神意の運動となし、一層善美なる、一層平和なる、一層完全なる目的に向つて進行するの道途にありと信ぜば、是れ最とも確然たる信仰にして今日此に優るものなかるへし

此れ余輩の論理上來るべき結論にして此にあらざれは他に完全なる信仰ある能はざるなり此結論を否定するは總て當今の智識を否定する所以にして人類最高尚の法則及び道德的理想を破壞する所以なり、余輩は萬物の流出する無究永遠なる勢力の生産なり而して原因と結果とを較せば、前者の後者より大なるや論を待たず、夫れ人類若しくは他の受造物にして、慈愛の性質を具ふとせば、上帝は決して悪意を有する能はざるべし、然ども此意志、此勢力、此上帝、此無究なる天父が萬物をして共動せしめ全智全愛に劣らざる目的を成就しつゝあるの實績は濶大なる眼光を開き充分の年月を以て深く之を討究するにあらざれば曉る能はざるなり

余輩は此の如き嚴格高尚なる信仰の頂點に達せり此の如き上帝の思想は余輩宗教定義の基本にして人類の最高哲學及び科學と最深の道德的感情とに照らして而して後に得たる結論なりとす余輩は信す基督教國及び世界の宗教的組織は早晩此の信仰に歸着し過古幾百年の間だ盛衰榮枯したる諸教會再び眞理の光明によりて新鮮活潑の働きをなすべきなりと

余は此の論文の初めに於て近世哲學者の宣言を引用せり今此文を終るに當り余をして當時最も明確なる詩人の語を引用せしめよ其意に曰く

上帝は愛に於て涯りなく生命に於て限りなし」萬物の運動する所以は唯一の上帝、唯一の法則、唯一の原素、高遠なる唯一の出來事によらざるはなし

論林

基督教を入るゝの必要

丸山通一

卑きは木石を崇ひ、禽獸を齋き祭る、通俗の物象崇拜教より、高きは涅槃寂滅の空理を唱ふる高妙の理性教に至るまで、凡そ天下宗教の諸現象を網羅して殆んど洩らす所なき我が日本の宗教界に更に一の基督教を入るゝの必要ありや否や余謂らく有り

基督信徒にして已に基督教の自餘の諸宗教に優ることを信ずる者は素より余の有りと答ふるを怪まざるべし然れども局外に立ち常に猜疑の眼を以て我が基督教の動靜を注視する者に至ては決して余が單に有りと答ふるを以て足れりとせざるべし茲を以て余は試に歴史上の觀察に基き二箇の點より新宗教を入るゝの必要を明にせんと欲す

神隨言擧げせぬ、上古我國の習俗の如何ばかり淳撲にして愛すべかりしや、詳くは得て知り難けれども、舊志の傳ふる所に據れば、文化尙ほ遙に大陸に及ばず、從て風俗亦猥雜の跡少からざるもの丶如し、應神以後漸く大陸の文化を輸入するに及んで、儒教亦其德化の効を收むるに至れり、上下の俗茲に至て大に見るべきものあり、後ち繼體を經、欽明の朝に至て、更に佛教の輸入あり、玆に至て制度文物大に光彩を加へ、技藝文學頓に面目を一新せり、是より以降千載の文化、實に是等儒佛の効績に因ること多し、若し神道の外儒教の入ることを許さゞりしならんか、若し儒教の外佛教の入ることを許さゞりしならんか、豈に我今日の文化の良俗あるを期すべけんや、新宗教を入れて我國の文化習俗を利するは、歷代朝廷の執て以て國是となせし所なり、祖宗の餘澤に潤ふ者濫りに千載の國是を革むべからず、是れ一なり

凡そ一大變遷の時機に際し、新奇の思想風俗其勢を逞ふするに當てや、能く古來普通の規矩を以て人心を修むべからず、故に昔日大陸の文化を輸入するに當りて

も、必ず之に相恰好する宗敎を入れて、新奇の思想風俗をして時勢の變遷に乘じ其暴威を逞ふするなからしめたり、是れ實に歷代朝廷の執て以て國是とせし所にして、又今世の則とるべきものなり、維新以降上下競ふて泰西の制度文物を輸入するに及んで、新奇の思想風俗忽ち大勢力を逞ふし、風敎の秩序俄然として破ぶれ、復た舊來の規矩を以て律すべからざるに至れり、今日の策泰西の文化と相倚り相待ちて發達せる宗敎を入れ、新奇の思想風俗をして濫りに其の暴威を逞ふせしめざるにあり、是れ二なり

夫れ我大八州の國躰は、鎖國攘夷の陋習に因らず、故に天下の時勢を追ふて宇內諸邦の文化に後れざらんことを國是とせり、若し夫れ物質的の文化を輸入すると共に、必らず風敎の基礎を輸入せしに至ては、祖宗の明達遠慮たる所以なり、經世に志あるもの、豈に思はざるべけんや

吾儕の好侶伴救世敎出づ

土谷忠治稿

人其友の晨星の如きを見れば、以て德の薄きを知り、森々として其多きを見れば以て其人の德望を知ると、宜哉言哉、人類は固より無望無欲の者にあらず、常に孜々汲々として、幸福を得ん事を是れ務む、故に人各其幸福の爲には東奔西走して、恰も蜒蟻の一食に群り、大河の低に就くが如し、依之德大なれば隨て其友の多きを知り、其友の少きは德の薄きを表白する者なるを知る、其德と云ひ、幸福と云ふそも何ぞ、小人の以て幸福とする所、君子は反て之を厭惡し、君子の德とする所、小人却て之を忌避し、各其見る所によりて、幸福の解釋も自ら異なり、之れ其者の異なるにあらず、唯見界、識量の異なるのみ、眞理に至りては、古今不變一確なる者なり、

歐陽盧陵論曰、大凡君子與君子以同道爲朋、小人與小人以同利爲朋、此自然之理也、然臣謂、小人無朋、惟君子則有之、其故何哉、小人所好者、利祿也、所貪者、

貨財也、當其同利之時、暫相黨引、以爲朋者、僞也、及其見利則爭先、或利盡則交疏也、甚者反相賊害、雖其兄弟親戚、不能相保、故臣謂小人無朋、其暫爲朋者、僞也、君子則不然、所守者、道義、所行者、忠信、所惜者、名節、以之修身則同道而相益、以之事國則同心而共濟、終始如一、此君子之朋也」と、其小人と君子との交義相排反する如此、之小人は利祿貨財を以て無上の幸福となして之に奔り、君子は忠信、仁義を以て無限の珍寶となして之に就く所以なり

小人の交りと君子の交りと何れか吾人の欲する所ぞや、論語曰「富與貴是人之所欲也、不以其道得之不處也、貧與賤是人之所惡也、以其道得之不去也」、又曰、「不義而富且貴、於我如浮雲」と、富貴固より欲せざるに非ず、貨財固より貴からざるに非れども、忠信仁義に如かざるや遠し、然りと雖も、世の庸惡陋劣の徒は、之に反して、道義忠信名節の貴ふべきを知らざるに非れども、金錢財寶の爲に目眩み心迷ひ、眞の利害得失を判別するに遑なく、遂に目前の快樂を來す資料たる金錢財寶を採て、永遠の利益、未來の幸福を度外視するに至る之古人をして、此言をなすの止を得ざるに出でしめたるなり、論語曰「朝聞道、夕死可矣」と、然らは「朝知無限之珍寶非利祿財貨、夕死可矣」と云ふも、敢て古人の言に反せざるなり、吾儕は小人の交をなして榮耀を圖らんよりは、寧ろ君子の交をなして窘困するの優れるに如かざるを知る、故に吾儕の友とする所の者は、便辟便佞善柔の徒にあらず、曾子曰、「君子以文會友、以友輔仁」と、吾儕は是等の資格を有する人をば、其何人たるを問はず、之を入れて友とし、之を迎へて朋となし、敢て其異種内外の區別を立てんや、中庸曰、「寛裕溫柔、足以有容也」と、是等の覺悟は常人に於てもなかる可らず、况んや人の先導を以て自ら任ずる宗教家、教育家に於てをや、吾儕の友を求むるに孜々たると共に、其容るゝ所斯の如く寛大なり故に其朋たるや地球上の人皆然り、其要求する所斯の如く遠大なり、故に其友たるや甚尠少なり矣、

此時に當り、吾人ゆにてりあん教徒の要求の一部を滿

足せしむる所の一信友、朋黨を得たり、吾儕の喜悦、何物ぞ之に如かんや、夫れ何とかなす、一の新佛敎徒なる大道長安氏の唱導する救世敎之なり、吾儕の今救世敎を好伴侶として目するは志を同ふし、道を同ふするを以てなり、然れども吾儕固より救世敎と徹頭徹尾同意なるにあらず、唯其說く所の一部に於て吾儕の說に合し、從來の佛敎に超絕すること數層なり、之吾儕の好伴侶となす所以なり、孟子曰、「責善朋友之道也」と、今吾儕の不敏を顧みず、之が論評を試みんとするは、此意に外ならざるなり、　吾が親愛なる救世敎徒諸君よ、吾儕を固信的基督敎徒となすなかれ、　吾が尊敬するゆにてりあん敎徒よ、吾人を目して佛徒となす勿れ、吾儕は無偏無黨の筆を以て批評を試みん、諸君幸に無黨無偏の眼光を以て照覽せられよ、

救世敎徒宣言して

曰く「唯妙の觀世音菩薩を以て本尊とす」

吾儕は此條に向て直に贊否を表せざるべし、固より有形の佛像畫像等に向て信仰を捧呈せず、唯無形の觀世音菩薩に向て信仰を表するのみとは、若し其本尊の解釋をして、吾儕の唯一の神たらしめば、常に贊する所なれども、若し否とせば大に反論せざるを得ざるなり、今爰に其解釋を下さずと雖も、以下條を重ね、項を累みて記するに於ては自ら明かなるべし

曰く「妙經觀音普門品經一卷を以て正依經とす」

吾儕は總て信仰の中心を眞理に置かんとするなり、其眞理は吾人の依て以て生活する所、禽獸草木の依て以て生を有する所、宇宙の萬物皆其眞理內に支配せらるゝなり、然れども今日吾々の確信する理學的眞理は、果して吾儕の云ふ眞理なるか、非眞理なるか、過去の經歷に由て考ふれば、未た以て萬世不變確竅なる眞理として信ずべからざるなり、見よコロンブス以前に於ては、此世界を東大陸諸洲のみとして亞米利加洲の如きは夢想だにも及ばざりし所なれども、夫れを以て、既に地球の陸地を悉くせりと信じたるにはあらざるか、蒸氣機關の發明以前は、馬車の如きを以て、迅速なる旅行、運搬の要器と信じたるにはあらざるか、心理の硏

究猶足らざるの以前に於ては、夢幻は心に一の幽躰ありて、睡眠中他鄉に出遊すると信じたるにはあらざるか、其時代に於ては、必ず夫れを以て眞理と爲し、之に疑を容るゝ者とてはあらざりしなるべし、然れども今日に於ては、既に其非眞理なることを知る、　宇宙は今日に於て、停滯し進化せざる者と信ずる人はいざ知らず、益進化することを知らは、今日の眞理、明日の非眞理たるに至らんかとは、識者を待て知るべきにあらざるなり、言ひ換ふれば、古代眞理の若干部は今日の非眞理たり、之を推して今日の眞理若干は未來の非眞理なりとは、論理上疑ふべきにも非ざるべし、　依之考ふるに、今日諸君の完全無缺として貴重する所の妙經觀音普門品經と雖も未た以て萬世不變潤大無窮なる者と斷言し難し、之れ正依經を設けて、其れ以外に講究を求むるを抑壓するに至りては、未だ其迷信の議を免るゝを得ざるなり、正に此宣言は吾儕が信仰する所の「全く自由討究を以て方法となす」と云ふに反せり、

曰く「念聖解脫の妙義を以て安心とす」

是れ吾儕の所謂、神の力を發見して、晴天白日の境遇に至りたる者にして、人の生を見ては怡々然たり、死を見ては慘然哀乎たるは、一に賤劣なる肉躰の盛衰にのみ注意するによるなり、肉躰の盛衰固より意に介するに足らずと云ふにあらず、之唯一時の出來事にして、眞の快樂は斯るものにあらず、救世敎の所謂念聖解脫の妙義を得て、慧日諸の闇を破るを得たるの高尙無限なる安心立命には如かざるなり

曰く「仁者とは身を殺して仁をなすの意味にして淨聖の代理を勤むる傳敎師たるの大任を有する者なり」

此宣言に就ては吾儕固より議論なしと雖ども唯望むらくは其注入の意味にあらずして協同一致以て救世敎の所謂淨聖の許に近かしむるを計り敢て我意を以て之を抑壓するを好まざるなり

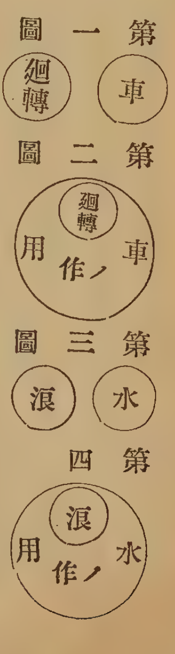
宣言して曰く「心法不二」と

救世敎徒又其宣言を釋して曰く、所謂心法不二とは心を離れて法なく、法を離れて心なく、心即ち法にして

法即ち心なりと、之れ果して眞理に合する歟、請ふ先つ吾儕をして自由に心法二字の關係を論ずるの光榮を負はしめよ

廻轉と云ひ車と云ふ一見其別を知るべからず、水と云ひ波と云ふ亦其異なるを發見すべからず、心の顯象と心とに於ける、筋肉と活動とに於ける亦然り、夫れ然り然りと雖も兩者自ら別なきにあらざるなり、　請ふ熟慮せよ、廻轉と云ひ波浪と云ふ之れ一時の現象のみ作用のみ、之れを以て其一定不變不動たる本躰の車、水と同一視すべからざるは三歳の童兒も猶能く之を知る、然るを彼れ救世教徒の唱ふる處を聞くに是を以て直に廻轉は車なり、波浪は即ち水なりと云ひ、又進んで車と廻轉とは同一物なり、波浪と水とは不二なりと斷言するに至りては、吾儕其心の存する處を知らざるなり、其迷信を憐まざるを得ざるなり、　然れども斯る不敬不遜の語を發するは吾儕の好む處にあらず、唯吾儕をして發するの止を得ざるに出でしめたるなり、請ふ少しく反省せよ、

今之を論理の圖式に創るに



のみ、決して同一に非らざるなり

廻轉せずと雖も車は車なり、豈車は則ち廻轉ならんや、唯廻轉は車に依て起る者にて決して離るべからざるを知るなり、水と波とに於けるも亦然り、水直に波ならず、水の作用即ち波浪のみ、波なしと雖も水は恒存にして廻轉なしと雖も車は永久存在するなり、不二論者の如く水と浪、轉と車を以て同一物となさば何ぞ殊更に心法二者を設けて論究するの必要あらんや啻に必要なきのみならず、到底之を言ひ能はざるなり、今爰に一洋犬あり、其名をチンと云ひ又カメと云ふと假定せよ、カメの講究とチンの講究と異なるかチンとカメとの講究を二途にし能ふか、其異にせざる所以、其能はざる所以は、眞に不二同物なるを以ての故なり、同一

物の不二なる斯くの如し、然るに水と波とは異にして講究し能ふにあらずや、啻に能ふのみならず異にせざるを得ざるなり、水は即ち酸素と水素とにして波は即ち然らず、酸素と水素との化合の上に更に或力の加はるを要するなり、今酸素を a とし水素を b とし或力を c として之を算數式にて表はすに

$a+b=x=$水　　$a+b+c=y=$波

$\therefore x=y-x$　　$y=x+c$

右の結果にして何れの點より視察を下すも其一致せざるや明かなり、之をしも不二と云ひ得るか、之をしも同一と論じ得るか、之を口にするに於ては其妄も亦甚だしと云ふべきなり、然れども吾儕固より水と波とは全然分離すべきものとは云はず、波は唯水の一作用と云ふのみ、心と法との關係に於けるも亦然り、心=法$-x$, 法=心$+x$ にして、法=心 とは何れの點より考察を下すも知る能はざるなり、其 x とは果して何ぞ、此活動ある動物の心なり、法直に活動の力を有せず、心を待ちて始めて其活動を起すのみ、其活動即ち心なること恰も水其物直に波浪たるにあらず、力を待ちて始めて波浪を起すなりと云ふに過ぎず、此項を終るに望み猶茲に注意を請はざる可らざることあり他なし、吾儕斯く論じ來るを以て佛者或は云はん汝の神は即ち宇宙外に存する神にして曖昧模糊として一も採るべきなきものと、然れとも吾儕の信ずる處斯くの如きにあらず、吾儕の所謂神は宇内に充滿するのみ、人、獸、禽、虫、魚、金、石總て之れ神の力即ち神の顯象にして所謂宇宙は即ち神なり、神の力なり、相對的のものにあらずして絶躰的のものなり、　請ふ少しく吾が信ずる所を又講じ信ぜよ大に悟る所あるべし、

又曰く「淨土は極樂より一層勝りたる妙樂世界なり其所以は極樂と云ふ言想も絶へ何とも彼とも思慮分別の立ぬ妙處なり」と

之れ吾儕の常に賛同する處にして彼の所謂淨土なるものゝ眞想は吾人人類未だ以て之を寫し出すべからざるなり、唯吾人は吾人の志想を以て之を假定するのみ、

又曰く「濟度法は普門化益即ち菩薩濟度法なり」と

之れ亦吾儕の持説にして舊存の佛敎の如く一門化益(諸宗の沙門濟度法)を以て甘んじ、又彼の固信耶蘇敎の如く常に口には博愛を唱へ身に履行するに當りては他宗を視ること仇敵の如く、之を遇すること禽獸の如き偏頗を忌避するなり、吾儕は之に反對して普門化益を以て自ら任じ、其職業の何たる其形其心の如何を問はず、廣く衆生を救濟するの組織目的に於て生れたる救世敎に向て大に賛同を表せざる可らざるなり、請ふ該敎徒熱心以て其目的を實行せられんことを、

又曰く「信者平等」と

此信者平等説に於けるも亦吾儕の口にする處にして、敢て其人の何人を問はんや、其人の位置を問はんや、唯其目的を同ふし、其志を同ふする者(外面に之を表出せざるも)皆之れ同じく信者なり、唯一時其異なるあるは一時の迷ひのみ、敢て人類に差異あるにあらざるなり、文を以て君に能く事ふるも忠なり、武を以て君に能く事ふるも同じく忠なり、其外観を以て其中心も亦異なりとするを許さんや、唯其人智の高卑により或は社會の存在を知て眼中國家なきの耶蘇敎徒を出し、或は國家のみを知て社會の存否を知らざる攘夷的論者を出すも、之れ一つに道德を堅固にし、文化を企圖せんとして其進路を誤りし徒のみ、斯る善良なる志想目的を有する人類のなどて攘夷と云ひ忘國と云ふの境遇を呈するか、他なし之れ一時の迷夢なり、迷信より出す處なり、吾儕は之等の人を驅て上帝の眞の力を擴張し吾儕の心と其力を一致せしめんことを企圖せんとするなり、此時に當り同じ此目的を以て立つ處の救世敎の生れしを悦ふのみ、該敎徒に向て大に感謝する處なり、請ふ救世敎徒よ懋めよや勉めよや、

又曰く「行説一致」と

理論(説相)廢すべからず、實行(行相)去るべからず、理論は實行によりて證し、實行は理論によりて進む、兩者相須つ水魚の如し、趙括能く兵を談ず、而して遂に勝つ能はず、水夫能く舟を行る而して遂に言ふ能はず、二者皆誤てり矣、理論固より貴ふべしと雖も實行の伴ふにあらずんば其眞價を表はさず、實行固より貴

ふべしと雖も未た以て足れりとなさず、理論なきの實行は常に人を迷誤に陷らしめ、實行なきの理論は常に人をして迷信に陷らしむ、之れ行相一致すべき所以にして行相一致とは即ち之を謂ふのみ、

又曰く「救世は人世の大目的にして所謂自利利他完全を得せしむる義なり」と

吾儕固より其一身を助け、家族を助け他人を助け又國家を助け天下幷に三千世界を助くるにありと云ふに至りては一介の反意を有たずと雖も其自己に對する務、家族に對する務と云ひ他人に對する務國家に對する務社會に對する務と云ふも皆一つに本心の命令に從ふて行ふ處のみ、本心の外邪に襲擊せられざるの時に惹起せる行爲志念のみ、是等本心の命令を自由に思考し行爲し得る其快樂果して如何ぞや、其幸福果して如何ぞや、之に超過するの幸福は決して他に索む可らざるなり、之れに依て考ふるに人生最終の最大目的は自利利他にありと言はんより寧ろ猶一層高尙廣濶なる意義を有する幸福說にありと言はざるを得ざるなり、救世敎徒夫れ自身も亦言ふにあらずや、慧日諸の闇を破るこれ亦何の幸福なるぞやと實に其幸福の二字即ち最終の目的なり、然れども吾儕敢て自利利他說を反目視するにはあらざることに注意すべきなり

又曰く「救世敎徒は常に眞理を信じ口に眞理を吐き身には眞理を收め心には眞理を念ず」と

吾儕は此最後の宣言に向て大聲歡呼滿腔の熱血を濺きて以て贊同を表するなり、吾儕の斯く贊同を表すると共に大方の諸君をして皆共に眞理の勢力を認知せしめんことを切望するなり

以上縷々數千言一つに處友の信義を盡さんとするに外ならず、請ふ少しく反省以て其短を捨て經に曰ふ所の慧日諸の闇を破るべし、諸君幸に慧日諸の闇を破らんとならば請ふ本誌の宣言及びユニテリアン敎の基本の主義とユニテリアン敎徒の普通の信仰とを玩味せよ之れに勝るの悟道法はあらざるべし

學者の改言

吉村秀藏

余は前々號の「宗敎」に於て學者心事を高尙にす可きを論するところありしが今又學者の改言に就き少しく述ぶるところあらんと欲す

鳧の脛短しと雖とも之を繼ば憂ひなん鶴の脛長しと雖とも之を斷たば悲まなん民を制すると此理に等しと宜哉言凡そ學者にして一說を主張するときは必す之に敵あるを常とす此時に際し反對の說を唱へて抗擊するのみならす論題の稍々重大に涉り反對者にして熱度の極點に達するときは其書を燒き儒を穴にして尙ほ飽き足らさる者の如し遠くは秦の始皇を首しめ近くは歐洲十五世紀の狀況の如く其甚しきに至ては今日に至るも歐洲諸國の新聞記者輩にして文壇の論を決鬪に訴て是非を角ふ者なきにしも非す人類愚痴の極端と謂つ可し或は學者にして一たび世上に流布したる說を改言せさるに於ては其職を奪はれ或は死を以て脅嚇せらる此時に際し改言せんか天理の發見を如何せん改言せざらんか活路を失ひ生命をも失ふを如何せん進退維に谷まる學者の難題蓋し之より大なるはなく學者の決心此時より重きはなし然らば果して何れに決す可きや君子小人の岐路亦た此邊に存す、我輩自ら說なきにあらず請ふ之を述へん、

抑も學者にして敎義の解釋、學術上の發見歷史上探究の末終に一の結論に達し之を書籍に出版して世上に公にするに當り反對者辨駁を以て滿足せす是れか職務を奪褫し甚しきは卑劣にも腕力に訴へ威嚇して以て前言を改めしめんとし中には又親族故舊の窃かに改言を勸誘する者もある可し、此際學者の心中煩悶の如何は吾人の想像のみにても魂消へ膽冷ゆるの念あり況んや其人に於てをや、果ては親類朋友に絕交せられ、終には社會に一身を容るゝの餘地さへなく、自身はまだしものと、柔弱なる、妻子の行末等も案じられ、改言爲したきは人情の常なるへきも我輩の卑見を以てすれば斷然改めす前言を執て動せず確乎不拔の精神を示すこそ學者の本分なるへきを信す如何となれば凡そ敵あれば

必す味方あるは世の常にして世上必すしも百鬼のみの巣窟にあらざるなり然るに一朝死を恐れて前言を改むるとするも敵たるものは此を以て甘んせす倒して蹶るにあらずんば止ます是れ人情なり加之るに我に味方する人々の失望如何計ぞや、所謂虻蜂取らずと成り、果ては世間の嘲弄物たるのみ退ゐて背水に溺死せんより、進て敵と刺し差へるこそ韓信の韓信たる所以にあらずや源義經は逆櫓を附けざりしが故に戰ひ勝利を得たるにあらずや改言して敵に降服を請はんより寧ろ小勢の味方に人望を失はざるの優れるに若かざるなり設し活路を失ふありとせんか宜く潔く首陽山に餓死すべし此の如く論ぜは人或は以て書生論となさん然ども決して然らさるなり如何となれば凡そ天地間に一たび生を得し者にして再び之を失はざる者は有らず是れ生者必滅の理なり榮華人世を極むる雲上の王公も橋下に露命を繼く乞食も早晩地下の土と化するにあらずや、一は疊上に病死し、一は首陽山に餓死す、病も死し、餓も亦死、其死に於て何そ異なるあらん然らば病に死せんより寧ろ功に斃るの優れるに若かざるなり何ぞ權威、門閥、塵俗、の世界に戀々たるを是なさん

ながらふべきか但し又。ながらふべきに非るか
爰が思案のしどころぞ運命いかに拙きもこれに
堪へるがますらをか

、、、、〔中略〕

强者の非道世のそしり驕れる人のはづかしめ思
ふ美人の不深切。緩みすぎたる國の法貴人の無
禮又たとへ。下人とならば善とても輕しめらる
ゝ之を是れ。堪へ忍ふのは何故ぞ〔ハムレツト〕

斯も現世に戀々たる是れ人情の常か、仰で天を望めは日月星辰、莊麗なり、伏て地を察すれば山川草花優美なり、家族の和樂亦た嬉し、然れども今より五十歳の星霜を經るも同し天地の月を眺むるのみ天然は同一の定則を毎年繰り返すのみ天躰の運行、地球の引力の定則に變動はあるまじく只見る社會人爲の事業に變動あると家族親友の離苦愛別有のみ古昔希臘の賢哲瑣格羅抵斯氏の教義一たび社會の容れざるところとなるや終

に死刑の宣告を受く、其友氏に勸告するに死を免るゝの道あるを以てす氏固く辭して曰く吾若し膝を屈し、官吏の足下に垂るれば其生命を救ふを知る、是れ君子の爲さゞる處なりと又曰く齡既に老ゆ、尙ほ生命を延べ得んか、身躰怯弱に精神衰耗し他人の厭ふところとなるのみ、今死を辭せざることそ余の幸福なりと、爰に於て弟子大に悲歎す、氏叱して云く卿等何ぞ余が教旨を解せざるの甚しきや死するに非す眠るのみ、クリトン、尋るに埋葬の事を以てす氏又云く、吾に於て何かあらん、何ぞ此事を尋るや、是れ卿の兼て余が教義を解せざるの證、卿等眞我「靈魂」を捕ふるを得んやと」終に毒杯を擧けて神色自若たると猶ほ常人の葡萄酒盞を傾むくるが如く靜然として死に就くと聖賢の最後何ぞ夫れ偉なるや、

其外ジョンバッスの如き、サウヲナロラの如き、就中ティンデル氏の聖書翻譯を補助したるジョン、ロジョル氏の如きは一朝スミスフヰールドに引き出さるゝや、氣力爽快、人民は氏を歡迎し、夏虫の其れにはあらねど、身を燒く焔にて先つ双手を濯ふと恰も冷水に於けるが如し、クラマ氏の改言書に署名せし右手を先づ焔にて燒盡し而して死に就く、何そ夫れ壯なるや

若し夫れ瑣格羅低斯氏にして義勇を賣て生命を估ふとも之が爲に其教義を傷ひ人望を失ふが如きとは少しも有るまじと考へらる如何となれば非凡の聖賢なるを以て知人擧て其死を惜みたればなり又氏にして死を免かるゝの深意あらば其教義學說を改言せざるも良方法ありしなる可く加ふるに氏にして其生命を延ぶるあらば其教義學說は益々宣傳して其宗徒を增したるや疑なし、然るに強て生を辭したるを以て見れば是より以下に位する學者は生前の賢德を補ひ其學說を益々鞏固ならしめん爲に事と塲合に依れば一死をも辭せざることそ學者の本分にはあらざるか維新の際江戶に洋學者の嚆矢として知られし二人あり、浪人者朱鞘の大小を脇ばさみて此の二氏に面會を請ひしと數々なりと然るに此中一氏は少しも臆するとなく、泰然として面會に應せしと、先年福澤先生の楠公權助論一たび世に出るや、

新聞雜誌類に駁論嘖々たり、或は例の精神家とか、神統者流又はいそのかみふりにしむかしのなつかはしき輩に取りては國家無二の忠臣を堂より下され、切齒扼腕せしなるへし、然れとも先生は恬として顧みす况んや改言抔をや、獨り卓識に富むのみならず、氣慨の高尙なる眞に我邦一流の人物たるが如し吾輩の學者を貴ぶ所以は其人の學識の多少にあらず、人物の高卑にあるのみ、智識の點より論すれは瑣氏もニウトン、エヂソン氏に及ばさるなり、引力の理と電燈あるを知らさるの故を以て氏を聖人と尊敬する能はざらんや、學者にして義氣なきは猶ほ人工の花卉の如し、又た反對論者も學説の爲に脅迫の手段に及ぶとは自己學識の淺薄にして一方論説の眞なるを證する者にして正しく其目的を誤る者なり、學説を擊つには又學説を以てす可し、自ら宗徒を減らし、祖師を草裡に泣しむる勿れ、カルビンはセルビータスを殺したれども三位一躰論は行はれず、羅馬法王はガリレを獄に下したれども地球は四角に成らず、蓋し眞理は猶ほ「ゴム」球の如きか打てば擊つ程膨脹す敢て學者の猛省を煩はす

宗教界能く偉人を容るゝに足る乎

石毛太一

夫れ達人は大觀す錯雜混亂せる社會に立て悠々自若として着々歩を進め其變を察し其機を知るに明かなる凡人の得て知るべからざる所あり夫れ然り之を以て達人の一擧一動は出沒變化極りなき其中に之を貫通せる脈絡を備へ毫も斷絶せざるなり故を以て伸びんと欲するに當て屈し屈せんと欲して伸び人之を呼んで愚と云ひ狂と稱すると往々之れありと雖ども之れ達人の達人たる所以にして世俗の爲に浮沈せず能く社會の大局に立て活劇を演ずるとを得る所以なり」

社會は活物なり其の細胞は時々刻々變化極まりなし而して其變化の及ぼす所遂に社會を一新せしむるは動物界の變化すると異なるなく而して其變化するや次第に進歩するあり退歩するありて數百千年毎に大變動を來

すこと社會發生の常に免れざる所にして社會の事物中或は排除せらるゝあり或は吸入せらるゝ者ありて前後の形狀相比し見るときは人をして驚かしむべき一大異物を生ずることあるは活物界中怪しむに足らざる現像なり達人が活劇を演ずるは此の時期にあるなり之を以て時期到らざるに治平に波瀾を起し全土を覆飜せんと欲するも事成らずして世の嘲を招ねぎ其跟跡概ね世に害をのこし社會を益するなくして已むこと往々あるは時機到らざるに乘ずるを以て悲嘆境裏に墮落するにあり我輩之を稱して小達人と云ふ此の小達人相起り相仆れ遂に撥亂反正の大達人出てゝ五尺有余の軀幹能く天下を覆載し天下を滑動せしめ一たび手を擧ぐれば山川首肯し草木風靡し宇內の事物意の如くならざるなきに至る是れ何を以て然る乎曰く大達人は社會變化の代表者にして數百千年間の社會の大勢化して此の偉人となるによる是を以て社會の大勢偉人を出でしめ偉人能く社會の大勢を達觀する所以にして取も直さず小達人の一起一仆は大達人の出づる原因にてありしなり」

仙郷の夢醒めて古來の所謂豪雄傑士なるもの面名なし七道の名今は昔しの片身なり北は千島より南琉球に至る迄旭光の輝く所我が同胞の來往する所は蜻蜓洲の本領にして宇內萬國は皆な我が交友なり彼の精は取て以て我が足らざるを補ふべし我が長は以て彼に敎ゆべし遂に或は握手談笑或は踏舞夜會に友情を温め益々彼我の胸壁を打壞し以て一大共和の快樂を享くるに至りしは豈に快ならずや我輩不肖と雖ども之を賀せざるを得んや　我が朝の國を建てし以來茲に二千五百五十二年其間英傑の士乏しからざるも其眼界の及ぶ所は坤輿の一局部にして輿地圖上鼠を以て巨象に比する如し其擧其動知るべきのみ然るに今ま坐ながら五洲を算し十數億の我兄弟姉妹と寒暑相通ずべき文明の利器一として備はり設けあらざるなきの時に當り徒に井底の蛙たらんと欲するは我輩の大に取らざる所なり」

是を以て今日なすべきの事業擧て數ふべからず農に工に商に改良すべきの器械發明すべきの新工夫實に傑士の出づるを待ち居るなり而して世人が最も顧みざりし

所の宗教界に至ては我輩が夙とに社會學上の一大疑問として之を探硏するの急務なるを論じ大に世人の注意を喚起せしなり抑も宗教なるものは人類未開の時に發し人種の文野を問はず方今普ねく行はるゝ所のものにして又人生欠くべからざる一大物なり古來より碩學の士之が硏究を試みしもの無數にして未だ其一定の眞理を見る能はずと雖ども彼の宗教は僞なり此の宗教は眞なりと是非論及する能はず彼此相比し互に長ずる所を收集し眞理のある所を極論せざるべからざるや明かなりと雖ども天下人心の傾く所を察するに今日に至り漸く定まれる所あるが如し即ち宗教は口碑によらず迷に陷らず學理に反せず以て所謂神なるものを認め之に從て人生の方法を定むることと之れ宗教の本分なるべし夫れ然り宗教は人生々活の方法を立つる基本なり然るに今日我か社會を通觀するに人々宗教の存在を認むるも之に心を歸するもの少なきは何ぞや曰く封建時代に天下の人心を支配し之か羨望する所のものは農工にあらず學理にあらず宗教にあらず唯武臣の刀鎗を取て修羅道に奔走するを見て快事となし來りしを以て今日に及んで未だ其舊習を洗除する能はずやゝもすれば宗教を以て男子の業となすべからざるものと云ふに至りし所以にして大なる誤解なり」

見よ中世の兵亂極りなき其中を經過し今日迄文學を維持し美術を勵まし來りしものは宗教にあらずや又見よ爭亂止むなく人心殺伐の氣風を以て充滿されし其時に當り平和なる空氣を以て人心を慰めしものは宗教にあらずや又見よ今日併呑社會に立て獨り和氣を四方に傳播し四海兄弟一視同仁の恩澤を以て萬邦歸一の説を主張し鷲鳥の慾を抑へて小雀國の翼を伸ばさしむるもの豈に宗教にあらずして何ぞや宗教の用少小ならざるなり宗教の事業易々なりと言ふを得べきや特に我國今日の有様たる舊來の事物漸く捨てられ新分子輸入せられて新舊相入れず互に軋轢を生じ未だ之を化して其精を吸ひ粹を收むるに至らざるを以て内外新舊の各分子歸着する所なく今日の是は明日の非となり其動搖止まざるを以て人日々に其方向に迷ふは痛く嘆せざるべから

ず夫れ宗教は國民の精神を强固ならしむると歷史上に散見するを得べし先人去り後人來り年過き星移るも依然として變更せざるものは唯宗教の勢力のみ又宗教は道德の根本なれば泰西民族にありては五六才の兒童に敎ゆるにバイブルを以てし兒童は能く好んで之を誦し常に記臆すと去れば歐米諸國の人民は宗教を以て人生欠くべからざるの事となす明かなり是を以て偉人傑士の宗教界より出づると多き所以怪しむに足らざるなり」

我社會の變遷已に此の如し是の時に當り舊習を墨守し更に進取の氣なくんば宇内の精を收めて新文明となし更らに之を宇内に發射するは何れの時なるぞ之れ偉人傑士の出て丶萬世の爲めに新文明を唱へ之を天下に流布するの時なり偉人傑士の舞ふべき劇塲は一世を堵し末路の悲むべき殺々たる修羅の巷に限るべからず一大眞理を發見し世人の誤謬を正し千歲の末に至るまで人々の敬慕する所となる一大快事にあらずや況んや世の嗜好流行なるものは變化極りなきものにして我か王朝の始めに當り武臣を視ると奴隸の如くなりしも中世に至り大に權勢を得降て今代に至り武臣形を絕し農工商之に代て盛大を來したるが如く又昔時蓬頭垢面貴客面前に虱を捫て其名聲を博せしか今日は之を擯斥し人之を伍するを耻づるに至りし如く今後宗教か社會の表面上に一大活劇を演じ社會の耳目を收むるや明けし矣是余輩が我が社會の變遷を述べ古來英雄の一起一仆は實に今日偉人傑士をして起て宗教界に舞はしむるの原因にして社會の事物は皆な斯る大達人が出づるを待ちつゝあるなりと呼號し天下の人士に反省を希ふの已むを得ざるに至りしなり」

傳記

ヂョン、スチユアード、ミルの傳（承前）

余はミル氏の二大時期を述べたり今氏が作者として人物として如何なりしかを說かんとす

ミル氏の著作は英文學中萬世に其名を殘すなるべし其一部分は經濟學に不朽の功績を顯はし一部分は英文學

に哲學的思想を與へテイン、レナン、ハイチ、ヘーゲル等の如き批評家の誹謗中より英文學を救出して大に光彩を與へたり氏は又た論理學者として英國及び歐洲の思想に一新世紀を造れり氏の「論理學系統」によりて生じたる結果は能くホウエトレー氏の唱へたる論理學研究の眞系統復興を完成せり氏が教義の如何は暫らく之を論ぜざるべきも氏の此書は論理學の問題に於ける英文學中最大の者なるべし氏の主旨とする所は數學的及理學的眞理に關して直覺的哲理を排撃し必然的眞理を顯彰するにありき然れとも讀者の大に此書を珍重するは其理學搜索に科學的形式を應用せしにあり蓋し論理學は氏によりて其範圍を廣くし世の之を以て單に名目、圖式等をのみ論し事實の考究、自然法の探求に於て益する所なしとなせし攻撃を脫せしめたり

今日に於て古典と仰がるゝ經濟學に於て氏は恰もアダム、スミスが十八世紀に於てなせし事業を十九世紀に於てなさんとせり而して氏の企圖未だ必ずしも失墜せりと云ふべからざるなり原理の點に於て氏の哲學的眼光は能くアダム、スミスの哲學的著書に匹敵せり然とも見界の廣濶なると一般に社會學の原理に關して理學の限界に深奥の觀察を下すとに至りては古今獨步其二位に立つものすら之を發見するに難かるべし是れと比せばリカードの書は不明にしてスミスの書は不整なるを免れず氏の書はラヴェレイ、ラヴァーン及びロスチヤー等の如き大陸經濟學者の著書に着色を與へ本國併びに外國に於ける立法に影響を及ぼせり實に英書の斯の如く迅速に歐洲の名聲を博せし者はなかるべくアダム、スミスの富國論は之を外にして、今日に於て斯の如く直接に英國、大陸、殖民地の立法に影響せしものなかるべし

高名なる「自由の理」は人以てミル氏の最大著述となす實に此と比較し得る者は唯英文學中最高の文躰、最高の思想、最高の實行的英敏あるのみ「自由の理」の要點は完全なる自由と最も自由なる討論とは眞理の唯一なる保人なるを明にし、謂へらく、人類の過半は、幾多の事實、幾多の教理中、多數人の贊成して以て要用なりとなす所のものを採用するものなり、一言以て之を盡せば、自由は眞理に必要にして誤謬に必要ならざるものなりと

此等及び其他の著書によりてミル氏の思想及び原理は近世の眞生活に進入し、近世心食の一部をなせり、哲學に於ても、政治學に於ても、經濟學に於ても、文學

批評に於ても、氏の意見は當時に於ける俊秀の士の心裡に反映し、獨立的思想に刺激を與へ、是れが勃興を促せり、ハーバート、スペンサー、ベイン及び近世のグロート氏の著書は明に氏の勢力を示せり、政治上に於ても、哲學上に於ても俊秀の反對者少からず然ども此等の諸人は氏の熟練を學びしものなれば反對者たるも尙弟子たるを免れざるなり氏の論理學氏の經濟學を稱して當時に於ける二箇の大訓練著述と云ふも不可なかるべし此二書は近世の深識成學の諸人を訓練し是をして高大なる有益の思想を起さしめたり」或る偶然の場合に於て氏が議論に敗北するの觀あるも多くは氏が授けし所の思想と論法とによりて也哲學上に於ける社會上に於ける若しくは道德上に於ける氏の持說は將來に於て其根底を失ふとあるべし（特に功利道德は今日既に敗兆を示せり）然れども氏の如く雄徤に、氏の如く眞心に、氏の到着せし確認を辨護し防衛せしものなかるべし、斯の如き獨立的性質の人、斯の如き驚く可き權力の人にして多くの重要なる問題に於て、國人と其說を一にする能はず、敵を造らざるを得ざるは怪むに足らず、然れども氏は高尙なる道德的性質を有し高貴なる精神を持し、進捗に熱心に、人情に篤く、併せて俊秀なる天才にあらざれば能はざる致導的模形的の內助ありて大に氏を強くせし者ありき

偖ミル氏は如何なる人物なりし？氏は其著書の最良なる者よりも、否全著書を總合したるものよりも、善良にして偉大なりきある二三の學科に於て氏に優れるものなきにあらずスペンサーの如きベインの如き共に氏と同一の哲學派に屬し或る學科に於ては氏に優りて精密深奥の眞理を發輝せりウ井リアム、ハミルトン君及びディン、マンセル氏の如きも其說明遙に氏に勝り其範圍も亦濶大なり、其他經濟學に於ても氏の競爭者たる者少からず、然れ共此等の諸人は單に一二の學科に秀で氏は此等諸人の優を合せて一人に集めたるの大差あるを見るべし、氏は最も困難なる闡究思辨の問題に於て嚴密正確なる思想家の才能を有し、併せて種々の文學的訓練を有せり、氏は理學數學を熟知し、其法則結果を實際に應用するの才能ありき、氏は晩年に至る迄成熟したる博物家として其名聲を損ぜざりき氏が壯年の時に植物學上になしたる功績少からず其發見に係る植物にして氏の名を有するものさへあるを見るべし、之に加ふるに氏は古代近世の有名なる文學に委しく、希臘、羅馬、佛蘭西、英吉利の名文に深く、其文

躰は裝飾なく、嚴格に、决斷的にして、寧ろ辨明躰、議論躰に適せりと雖ども、善く察し深く味ふの人は氏の筆を養成せる、多くの想像的形跡を見るを得べし、ミル氏は眞情より音樂を愛し、之れが批評に妙を得、又快樂の爲めに樂歌を作りしこと少からず、氏は當時及び古代の大著に親炙せしのみならず、併せて廣く新聞雜誌を購讀し、深く當時の輿論を熟知せり、思ふに氏の如く諸學科の眞理に明に、諸種の藝術に委しく、特種の不能なき者は稀に見る所なり、而して眞心天禀の賦性を啓發するの能力に於てはミル氏獨り卓然として雲際に表出せり

氏の德性は人を誘ひ人を心服せしむるに足る其性實直にして單純明淸、之に加ふるに快活にして温柔、堅確、善人の防衛すべく惡人の攻擊すべきあれば、電光の如き勇氣を以て之れに當り、憐むべき助けなき者に惡行をなすものあるを聞けば、氏の精神、火の熱するが如く、憤懣已む能はず、男子の抑壓の下に沈吟せる女子を愛護せし氏の熱心は自から中世時代に於ける騎士の風ありき思ふに近世史の記者中自ら眞理と信ずる所のものを公言するに躊躇せず、其德性の勇敢なりしはミル氏を以て第一に置かざるべからず代の書籍を捜索するに當て其書の流行すべきか然らざるかを問ひし形跡あるを見ず氏は其眞理なるを信ぜり是れ之れを公言する唯一の眞理なりき氏は後世に殘すに眞理を公言する者の神聖なる義務は人の之を聽くと聽かざるとに拘泥すべからざるの敎訓を以てせり世上氏を以て頑固冷淡なる思想家となすものあり然れども是れ大なる誤謬なり氏は技術に於ても、文學に於ても、生活に於ても、最も精細を好み、美麗を愛せり、氏の冷淡なりしは道理的の者を道理ならしむるにありき、氏の頑固なりしは不正を攻擊し正理と考ふる所のものを主張するにありき、氏の如く、斯の如く精細硬固に、斯の如く純淸鋭敏に、斯の如く我欲の物にも私情を挾まざる、斯の如く眞理と正義の爲めに熱心なる、恐らくは古代の淳朴世界にも得易からざるべし、氏は非常の自由論者なりき、然れ共又た殆んど制慾家なりき、氏は深沈なる論理家なりき、然れども又た熱心なる實行家なりき、氏は其哲學に於て殆んどクウザンの如く電氣的なりき、激動的なりき、然れども決して電氣に固有なる漠然不可思議ありしにあらず、氏の此等の特性は、以て氏をして、永遠に、英國歷史に於ける、高貴の人物となす所以ならん歟

（完了）

叢　談

○耶蘇の語(其一)

耶蘇の語は善人の呼吸となり、賢者の希望となり、信者の喜悦となりて數百萬の心情を慰せり。耶蘇の語は教會の祈禱なり、爐邊と田野とに於けるに善良の歸心なり、心情の魔力なり。耶蘇の語は今日尙ほ人心に驚くべき奇蹟を行へり、之に較するに記錄の奇蹟を以てするも其宏大なると有益なるとに於て何かあらん、殿堂を建て家內を美にするも耶蘇の語なり、高尙の思想を鼓舞し、純粹の理想を起し、眞理と愛とに向つて祈禱を奉ずるも耶蘇の語なり、潔士の生命をして美且つ聖ならしむるも耶蘇の語なり、吾人の希望に羽翼を與ふるものも耶蘇の語なり。聖書を讀むものは悲哀も爲めに慰し病苦も痛を覺へず不運の權力も其通力を失ふべし。耶蘇の語は何如なる魔力を有する！信心の靈性に健康と羽翼とを與へ、失望者は之によりて其心を強くし、破船者は之によりて再度の冒險を企つべし。耶蘇の語は萬物を我が有となし基督を我が兄弟となし時間を我が奴隷となし死を我が同盟となし勝利の證人となすものなり。耶蘇の語は吾人に上帝の存在を敎へ、春花の風に漂ふも燕雀の死するも國民の零落するも世界の悲哀も歡樂も皆上帝の力に因るものなるを明にせり　（セオドル、パーカー）

○耶蘇の語(其二)

福音書の一、若しくは福音書の全てにして、明確に耶蘇の思想を顯はすものなりとせば其神學には大に誤謬の混入せるあるを見るべし、是れ公平なる讀者の知る所なり。されば耶蘇を以て神學上に重要なる誤謬なく、當時の眞理は悉く其知る所たりとなすは不條理の甚しきものなり。摩西の時より耶蘇の時に至る迄人類は其一個人たると國民たるとを問はず其智力に於ても宗教上の感覺、思想及び行爲に於ても大に發達し來れり、而して耶蘇の時より今日に至る迄其進步昔日の比にあらず舊誤謬は悉く投棄せられ新眞理は人類の智覺に光輝を與ふるに至れり、……如何なる人も一人を以て人類全躰の如く大なる能はず、若し初世に於て大智出で遙か同胞兄弟の上に立ち世人仰視し難しとなすも、人類は漸次に之に追着し、通過し、終に昔日の大智は今世の通常人と異なるなきに至るべし、否昔日の大智却つて後世の大智を仰視するに至るべし、……宗教

上の大能を有するものは其何人たるを問はず宗教的實驗に新事實を附加するものにして耶蘇の前後たるに於て決して異なるなきなり。宗教の道路は聖人の通過を得て平坦となれり然れども如何なる聖者も宗教の全路を通過する能はざるなり

○左の天理教の歌は德島の教友關某氏より遙かに寄送せられたるものなり此歌は關氏の知友なる宗我華咲坊の訂正に係るものなりと云ふ

●三種のつとめうた

○あしきをはろふてたすけたまへてんりわうのみこと

○ちよとはなすかみのいふこときひてくれあしきことどをばいはすせよ

●このやうにちとてんとをかたどりてめをとなこしらえきたりしぞこれはこのよのはじめなり

○あしきをはろふてたすけないたゞきいちれつすましてかんろだい

●かぐらうたのはしうた

○よろづよのせかいいちれつみわたせどむねのわかりたものかない

○そのはづよといてきかしたことはないしらぬがむりではないわいな

○このたびはかみがおもてへあらはれてなにかいさいをときゝかす

○このもとをくわしくきいたことならばいかなるものもこひしうなる

○きゝたくばたづねくるへしいひきかすよろづいさいのもとなるを

○かみがでてなにかいさいをとくならばせかいいちれついさむなり

○いちれつにはやくたすけをいそぐからせかいのこゝろもいさみくる

●かぐらうた　●ひとくだり

○一ニ正月こえのさづけはやれめづらしい

○二ニにつこりさづけもろふたらやれたのもしや

○三ニさんさいこゝろをさだめ

○四ツよのなか

○五ツいづれもりをふく

○六ツむしようにできます

○七ツなにかをつくりとるなら

○八ツやまとはほうねんよ

○九ツこゝまでついてこひ

○十ドとりみがさだまりた

●ふたくだり
○とん〳〵とんと正月をどりはじめはやれおもしろい
○二ッふしぎなふしんかゝればやれにぎはしや
○三ッみにつく
○四ッよなほり
○五ッいづれもつきくるならば
○六ッむほんのねをきらん
○七ッなんじゆうすくひあぐれば
○八ッやまひのねをきらう
○九ッこゝろをさだめゐるなら
○十デところのをさまりよ
●みくだり
○一ッひのもと志よやしきつとめのばしよはよのもとよ
○二ッふしぎなつとめのばしよはたれにたのみはかけねども
○三ッみんなせかいがよりあふてできたちきたるがこれふしき
○四ッやう〳〵こゝまでついてきたじつのたすけはこれからよ
○五ッいつもわらはれそしられてめづらしたすけをするほどに
○六ッむりなねがひはしてくれなひとすぢこゝろになりて
○七ッなんでもこれからひとすぢにかみにもたれてゆきます
○八ッやむほどつらいことはないわしもこれからひのきし
○九ッこゝまでしん〳〵したれどももとのかみとはしらなん
○十ドこのたびあらはれたじつのかみにはさういない
●よくだり
○一ッひとがなにごといはふともかみがみてゐるきをしづめ
○二ッふたりのこゝろをさだめゐよなにかのこともあらはるゝ
○三ッみんなみてゐよそばのものかみがすることなすことを
○四ッよるひるどんちやんつとめするそばもやかましうたてかと
○五ッいつもたすけがいそくからはやくやうきになりてこ

○六ッむらかたはやくたすけたいなれどこゝろがわからぬ

○七ッなにかよろづのたすけあひむねのうちよりしあんせ

○八ッやまひもすつきりねはぬけてこゝろもだん／＼いさみく

○九ッこゝはこのよのごく／＼よわしもはや／＼まゐりたい

○十ドこのたびむねのうちすみきりましたがありがたい

●いつくだり

○一ッひろいせかいのうちなればたすけるところもままあらう

○二ッふしぎなたすけはこのところおびやほうそのゆるしだし

○三ッみづとかみとはおなじことこゝろのよごれをあらひきる

○四ッよくのないものなけれどもかみのまへにはよくがない

○五ッいつまでしん／＼したとてもやうきづくめであるほし

○六ッむごひこゝろをうちわすれやさしきこゝろになりてこい

○七ッなんでもなんぎはさゝぬぞへたすけいちじよのこのところ

○八ッやまとばかりぢやないほどにくに／＼までもたすけゆく

○九ッこゝはこのよのもとのぢばめつらしところがあらはれた

○どうでもしん／＼するならばこうをむすぼぢやないかいな

●むくだり

○一ッひとのこゝろといふものはうたがひふかいものなるぞ

○二ッふしぎなたすけをするからにいかなることをもみさだむる

○三ッみんなせかいのむねのうちかゞみのごとくうつるなり

○四ッやうこそつとめについてきたこれがたすけのもとだてぢや

○五ッいつもかぐらやてをどりやすゑではめづらしたすけする

○六ッむしようやたらにねがひでるうけとるすぢもせんすぢも
○七なんぼしん〳〵するとてもこゝろえちがひはならぬぞへ
○八ッやつぱりしん〳〵せるやならぬこゝろえちがひはでなほしぢや
○九こゝまでしん〳〵してからはひとつのこうをもみにゃならぬ
○十ドこのたびみえましたあふぎのうかゞひこれふしぎ

●なゝくだり

○一ッひとことはなしはひのきしんにほひばかりをかけておく
○二ッふかひこゝいがあるならばたれもとめるでないほどに
○三ッみんなせかいのこゝろにはでんぢのいらぬものはない
○四ッよきぢがあらはいちれつにたれもほしいであろうがな
○五ッいづれのかたもおなしことわしもあのぢをもとめたい
○六ッむりにどうせといはねどもそこがめい〳〵むねしだい
○七ッなんでもでんぢがほしいからあたひはなにほどいるとても
○八ッやしきはかみのでんぢなりまいたるたねはみなはえる
○九ッこゝがこのよのでんぢならわしもしつかりたねをまこ
○十ドこのたびいちれつにやうこそたねをまきにきたたねをまいたるそのかたはこえをおかすにつくりとれ

●やくだり

○一ッひろいせかいやくになかにいしもたちきもないかいな
○二ッふしぎなふしんをするならはたれにたのみをかくるべき
○三ッみなだん〳〵とせかいからよりきたことならできるなり
○四ッよくのこゝろをうちわすれとくとこゝろをさだめかけ
○五ッいつまでみあはせゐたりともうちからするのぢ

やないほどに
○六ッむしようやたらにせきこむなむねのうちからしあんせよ
○七ッなにかこゝろかすんだならはやくふしんにとりかゝれ
○八ッやまのなかへといりこんでいしもたちきもみておいた
○九ッこのききろふかあのいしとおもへどかみのむねしだい
○十ドこのたびいちれつにすみきりましたがむねのうち

●こゝのくだり

○一ッひろいせかいをうちまはりかみにまかせてたすけゆく
○二ッふじゆうなきやうしてやらうかみのこゝろにもたれつけ
○三ッみればせかいのこゝろにはよくがまじりてあるほどに
○四ッよくがあるからやめてくれかみがうけとりできぬから
○五ッいづれのかたもおなしことしあんさだめてついてこい
○六ッむりにでやうといふでないこゝろさだめのつくまでは
○七ッなんでもこのたびいちれつにしつかりしあんをせにやならぬ
○八ッやまのなかでもあちこちにてんりわうのつとめする
○九ッこゝでつとめはしてゐれどむねのわかりたものはない
○とてもかみなをよびだせばはやくこもとへたつねでよ

●とくだり

○一ッひとのこゝろといふものはちよつとにわからぬものなるぞ
○二ッふしぎなたすけをしてゐれどあらはれでるのはいまはじめ
○三ッみづのなかなるこのどろをはやくいだしてもらひたい
○四ッよくにきりないどろみづやこゝろすみきれでくらくよ
○五ッいつ〳〵までもこのことははなしのたねになる

ほどに
○六ッむこいことばをだしたるもはやくたすけをいそぐから
○七ッなんぎするのもこゝろからわがみうらみであるほどに
○八ッやまひはつらいものなれどもとをしりたるものはない
○九ッこのたびまではいちれつにやまひのもとはしれなんだ
○十ドこのたびあらはれたやまひのもとはこゝろなり

●十一くだり

○一ッひのもとしよやしきかみのやかたのぢばさだめ
○二ッふうふそろふてひのきしんこれがだいいちものだねぢや
○三ッみればせかいがだん／＼ともつこになふてひのきしん
○四ッよくをわすれてひのきしんこれがだいいちこえとなる
○五ッいつ／＼までもつちもちよまだあるならばわしもゆこ
○六ッむりにとめるじやないほどにこゝろあるならたれなりと
○七ッなにがめづらしつちもちよこれがきしんとなるならば
○八ッやしきのつちをほりとりてところをかへるはかりなり
○九ッこのたびまではいちれつにむねがわからぬざんねんな
○十ドことしはこえおかずじふぶんものをつくりとりやれたのもしやありがたや

●十二くだり

○一ッいちにだいくのうかゞひになにかのこともまかせおく
○二ッふしぎなふしんするならばうかゞひたてゝいひつけよ
○三ッみなせかいからだん／＼ときたるだいくにほひかけ
○四ッよきとうりやうがあるならばはやくこもとへよせておけ
○五ッいづれとうりやうよにんいるはやくうかゝひたてゝみ
○六ッむりにこひとはいはねどもいづれだん／＼つき

くるで
○七ッなにかめづらしこのふしんしかけたことならき
りはなひ
○九ッこれはございくとうりやうよたてまへとうりや
うこれかんな
○十ドこのたびいちれつにだいくのひとをそろひきた
(大尾)

右訂正天理敎の歌に宗我華咲坊は左の語と一首とを加へられたり

博粲一語

天理敎は多神敎なり十神を以て天理王尊とす

宇宙萬物有機無機を水火の二理を以て統括すと前の十神を五行に配等し病理等を論及するに八塵(ほこり)なる名を用ゐ一身一家より天理を推て所謂眞理を覓むるものゝ如し信徒は之を理合せと

因に云ふ天則眞理は算法の定則に同しく人意の撼し能はさるもの

心源澈

心にもあらぬほこりをかきみたし
いつもしみつをにごす人かも

雜録

○文部大臣大木伯の演説

去年十二月二十日大木文部大臣が各府縣學務擔當者を鹿鳴館に招集して徳育に關する文部省の方針を演説せられしか右は風敎上に取りて至極有益なる演説なれば即ち之を左に記るす

客月十七日を以て發布したる文部省令第十一號は其令文に掲くる如く小學校敎則の大綱を示したる者にして即ち小學敎育の標準なり

諸君は既に學識あり又經驗あり該敎則の大綱に於て既に其意の在る所を了解せられたるは予が信して疑はざる所なり而れとも其第二條の如きは專ら修身科の目的を指示したる者にして該敎則中最も肝要なるか故に今幸に諸君と會同するに方りて第二條に於て指定したる所以の旨趣と其包含する所の意義とを擧げて之を陳説するは必らず無益の事に非さるを信す

但し第二條の項目のみに就て之を陳説するは不足を感ずる所あるを以て重複の嫌あるに拘らす先つ初めに其大要を畧述するの止むを得さるものあり諸君之を諒せ

られよ夫れ道德の問題に於ては古來哲人各其執る所の主義相契せさる者なきに非ず故に世人道德の問題に涉れは以爲らく是れ某の說を取り是れ某の論に從ふと知らす道德なる者は某々流派の占有物に非さるを

凡そ人類が此世に生出したる以上は其人たる所の道を踐行せさる可らさるは是れ理の當然なり而して其の之れを踐行するの責務は人の此の世に出生すると同時に各自之を負擔したる者なるは疑ふ可らす故に人道實踐の方法を敎示するは即ち道德敎育の本旨なるへし

今吾四千有餘萬の同胞は皆是れ日本帝國の臣民なり則ち其日本帝國の臣民たる責務を盡すは人道中最も必要の事にして若し之を闕如すれは我國家に對し其欽德たる言を竢たす故に敎育上此責務を盡すの事を敎示するは國民敎育の要旨なるへし

人は織て之を衣るに非されは以て其寒を防くなく耕して之を食するに非されば以て其飢を免かるゝなし是に於てか百工興り有無相通し彼是相資るの道生し以て漸く其雨露飢寒を凌くを得るなりされは人生千緒萬端の事業中其生活に必須なる者を撰ひて之に從事するに非されは身飢寒に迫り家困窮に陷る是れ人生必然の結果なり故に教育上務めて空想の妄念を斥ぞけ智識技能をして着實なる線路に就かしめ誤謬なからしめんとを期すへきなり

人をして空想を斥け其智識技能をして着實の線路に就かしめんとするに方りて片時も缺く可からさる所の者あり所謂注意是れなり是れ唯平易淺近の言葉にして理解するに難からさる者の如しと雖も日常の行爲に於て極めて的切緊要の者なり夫れ道德や事業や衛生や人間相互の交際や智識を磨勵するや注意不注意の結果は其實際に於て啻に雲泥霄壤のみならさる者あり例へは注意することなくして得たる智識の如きは毫も活用の功なく空想と擇ふ所なし今若し社會全般此注意の必要を感するに至らば則ち社會は幾層の上進を見るや亦疑はさるなり故に教育上時に臨み機に投し兒童をして事々物々に注意せしめ其習性を馴養することは最も肝要と爲すなり

以上說く所のもの即ち小學敎育の標準なり故に小學校令第一條の旨趣をして普く貫通徹底せしめんことを期するは予の責任にして亦予か志望なることは予が敢て諸君に宣告する所なり

又一言の陳すべきあり以上述へたる所の旨趣は獨り學齡兒童のみ之を踐行すべき者に非ず即ち我輩同胞四千

有餘萬臣民の皆共に實踐躬行すへき者にして假令敎を以て之を布かさるも文を以て之を示さゝるも其責務は自から四千有餘萬臣民各自に具存する所の者なり之を換言すれば此の敎則大綱は我同胞四千有餘萬臣民の素分として各自に固有する所の責務の大要を擧けて以て之を示したるに外ならざるのみ故に小學の敎育を以て特に此敎を定め以て四千有餘萬の臣民中より特に其人を撰ひて敎育するものと誤解するなきを要す

蓋し人の人たる所以の道を踐行すべしと云ふに於て誰か異議の存する者あらん然れども若し唯之を汎說して其の要領を示さゝれば墨翟岐路に泣くの患あり是れ敎則大綱第二條に於て其要領を指示し修身科の範圍を明にせし所以なり

第二條の要旨は其令文に明瞭なるを以て今復之を說明するの必要なし然れとも兒童の良心を啓培し其德性を涵養すと云ふが如きは輕々之を看過す可らす深く留意すへきの事と爲すなり

夫れ心理學上の說は古今哲人其說多々なりと雖も千歲の上萬年の下横目縱鼻の人類か其文明なると野蠻なるとに拘らす良心を有せさるなきは明かなり則ち其良心なる者は人類本性の作用にして即ち道德の淵源なり故に人類萬般の行爲上其善良なる者は即ち良心發達の結果多きに居る（法律及社會の制裁に依るものあり）凡そ社會は人類が此良心あるに依り構造せらるゝを得る者にして法律なり制度なり凡そ社會は人類の福祉を爲すを得る者は一に此良心に依賴せさるなし若し人類にして此の良心を磨滅するに至らは是れ禽獸に均しきのみ禽獸にして安んそ能く社會を成すを得ん是れ理の昭々たるものなり而して人生千態萬狀不良の行爲不正の擧動を抑壓し得るもの此良心の制裁に依ること吾人の信する所なり

然らは即ち人皆其良心あるの故を以て不良不善の行爲なきを得へき乎曰く然らす凡そ人の行爲上外圍の形情に因り良心往々一隅に退縮して發達するを得す隨て道德薄弱の地位に陷る然れとも夫の良心なる者全く滅亡喪失するに非さるを以て亦屢發露するとあるなり若し夫れ社會の秩序紊亂し人々不良を營みて怪まされは我亦不善を爲して憚からす不信の言不實の行恬として耻つる所なく社會腐敗するに至らは良心の感覺を遲鈍ならしむるや亦怪むに足らざるなり故に人生の情態に就て之を言へは良心及び道德は社會と相伴ひて消長を爲す者と想像するを得べし之を要するに社會の福祉は道

德の盛昌は良心の發達に依る

前述の如く良心は時々蔽はるゝことありと雖も凡そ人の生るゝや其初め未た惡習に染ます不良の念未た生せず之を成人に比し純潔のものとす然れども人の幼時に極めて外圍の形情に左右せられ易きものなれは機に投し變に應し近く譬を取り又易く事を說き良心を啓發培滋し以て德性を涵養せんことを緊要なりとす

今試に敎員諸君に於て兒童に問て曰く汝等父母を思ふやと即ち其父母を思ふと云ふの聲は敎場に滿つるならん又汝等父母の言に從はさりし時汝等の心情如何なりしやと問はゞ皆必ず不快なりと答ふるなるへし又楠正成と足利尊氏とを比較して試に之を判せしめて曰く汝等孰れに左袒する乎と即ち正成に與せんと云ふの聲は亦敎場に滿つるなるへし

昔元寇十萬來て日本を侵せり日本の人士は皆奮戰勇鬪身を毀き骨を碎き以て終に元寇を退けたり而して其人士の名譽今に於て昭々たり汝等も亦之に倣ふと欲する乎と問はゞ必す其之に倣ふへしと云ふの聲は亦敎場に滿つるなるへし此の如きの類亦是れ良心發露の一斑と云ふを得へし故に事物に觸るゝ每に叩て以て其感覺を惹起せしむるは敎員諸君の當に務へき所なるを信す」

蓋し良心は又責心悔心の意を含蓄す敎育上其場合に應し此等の念を喚起し以て良心を啓培すること最も必要なるへし

又爰に附言する者あり抑も道德の基礎は人心隱微の裏に在り人或は不良の念發生すると同時に亦善良の思念ありて常に其不良の思念を抑壓せんとす隱微の裏人之を知る者なし而して我獨り之を知る之を知る者即ち良心にして其の不良の思念を制する者も亦是れ良心なり然るに泰西全般の道德上人心隱微の事首として天神の制裁に依る者の如し

蓋し我國に於ては神明を尊崇すること臣民の分として務むる所なりと雖も我國の敎育は專ら人性に基くを主義とするは顯著なることとならん

但し良心は人皆是あり是れ天の賦する所人若し此良心を磨滅喪亡せば天理の赦さゝる所自然の數なり故に曰く積善の家に餘慶あり積惡の家に餘殃ありと之を以て天罰を畏れて行爲を愼むは世俗の常なり若し一知半解の理論を以て妄りに之を打破するが如きあらば予は甚だ社會の爲め其危險を恐れさるを得す學校に於て甚た注意を加ふべきの一事なり

第二條第二項に掲くる者即ち人道實踐の方法を示した

るものにして其列記したる者は其綱領なり之を擴充し之を推究すれば其の意の含蓄する所自から明かなるへし孝悌友愛仁慈信實禮敬は讀みて字の如し但仁慈以下に就き含蓄する所の意義を陳述すへし

仁慈は仁慈の心を施し博く愛憐するの意たるに外ならすと雖も爰に尙一層を進むへき者あり其仁慈の心を推廣めて以て物に及ほすと云ふことと是れなり凡そ人間相互の間に於て仁慈の心を加へさる可らさるは固より言ふを待たず苟も良心の在るあつて夫の物類を虐使するが如きは亦忍ひさる所ならすや是れ亦仁慈の範圍内に包含ずる者たるを知るべし

信實も亦讀みて字の如く人に對して言行背反せす己れを盡すに實を以てすへしとの謂なりと雖も此中に亦責任なる者を包含することを知るへし

夫れ社會相互の間凡百の事物相運轉活動して凝滯する所なく獨り凝滯するなきのみならす又社會の福祉增進する所以の根基は其有形と無形とに拘らす人各其負ふ所の責任を盡すに在りて若し各人が其責任を盡すことを怠らば百事百物皆信を置く能はす敗壞退縮して社會の不幸焉れより甚しきはなかるべし故に行爲にして其責任を盡すに怠る者は之を信實の行爲と謂ふを得ず故に信實中自から責任なるものを包含するものとす

禮敬も亦讀みて字の如しと雖も亦輕々之を看過す可らす夫れ禮は社會相互の間寸刻も離るへからざる者にして其大其小包ねさる所なり而して禮の主とする所は敬なり故に曰く禮は敬せさるなし又曰く禮は宜しきに適す此二語は則ち禮の眞相にして社交第一の眼目なり禮式は敬の形を顯はしたるものなり其無形にして敬の存在する所も亦禮也其形を成したると其形を成さゝるとを問はす人皆以て由らすんはある可らす故に禮は百行に通し萬事に涉る者にして要するに唯敬の在る所なり故に之を大にしては邦國相交る禮に非されは攝せす之を小にしては一言の微一行の細と雖も禮に非されは行はれす凡人類の自由と云ひ權利と云ふ亦皆禮敬に由て而して後能く行はるゝを得夫れ所謂權利自由なる者は己れ獨り之を行ふを得て人之を行ふを得さる者とせん乎人は當さに笑はんとす其背理の甚しきを試に思へ人誰か己れの欲せさる所を欲し己れの惡む所を好む者あらん乎故に己れか權利と自由とを重せんと欲する者は亦人を毀傷す可からす然らは則ち傲慢なり誹謗なり妄語なり皆禮敬を失する者なり故に禮敬の裏面に就て之を戒めすんはある可からす

孝悌友愛は親子朋友の間に於ける道にして百行の基たるは固より論を待たす仁慈信實禮敬は廣く人に對するの道なり人の交際上親疎厚薄あるは固よりなりと雖も既に廣く人に對するの道なる以上は地球上人類に對し之を踐行するは人の當に爲すへきの道なり

義勇恭儉は人に對するの道なり然れとも二者は自ら守るに就て之を言ふ則ち勇は一日も無る可からす若し夫れ人にして勇なくんは其爲さんと欲するに當り躊躇逡巡成功を誤まるに至る凡そ活潑の氣象と元氣とを有し國の爲め身を殺し骨を碎くか如きは皆是れ勇の作用なり故に人にして勇なくんは鳥の翼なく獸の足なきに似たり然れとも勇にして義なくんは眞の勇に非さるなり勇と義とは須臾も離る可からす又人の行爲は撿束する所なかる可からす然らされは不測の災害を惹起するに至る故に恭儉は正當なる撿束なるを知るべし凡そ國民たる者は其國君及國家に對して忠節を盡すは至當の事なり日本國に生れ日本國民たる者は誓て尊王愛國の志氣を養成し居常　皇室の爲め忠節を盡すことを忘るへからす

天皇は萬世一系の帝祚を踐み日本を統治したまふの元首なり須く一意一心　天皇に奉事して易るべからさるは我輩四千有餘萬臣民の素務なり而して四千有餘萬の臣民は日本國に生れ日本國の臣民なれは勇壯活潑日本國の爲め忠節を盡さゝるべからす此志氣を養成するは國民教育の骨子にして一日も忽にすへからさるものなり但其志氣を養成するには能く之に事歷を示し以て感動する所あらしむるは肝要なり是れ歷史教授の最も注意すへき所なり

孝悌以下は皆人道實踐に於て一も缺くへからさるは勿論なりと雖も若し尊王愛國の志氣微弱なるときは日本國民たるの道を缺き百行の善も尙償ふに足らさるものあり如何となれは國家に對するの缺德は各個人に對するの缺德より其害一層大なれはなり是れ本條文中「殊に」の文字を冠し人道實踐の方法を授くるに於て殊に尊王愛國の志氣を養成するとに務めしむる所以なり

夫れ尊王愛國の志氣を養成するの外亦國家に對する責務を知らしめさるべからす爰に國家に對する責務の何たるを擧ぐれは租稅兵役服從等の義務の類の如しと雖も尙一歩を進めて其無形なるものに及ほさは更に又緊要なる畏あり私を以て公を害するなく小を見て大を忘るゝなく國家即ち公に奉するの思念を單純專一ならしむると云ふことと是なり吾人各自は國家に奉するの思念

を一にして以て國家の福祉を計らさるへからす故に吾人か國家に對する所以のものは一個の人に對するよりも其關係甚た大なり故に國家に對するの責務を盡さゝるものは一個の人に對するよりも其缺德たる亦深しとす故に吾人か國家に對する責務を盡すは一個の人に對するよりも其美德たる亦高しとす敎育上の注意怠るへからさるなり

凡そ人の不良なる行爲を防制するに法律を以てするは其形れたるものを制するに止まり背德の行爲を制すること少しとす然るに人の行爲千緒萬端道德上に關するもの多きに居る若し人の行爲にして法律の制裁を以て限度とせは人は殆と禽獸に近きに至るへし如何となれは人は前已に述へたるが如く外圍の形情に感染して良心亦退縮することあるを以て其行爲は往々不良に傾向するに至れはなり此場合に於て防止するものは獨り社會の制裁あるのみ假令良心を以て不良の行爲を壓抑する能はさるに際するも社會の擯斥を恐れて以て其行爲を制止する場合甚だ多しとす故に社會の制裁は常に良心の助援をなす者にして畢竟良心ありと雖も若し社會の制裁なくんは良心は常に孤窮の境遇に在て其發達を失ふに至らん然るに人若し社會の擯斥を懼れさるあらば社會の制裁其効力を減すれは人益々之を懼れさるに至り社會は遂に不良の域に陷るへし而て人が社會の擯斥を顧みさるに至る者は是れ其の廉耻の重んすへきを知らさるに依る故に廉耻の重んすへきを知らしむるは德育上亦た緊要のことなり要するに人は廉恥を重んせされは社會常に萎靡敗頽するに至らん管子曰く禮義廉恥之を四維と云ふ四維不振國則滅亡すと

若し背德の行爲あるも恬然として耻つるなく廉耻の何物たるを顧みす表裏反覆詐僞是れ競ひ苟も免かるゝを以て得策とし不德の行爲不善の擧止日に相積みて全社會に充塞するに至らば是れ之れを何とか謂はん故に社會は常に其制裁を嚴にし人は應さに廉耻の重んすへきを知り相依りて以て社會及國家の品位を上進し風を正し俗を直くし以て其福祉を增進せんことを努めさるへからす敎育上最も意を用ふへきの一事なり

以上述ふる所の事項は日本國民たる者の踐行せさるへからさるものなるを以て其程度を量り之か宜しきに適せしむるは敎員諸君の方寸にあるへしと雖も之を取捨するを爲さすして假令淺きも其全體に渉らしむべし高等小學校に於ては較々深く之を敎へ陶冶の功により益々其志操を堅固ならしむるを務むべし諸君宜しく堅

固の二字に意を置れんことを望む
女兒に在りては素より男子と異なるあるも其國民たる所のものは一也但し活潑なる元氣を養成し國家の難に赴くべしと云ふか如く之を直接に磨勵するは過ぎたる所ならん然れとも其意は常に存せらるへからす如何なれは女子は家庭教育の訓導なればなり又貞淑の美德を養ふへしと云ふは女子の本分たることと言を待たさる所なり
從來終身の教授に於ては古人の嘉言善行を以て目的となせるものゝ如し今第二條に於ては特に終身科の目的を明記し古人の嘉言善行の如きは兒童の感情を惹起して此目的を達する爲めに引用例證する所の具となすに過ぎさるものとせり其勸戒を示すと云ふが如きは事の表裏を示したるものにして表面に之を勸むれば裏面に之を戒むるの謂なり例令は孝悌はなすべしと云ひ又不幸不悌はなすべからすと云ふか如し蓋し事は表裏相待て始めて其完きを成すものなれば表面に關する事を授くると同時に又其裏面に包含する所を探究し之を擧示して以て教訓するは亦必要なるを信す
抑も普通教育は社會及國家の福祉と品位とを增進發達するを以て目的とすることは前已に陳述せし中に就て諸君は既に詳知せられたるならん故に殊に修身科に於ては其目的に依り務めて兒童の感情を惹起して以て日常人の當になすへき所の道を實踐躬行すへき方位を懇示訓練することを要す
教科書は教育上主大の關係を有するものなり予世の教科書を閲するに棟に充つ馬に汗するの多きなり而して嘉言美行を擧くるもの多くは異常矯激の事を以て標準としたるものゝ如し伯夷叔齊が首陽の山に飢えたるは予亦甚た尊崇する所なり然れども一般の人に向ひて之を目的とせしむるが如きは予の左袒する所に非さるなり故に嘉言善行の矯激異常に屬するものは兒童の感情を惹起する爲めに其引用の具となすは亦或は必要ならん予は信す世間必す教科書等の改良を圖るものあらんことを但し急に變更するか如く弊を生することと少しとせす注意せさるへからす　（完）

左の一編は神道權教正津田常名氏が諸新聞に投出して田口宇吉氏が先月中神道家諸氏に告くと題して世上に發表せられたる論文に應へたるものなり、宗教子は玆に轉載し以て江湖に披露す固より說の可否は宗教子の責任に非すと知るべし、

○田口卯吉氏に告ぐ

長門國須佐　神道權少教正　津田常名

久米邦武氏が神道は祭天の古俗と題せる一文を史海第八號に掲載せるより忠愛なる我同憂志士は大に憤激して久米氏に質すに我國體に關係ある妄說にして皇室の尊嚴を傷くる大不敬の罪ならざる乎を以てしたりしに久米氏も寤悟る所あるもの丶如くにして諸君の指摘せられし點を世に誤解とする廉は篤と勘考の上取消すこともあるべしといへりしを田口氏の神道者諸氏に告ぐると題し該文の不敬に涉らざるを辯護せしのみならず一旦鈍りたる久米氏の鉾鋩を磨き出し更に其旗幟を鮮明ならしめんと一臂否、兩臂の力を添へて應援を試むるに至りては豈其罪の久米氏に勝る萬々なりと云はざるを得んや余頃日二豎に冒されて蓐中に在りと雖も世間或は無腸男子の徒其枉筆奇言に惑はされて畢生を誤る者あらんを恐れ輕々昏默に附し去ること能はず聊か其要領を摘みて氏が迷夢を攪破せんと欲す氏よ平心虚懷余が微衷のある所を諒察せば何の幸か加焉

氏は假に日本古代の歷史の研究は今日の儘に放擲して可なるや又本居、平田等が古事付けたる解釋の他に今日の人民は新說を出すべからざるや否や又新說を出せば皇室に不敬なるや否やの三問題を設け自から之に答へて日本人民は隨意に古史を研究するの自由を有すると云ひ隨意に古史を研究するも皇室に對し不敬に涉らずと斷定せり日本古史の研究は素より今日の儘に放擲して可なりといふべからず然れども日本古代の實歷は日本古代の言文を以て傳へたりしを歷史勅撰の時に當りて漢字を塡るながらも其原義を喪はざらんことを勉められし事を古事記の序文に曰く然上古之時言意並朴敷文構句於字即難已因訓述者詞不逮心全以音連者事趣更長是以今或一句之中交用音訓或一事之內全以訓錄即理難見以注明意況易解更非注其用意の周到愼密なりしを知るべし如斯古代の言文を以て吾人が想像の及ばざる天地開闢の眞理實蹟を記載したるものなれば必ずや先づ久しく世に堙滅したる古言古文の意義を十分に研究せる後にあらざれば其の妙趣を味ふに由無きは余が喋々の辯を費すの要なし

然り而して我國文國語の學は水府義公に淵源し荷田、賀茂、本居、平田の先哲輩出して勵精刻苦其規模を完大にするの偉功ありと雖も其結果は言義的解釋の成蹟に止まりて未だ理義的解釋に進に遑あらざりきされども平田翁にして言義的の解釋は殆ど餘地を存せざるが

如く完成せるを以て漸く理義的の解釋時運に移るべきは自然の順序なれば大國隆正氏の古史を講ずるや始めて理義的の見解を胚胎せしより次で近世大家の此學を攻るもの大率其方針を此に執らんとす余夙に感ずる所ありて本教神理の討究に從事し本教神理大要と題せる一篇を著して經緯二眞の義、初眞熟眞の解等古人未發の新說を吐露したるに非常の喝釆を博して發行の日尙淺きにも拘らず購閱者の夥多なると實に豫想の外に出たりしは特に學術を以て自から任ずる者のみならず世を擧りて我國體に密着の關係ある古史即ち神代紀の眞價を理義的に需めんと欲するの機到れりと余は欣喜に堪えざるなり故に今日の學者にして新說を出すは勢の然らしむる所なり新說を出す者概して皇室に不敬不忠なりとは決して云ふべからず然れば則ち氏が隨意に古史を研究するの自由を有するといへるも妨げ無からん乎といふに隨意の文字は漠然たり古史の文義を損はざる限は其の畧傳を參互考究して益々神理を發揮し新說を唱ふるは固より隨意なり自由なりと雖も本邦の正史、皇室の寶典たる神代記を荒唐不稽の妄談視して造化天神は想像に出たるものと斷言し萬世一系の皇統をして畢竟偶然のみとするの感あらしむる奇怪の論說を世に公にして憚からず彼の人子を賊ふに至りては其の罪決して逭るべからざるなり

氏曰く皇室を敬し國家を愛するの氣は彼の本居、平田等の如く單に古事記の語義を尋思して研究するよりも廣く人種、風俗、言語、器物等に就いて研究するの間に於て盛に發揮すしべと余が已に云へる如く本邦古史學は語義的解釋の時運業已に去れり今日の學者は奮つて理義的解釋に從事し造化の秘蘊を叩きて神理天則の妙機を發見すべきの責あり語義的解釋は尊王愛國の元氣を發揚するの効大ならずと雖も理義的の解釋を完了して邦家の經緯、王化の鴻基を益々鞏固にするは和魂を養成助長するに於て必須の要務なり然して其解釋の參照材料に缺くべからざるは人種、風俗、言語、器物の進化、發達、變遷、沿革等に係る研究なりと雖も奈何せん人種、風俗、言語、器物等に就て專ら探檢するところの人類學は僅に萌芽を發生する迄にして學理の程度頗る低きを以て未だ俄に其說を信ずべからざるなり氏が其幼稚なる人類學上の考案を金科玉條と賴み我皇室の寶典よりも重を此に措かんとするものの如きは惑へるの甚きにあらずや

氏は平田等が靈の眞柱に於て述ぶる所の造化三神の說

は耶蘇の三位一體の說に類し吾人をして信ぜしむるに足らずと辯ずれども假令造化天神の神德は全く三位一體の說に符合するも古傳の意義を其儘に講明して自から其歸を一にするに於て何かあらん若し之をして信ずるに足らずとせば本敎の明文あるにも關らず我神道は一天神を奉祀するものにして其實は一神敎なりと唱道し外人の嗜好を迎へて幸に彼が一諾を買はんとする久米氏が卑屈方便說の信ずべからざるは理の睹易きところなり田口氏は彼の信ずべきを信ぜずして此信ずべからざるを信ず惑乎、將狂乎、我神道は多神敎にして彼れが一神敎の旨意に適はざるも蒙昧野蠻の國にありて禽獸を奉祀し禮拜祈禱するの俗と同じからざる以上は焉んぞ之を世界最劣等の敎法と判定するを得ん況んや唯々幽微深邃なる正史の眞理を硏精するの勇氣を振興して孜々汲々倦まざるに於ては皇室傳統の寶器も其光華を放つて普く五洲に照徹し外人の神宮賢所を崇敬するの日も盖し遠きにあらざるべし水戶義公の大日本史を編纂するや鳴世の碩學鴻儒を聘して其大業を翼賛せしむると雖も當時國文國語の學未だ開けざるを以て言義的解釋たも容易の業にあらず況んや理義的の硏究をや故に義公は神代の事蹟は神異に涉りて凡智測るべからざるものとして姑く紀記二典の本史に讓り愨に之を改竄撰擇して其史中に載せざりしは實に義公の義公たる所以なり然るを氏が此の擧を論じて公は神異不測の四語を以て神代史を抹殺し去れりとして久米氏の罪を庇護せんと欲するは豈義公の罪人ならずや

氏は神代諸神を吾人と同一種なりとするの論據を執るに內外古史の年代經歷に於て相適合せず時運遷移の數人智發達の度、頗る逕庭せるを以てなり古史年歷の事に就きては我神道者中にも熱心に考究するものありて余が耳窠に蓄へたる新說も亦尠からざれば余が鄙見を併せて江湖の識者に質さんとするの宿望ありと雖も其煩を厭ひて茲に盡すべきにあらず然れども平田翁の三五本圖考、弘仁歷運記考及び余が本敎神理大要等を繙きて大國主神馭戎の事蹟邇々藝命天降の後風俗の一變遷、日向帝都三代の年數、神人分界の時期、初眞熟眞の理(加美の語義)等を了悟するに至らば思半に過るものあらん

氏又古事記の序文を引きて天武天皇の勅に見るに或は曰く既に正實に違ふと或は曰く僞を削り實を定むと當時舊辭の紊亂したりしを知るべし夫れ聖德太子蘇我馬子の時より以後既に一方に漢文の歷史あり然るも倘ほ

虚僞を傳へたり然らば則ち知るべからざるの古代より聖德太子及馬子の時に至る迄口々相傳へたる舊辭に虚僞なきことを保證し得べきや否や且つ又聖德太子と馬子とは果して正實なる歷史眼を備へたる者なりしや否やと難詰せり吾國の我代文字に就きては異説無きに非ずと雖も之を信ぜざるものは齋部廣成宿禰の上古之世未有文字と云へる一語に雷同せるに過ぎず然れ共其文字といへるは漢字を指したるものにして古語拾遺を編纂せしより僅に六十年を距る天平勝寶の頃迄は古文字の世に存せしことは大國隆正翁の證明せる所なり先年海江田子爵が命を奉じて歐米巡航の途次墺國の須多因氏を訪ひし時同行丸山氏が日文の神字を須多因氏に示せるに其字體日耳曼の上世に行はれたる流泥といへる文字に全く同じき者あるを以て大に感賞せしことありと聞けり然れば聖德太子蘇我馬子と倶に天皇記國記などを錄し玉へるより以前既に古文字を以て記せる歷史ありて語部の天語を始め口々傳へたる舊辭と並び行はれたるものなりしを太子馬子は之を漢字の假正相混へたるものに錄し玉へることと知るべきなり故に太子馬子が假令正當なる歷史眼を具へ玉はざるも其記せる事實に於て大なる誤謬のあるべき理無し尙一歩を讓りて其書の誤謬多かりしとするも未だ脫稿に至らずして蘇我蝦夷が爲めに燒却せられて僅に國記の一部をのみ存せりと云へば天武天皇の舊辭を討覈し玉へる時其資料たるものは諸家の藏せる古語の假字本、帝紀、纂紀等の類にして必しも太子馬子の手を經て成れるものに限れりとは定むべからず　然るに氏が　古事記の序文に亦於ニ姓日下一謂ニ玖沙訶一於ニ名帶字一謂ニ多羅期一如レ此之類隨本不改とあるを引きて然らば則ち古事記撰錄の時亦た舊本に據りしなり其舊本とは必ず聖德太子馬子等の撰錄せしものならざるべからずと云へるは違へり又稗田阿禮が此勅語舊辭を天皇より承りてより和銅四年に至る迄二十餘年を經たり一字一句能く忘却するなかりしや否やと云へる氏が疑團は風俗敦厚人事單純にして心志の專一なりし故に各暗誦に長じたりし時代に於て殊に拔擢せられたる阿禮の人物を想見せば忽ちに氷解せん

氏曰く安麿の史論に至ては余は最も不贊成を表するものなり夫れ壬申の一亂は云々然るに安麿は此變を記して曰く杖矛擧レ威猛士烟起絳旗耀レ兵凶徒瓦解と云へり夫れ正統の天子弘文の官軍を稱して凶徒と云ふ是れ實に阿世の小人なり吾人何ぞ之を筆誅せざるを得んやと

氏は久米氏の非を飾らんと欲するの情念勃勃として息まざるの餘畏くも天武天皇を誣るに簒奪の罪を以てし太氏を罵るに阿世の小人の語を以てす何ぞ忌憚無きの甚しきや謹んで天武紀を按ずるに天皇は天智帝の同母弟にして同帝の元年に立ちて東宮と爲り玉ひ四年十月天智天皇御不豫の事あり曰く「天皇臥ㇾ病以痛ㇾ之甚矣於ㇾ是遣二蘇賀臣安麻侶一召二東宮一引二入大殿一時安麻侶素東宮所ㇾ好密顧二東宮一曰有ㇾ意而言矣東宮於ㇾ玆疑ㇾ有二隱謀一而愼ㇾ之天皇勅二東宮一授二鴻業一乃辭讓之曰臣之不幸元多病何能保社稷願陛下擧二天下一授二皇后一仍立二大友皇子一宜ㇾ爲二儲君一臣今日出家爲二陛下一欲ㇾ修二功德一天皇聽ㇾ之即日出家法服因以收二私兵器一悉納二於司一

同年十二月に至り天智天皇は遂に崩じ玉へり其翌年即ち弘文天皇の元年三月に條に曰く「是月朴井連雄君奏二天皇一曰臣以ㇾ有二私事一獨至二美濃一時朝廷宣二美濃尾張兩國司一曰爲ㇾ造二山陵一豫差二定人夫一則人別令ㇾ執ㇾ兵臣以爲非爲二山陵一必有ㇾ事矣若不二早避一當ㇾ有ㇾ危歟或有ㇾ人奏曰自二近江京一至二于倭京一處々置ㇾ候亦命二菟道守橋者一遮下皇太弟宮舍人運二私粮一事上天皇惡之因令二問察一以知二事已實一

由是觀之れば天智天皇御讓位の効ありしより以前當時の儲君たる天武天皇を退け大友皇子即ち弘文天皇をして天職を奉承せしめんとするの隱謀を懷ける姦臣のありしを以て天武天皇は弘文天皇に讓りて皇位に即き玉はず出家入道し玉へり然れども彼姦臣等は尙其雄拔神武の天資を憚りて之を害ひ奉らんと圖るに至りしは覆ふべからざるの事實なりしを曉るべし天皇の詔に曰く朕所ㇾ以讓ㇾ位遁ㇾ世者獨治ㇾ病全ㇾ身永終二百年一然今不ㇾ獲ㇾ已應ㇾ承ㇾ禍何默亡ㇾ身耶、余は此詔を拜讀する每に未だ曾て涙潸々として襟を濡さずんばあらざるなり天皇の兵を擧げ玉ひしは實に已むを得さるものにして所謂應兵なり弘文天皇は此兵亂の爲に自ら縊れて崩じ玉へども天武天皇に於ては其初め弘文天皇を殺し玉ふの叡慮ならざりしは村國連男依和珥部臣君手身毛君廣等に詔して今聞近江朝廷之臣等爲朕謀害是以汝等三人急往二美濃國一云々と曰ひしを以て證すべし然れば太氏が壬申の亂原たる近江朝廷の元兇を惡んで其軍を凶徒と記せしは史眼を具へたる者と云ふべし嗚呼天武天皇は智海浩瀚心鏡煒煌たる英主なり太朝臣氏は學識兼備の眞史なり余不敏なりと雖も誓つて其冤を雪がんとす

上陳の如くなるを以て余は紀記二具なり神代卷は天地開闢の眞事實を傳へて神理天則を窺ふべき眞材にして

世界無比の古史たるを信ずるものあり之を信ずる如此厚し故に理義的解釋の機運に向へる今日の學者は肩上に横はれる重任として廣く參照の事物を求め本文の意義を損はざる限りは互に新説を戰はして十分に研究すべしと雖も其意義に關らず之を隨意に取捨し天壤無究の皇統をして其出自を曖昧ならしむるは國家の秩序を紊り皇室の尊嚴を損するの罪ありと又信じて疑はざるなり然れば則ち久米氏が大學敎授の地位に在りて血應の儀範たる身を以て該文を世に公にし古史正傳の眞骨子を一抹打破せんとせしを憤り其罪を鳴して之を責めたりし諸氏の擧動は決して怪むに足らざるなり氏は彼諸氏が國家の秩序と皇室の尊嚴とを保つべき職任あるに非ずして久米氏の罪を責めたりしは尸祝樽俎を越ゆるに類せりと評すれども苟も其興廢は國家の盛衰に關係ある神道の擴張を以て自から任する者は政府の其職を失ふ時と否とを問はず國家の秩序と皇室の尊嚴とを文壇上に保つの精神無かるべからず政府律法の具を假りて之を形有上に維持すると學者道德の具を假りて之を無形上に維持すると自から其責を異にするものなり嗚呼田口氏は儁才博識を以て夙に其名を轟かせし東京府下屈指の人物なり余が文辭の拙陋を厭はず一意斯道に盡さんとするの精神を愛掬して冀くは反省する所あれ

（完）

久米邦武氏が曩きに神道は祭天の古俗と題したる論文を公示せし以來大に神道家の感情を害し遂に諭示免職の沙汰となりたり、當時諸新聞紙は久米氏の論文に就て評論を試みし處ありたるが去る四月七日の讀賣新聞紙に記載せられし評論に對し久米氏は左の正誤を讀賣新聞紙に要求せられたり、文章短簡なりと雖も聊か以て久米邦武氏の心情を知るに足るへければは宗敎子は茲に四月九日の讀賣新聞紙上より轉載し以て江湖の參考に供ふ

○正誤を求む　　久米邦武

貴社今日の新聞に余の神道論は我神道の今日の儘にては耶蘇佛敎と對峙し難きにより其根底を高尙の地に据えんとするに在りと載られしは間違なり彼の文は固り歷史的を以て外面より神道を考へたる説なれども其中に是を宗敎外に超然たらしめんとの微意はありき抑此論をなしたるは今西洋の史學は萬國比較的にて考究して進み一方より比較宗敎學も起りて一球萬國盡く其比較を逃れざる中に兎角東洋の事情には晦くして或は神

道を波斯古敎拜日の系統ならん或はあいぬの蠻俗より出たらんなど丶色々誤解もある樣なるを以て和漢支那の古史古傳を擧げ東洋の太古は皆祭天の故俗なることを考證し而して我神道は最もよく保存せられたりと聊之を高尙の地におきて參考に供へたるなり故に此論の諸科學の注意に上ると同時に多少の駁論はあるならんとは覺悟したりしに思ひも寄らぬ國學者より攻擊を來し其論點の餘り無頓着なるにあきれ倉皇取消したり然しながら舊來の陋習を破りて天地の公道に基き智識を世界に求めて大に皇基を振起すべき今日に當りて學問のみ鎖國し比較宗敎比較言語比較法律を逃避し史學人類學社會學を防止することは得べからず又憲法に信敎自由を許されたれば爾後宗敎上の面倒は生ぜずとも安心し難からん其曉には余の抹殺したる治安妨害の文も回顧せらるゝことあらん歟　四月七日

○呑僧呑居士

先程より去る地方に僧呑居士と呼へる人頻りに佛敎耶蘇敎なとの攻擊をなすより今度は水戸佛敎青年會中に呑僧呑居士と稱する人出て(其他辨士數名)過般三日間耶蘇、神道の駁擊演說を爲せし由なれば此上は耶蘇敎者より呑々僧呑居士か出つるならんと或る傍聽者の話

○宗敎と國家

去月十日岐阜日々新聞は宗敎と國家と題して左の如く論せり「宗敎は國家組織の一原素なり盖し國家を組織するには政治なかるべからず法律なかるべらず敎育なかるべからず又た宗敎なかるべからざるなり而して國家は斯くの如く各種の原素を要するが故に其の一を欠くの不可なると同時に又た其の一をして特に非常の勢力を有せしむべからざる者なりとす若し一元素をして他の元素よりも餘計の勢力を保たしめ其れをして唯り跋扈陸梁を擅にせしめば國家は遂に壞亂滅亡するの不幸を招來するに至るべきなり何となれば一元素特に非常の勢力を占有する時は社會の万事万物をして悉く己れの意の如くならしめんと試み己れの利害得失に依りて國家を左右せんと欲するに歸すべければなり

今夫れ宗敎は國家を組織する元素中の一なるものにあらずや然るに世には一種の怪謀を抱くものあり此の徒の言に依れば佛敎を以て國家を經營せんとするにあるが如し即ち佛敎を以て忠孝節義の大和魂を振起し佛敎を以て道德を養ひ將た佛敎を以て殖產興業を盛んならしめんとす豈に誤れるの太甚だしきものにあらずや苟くも此の怪謀を許さば佛敎の利害を以て國家の利害と

し佛教の得失を以て國家の得失とし遂には佛教の意の儘に國家を左右し此れも佛教に害あり其れも佛教に利ならずとて何事も佛教の都合を計り社會は全く佛教の奴隷となり了るやも測知すべからず萬一にも此慘状を目撃するの日あらんか國家の不幸は申すに及ばず佛教其ものゝ爲めにも意外の災害を醸し果ては佛門の破滅を免かれざる必至當然の理なり」云々

○風俗取締の方針

國家の元氣は中等社會に依りて維持する者なり中等社會の元氣衰ふる時なり然れば國民の風俗を正さんとするにも中等社會に最も注目せざるべからず下等社會の如きは其取締を嚴にすれば徒らに犯罪者を增加するのみにて何等の効能も見えず又上流社會に對しては如何に性實を排斥せんとするも急激に取締り難きものあり若し強て之をなさんとすれば毛を吹き疵を求むるの虞あり且は其數も少なくして無學無識にあらざれば中等社會に對して取締を嚴にせば自然顧る所あるべし、とは副嶋内務大臣の風俗取締に關する方針なりと傳説す去りながら上流社會とて下等仲間とて全く取除けと云ふ譯ならぬは勿論なりと云へば何れも努油斷あるべからず

○風俗矯正の一方便

關西各縣には兼てより藝妓を遊廓内に蟄居せしめんとの議ありしが岐阜縣にては他縣に先ち來る六月三十日より遊廓所在地の藝妓は凡て廓内に居住すべしとの縣令を發したるよし

○孝子の賞與

府下赤坂區新坂町五十九番地羽鳥福太郎と云ふ者あり以前は相當の生活を營みたる趣なりしが明治十五年の頃不圖胃病に罹り五ヶ年の久しき名有る醫師の治療を受け漸く本復したれども夫れが爲めに資本を失ひ家產を傾け遂に人力車夫とまで成果たる折柄又々不幸にも舊病再發し中々勞力に堪へ難く今は其日の生計にも差支ふるに至りしが一家何れも心懸け善き者にて妻ぎんは長男榮太郎(年十二)を勵まして毎日蜆を賣り歩かしむるに榮太郎未だ幼少の身なれども能く其敎を守り晝は終日行商して藥餌の料を辨じ夜は病床に侍して看護の勞を採り且つ殊勝にも毎朝冷水に浴して只管父の平癒を神佛に祈る等實に世に珍らしく奇特の擧動近隣に隠れなく孝子の聞え益々高かりし程に遂に近藤赤坂區長山田赤坂警察署長等の耳にも入り府知事警視總監等へ夫れ〳〵上申ありければ府廳に於ては尙ほ篤く取調の末

本月五日左の通り賞與ありたりと云ふ今の世得離き孝子と云ふべし

東京市赤坂區赤坂新町
羽鳥福太郎長男
羽鳥榮太郎

平生父母に事へて至孝父の病に臥すや幼年の身を以て行商藥餌の資を辨じ日夜看護に志を盡し歲餘一日も倦怠せざる段奇特に付き爲其賞金五圓下賜候事

明治廿五年四月五日

東京府知事從四位富田鐵之助

○琉球の葬式

是れ亦奇なり先つ一家不幸あるときは家族一同大聲を放つて泣き叫び直樣鐘叩者（葬式の際鐘叩きを營業とするものあり）を雇ひ來りて憐れ氣に鐘を打ち鳴らし居るなり又葬式は即日に行ふが通例にて聽て時刻に至れば死者の棺を舁ひて其家を出で家族は勿論苟くも血緣あるものは皆之を送るなり又知己朋友其他村內の者共何れも會葬し一見其儀式の甚だ鄭重なるを知るべし又此際內地人の見て惻隱の情に堪へずと云はんよりは寧ろ奇怪の思ひを爲すは棺の後へに隨ひ行く家族を始め總ての血緣者何れも大聲を發して泣き如何にも悲哀の情に堪へ難き面色して進み行くことなり殊に是等の者には一人に付き二人宛の看護者ありて悲みの餘り殆んど步行出難きかの如く該看護者の肩に寄りて漸く葬式場に赴くなり右の如く死者の血緣者は途すがら何れも泣き叫ぶを以て其喧しきと言はん方なく家族親戚の多き者の死したるときなどは其泣聲實に物悽く內地人の實に夢想にも浮ばざる程なり死は固より悲しきものなれば人情泣き叫ぶは至當の事なれども同島民の如く其悲哀の情を表するものは恐らく他に其例を見ざるべし斯く云へば同島民は如何にも淚もろきが如くなれど決して左にあらず、と云ふて非常に其死者の不幸を悲むにもあらずして只古來よりの習慣に依りて死者あれば必らず泣き葬送の際又大に泣かざるべからずとの觀念深く腦理に染込みたるに依ると云ふが兎に角奇躰の習慣なりと云ふべし又同島にては葬式の際必らず娼妓の會葬するより又其數の多きを以て其家族の名譽と爲す由なるがコハ同島の娼妓ハ內地の娼妓と違ひ云ハゞ外妾の如くにして敢て多くの客に接せざるを以て娼妓の會葬の多寡に依りて其家の富を卜し其人の働きを確かめ又其人の人望如何を察するなり故に富豪の人死するときは娼妓の頭分即ち琉球語に所謂大アンマなるも

のが他の娼妓を驅り立てゝ會葬せしめ死者の緣者行く〳〵泣き叫ぶの傍ら時ならぬ春を來たすの觀ありと

彙報

●日本ユニテリアン第一協會　は四月中毎日曜日午前十時より京橋區加賀町八番地假會堂に於て古莊氏、西村氏、神田氏等の說教ありて毎會相應の參集者ありし由

●神田區錦町講義所　は去四月三日開堂式を擧行し、同八日マコーレイ氏の演說ありし後同月十日即ち第二日曜日より同講義所の擔當者ローレンス氏は毎日曜日に於は說教するの都合なりしが、不幸にして四月十日午前二時頃祝融氏の爲めに建物は勿論同所に備へ付けの書籍器具は盡く燒失せられたり、之れが爲め本會に於て敎會設立部の損失は殆んと四百圓以上に達せり

右に付きローレンス氏は目下日本ユニテリアン第一協會に於て盡力中なれとも遠からずして氏は更らに傳道所を撰定し以て氏か得意の器量を顯はすに至らん

●藥研堀敎會は創立以來日猶淺しと雖も有志者の盡力に依り追々隆盛に至れり、今や同會に加盟せんとを企望せらるゝの者已に十名を越へ役員會の議事に於て最早入會を許すの運びに至りたる由

●高田てい子逝く　本年三月以來病蓐に在りしが終に去月十六日午後八時半頃東京市本所區相生町十五番地の自宅に於て永眠せられ同十八日午後一時同所を出棺して染井村埋葬地に葬られたり、此の日の送葬式は三並良氏の司る處にして同氏は聖典朗讀、祈禱、追悼の說敎と共に遺族を慰諭せられたり、古莊三郎氏は敎友の一人として禱告を爲し、贊田剛橘氏は高田貞子が生涯の事歷を述ぶ而して其大畧は左の如し、

高田てい子は明治三年閏十月廿三日遠州濱松分木に產る、てい子の父高田義次は元と幕臣なるの故を以て彼の德川幕府瓦解の當時舊主に從ふて靜岡濱松の間に流浪し、後明治五年四月途を得て東京に移り爾來今に到る迄で東京に住居す、

てい子は明治九年九月東京に在て小學に入門し同十四年九月卒業す、是れより先き明治十一年良師を得て漢學を修め亞で十八年五月キリスト敎を信じ受洗して本所敎會に入る、十九年三月一學校に於て英語學を修め進步甚だ迅速なりし、明治廿一年九月より東京音樂學校に入門し「ヴァイオリン」を專修す、廿三年十二月前川太郎氏と結婚して高田の家を繼ぐ、廿四年六月音樂學校を退く内助の必要之れを允さゝれはなり、是れより前き高田太郎氏はユニテリアン協會にありて敎師の職に在るを以て、てい子も亦其敎籍を轉じて日本ユニテリアン第一協會に轉ず、廿五年四月九日出產して男兒を擧ぐ母子共に成長あしく兒は即日死し、てい子も亦藥石の効なく玆年廿一年七月を以て一期とし終に四月十六日午後八時半頃昇天せられたり、てい子は其終に恢復すへからさるを知るや其後に殘りし双親の事を所天に依托し此の世に戀着するの有樣更らに見へず只だ將に到らんとする新天新地に向て充分の望みを懐き犯すへからさる信仰を以て安全に其靈魂と神の聖旨に任かせ奉りしとかや、實に信神家の死期に於ける信仰は斯くありたきことにこそ

宗教 第八號（明治廿五年六月五日）

社説

祈禱論

マツコーレイ

余は近頃日本の靈場勝地を探らんが爲め勢州地方に旅行せり、其途上に於て同く靈場聖地を訪はんか爲に旅行する數群の同行者を見たり、惟ふに此れ等の同行者は其目的とする處盡く所々の神社佛閣に詣で、本年の作物豐饒ならん事を祈るあり、或は商業の彌や益々隆盛にして利得多ふからん事を願ふもあり、或は病の快愈を祈るもあるべし、勿論多數中には見物遊山に出掛けるものあるべしと雖も、要するに是れ等は神社佛閣に參詣すれは滿腔の願望を吐露し、恰も小兒が双親の膝下に物を乞ふが如く、赤心眞面目に祈求するものたるや明なり、彼れ等の心中豫め其神佛なるものは盡く人間の如く、告くるあれは之を聽き、問ふあれは之に答へ、強て之れを求むれは情ありて之れを容れ玉ふものなりとの信仰を有するに依て然るものなるべし、必竟古來人間の總へて他を忖度するに當ては、己れを以て其尺度とするものにして、恰も兒童が其兩親も其愛犬も等しく己れの如く小兒らしきものなりと信するの類なり、

歸路に於て余は又函嶺の旅舍に一宿せしが、早朝旅客猶ほ熟睡せる頃に於て戸外に怪しげにして聞き慣れざる物音するを聞き、春曉の夢半ばにして起き出でゝ見れは、コハ如何に、庭前には一人の壯者東天に向ひ跪きて太陽の昇るを遙拜せり、余は此の人に依て大に禮拜祈禱と云ふ事に關し一層の注意を喚起するに至りたり、夫れ祈禱は獨だに日本人のみ然する者に非す、東西兩洋の區別なく、北は氷山の間に嚴冬を凌くのエキスモー人より、南は南洋諸島の土蠻に到るまで盡く禮拜祈禱す此の如く、祈禱は宇内一般人類の特性にして文野古今を問はす盡く此の性質あるものなり、

然らは何故に人間は如此祈禱を爲すの性質を有するものなりや、

第一、人は賢愚を論ぜず萬事意の如くならざるを知る、譬へは霖雨連日なれは速かに好晴天を望むと雖も時到らざれば如何ともする能はず、夏日炎天地上を燒くの時に當て冷風を欲すれとも得べからず、返て嚴寒の候に北風吹きて吾人に滿足を與へざるが如く、其他毎歲の豐作を望み、無病息災を望むと雖も老少不定ありて如何ともすべからざるを知る、茲に於て人の此の世にあるや、實に單身孤獨賴み少き身にして人間は身己の力及はざる處あるを知り、人は此の及はさる處の者に向て依賴し、之れと共に和き、之れと共に睦み、此の力の暴威を逞ふせざらん事を企望するものなり、故に迅雷風烈に接するや大に恐懼心を發し、之に降伏し、之れが意に逆はざらん事を欲し、之れを樂ましめ、之れを喜はしむるに當ては己れが最も貴重するものを捧げ、以て其神意を和げんとす、故に初穗を捧けて豐作を祈り、犢牛を屠て燔祭となし、時としては己れの愛子を捧げ、或は其家中の一人をも犧牲となすが如き事實あるは歷史上に明記せられたり、必竟此れ等は人類の理想未だ幼稚にして、恰も小兒の如く、己れを以て盡く他を推し、神佛も亦己れの如く智情意の三識を具へ、己れの欲する處の者は神佛に於ても欲し、己れの貴重する處のものは神佛に於ても貴重せりと確信せしに依り、斯る禮拜供養等をなすものなり、

然らば如此禮拜は吾人の爲すへきものなるや、否な吾人は決して如此兒童的禮拜祈禱を爲すへからさるものなり、如何となれは、今之れを學理に照し、又實際に照すも、吾人は斯る祈禱を以て適當なりと見認る事能はざれはなり、理學の大家ロバートソン氏曾て曰へるあり、試みに吾人をして海邊に於て、波浪の爲めに陸上に打ち上けらるゝ處の一ッ砂礫をして、猶ほ三尺ヨり陸上に高く打上け玉へと神に祈求せんに、神は此の祈禱を聞かんが爲めに如何なる作用を爲さゞるへからさるかを驗せしめよ、彼の砂礫は波浪の力に依て陸に打上けらるゝものなれは、今之れを猶ほ三尺上方に押し上げんには、先つ神は此の原動力なる波浪をして、之れに適宜なる勢力を與へざるへからす、而して此の波

涙をして動搖の度を高めしむるに當てや、次に波動の原動力なる風力をして尚ほ一層强大ならしめさるべからす、次に風力の原動力なる大氣の熱度に異變を來さゞるへからす、次に大氣熱度の原動力たる遠き太陽の熱度を變化せさるべからす、如此順次其原動力に溯りて變化せしむるに非ずんば能はさるなり、故に神は一砂礫をして今打上げし處より猶ほ僅に三尺の高度に押し進むるに當てや、世界創造は勿論、宇宙創造の時より豫め用意周到ならざれば得へからす、且つ此れと同時に此の砂礫を三尺上方に押し上げしより、未來永遠に至る迄で之れに伴ふて起る處の結果をも變化せざるへからさるに至ると、然らは今天然に行はるゝ處の一小出來事を變化せん事を神に祈求するは則ち、神に向て宇宙創造の始めよりの天則に一變動を起さしめ、神の豫め定め玉ふ處の將來の運動にも亦永遠の變化を起させ玉へと希ふに等しく、理學上决して神は許す能はざるものたるや萬々明瞭なり、

飜て今實際に照して之れを驗するも、亦斯の如き兒童的祈禱は神の聞召し賜はざる實例を知るに容易なるべし、玆に豐作を祈る農夫あらんに、毎日神饌供物を捧けて神慮を慰むると雖も、必すしも毎歳の豐作を期すへからす、時として神は隣家の不信心なる者のゝ田畑に幸し、反て熱心なる祈求家の田畑を災ふ事等往々にして之れあり、或は日本にて家屋を建築する者は誰れにても棟上げの御祈禱を爲し、火災天災のなからん事を願ふと雖も、往々火災、水災、地震等天災の爲めに其家屋を滅亡せらる事實あり、現に神田區內の大火の如きは其一例にして、强ち該區內の家屋建築の際に棟上の御祈禱を省畧せし故にもあらざるべしと雖も、如何んせん一人の不注意と大風の媒介に依て數百千の家屋財產は盡く烏有に歸せしなり、聞く曾てイタリヤのフロレンス府に在てコレラ病流行の際に當り衆人盡く其寺院に詣でゝ病毒退治の祈禱を爲し、斷食をなす事每日なるも、天使の聖像、聖使徒の石像耳なきか、將た聞かざる眞似するか、吾人は之を知らすと雖も、群衆祈禱の中に在て現にコレラ病に感染して吐瀉し、即死

する者往々にしてありければ、群衆も終に其勞して功なきを覺り、聖使徒の石像を市中に引出して之れに鞭撻したり、此の時に當て醫師及ひ衛生家は百方愚民を諭し、水道より下水の大掃除を始めしかば日ならずして病毒も退散せりとかや、是れ等は實際寺院内に群衆して爲せし祈禱或は斷食よりも、病毒退治には衛生法の勝れるものたる例證の一にして、其他成田山に百度參りを爲し難行苦行を爲して祈禱し、時としては靈驗の在りしか如きものなきよしも非すと雖も、是れ實に曉天の星晨に等しく、萬人中一二に過ぎざるものなれば、實際に照すも、如此兒戯に等しき祈禱は神の聞き玉はざるのみならす、又同時に神の喜ひ玉はざるや明かならん、

然らは吾人は全く禮拜祈禱なるものを廢棄すへきものなるや、甲論者曰く然り、如何となれば祈禱は以て旻天に達し宇内の大原因より其結果たる萬有の現象を變轉する能はざればなりと、之れに反して乙論者曰く否な、之れを全く廢棄すへからざるなり、如何となれば甲論者の如く吾人の祈禱は以て天地を變動せしむるに足らざるにも關せす、猶ほ吾人の胸中依然として他物に依頼するの性質あるを如何せん、故に神は吾人の祈求を聞召し玉はさるにも關らす、吾人は暫時心を潜め思ひを凝し以て天地の靈智靈能なる神の前に拜跪する時は、例之今迄で如何なる世上の辛苦艱難、或は憂悶憤懣に圍繞せられしと雖も、知らす我れを忘れ我精神をして高尙なる理想の中に翱翔せしめ、實に愉快云はん方なし、人ありて今或る出來事に依り、鬱憤に耐へ兼ねて今や正に自殺せんと決心せし時と雖も、或は密室に入り或は幽邃人なきの處に於て心を靜かにし跪きて、積る鬱憤を大神の御前に告禱する事恰も小兒の其慈母の膝下に訴ふるが如くする時は、今迄で憂鬱に塞かれし心も晴れて又一入ほゆかしき心となり、恐くは自殺等の如き短慮輕卒の擧動は爲さゞるべし、必竟此告禱は觀格的に外方に在る神は吾人に力を與ふるに非すして、主格的に自己の力が自己に反照して其勇敢を鼓舞するものにして、實際に於ても大なる能力あるも

のなり、在昔クロムエルの軍勢は正に戰はんとして祈禱せり其決心の强き實に驚くに耐へたり、故に到る處に勝ち、勝ては敵軍を非常に苦しめ、前代未聞の殺戮を恣にせり、是れ必竟正義を愛で玉ふ神はクロムエルが軍人の禱告を聞召され、其軍人をして殺戮を恣にせしめしに非ずして、其軍人等が神の名に依て、自らを奬勵鼓舞せしに過きさりしなり、詩人は斯の如き祈禱論者の理想を穿て曰へるあり、

ゑばしみまへに　ひざまづき
よわきろこゝの　そのそこに
おもひもかけぬ　へんくわをは
あらわゑたまふ　みちからの
わが身にあまる　頸かせを
おろしたまふぞ　ありがたき
夏のくもまに　なるかみの
音もはげしく　ふりみだる
夕立ちくもの　はしりゆき
虹見へそめて　遠ち近ちの
野山もはれて　見へにけり
弱きおもひに　ふしゑづむ
涙にかへて　いまはまた
心も晴れて　雄々しくも
いさみに勇み　起ちにけり」

と此等は孰れも隨分道理ある議論にして、就中乙者の議論の如きは最も價値あるものなり、余輩は甲論者の如く全く廢棄主義を取るを欲せず、如何となれは道理上又は實際上祈禱を以て天地の原理を左右する能はすとするも、退て吾人の意向を察すれは、猶ほ吾人が所謂依賴心なるもの依然として存するを如何せん、吾人は之れを漏らすに當て何れにか其道なかるへからさるを知ると雖も、亦以て論者の如く單に自己より出でゝ自己に歸る反響或は反照のみなりとも考へ能はざるなり、

吾人は今此の問題を論するに當て、豫め此の人間は如何なる者なるやとの問題を研究せさるへからす、勿論人も亦宇宙万有の一部にして、等しく神の現象に過き

さるへしと雖も、此れと同時に人間は此の宇宙の一表本にして即ち一の小天地なり、人間たるの名稱は此の小天地内に包括せらるゝ處の、一勢力の中心點なり、故に今此の萬有は神の現象なりとの無差別を離れ差別の上に於て、一個人として見る時は、吾人々類は强ち何事をも爲す能すと斷言し得るものに非す、譬へは今板に釘を打たんと欲するに當り、吾人は鐵鎚を取り力を極めて之れを擊ち入るゝに非すんは決して釘獨り板の內に穿入せさるへし、此の出來事此の結果を以て吾人は眞面目にも、吾人の爲せし事業なりとて其不可なきを知る、或は杖を春郊に曳きて散策を試みんとするにも、亦必す自己の脚を運はされば到る能はざるべし、是れ少なくも吾人の行爲に非すして將た誰れの行爲なりや、蓋し吾人は此の宇宙間にありて全く無氣力無爲の者に非すして、必す有氣力有爲の者たるや明なり、今吾人の擧動は如何なる作用を爲すやを驗せんに、吾人が今拳を擧げ或る机を打たんに、此の行爲擧動に依て吾人以外の物躰、即ち机に一ッの劇動を傳へ、此の劇動は之れを大氣に傳へ、音響と爲て吾人の耳に反響し、且つ此の劇動は大氣地球に震動を傳ふるものたるなり、固より其震動は極て僅微にして吾人の感觸し能はざるものなるへしと雖も、實際物の震動は一度甲物に發すれは其周圍の乙丙丁戊已に傳へ、更に之れを其の隣の隣に傳ふる事、恰も石を水中に投する時、水面に波紋を呈し、其震動四面八方に通達するが如きものなれは余が今机を打ちし震動は數百千年の後ち、太陽に於て此の震動を傳ふへしと云へは、恰も虛僞假定の議論なるか如しと雖も、是れ實際の天則にして決して虛妄の言に非さるなり、

以上は只だ物躰の上に於ける吾人の動作の自己以外に感動する處の例證なれとも、今一步を進めて此の精神界に於ける感動を論せんに、人生は此の世界と共に猶ほ幼稚不完成なりと雖も、今日現に甲人の意思を以て乙人の意思を左右するに足る事あり、彼の英雄豪傑なる人々の人望、即ち語を代へて云へは、人心の磁石力は數百萬の人々を己れが手足の如く使用するのみなら

す、數百萬の人々は其最も尊重する財産、生命をも擧て此の英雄の意思の儘に爲すものなり、甚だ敷に至ては近世新たに發明せる、人身磁石力(ヒプノチズム)應用法に依り、外科手術を爲すに魔睡劑を用ゆる事なくして大腿骨の切斷を爲し、或は腫物を切發し、而して病者は全く其苦痛を覺へさるが如く、手術後始めて自己の精神は全く他人の支配下にありて己れを忘れたる事を知るに至る、是れ等は現に佛國邊に於て專ら醫療に應用實驗中のものにして、今若し人智益々進歩發達し來るの曉に於ては、人間の意思は甚た敷き感動力を他物に及ほすや期すへきなり、

前陳の如く吾人の腕力は外界に震動を及ほすが如く、吾人の意思力も亦等しく其感應を外界に及ほすものたるを信認せらるゝなり、勿論其度の高低强弱は論外と爲すも、一擘の腕力猶ほ遠く太陽に震動力を與ふるを以て見れは多少高低の差あるも何ぞ人類の一意想、一念力は外界の諸靈にも亦感動せさるの理あらんや、故に吾人は乙論者と等しく、吾人の意思は直接に吾人の上に反響して感動を與ふるものたるを信するのみならす、猶ほ一歩を進めて吾人の念力も亦必らす自己以内に止まらすして、自己以外にも其餘勢を及ほすものたるを確認するものなり、併しなから古昔曚昧の餘風を率き、吾人の一念力は外方物質上に現著なる變化を與へ得るものなりや、否やの點に到ては輕しく信認する能はざるものなり、

論林

ユニテリアン教徒の本尊

在佐賀　洪　榮　三

弓の達人となり鐵砲の名人たらんと欲する者は先づ其標的を造り狙(ねらひ)を定め一心之を貫かんとの熱心あるを要す暗中に弓を放ち大空に砲を發するも百年益なかるべし何ぞ養由基たるを得ん何ぞ村田大佐たるを得ん學をなす者も亦た然り漫然書窓の下に沈吟するも決して益する所なかるべし故に學者たらんと欲する者は先づ之を父兄に質し師に問ひ朋友に謀り或は地理或は歴史或

は理化或は動植物各其年齢に從ひ時期に應じ順序を逐ひ以て其學を進むべし彼を讀み此を學び左に顧み右に面ひ目的の定まるなく漂々たる浮萍の如くして安んぞ能く學問の上達するものあらん況んや自ら一家をなし名を百世の下に垂るゝに於てをや

天下の事物標的を要する斯の如し然らば則ち宗教獨り此範圍外に出づるを得ざるや明なり夫れ天下の宗教指を屈するに遑あらすと雖ども先づ重なる者を列擧せば耶蘇教、佛教、儒教、回教、火教等にして其優劣の差こそ異なれ共に人を善に導びき悪を避けしむる所以にあらざるはなし故に儒教徒、熱心に孔子の教に從つて身を立て行を研くべし決して儒教を奉ずると共に耶蘇教を慕ふ勿れ火教徒は誠實にゾロアスターの教旨を奉じアーレマンを崇拜すべし決して傍らに佛教を奉ずる勿れ佛教徒も然り回教徒も然り各其本尊釋迦を奉ずべくマホメットを戴くべし何ぞ法華經を學ぶと同時にコーランを學びアヴェスターを讀むの必要あらん各宗の教徒たる者各其本尊を戴き各自をして之れと同一躰たらんことを勉むべし何ぞ自己の本尊を棄てゝ別に福を祈り禍を避くるの魔法を聽くを要せんや

讀者諸氏或は謂はん然らば則ちユニテリアン教の本尊は如何ん？ユニテリアン教は天下の宗教を以て交友となし佛教にも眞理あり儒教にも眞理あり回教にも眞理あり火教にも眞理あり耶蘇教にも眞理ありとなすものなり彼れ何人を本尊とし何人を理想となすべきを知らざるべし、ユニテリアン教徒の本尊は耶蘇基督なる？孔子なる？釋迦なる？ソクラテスなる？カントなる？將た又たゾロアスターなる？曰くユニテリアン教徒の本尊は斯の如き地上の人物にあらざるなり地上の人物は假令ひ聖なりとなすも尙ほ國情に支配せられ社會の智識に支配せられ不完全なるを免れざるは爭ふべからざるの理なり、ユニテリアン教徒の理想とし標的とし本尊となす所のものは圓滿完全至らざる處なき、能はざる處なき上帝にあり仁愛の源泉たる正義の根本たる天父にあり故にユ教徒たる者は此圓滿完全なる天父の功德を讃し之に從順に是れと意志を通じ之れに類似せ

んとを勉むべし
人或は謂はん上帝は其大量るべからす其善度るべからず其美盡すべからず所謂る絶對的無限のものなり地上の人類有限待對的のもの如何にして其志意を知り其聖德を賞讃するを得ると是れユ教徒を攻撃する者の常に口にする處にして彼等が頼りて以て金城鐵壁となす所のものなり然れども余は之に對へて謂はんとす曰く人類にして聖賢の稱あるものは其有限なると共に幾多の無限的性質を備ふる者なり其待對なると同時に幾多の絶對的性質を有する者なり故に此等諸聖賢の遺範に遵據し天道人道の何者たるを知覺し頼りて以て天に事へ己を守るの道を講ぜば天意を悟了する蓋し難きにあらざるべし況んや天下の諸人各理性ありて幾分か神子たるの性質を備ふるものなれば人欲を去り僻説を脱し公平無私の誠心を以て事に當らば天人の間だに連接せる一條の道路は人類をして上帝の膝下に到達せしめ天父と意志を交通するに至る蓋し容易なるべし倘ほ何ぞ絶對的の上帝は待對的人類の考定すべきにあらずと云ふの要あらんや
ユニテリアン教徒の理想は上帝にあり故に耶蘇一人は未だ以て上帝の肖像となすに足らず釋迦、孔子、カント、ソクラテスの諸賢を合するも未だ以て上帝の肖像となすに足らず上帝は此等の諸賢に加ふるに幾多の善良なる性質を以てするものなり、ユニテリアン教徒は仁愛の行ふべきを知る何となれば是れ上帝の意志なればなり、ユニテリアン教徒は正義の行ふべきを知る何となれば是れ天父の萬物を處理する法則なればなり、ユニテリアン教徒は其本尊上帝にあり故に舊新約書に某々の命令あるも之を自然の法則に問ひ人性に訴へ不條理なる者は決して之を奉ぜざるなり、法華經に某々の制定あるもコーランに某々の禁條あるも之を天意に質し道理に問ひ其然らざる者は之を拋棄するに躊躇せざるなり、之を要するにユニテリアン教徒の本尊上帝は遠く數條の河流を隔てゝ前方に横はれる大湖にして孰れの河流よりするも之に到着せざるはなし然れどもユニテリアン教徒は此大湖より流出せる小河川を以て

理想となすものにあらず釋迦何かあらん耶蘇何かあらん之を我が本尊上帝に比せば大海の一滴のみ九牛の一毛のみ嗚呼我が本尊上帝は其大度るべからず其仁量るべからず世界幾百の聖賢によりて其聖徳を表はし自然の法則によりて其大智を顯はせり吾人ユニテリアン教徒は自然界を以て經典とし幾多聖賢の訓言を以て聖書となし熟考敢て上帝の膝下に近邇し以て萬物の靈たる人類の特權を落さゞらんことを期すべきのみ

基督教は果して倫常を壞亂するか

三並　良

政海の風濤愈益高く黨派の軋轢愈益甚たしく民心洶々たるは是れ今日の光景にあらずして何ぞや此の時に當りて法典實施斷行延期の說饒々然として世上に行はる余は素と法理を講するを以て自ら任する者にあらざるが故に新法典は果して法理上完全なる者なるや否、新法典は必ず明年より實施せられざる可らざるや否を玆に論せんと欲する者にあらず然るに余法典を實施するを否とする者の意見を讀むに其中に新法典は倫常を壞亂すと云へるの章あり而して其の然る所以のものは新法典は基督教の主義に基くが爲なりとす是れ余が玆に聊か論ぜざるを得ざるに至りたるの原因なりとす

基督教の主義は果して倫常を壞亂する者なるか論者は曰く「民法の法文先づ國教を紊亂し」と又曰く「嗚呼倫常は祖先尊崇家制恪守の影なりと蓋し論者は我帝國の倫常は祖先を尊崇するの國教を以て其の基礎となす者なるが故に祖先を尊崇せざる基督教は我國固有の倫常を壞亂すとなす者なり

祖先尊崇とは果して何の意ぞや論者は曰く「祖先の肉體は既に存せざるも祖先の神靈尙ほ家に在りて家を守護す家長之に奉仕し細大の事之を家神に告ぐ」と

余は此の論を讀で一たびは喜び一たびは悲む其の喜ふ所以のものは論者も亦た宗教を度外視する者にあらず且つ人の靈魂は不朽不死なるを信ずる者なればなり論者は元と眞面目熱心を以て其の滿腔の精神を吐露する者なるは敢て疑ふべきの事にあらざるべし此の時に當

りて吾人は論者が宗教心を發見するを得たるを以てなり而して其の悲しむ所以のものは論者の如きは博學多才十九世紀の學理に通ずる者なるに關らず尙ほ依然として多神教の理に徜徉するを窺知するを得るが故なり今の時に當り學者間に向て多神教の取るに足らざるは喋々するは甚だ蛇足に屬するの感あり元來多神教なる者は人智未だ開けず哲學未だ發達せず理學尙ほ進步せざるの時に至り根ざしたりしものにして哲學が世界を以て統一的のものなりとの必至の理を極め理學が宇宙の秩序を考へ實踐論を講ずるに至りて多神教も亦た其の中の一顯象なる祖先宗も漸く信奉する者なきに至りしなり

吾人は人間なる者は肉體と精神とありて成立する者にして物質的なる肉體は暫時間にして再び其の組織を解き散亂すと雖とも其の精神は不朽不死にして在存せざるべからざるの理を知れり是れ我論者も亦た信仰する所なり然れども論者は更に步を進めて斷案して曰く「祖先の神靈は家に在りて家を守護す」と論者は何の理の憑據する所ありて祖先の神靈は家に在り而して其の家を守護するを知るか勿論我國民は多く此の信仰を有せし者にして今尙ほ此の信仰を存ぜり然れども若し此の信仰にして今日の學理的良心に反くならんには之を放擲するは學者の本分にあらずや況んや其の斷案の辨證は徹底出來得べき事にあらざるに於てをや又若し祖先の神靈は家に在りて家を守護する者なることを確知確信せず單に古來の習慣なるを以て家神に告ぐるの禮を保存するものならんには是れ實に虛禮に過ぎざるのみ吾人は虛禮を重ずる者と共に倫理を語る能はざるなり盖し虛禮は是れ實に僞善にして僞善は反倫理なればなり

雖然若し祖先尊崇の意は宗教的にあらず純粹なる倫理上の者なりとせば是れ吾人の全然同意し得る所のものにして基督教は決して之れに反對する者にあらざるなり吾人が今日に存在し得る所以のものは何ぞや是れ我祖先の恩澤に因れり我帝室今日ある所以のものは何ぞや是れ我帝室歷代の皇帝あるに因れり而其の恩澤は我

邦と我祖先の沐浴する所なり吾人焉ぞ其恩惠厚澤を忘却すべけんや聖書が「我祖先の事へし神」と云ひ或は「アブラハム、ヤコブ、イサクの神」と云ふも實に又た其の祖先の恩澤を追慕するが故なりイスラエルの人民がモーゼ、ダビデを忘れ能はざるも亦た是れが爲めなり基督教信徒たる者は祖先を神とし祟拜する能はざるも之を敬尊追慕するの情に至りて自ら昌盛なり

論者は曰く「夫れ一男一女情愛に因りて其居を同ふするは所謂耶蘇教國の一家なり平等博愛君臣の別なく父子の倫なきは耶蘇教國の常道なり、人類の敬と愛とは獨尊の耶蘇基督獨り之を專にする所君父の與り知るべきものにあらず、故に耶蘇基督の前に在ては父子平等にして尊卑なし祖先及び父を敬慕するは却て耶蘇基督を侮辱するものなり子孫豈に祖先の敬すべきを知らんや是に於てか孝道衰焉」と何ぞ其の言の妄にして基督教を知らざるの甚だしきや勿論論者と雖ども一男一女情愛に因りて其の居を同ふする耶蘇教主義なる家族を非とするにはあらざらん一夫一婦の制は天理に出で丶人世に適する者なり之を彼の慾情を制するを得す意馬心猿の奔逸を禁ずる能はず數婦を藏へ家族の風波常に絶ゆるなく嫉妬怨恨しきりに起るに比せば常智あるものは其の何れか人間らしきやを知る容易なるのみ

耶蘇教國の常道は君臣の別なく父子の倫なしとは果して眞なるか、論者は曰く「耶蘇基督の前に在ては父子平等にして尊卑なし祖先及び父を敬慕するは却て耶蘇基督を侮辱するものなり」と此の語果して基督教の聖經中に其の憑る所を有するか吾人は實に之れあるを知らざるなり若し夫れ人間なるとに就て論ずとせは世界億兆の生靈皆な人間にして其を相比せば皆な同じく人間てふ價値を有す人間てふ品位に至ては萬人皆な相等しく彼此の人は其の人間てふ品位を異にするの理あらざるなり然れども世の存在物は皆な相對的の地位にあるを免る能はず人間の此の世に出ずるや復た多くの關係を有す或は君となり或は臣となり或は父となり或は子となる而して基督教が之に教ゆる所は各其の地位にありて善く其の義務を全ふせんと是れなり聖書に「此

の世に在て家宰を求る所は其忠信ならんこと也」（哥林多前書四章二）と云へるも其の意なるのみ故に基督教は人の子たる者に命するに其の父に事へては至孝ならんとを請求する者なりモーゼの十誡の第五は明かに之を云ふものなり曰く「なんぢの父と母とをうやまへ」と耶蘇基督も亦た嘗て僞善に流れたるパリサイの人と學者等を詰責して曰く「爾曹は實に己の遺傳を守んとて能くも神の誡を棄る者なりモーゼ曰けるは爾の父母を敬へ又父あるひは母を詈る者は殺るべしと然ども爾曹は曰ふもし人父或は母に對て爾を養ふべき物は「コルバン」即ち禮物なりと曰はゞ事へずとも可しと而して人の其父あるひは母の爲に何をも行ふ事を爾曹許さず斯なんぢらは其敎る所の遺傳をもて神の道を廢ふす」と（馬可七章九―十三）是れ耶蘇教が父母に對する倫理を明言する者にあらずして何ぞや誰れか「父子の倫なきは耶蘇教國の常道なり」と云ふを得んや基督教は嚴然たる父子の倫を說くものなり

論者は又た曰く「耶蘇基督の前に在ては君臣平等にして上下なし君主を崇敬するは却て耶蘇基督を侮辱する者なり臣民豈に君主の神聖を認むるを得んや是に於てか忠君の道廢焉」と此の言たるや亦た甚た妄にして基督教の聖經中に一の憑據すべき所もなからん若し論者の言ふ所眞に基督教の旨意に適せりとせば基督は「帝の物は帝に歸し又た神の物は神に歸すべし」（馬太廿二章廿一）と云はざりしなり耶蘇基督は則ち宗教と政治とを區別し見る者にして臣下たる者の其の君主に對して爲すべきの義務は悉く之を盡すべしと命ぜしなりポーロも又た曰く「上に在て權を掌る者に凡て人々服ふべし蓋神より出ざる權なく凡そ有ところの權は神の立たまふ所なれば也是故に權に悖ふ者は神の定に逆くなり逆者は自ら其罪の定を受べし有司は善行の畏に非す惡行の畏なり………爾に益せん爲め神の僕なり若し惡を行ば畏れよ彼は徒らに刄を操ず神の僕たれば惡を行ふ者に怒をもて報ゆる者なり」（羅馬書十三章一―四）と又た曰く「われ殊に勸む萬人の爲に顧告、祈禱、懇求、感謝せよ王及び凡て權威を有ものゝ爲には

別て之を行ふべし是われら敬虔と端莊を以て靜に安らかに日をおくらん爲なり此は美事なり」(テモテ前書二章一、二)と由是觀之君主に事へて忠に之を敬するには決して基督敎の主義に背く所のものに非らず其は反て基督敎の奬勵する所なり

抑基督敎の主義を以てすれば國家の制は各人各個の便益の爲めに人の制定せし者にして全く人爲的に組織せられたるものなりと云ふにあらず國家の制は神より出づるものとなすなり若し夫れ國家の制は單に人爲的のものにして人の都合の爲めに人の設立せし者なりとせば原理上より論じ來れば各人必ずしも一國の法に從はざるべからずと云ふべきの理由あらざるなり又た若し人世の道德にして其の由來する所は絶對者にあらず又た人間の爲め道德は先天的に授與せられたるものにもあらずとせば國法は必ずしも罪人を罰し得るの理あらざるなり然れども基督敎の主義を以てすれば人世の道德は神より出づる所のものにして法律は道德を以て其の基礎となす所のものなり而して君主若しくは政府は神の意より出でゝ成れる家國を保護する者なりと信ず故に君主若しくは政府あるも亦た神の意より出つる所のものにして神の意より出でたる法を守とる所の者なり而して神既に神聖なり故に神意より出づる所のものを守とるの君主若しくは政府は其の守とる所の法の神聖なる神より出でゝ神聖なるを以て神聖なりとせらるべきものなり

更に歩を進めて基督敎主義大躰の上より論ずるも忠孝の二道は基督敎の常に奬勵する所のものなるを知らん基督敎の主義たるや元と愛の上に立つものにして神を父とし人間を子とし兩者を相結合する者は愛にして父なる神は子なる人間を愛し子なる人間は父なる神を愛せざるべからずとは是れ實に基督の敎へなり父子の情愛を以て神人の關係に比す未た父子の情愛を味ひ知らずんば焉ぞ神人の關係父子の情愛の如きを感知するを得んや父の子を愛するの情子の父を愛するの情の濃厚親密なるは基督の知れる所なり故に之を以て神人間の關係を說くに至りしなり既に神人間の關係を以て父子

の情愛に比する者焉ぞ父子の情愛を輕視する者たるを得んや又た君主に對するの道に至りても基督教は愛を說かざるを得ざるは其の主義の然らしむる所なるや更に多辨を費さずして明かなり子の父に對する愛とは則ち孝なり、君主に對する愛とは則ち忠なり誰れか基督教は忠孝の道を壞亂する者なりと云ふを得んや

歐亞社交法の是非

石毛太一

凡そ大古蒙昧の時代より今日の文明時代に至る迄人々相團結し以て互に利害を共にし緩急相待ち休戚相感ずるは人の人たる特性にして古今の別なく人類の集まれる所には社交、同情等の意味を以て之に充つるは明白なり彼の所謂ソサイチーとは社交と云へる意味より起りしものなり又人間とは人と人との間に存在せらるゝものなるを以て斯く謂へるものなり又人として喜怒の情を備へざるなく且つ言語を以て之を人に示すとを得る所以のものは同情と云へることの起れる基にして且つ又之を抑ゆる所の性あるを見れば實に人は社交物なるを知るに足るべし是を以て人として孤立の生活を好むものなし縱令孤立の生活をなすもの世にありと雖ども彼等は好んで之を取るにあらず已むを得ざる事情の爲め山川を算し恰かも塵界を厭ふの樣を飾るも其心中常に盡く所は人界の外に出でざるなり是れ人類たる性情の然からしむる所にして天は孤獨の生活を許さゞるにあり

夫れ然り是を以て一社會を組織し一國家を作爲し利害を共にするよりして蒙昧の境を脫し能く今日の文明に進步し來りたる所以なり故に現時國をなせるもの其數擧て算ふに暇あらずと雖も强弱文野の差異あるものは皆な結合の强弱によりて來れるものなりと云ふも不可なし一言すれば社會の進步は人類の結合に隨伴するものにして其進步に遲速あるは之が結合の弱强による尙も强て宇內に誇るの大國と雖ども人々個々相反目するあらば土崩瓦壞亦收集すべからざるに至るは既往の史上之を證するにあらずや是に因り之を見れば社會をし

て強大ならしめんと欲せば勢ひ社交法の如何を論ぜざるを得ざるなり然り而して今日人々各秘を盡くし交際場裏の妙を得んと東奔西走するもの多く其力も亦た千百にして盡くす能はざるも大凡之を大別して二となす曰く西洋主義　曰て東洋主義

今ま歐米人士の社交法なるものを聞くに頻繁なる社會に立て人事を處理するに當り常に誤謬多く紛雜混亂の免れざる所以は人々或は一時を彌縫せんが爲め或は人の擯斥を受けんことを恐れ或は人の好誼を損はんことを恐れ自己の意志を枉げて人の意に投合せんとするにあり一言すれば自己の希望に從はざるの約束は實に社會を亂すの根本なり况んや人事進むに從ひ世事亦繁忙を來すに至りては商業上に政治上に要するものは誠實を以てし虛飾を去り何事も己れの意に合はざれば之を否むに躊躇せざるにあり令日歐洲に國をなせるもの其富國强兵の實は心のありの儘を以て人を遇するにあり之を以て彼此の交際上互に外貌を飾らざるを以て益々親密を來し繁雜なる人事を理するには簡便にして且つ確實なる方法と云はざるを得ず殊に人文發達と共に來れる一大弊害は兎角社會の事物が手數を要するに至るの一事にして之を以て社交法の如きは成る丈け煩はしきに至らざる樣注意すべきなり

更に東洋人士の社交法とは何ぞや曰く人を遇するに温顏を以てし縱令心中快からざるも他人には少しも不快の樣を現はさず深く心を沈めて喜怒を人に知らしめず之を以て古來能く東洋豪傑の士は特に己れの心中を掩ひ驚けるに笑顏をなすが如きは其本色とせる所にてありし而して又人の言ふ所往々己れの意に反するも即座之を否むが如きは實に稀にして或は寬仁大度或は温良恭謙等の文字は常に能く社交上に取り用ひられたりしなり故に人と交はるに禮讓あり人を遇するに懇親あり爲めに長幼相序し上下相和し朋友相交るに愛敬友情を以てするに至れるを以て國家大に靜寧にして擾亂の煩ひなく萬事沈着を主とし古聖人の謂へる如く人の人たる所以は禮節を守るにありとすれば人類相集り相結んで一會社をなすに於ては將に斯くの如くならざるべか

らざるや明かなり

然れども更に進んで之を極論すれば事物に利害の兩面あるは到底免るべからざるものなれば彼我社交上の方法各弊害の免れざるあるなり即ち自己の意志に反せず誠實を以て人を遇するは良からざるにあらずと雖ども人の弱點として喜怒により判斷に誤りを來すは往々世に珍らしからぬ事なれば若し彼の如く自己の感情或は一時の思慮を以て人を遇せば鬪爭憂慮後悔等の續て來らざるなきを保せず却て退て後日を待つに益あることあり又自己の意志を抑へ少しく我が意に反するも或は我か意に快しとせざるも座上を取りなすが爲め敢て輕しくせざるが如きは頗る丁寧なるが如しと雖ども固より我か意に反するとあれば後日禍の此處に基せんこと知るべからず東洋人が人と約束するに當て一時之を諾するも實行の期日に至て能く言語の前後反するものあるは即ち即座の靜穩を求め後日の如何を慮らざるにあり之を以て彼我の社交上各一利一害の隨て來れるは到底免るべからざるものと定め何れか今後吾人々類が相集りて一社會をなすに利益を與ふべきやを決せざるべからず世上に良不良の區別あるは一定の方法ありて標準となすべきものあるにあらざるを以て古今東西の別なき能はず故に一方に利ありと雖ども一方に害を與ふることあるは既に論ずる如く事物の常なれば能く世の成行きと人の性質とを探ぐり之が適否を知り從て其物にして果して適すれば良なり適せざるときは不良なりとし換言すれば事物の良不良なるものは目的によりて定れるものなれば從來の習慣を捨て他國の長を取て我れの不足を補ひ之を以て我が利益を暢長するを得ば是れ不良なりと謂ふを得ざるなり特に國各々習慣あり特性ありと雖ども習慣に之を守るべきあり之を守るべからざるあれば我が國人たるもの宜しく之を服膺せざるべからず余輩が彼此の利害を論じ來り二者の是非を世人に問はんとするは唯之が爲めのみ

以上は余輩嘗て米人某と問答せし所にして各其優劣ありて一朝之を論じ去る能はざりしを以て今之を掲げ世の敎へを待つことゝなせり

宗教の力―宗教の由來

土谷忠治

爰に豫め讀者の注意を要することあり、吾儕は敢て諸君の先達を以て自ら任ぜんとするにあらず、又一宗一派の爲に其主義目的を表明せんとするにもあらず、時に或は諸君の從者となり奴隷となり、時に或は諸君の朋友となり、以て益々斯道發達の上に一層の光輝を放たしめんことを期するにあるのみ、故に本論に於て、又余輩の主義に於て若し諸君の意に反する者あらば、請ふ高論卓説を惜むなく以て吾儕を敎導せよ、而して若し取るべきあらば、幸に我運動上に向て一臂の助力を與へよ、

吾儕は前號に於て云へり、純清潔白の清水も其の混交するところの水にして汚穢混濁ならんか、其の結果果して如何、唯淨水の淸淨なる水に混交するを得て、始めて其の純良を得るのみ、小學校事業も亦然り、外界の感勢如何により、其成功に及ぼす所の影響は實に尠少にあらざるなり、若し其の感勢即ち社會の風俗習慣にして善良ならざらんか、如何に校舍をして完美に、敎授をして精巧に、管理をして整頓せしむるも、得て其の良果を期すべからざるや、智者を待て而して後知るべきにあらざるなり、夫れ斯くの如く、社會の風俗習慣より得る所の感化の勢力は實に强大なり、而して文明の進歩するも、退却するも、一に此の力によるものとせば、今に及んで其の感勢の善良ならんことを計畫するは實に吾人の急務にあらずや、

然り、而して此の强大なる勢力を有する外界の風俗習慣を左右する、更に一層强大なる勢力を有するものを宗敎とす、是れ今日吾儕の微力を顧みず、試みに本論を草して、以て世に問はんとする所以なり、世の敎育家たり宗敎家たるもの、希くは先つ一宗一派の爲めに眩惑せらるゝことなく、我田引水的の念慮を放擲し、虛心平氣、活眼以て世の大勢に注意し、斯る論述の何故今日の我國に必要なるかを了得せよ、是れ吾儕の豫め切に諸君に望む所なり、

今宗敎と社會の風俗習慣との關係を論究せんとするに

當り、試みに自ら沈思熟慮せば、蓋し緊要なる數多の疑問ありて、陸續我が心頭に浮現し來るならん、而して此等緊要なる疑問を理解するは即ち所謂二者の關係を解得する最良の捷徑なり、

抑も宗敎なるものは何に依りて生ぜしか、是を劈頭第一の疑問とす、蓋し宗敎の由來を知らんことは吾人の共に切望する所にして、又之を知ると否とは、宗敎の果して世に必要なるか否やを決するに於て、實に重要なる關係を有する事項なり、世に無宗敎を以て自ら高ぶり、人に誇り、恬として怪まざる者の如きも、畢竟未だ宗敎の由來如何を辨知せざるに坐すること甚だ大なるに非ずや、

宗敎の由來を究めんとするには其の如何なる顯象の境遇に於て發生したるか、如何なる狀態の時期に於て發達したるか、又吾人の宗敎心は、經驗によりて生ぜしか、將た天然に附與せられたるものなるかを了解せざるべからず、蓋し這般の研究たる、事頗る難問に屬するを以て、素より吾儕淺學の企及する所にあらずと雖も、而も先賢夙に講明して以て吾人に貽し丶所の諸說、亦一にして而して足らざる者あり、聊か以て發明する所なくんばあらず、請ふ試みに之を述べん、

第一　古代の有樣、成住壞空の眞理に支配せらる丶花は、蕾……開花……晩花……落花の順序によりて誤ることなし、故に今日散ずる所の花……將に散らんとする所の花……既に開きたる花、其元を尋ぬれば、皆是れ一粒の蕾のみ、同じ理に支配せらる丶此の社會……此の人類、其の元は皆總て、闇黑……朦昧……野蠻……未開の時代を經過したるなり、亞非利加內部……南亞米利加內地、其の未開の狀態を見よ、其住民、彼等は父子なく、夫婦なく、君臣なく、昆弟朋友なし、彼等は飢ゑて食を爭ひ、渴して飲を貪るを知るのみ、彼等の常に思ふ所、彼等の知る所、彼等の感ずる所は、肉躰上の禽獸的快樂に過ぎず、其の肉躰の賤劣なる快樂の爲めには、如何なる危難も之を意とせず、其の生命の危殆に陷るまでは、其の苦痛を感せざるなり、然れども彼等は常に恐る、天に轟く雷鳴電光……此の天地

を震動せしむる魔力……地を捲き沙を拂ふの風、……音の響……光の反射等を、彼等は之を以て解すべからざるものとなし、甚た之を恐怖せり、

彼等蠻民は、既に幾千百年間進化し來れる人類なり、而して猶且つ然り、況や其の未だ進化せざるの時代は如何、蓋し吾人が想像推測の及ぶ所にあらざるなり、吾人人類が今日の形躰と智識とを有するまでには、噫々、幾千萬年を經過したりしぞや、

吾儕は今人類の始終を分ちて左の四期とせんとす、

- 第一期　元力（即ち神の力）
- 第二期　……動物的形躰（數階級あり）
- 第三期　人類的形躰
  - 禽獸的生活時代
  - 扮搔的生活時代
  - 神似的生活時代
- 第四期　……元力（即ち無窮なる神の力）

第二期は未だ人類の形躰をなさゞる時にして、第三期第一は肉躰的の賤劣なる生活を存するとき、其の第二は眞理を發見し、神の許に近かんとしつゝある今日の如き時代、而して其の第三は已に一致に歸して將に溶化に傾かんとする時代なり

第二　信仰心の起りし時期及び境遇、庭に植ゑられたる松……梅……櫻、彼等は皆極微なる種子より生長したるものなれども、種子と彼等とは其の形狀に於て、其の大小に於て、決して一致し能はざるべし、彼等が其の初、彼れが如き極微の種子より來りたりとは決して思はれざるなり、然れども其の事實に於ては、毫も疑を容るべきにあらず、而して今試みに其の種子を分拆せば、其の如何なる元素より成立したるかを發見すべし、然らば次に人工を以て其の元素を化合せしめば、能く同一の種子を得べきや如何、其の人工の種子を播種して、能く彼の愛らしき、美しき馨はしき松……梅……櫻を得るや如何、若し此の覆載間の森羅萬象にして、單に形而下的のものたるに止まり、神の附與性なきものとせば、同一の元素を化合するに依りて、能く同一の元躰を得べき理にあらずや、其の然らざる所

以の者は、果して如何なる理にかよれる、知るべし、彼等種子には、既に後來生長して、喬木となり芬草となるべき、天與の(即ち神の賦與したる)性質を固有するものにして、敢て人爲のよく左右する所にあらざることを、

人類の性質に於けるも亦然り、其の原始に遡りて探究するに、恰も猶ほ種子の適當なる時期に遭遇し、自然の培養を得て、生長繁茂すると同じく、祖先傳來の適當なる經驗と敎育とによりて、今日あるを致せること明かなり、然りと雖ども、若し單に經驗と敎育とによりて進化し來れるものとせば、彼の無智なる狗、無識なる猫、彼等も今日までには幾千萬年の經驗と敎育とを積みしなるべし、又未來に於ても積むなるべし、然らば彼等も人類同樣に思考し、又能く思考するに至るべきか、其の終に然らざる所以の者は果して何ぞや、松の種子は梅とならず、梅の種子は櫻を生せず、牛馬雞犬の子孫は、終に牛馬鷄犬たるを免れず、蓋し固有の性質あればなり、單に經驗と敎育とによりて其の進化を致すものにて、補附の性質なきものとせば、生命は肉躰の組織と同物なるか、人類同樣の元素を用ひ、人爲を以て之を組織せば、能く同一の活動を生すべきか、今日の理學をして、將來如何に發達せしむるも、能く此の問に對して肯定の斷言を與ふる者は、恐らくは一人もなかるべし、是に由て之を觀れば、人類の宗敎心は、經驗と、敎育とによりて、新に發生したるものにあらず、是又天賦の性にして、唯適當なる時期と、境遇とによりて、外面に顯現し發達したるものたるを知るべきのみ、而して其の始めて顯現せし時代は如何と云ふに、實に上古曚昧肉躰的の生活をなせる第三期第一の時代にして、彼等は其の肉躰的賤劣の慾望を滿足せん爲に、雷鳴を聞ては恐れ、地震に遇ひては畏れ、其他音響……光線……猛獸……蛇蝎、苟も自己の力(其の時代の人類の力)以上にある者は、皆之を恐怖し、其の災害を免れんが爲、畏敬して之を遠け、崇拜して之れが怒りを來さゞらんことを願へり、是れ即ち信仰心の起りし原因なり、

猶ほ茲に論せざるべからざる事あり、凡そ世にある宗派の數は、頗る多くして、殆ど數ふるに遑あらずと雖も、歸する所は、孰れも幽現二躰の觀念に基かずんばあらず、然るを或論者は、幽現二躰迷信の起源として、論じて曰く「或は一天晴朗たる天空、俄然雲を生じ、雨を降らすとあり、或は忽焉として朋友知己に會し、或は忽ち變じて茫然拱手の苦境に沈むとあり、或は未だ想像だに及ばざる大都府に徘徊すと見れば、又忽ち翻然として僻邑に逍遙することあり、斯く其の轉變の急激なるも、夢中に在りては、未だ敢て意とせざるなり、然りと雖も、其の一度醒むるに及んでは、誰か其不可思議なるに驚かざらんや、是に於てか思へらく、是れ吾人の躰內に、見る可らざる幽躰ありて、夜間異境に出遊するなりと、古代蒙昧の人類に於ては、斯く思ふも無理にあらず、是れ等即ち幽現二躰迷信の由て來る所以なり」と、然れども吾儕は之を以て迷信とは思はざるなり、時としては天轟き、地動き、時としては疾風地を捲き、樹木を倒し、時としては、睡眠中他鄉に遊ぶ、是必ず幽躰の存するによらずんばあらず、唯其の解釋、古は茫漠淺近、今は明瞭深遠の差あるのみ、見よ、昨日眞理となしたる事物も、今は之を以て妄想となすにあらずや、古人は雷の鳴を以て幽躰の所爲となせり、其の幽躰と云ふは即ち古の神力なり、而して今は則ち之を以て電氣の作用となす、然れども其の何が故に電氣の作用は音と光とを發するかに至りては、今人未だ之を知ること能はず、焉んぞ是れ今日の神の力にして、而して後世之を以て人の力となすの時あらざるなきを知らんや、火の燃ゆるは何の理か、古人は之を疑へり、蓋し神の力と云ふ名辭なかりしならん、然れども其の思想上に於て之を神力に歸するの一段に至りては、今猶古の如きなり、見よ、古代は酸素と炭素との化合は以て燃燒を生することを知らず、而して今は則ち之を知る然れども一歩を進めて其の化合は何故に火を發するかは、今人猶未だ之を說明すると能はざるなり、是れ豈神力の然らしむる所にあらずや、世の之を以て迷信なりとして指笑する所の士は、果して能く吾儕

の謂はゆる神力の原因を解釋し得るか、若くは今日之を能せざるも、將來理學の進步は、以て、能く之を解釋し得べしと斷言するとを得るか、

第五　其の進化……其の起原たるや、前に述べし如く、始め各自の恐怖と慾望とにより信仰を捧げしものなれば、古代の宗教は、其の恐るべき者、慾望を達せしむべき者を尊信するにありたりき、　多神教の起るも亦偶然にあらざるなり、　猛獸の恐るべきを見て、之れが難を避けんと欲して之を祭り、雷鳴地震の不可思議に遇うては之を怖れて祭る、之れ彼の亞非利加内部未開人の宗教心に徵して明かなり、　次第に世の開くるに從ひ、猛獸の恐るべからず、又之を恐るべきものとするも、之を防禦するの術を知るを以て、敢て之を恐れず、地震も敢て不可知物にあらざるを以て、之を祭るを肯せずして、其の本質を祀る所の凡神教出でしと雖も、是れ又唯一に其作用を起す所の至大、至剛、極算、圓滿なる、或勢力の實在を發見せらるゝや、凡神教の未だ狹倭、幼稚なるを以て、之に向て信仰を表するに足らざるを知る、是れ眞理を以て、信仰の中心とする科學的宗教の途に起らざるを得ざる所以なり、抑も此の吾儕の希望に向て滿足を與ふるの宗教あるか、讀者請ふ幸に「宗教」（本誌）の表紙裏面を覽られよ、

人性論

在高輪　樂天堂

人の性は善なるか將た惡なる乎の問題に就て古來より聖賢博識の士にして其論說する處少からずと雖も、今之れを大別すれば、第一性善說、第二性惡說、第三性本善の三種に外ならず、惟ふに是等は盡く人間の確實にも此世界に生存する事を承認せる處の積極論者なり之れに反して世間には往々本來無我說を主張する消極論者のあるありて、極端にも有我の說を打破せんと企つるものあれば、今若し斯る論者の如く本來無我なりとせば余が茲に人性を論するも亦徒勞たるを免れざるべし故に、余は本論に入るに先ち豫め本來有我の說

を證明し然る後ち人の天性は如何なるものなるやに論及せんとす、

抑も人とは如何なる者に命名せしものなるや、余は此の耳目に觸るゝ處の肉躰の上に命名せしものに非ざるを知る、然りと雖も論者或は曰はん、其耳目に觸るゝ能はさる處の人間は如何にして其有無を知らんや、人とは只だ空風地水火五原の因緣に依て集合離散する處の一幻躰に過きされば、昨の我も此身躰なる大幹より切斷し去れば我にあらずして立ち處に塵土に化し、昨の野菜肉片も一晝夜を出でずして我と化するものなり、此の如く變轉限りなきものを以て組織せられ乍ら猶ほ我れありとの迷信を起し以て貪慾、嫉妬、憤懣等の如き諸惡を作り終生解脱の大道に悟入する能はさるものなれば、本來有我は俗世界に彷徨する亡者論にして、出世間博識者の議論に非さるなりと、併し乍ら余は斯る論者の如く此の耳目に感觸する處の身躰を以て眞我なりと信ぜざるなり、如何となれば余は吾が住家を以て己れが所有物なりとするも是れ即ち我れなりとの速斷を下し能はさるなり、勿論余も亦人間の肉躰は空風地水火等の諸原素の因緣に依て集合離散するものなるを信ずるものなりと雖も、是れ必ずしも吾人の眞我なりと速斷し能はさるなり、余は此肉躰の内に在て生々化育の道を統御する不可思議なる眞我ありて居住するものにして、余の人性とは此肉躰のみの生質を論ずるに非ずして此れに居住する眞我の天性をも論及せんとするものなれば、果して本來無我なりや、或は眞我なるものゝ實在するありて以て其天然の性情を現はせるものなりや豫め之を攻究せずんばあらさるなり

諺に曰ふ、「人は無情の木石に非すと」、穿てるの言かな、必竟人は耳目に感觸する物質的のものなれば無情何ぞ木石と撰ばん、雖然人は決して無情の木石に非さるのみならず、人は有情、有意、有智の靈性にして、何人も適當なる成長を遂げし者に在ては其毎日の經驗に徵して以て其然る所以を知らん、人間は若し此の耳目に感觸する處の木石に等しき肉躰のみならば、斯る智、情、意の特色を有するや、是れ人は木石同然の肉躰以

外に靈妙不思議なる眞我ありて然るものなるべし、勿論余は論者の如く此の變轉限りなき肉躰を以て眞我なりと信ぜさるなり、人にして若し玆に智情意の三識性を欲き、自己なる直覺力なき時は本來無我なりしやも計り難かるべし、然りと雖も余は面のあたり此れ等三識性の明らかに吾人の自覺性内に在て整然亂されざるを以て見れば、决して本來無我なりと速斷し能はさるのみならず反て本來有我の説を奉ずるものなり、嘗て佛蘭西哲學の大家デカート氏は本來有我を證して曰くCogito, Ergosum.「余は思ふ、故に余れありと」約言すれば余は事物に向て思想せり、今若し我れなるもの無かりせば本來誰なるものありて此の働を有するや、玆に思ふと云ふ働詞あれば必ず之れを思ひし存在者即主働者なかるべからず、玆に爲すと云ひ、考ふると云ひ、思ふと云ひ、怒ると云ひ、信ずると云ひ、或は疑ふと云ふ實事あるときは、之を爲し、之を考へ、之を思ひ、之を怒り、之を信じ、之を疑ひし處の主働者即ち此れ等の實事の原因なる者は豫め存在せざるべからざるや明なり、必竟本來有我を疑ひ本來無我なりとて如何なる者が論者の心中に在て思ふものなるや、是れ論者の胸中眞我の活働して如此現象を生ずるに非ずして何ぞや、蓋し世上に在て吾人の所謂智識なるもの多しと雖も此の本來有我の智識の如く正確なるものは非ざるべし、如何となれば他の智識は盡く此の物質的五官の作用に依り間接に眞我に到達する智識なりと雖も此の眞我を自覺するは直覺にして總ての智識の根元なり、舊約書モーセスの詩に云へるあり『ヱホバを恐るゝは智惠の始めなり』と余は今云はんとす『自己あるを知るは智識の根元なり』と、

前條に略述せしが如く本來有我を知るは人間智識の原始なり、已に本來有我なれば　隨て天然の性狀なかるべからず、故に古より聖賢博識の士は之れが本然の性を論して性善と云ひ或は性惡と論し、或は性本善の説をなせり、其性善説に依れば曰く＝人には仁義禮智忠信孝悌の徳自然に具備せるを以て、發して側隱の心となり羞惡の志となり、辭讓の行となり、是非の判斷力

となる、斯の如きは盡く人たる者の自ら賊ふ者に非ざれば必す就し得る所の事柄なるを以て人は教育に依らず、習慣に關せずして多少を問はず必ず斯る善の本性を具有する者にして、只た教訓其宜に適ひ、境遇其所を得れば開發して純善の諸徳を發揚するものなり」＝と、之れに反して性悪論者の説く處を聞くに＝若し人にして性善なれば世に所謂罪悪なるものは無かるべきに、却て社會に數多罪悪の事實あるを如何せん、夫れ人は幼少にして未だ善教の布かれさる時期に在ては、如何なる行爲を發露するものなるか、無論惻隱、羞悪、辭讓、是非の心あらさるなり、只だ己れが欲する處に從て自由勝手に遊戯し、之れを戒しむるも理非を辨せされば、社會は止む事を得ず幼稚の兒童或は之に等しき文化の程度劣等なる人種に對し之を教訓するに威を用ゐざるべからさるなり、故に人類の起原に遡りて之を驗するも亦人間は社會をなし倫理道義の未だ發せさる其前に在ては、確かに爭戰を事とし勇勝劣敗の修羅界を演せしや明かなり、現に今日に在ても未開野蠻の人間には道義の力よりは寧ろ腕力を尊重するものなり、且つ又一般に人類意向のある處を見れば、人には甲乙の論なく他人を凌駕せんとする非望ありて互に相侵す處の本性を有する者なれは、其本然の性は善ならんより寧ろ悪なるや論を俟たさるとなりと雖とも、只だ社會の制裁力、教育、宗教及ひ道徳等の勢力に依り以て其の慓悍不逞の本性を壓倒し自ら善人を粧ふに過きさるものなれば、好し善なるも亦以て僞善者たるを免れさるものなり＝と、

然るに今又た之れか中和説ありて此れ等の極端論を融合せんとす、其説に曰く＝人の性は素より善良にして純善なる神の聖像に則りて創造せられたる者なりと雖も、中途にして悪魔の誘惑に陥り非望を起こし茲に始めて悪の習慣を生し、終に第二の天性を作こし、罪悪の淵に沈淪墜落せり、故に創世の頃に在て人は神の聖像とも云ふべき價値を有せしかども、今日の人類は盡く墮落の人間なれば一人として純潔なるものなく、盡く天罰の下に定められたるものなれば、世間或は罪悪

に充滿する何ぞ夫れ怪まんや＝と、是れ通例キリスト教徒の所説にして、舊約全書創世記を基礎として論し來り終に新約説の耶蘇贖罪論に及ぼし、神は正義を全せんが爲めに如此人類を盡く天罰の下に定め給ふと雖とも、神の仁慈は又之れを爲すに忍びずして終に神は自ら人となりて此世に降り、身を十字架上に掛け以て之を信ずる者を救ひたりき、故に人として耶蘇基督の贖罪を信じ得る者は全く天罰を逃れ以て再び本然の善性に移ることを得るものなりと、

偖て余は今一々此等の説を閲するに、第一性善説の如くんば此の人界に在て所謂罪悪なるもの丶匆かるべき箸なるに反て顯著なる非道悪行のあるを如何んせん、是れ即ち人性の一端を見以て全體に速斷を下したる者にして正々堂々たる議論と云ふを得べからさるなり、何となれは人性は全く善性なれば、如何で悪行を爲し得んや、第二の性悪論も亦之れに等しく人性の一方面をのみ窺ひし議論にして、今若し人は論者の如く全く悪なるものなれは之に向て善を望むは得べからさるの企望なり、且つ又其本性全く悪なるを教育或は社會の制裁力は如何に勉むるも之をして全く反對の方向に進め得るものに非さること恰も一定の軌道を奔る滊車をして、滊關車の向はさる、全く軌道のなき方向に進ましめんとするに等しく望むべからさるの所望なり、故に論者の如く人は天性悪なれば社會の倫理も、道徳の制裁も、教育も、宗教も盡く徒勞にして恰も的なきに射る矢の如く空を突て落んのみ、第三の性本善、習慣に依り其性を變したるの議論幾分か實際に近きもの丶如しと雖とも、人は若し創世に於て神聖なるものなれば、決して第二の天性として悪に感染し得るものに非ずして已に感染せりと云はゞ、悪に感染するに足るべき神聖ならさる性質幾許か人性の内に潜伏せしものなるが如し、且つ此の人世墮落説は神の理想をも墮落せしむる處の消極説にして、必竟神は世界人類を創造する不完全なりしか爲め、其第一に寵愛を蒙りし被造物なる人類が天意に逆ひ自から悪魔の群に迄で沈淪し、而して神は之を再び本然の性に復らしめんが爲めに自ら此

世に降り難行苦行を嘗め始めて贖罪の道を開きたるも、今日にして猶ほ完く成就せるを見さるなり、之れに依て之れを見れば神の事業は抑ゝ其創世の始めに於て已に失敗したるものにして今日に於て神の事業は恢復策に餘事なきが如し、故に此の人性墮落説は正しく人の天性を説き去りたるものにあらずして、人類の世に在るや失望の極度として終に此の贖罪論を作爲し其失望を慰するの具たるに過さるなり、

余は如此極端論或は失望説を以て能く人性を論破せりとは信せさるなり、翻て形而下の事物に就て考ふるに大にしては天體、地球等の成り立ちより、小にしては動植物の生長繁茂より、遠くは歴史的人類の發達より近くは一個人の生ひ立ちの如きは盡く前陳諸説と相ひ容れさるの事實あり、即ち此の太陽系の起原に遡りて考ふるに、渾沌の其始め火災は流れ漲りて空間に充滿せしかども時を經るに從ひ、漸次縮少して一種の球形を爲すに當り、内外寒熱の變を生し其中心點なる太陽は諸星を放抛したれば、海王、天王、諸星を初めとして順を追ふて土星木星火星と分離し終に此地球も太陽と分離するや其始猶ほ濃厚なる赤熱瓦斯の球形をなし、之れより更に太陰を分離せしめたり、當時地球の直經は殆んど今日の太陰軌道に超へたるの一大瓦斯球なりしが、漸次收縮し隨て外面の熱度降下して稍や地球の表面も薄皮を被むるに至る、當時に在ては地上常に熱風吹き熱湯を雨ふらし地震、雷鳴、噴火山の破烈より地盤の變轉等究り無く未だ以て生物に適せさりき、空氣は全く毒性の含炭酸瓦斯を以て充滿せられたりしが漸く地上の熱度下降するに隨ひ、水中に最下等なる膠質狀の生物を生じ漸々今日の海綿虫、珊瑚虫等に類似の下等動物を生じ地上には又數多の高大なる古代植物を生し、今日南洋諸島に繁茂せる棕梠樹に似たる植物より蕨薇の類に等しき諸植物を生し以て不潔の毒性瓦斯を空中より吸收し去らしめ其他數種の古代爬行動物を生じ、噴火の勢力に依て蹶起せる諸山は此風雨日光等の天然力の爲めに破碎せられ河流の爲めに押し流され、淵瀬の變幾く度となく、終に南山の巖も泥土の

如く粉碎せられ諸の古代動植物は終に其泥土の下に埋めれ、茲に初めて高等なる植物の幹根を支ふべき沃土を作りたり、

地熱漸々降下するに從ひて古代の動植物は氣候に不適當となり、終に其餘孽を南洋諸島より熱帶地方の深山に殘こし、枯れ果てゝ更らに第二の生活に適當せる動植物をして地上に生々繁茂せしむるの機會を與へしなり、地上一度高等動物を生するや終に最高等なる人類世に出てゝ、神の協力者とし、神の共働者として大に世界の面目を一新せり、

人類は今を去ると大約十五萬乃至三十萬年以前に於て始めて發生せしものにして、其始めは今日人間の次位に居る猿猴を去る遠からさるべし、最初人類は火食するの法を知らずして木食或は生肉を啖ひたるものなるや必せり、人類の火食を始むるや人生に一大進歩を與へ石器を使用して事を營みしより、金屬を發明して更らに長足の進歩を與へ、近世に至り四海交通の道を便にして人は今や天外にも翱翔するに至りたり、

斯くの如く地球の成長、人類の繁植を見るに其初めより高等即ち全善に非す又是れと同時に始終同一轍のものにも非ず、又最初高等にして漸次墮落の現象をも顯はさゞるのみならず、反て最初は劣等未完成にして漸次高等完成に進歩せるか如し、所謂世の進化とは是れ之れを云ふものなるべし、今之れを人間一個人の上に於てするも、人は其初め一インチ(一寸)の四千分一の直徑を有する細胞、即ち一點の血球に過きさりしも、漸く發生して動物中最下等に位する處の一定の精虫となり、一度び母躰に入り卵巣に宿るや先つ魚兒の境遇に至る、此の時に在て人間も亦一種の鰓(エラ)を具へ次に羊豚に等しき境遇を經過し終に人間と化して產生するものなり、而して此稚兒は肉躰の上に於ても精神の上に於ても發達未だ幼稚なるを以て、已に發達十分せる犬馬に比して劣るとあるは萬々にして一つも其勝る處を見さるなり、斯く精密なる調査を遂くる時に於ては、人は決して肉躰の上に於ても將た精神の上に於ても全善にして常に高等のものにも非ず、亦全惡にして始終劣等

のものにも非す、隨て其起原に於て全善にして成長の後に墮落せしにも非さるや更に明白なる事實にして、人は進化の大理に則り宇宙萬有の一として、其始め微少、劣等より宏大高尙の位置に進化するの性質を有するものにして、換言せば人は最下級の地位即ち惡より最上級即ち至善の地位に進化するの天性を有するものにして今日未完成の地位に在り晝夜を止めす進化しつゝあるものなり、蓋し善惡は只た其階級比較上の議論にして、彼の高きに攀つる者の必ず卑きよりせさる可からざるが如く、善に至るや必す惡なる階級を超越せされは得べからさるものなり、然るに世上善を望んで之れに達せんとするに適當なる階級を踏むと無く、一躍之れに達せんとす、惑へるの甚しき者なり、見よや世間に存在せる困難、非道、殘酷の如き罪惡は幸福、正義、良政を産出するを、言に曰く=順序は天の第一則なり=と、夫れ氷點の水は百度の水よりも六十八度寒冷なりと雖も零點の氷に比するときは三十二度の熱を有するものなれば、氷點必ずしも寒ならず又熱ならさるや知るべきなり、然りと雖ども論者或は云はん進化の說、理論上適當なるか如しと雖とも之れを實際に徵するに大に齟齬する處少なからさるあり、何となれば歷史的人類を洞觀するに支那、印度、埃及の諸國は古代文明の絕頂に達せしか如しと雖も今は反て半開野蠻たるを免かれさるは何ぞやと、勿論古代に在て支邦、印度、埃及等の諸國は著しく文化を蒙りしは事實たりと雖とも、人は往々彼の黃金世界を過去に在りとするの弊習に陷り易く恰も老人に向て彼れ等若年の時我か國は如何なる國柄なりしやを問ふ時に當り、十中八九迄は彼の老人等か壯年の比は國富み民其業に安せりと誇るものにして、昔時支那文明の度を推すに今日吾人等の理想せる文明を以て直ちに之れに當て欲め過去を羨むものなれば、實際今日の政治は遙かに舊幕時代よりも人權は重んせられ孩提の童子も千金を懷にして旅行するも敢て危險なきが如し、勿論一進一退は數の免れさる處なりと雖とも一局部に拘泥するとなく眼を一般に注くときは、一局部の一進一退に關はらず其間

に全躰の進化を見る容易なるべし、何となれば吾人の今日迄に實地經驗せし處に據らば、其局部に一進一退あるに關せず、人生終局の目的は最良純善にあればなり故に吾人は天性として此の最良純善を望みて進化しつゝあるものなり、

卅五日之記

舞川帝二

我が妻逝きてより、五週を過ぎぬ、今宵は五回の土曜日にて、世俗に所謂卅五日といふ大切の日なりければ、いでや我等も俗に倣ひて、朋友親族を聚め、妻の名殘を語り出で、惜しき別れを忍ばゞやと思ひ、下婢に命じて、食膳の準備を取り繕はせ、席を設け、亡き人の肖像を飾りなどしつ、爲すことをも爲さで、時刻の移りを待ちたりけり、

寔にや、人生は恐はき險阻の難路なる哉、余れこの年の春二月、日は正に十一日の吉天六時、平常にはまして、朝早く起き出でければ、書齋の窓、推し開きて、新鮮らしき空氣を通はし、文机を淸めて中に擁しつ、妻と共に聖書を讀み、聖氣の感應あるがまに〳〵、己が心靈に得たりと憶ふか節ども、打ち語らひ、頻りに神德の赫灼なるを謝してありしが、やがて心付かぬ間に、兩人の首、俛れて、机邊に額づき、しばし浮世を離れて、不可言の鄕に遊びぬ、其間、余は確に天父に近づき參らせしと憶へしが、妻も定めて、默禱をやしぬらん、首、擡げたる時は、顏貌潔く輝きて見へけり、後にて、妻の謂けらく、神が人類に子を賜ふは、誠に無比の恩寵なり、初めの程は、子は唯嗣續の爲のみと思ひしに、左にはあらず、己が懷妊の月、重ぬるに從ひ、日々に道念の發らくが如く感じられ、父母の高恩、我が身の任務、いよ〳〵重きを明らかに覺りぬ、胎孕の日、未だ滿ちず、生子の面容すら、いまだ見ざるに、斯かる愛念は、何にして起るものにや、殆んど不思議に堪へ難し、もし幸にして安產を得、この子の生育宜しきに遇はゞ、慈愛の誠を知るを得べけん、愛なる神は確におはせり、などかおはさぬ理はりやあると、信

望、眉額の間に溢れ、感謝、喜樂の聲に混はり、宛がら、抃舞の狀見へて、禁むる色もあらざりき、

指僂ふれば、之より前き六七日、蕭々たる微雨の夜なりき、余が豫ねて、心友と頼み、先覺と崇むる某といふものゝ家を訪ひ、靈界の談論に、深更の速きを惜しみし事あり、時は更めて憶へず、四面沈まり、喧聲收まり、靈覺唯り勝ぐれて鋭かりける時、不圖、某の談話に大益を得たる事ありしが、爾來、生命急に加はり、宗教の觀念、著しく高ふなり、汚穢の塵、掃はれたるが如く、いと心地よく暮しけるが、今日は、妻また聖露に浴沐し、殊勝なる感情の、唇の端より洩れたるを聞きては、得も堪あらず、胸搔くが如く、肌膚慄ふが如く、暗涙、眼瞼に迫まるを知らで、倶に喜び躍りけり、余もまた謹みて妻に謂へらく、卿がこたびの産、幸に安からばいと嬉しかるらめ、神もし男子を賜はらば、其名を欣愚と呼びて見ん、欣愚とは説教の愚を欣ぶの義、説ひて聖書の中に示せり、又一つには、今や、米國桑港にあるゆにてりあん第一協會の牧師は、其名を、タムス、スター、キングといふ由、彼れの性行と人物は、幸ね同氏の著書にて知りぬ、氏は誠に當代の名家なり、我が家に東洋のキングを出すも、また人生の愉快ならずやなど、寸前をも知らぬ身の、憐はれ空想に驅られて、漫りに謳ひ樂みけり、

妻は身體の攝養を懈りしにあらざるのみか、諸の嗜慾を絶ちて、胎育の害を防ぎぬ、頓がて月は滿ちてけり、陣痛時を正ふして起り、動悸順を紊さずして進む、看護の人皆笑を含み、産婦勇み、余れ樂しみ、天下の喜悦、咸なこゝに群がりしが如く、暫しが程は、憂事の憂を忘れて、呱々の初音をのみ待ちたりけり、思はざりき、圖らざりき、この子この母、一宵を徹せども、いまだ生れず亦生まず、二宵三宵、倘生まず、さしもに、健全なりし容躰、次第に變はりて難産の兆候となり、喜悦、憂苦に變はり、痛苦、煩悶に變はる、待坐の人々見るに忍びず、看護の介手、眉を顰めて死せるが如し、憂たてやな、あだに幾日をか過こしける中、端なく母躰に熱發こり、身躰の調和、俄に亂れ、胎兒

も亦犯されて、病兒と成りぬ、醫師は保壽の難きを教へ、家人は救生の道無きやを余に迫まる、余は失意の淵に陷り、落膽の濤に捲かる、歎き、悲み、苦み、憂へ、咸く皆一家に簇まり、更にまた爲すべふもあらず、遂に藥石生を回さず、名醫の施術も死を起さず、欣愚空しく消へて、いまだ來らざるにまづ逝きぬ、斯かる災厄これ人生の常なるか、凶魔の襲ひ、などて斯くは速なる、今や我か國人、擧りて物質の福を貪るに忙はし、少しは心して人生の疑題を解くに苦勞せよ、夏の夕まぐれ、しばし佇みて天を眺めよ、見る〳〵黒雲漲りて雷雨首の上に亙らん、人生の厄事もまたこれなりといふものあり、されど斯くは信じ難けん、悲哀は此上なき事實なり、余はこの日悲哀に鎖され、憂愁に攫はれ、悄然として妻の病苦を看護りつゝ、彼が褥の傍に坐し、心窈に天父を呼びて、僅に思ひの半を祈りぬ、數日の痛苦に疲れたか妻、今の程は靜に睡りてありけるに、何物に感じたりけん、驚き覺めて余に謂へらく、郎君兒せよ、子は死しぬ、必らず怒りな、爲し玉ひそ、我が身の失望はいとはねども、郎君の心根を想ひ像りては、憂に堪へず、兒せよ〳〵、と酸鼻の訴、切なる情願、余はいまだ鬼ならず、何とて聞くに忍ぶべき、噫、嗟吁、欣愚は余のみの子にあらず、彼が爲めにも、最と惜しの子なるに、悲哀を抑へ、失意を制へ、强ひて此期に及んで、この言葉を先んぜしむ、抑も誰人の罪なるぞや、今にして思へば、余れ妻を愛せざりしにあらねども、對遇らふ方法に誤謬のありたらめ、仲尼の教訓三省の要はこゝぞと後とに思ひ當りぬ、嗚呼、余れ情に弱はき哉、今までは齒牙喰ひ縛りて、推し隱したるに、この一言に責められて、淚綻び、咽破れ歔欷に追はれて、聲音出でず、忍ばにんも念逆しり、慰めんにも胸迫り、悲哀痛哭、肺腑に浸みて、腸も膵も斷れけり、死は人生最終の恐懼なり、富貴も威權もこれを救はず、勝れし智慧すら用を効さず、唯心淸らげく、安らかなるもの、死出の旅路に希望を抱き、天の御座を仰ぎて眠る、我が妻の病症遂に輕からず、看護の勞苦力及はず、日々に衰へ夜々に弱はり、四月十六日の夕、午後

六時半、彼は抱かれて我が左手に任り、余れの右手は彼の首に按しつゝ、余が祈りたる祈りの聲の、止むと同時に氣息絶へぬ、人皆漫り泣くを止めて、我が御神を讃めよ、神の慈愛は隠れて見へざる事多し、我が妻、こたび神に召されて逝くや、死期いまだ到らざるに、辭世の覺悟、はやくも定まり、後事の囑托に憾を遺さず、最終の祈禱聲朗らかに、謝辭看護の人に厚ふして、謹んで睡みけり、病褥の苦惱に我が妻忍耐を悟り、愛子の死亡に余れ亦攝理を知りぬ、彼は人生の秘密を行ひ、余はこれに由りて深く眞理を悟りぬ、靈魂の不滅、今までは只智識の敎訓に依りしも、今は然らず明らかに認めぬ、仁愛何ぞと問ふべからず、判らかに神の御姿なり、正義何物と疑ふべからず、正に神の御旗なり、善悪の戰、正邪の亂、露の間の夢幻のみ、基督呼びて、我れ世に勝てりとのたまいしは眞なり、仲尼語りて、人の將に死なんとす、其言ふ事美しと曰ひしは誠なり、淺學の身なれども、余の神學、哲學、或は變はる事もやあらん、噫、我が妻の死、一家のみの變にはあらず、神の不思議の政治、其御奥意ぞ知り難し、宴にや人は一人りにて、置かるべからずとは、これらをぞ謂ふなる、

青爐の烟、斷へ〳〵に、一座寂りて咳ぶく者もなし、客の中に老人ありぬ、余の心を酌みかねてか、聲をはげまして謂ひけるよふ、君餘りに憂へて、身心をな害ひぞ麥酒を驅りて、微醉を容れよ、

余朝夕に謳ふて歌ふ、彼の一期は廿三歳、彼の好みしは廿三篇、これも亦かたみなり、

エホバはわが牧者なりわれ乏しき事あらし、エホバは我をみどりの野にふさせ憩ひの水濱に伴ひ玉ふ、
エホバはわが靈魂をいかし名のゆゑをもて我を正しき路に導き玉ふ、たとひわれ死の蔭の谷を歩むとも禍害を恐れじなんじ我とともに在せはなり、なんじの笞なんじの杖われを慰む、なんじわか仇のまへに我が爲に筵をまうけわが首にあぶらをそゝぎ玉ふ、わが酒杯にあふるゝなり、わが世にあらん限りはかならず恩恵と憐憫とわれにそひきたらん我はとこしへにエホバの宮にすまん、

傳記

ウ井リアム、ロイド、ガーリソン氏の傳

今を去る事六十年前米國南部の大都會ニユーオルレアン市より牛馬と等しく賣買の目的を以て黒人種の奴隷數千人をボルチモーの町に護送し來れり、此の時に當て恰も好し一個の青年は此殘酷なる運命に陷りし黒人種の實に哀れなる有樣にて市中を通行する行列を見るや、直ちに彼れの同情相感ずるの精神勃如として興り底止する處を知らず、終に非常に激烈にして當るべからさる言詞を以て輿論に訴へたりしが不幸にして彼は輿論に容れられさるのみならず捕はれて法庭に吟味せられ縲絏の辱を受くるに至れり、然りと雖とも彼は甘じて牢獄に安居する事能はず、獄中より更らに輿論を喚起して曰く、『願くは判官をして彼の譴責に依り余を驚嚇し且つ彼れの判決文は全く余か將來此壓制に反對する音聲を消滅せりと思はしむる勿れ、必竟彼の判官等は余の何物たるを知らざればなり』と

光陰は矢の如く此の少年の入牢以來已に五星霜を經過したりしが、茲に又米國に在て其昔十三州が英國政府の壓制を逃れ、自由を得んが爲め、始めて獨立革明の戰爭を宣言せし土地にして有名なる「ボストン」市中に於て、或る日一大暴徒蜂起し人心洶々鼎の沸くか如き其中に、一の男兒は頭に帽子なく身に纜縷を纏ひ、且つ繩を以て其身を縛せられ、豫め松脂を沸かし鳥の羽、及び腐蝕性墨汁を具へ置きたる場所に牽き行かれたり、是れ即ち暴徒等が松脂を以て此の人の身躰を塗り、鳥の羽を其上に貼し、墨汁を以て其顔を塗沫し、再び白色人種たる事能はさらしめんとの目的なりしが、幸にして此不運なる男兒は此暴徒等が毒手より救はれ、九死の裡に一生を得たりと雖も、更らに獄裡の人となりて呻吟するに至れり、

以上述へたるか如く此の人の一生に關して如此二而異樣の寫眞ありしが、吾人をして更に進で猶ほ一面の眞

象を發見せしめよ、此れ等の見るに忍ひず又云ふに忍びざる殘酷なる寫眞の時代より、僅か三十年を經ずして米國合衆國の人民は、故の大棟領アブラハム、リンコルン公を除くの外は、此の男兒に大名譽を歸し大尊恭を表する處となれり、今日より三十年前に在て彼れが世を去りし時の如きは、數百萬の人々は彼の墓前に感謝と愛を以て棒げ祭り、而して彼れの名は單に米國に於て賞讃せられしのみならず、普く歐羅巴諸州幷に世界各國に於て賞讃する所となれり、

抑も此の男兒は何人ぞ、彼れ曾てボストン市の監獄に在りし時自ら其壁に書して曰く「一千八百三十五年十月廿一日に於てウ井ルリアム、ロイド、ガーリソンを亡ぼさんとして蜂起せし、禮義ありて勢力ある暴徒の强迫より救はれんか爲めに彼は牢中に幽囚せられたり、如何となれば彼は人の惡むべき教理、即ち人類は盡く同等に造られたれば總べての壓制は神の前に不義にして厭ひ惡まるゝものなりとの教理を主張すればなり」と、是れ即ち三面の著しき生涯を迎へし處の自由家ガーリソン氏其人なりき、最初に在て彼は罪人として縲絏の辱を蒙り、次に蜂起せし暴徒の爲めに非常なる危嶮に迫られ、且つ入牢して其生を得、終に於ては一大英傑として數百萬人の尊恭敬愛賞讃の歸する處となれり、米國合衆國に於て、四百萬以上の奴隷をして全く舊來の羈絆を脱し、自主自由の身となせし運動の開路者先導者たりし、此のガーリソン氏は一千八百〇六年に於て米國マザチウセット州ボストン府に近きニユウバリーポートに生る、幼にして印刷術を學び長ずるに及で或る新聞社の記者となれり、彼は幼時より自由に向ては實に熱心なりし、彼が若年の頃に於てギリシヤ國ガトルコ國の抑壓の下に在て艱難せるを見るや坐ろに慷慨悲憤の情に堪へざりし、又或る時彼は軍人たらん事を企望せしかとも、彼の氣力は終に彼をして其身を文學界に注入せしめ、彼は社會道德改良の説を唱へ節制主義、個人的潔白、及び奴隷禁止論の如き問題に關せる論説を世に公けにせり、彼は廿四才にしてボル

チモー市に一つの小新聞紙を發行し、其記者として直ちに米國の奴隷所有主に向ひ、奴隷も亦等しく人間にして自主自由の權利あるものなれば、其所有主は直ちに奴隷を解放すへき義務ある事を痛論せり、

此の奴隷解放の要求は、彼の奴隷所有主をして非常に憤懣せしめ、終に之に向て反旗を飜へし開戰を宣告するに至らしめたり、如何となれは萬一之れに依て米國人の本心を警醒するの時至らば、彼の無情なる奴隷所有主等が榮耀榮華は其終りに近けれはなり、

ガーリソン氏は南方の奴隷市場に此れ等の奴隷を盡く護送すべき事、並に人間を牛馬と等しき方法を以て賣買する事の無道なるを痛論し、奴隷使用者の罪狀を公論に訴ふるや、ガーリソン氏は之れが爲め讒謗律を以て問はれ、且つ若干の罰金を科せられたり、然れとも氏は其判決の不當なるを信ずるが故に敢て之れを承認するの色なきを以て、再び獄裡の人となれり、如此七周間を經過するの後、氏の親友等金を醵してガーリソン氏をして再び青天白日の身となしたれば、氏は是より直ちにボストン府に至り、再び氏か身命を捧げて成功を期する處の事業を繼續せり、然れともボストン府は勿論何れに至るも政治、商業、社交、及び宗教界に於ける輿論は常にガーリソン氏の事業に反對せり、故に彼は廣きボストンの市中に居り乍らも彼の羽翼を張るの餘地なく、ボストン市中の公會堂、演戲場一として彼の目的に向て貸與する者なく、彼は此の地に於ける議員、豪商、學者等を訪問し彼れと共に運動せん事を勸告し、若し種々なる情實の爲めに彼れの運動を助くる能はざれば、或は彼の精神に向て同情を表せられん事を哀求せり、不幸にして彼は何處に至るも常に彼を奬勵する者なく、彼をして失望の淵に沈淪せしめんとせり、然れともガーリソン氏は此れ等の困難に依て屈撓する事なく、反て成功を天に任せて、彼の事業は正統にして奴隷使用は不正なれば、國家の爲め此の大災害を驅除するまでは、譬ひ如何なる困苦辛酸を嘗むるも此の運動を猶ほ繼續する事を決心せり、而して壹圓の資金もなく、一人の豫約購讀者もなきに、彼は大膽

にもボストン市に於て解放者と題する新聞紙を發刊せり、彼は快く睡むるの寢臺なく每夜其印刷處の床上に終日の勞を休ひたり、此新聞紙は其始め如此微賤より起りしかとも、終に米國合衆國の民心を上より下に至るまで攪擾するの生靈を有せり、此の新聞紙は當時に在て、大に奴隸所有主等の憤りを買ひ、其局終に米國に於ける北方自由主義の諸州と、南方の奴隸使用に加擔する諸州との間に於ける、世界歷史の上に顯はれし激烈なる內亂の一原因とはなれり、而して此小新聞は、故の大統領アブラハム、リンコルン公が四百萬の蒼生をして、青天白日自由主義の民たらしむる處の布告文中に明記せられたり、如此僅かなる一新聞の精神は、米國合衆國に於て將來永く其憲法上に奴隸使用禁止のヶ條を追加せしめたり、

併し余は諸君に向てガーリソン氏の曾てなせし處の豪毅なる義の戰を敘するを略し、而して彼の事業を概言せば、則ち彼れの堅守せし事業は能く其終を全ふし、此內亂鎮定の後彼は自由にして幸福なる米國人と共に歌ひ共に樂み、人間の生涯に於て受くる處の名譽は盡く彼の上に歸せられたり、彼は軍隊の指揮官として戰ひし事なく、彼は政治界に在て顯職を受けし事なく、常に之を拒みたり、彼は金銀の富を貪りし者に非ず、彼は學術美術界に於ても名譽ある冠を冒さざりし、併し乍らガーリソン氏は其痛快なる言論と文章に依て、人間一人の爲すに餘りある大業を成就し、米國人の熟睡せし本心を警醒喚起し、彼れ等をして義務の元に降伏せしめたり、彼は此慈善的大業の中心力となり、終に數百萬の生靈をして、牛馬と共に呻吟せしめたる、奴隸の羈絆を脫せしめたり、

余は今茲に特にガーリソン氏の名を吾が演題として論するは他なし、吾人をして此男兒の不可思議なる行爲に依り幾分か得たる處あらしめんとすればなり、

第一ガーリソン氏の生涯は一事業に向ては懈怠なく忠實なりし人間の價値を證明せる一大表本なり

吾人をして今を去る事六十年前ガーリソン氏は新運動を計畫せし當時を懷顧せしむれば實に賴み少なき事な

りき、現に米國合衆國内に於ても新英國諸州の如きは米國獨立の種子を孕みし土地にして、爾來夥多の慈善的社會的事業に向て熱心に同意を表したる土地なりと雖とも、當時ガーリソン氏の運動を助け、此の奴隷解放の運動に加擔せし者實に寥々として曉天の星も只ならざるなり、故に此の同情同感の精神を以て充滿せるガーリソン氏は當時新英國諸州の人々を詰て曰く『余は此地に來り彼の奴隷所有主の中に於けるよりも余を輕蔑する事の猶ほ甚だしく、余を讒謗する事の猶ほ無情なる事、及び人心の偏頗强情にして奴隷所有主等よりも更に無感覺、且つ冷淡たるに驚きたり』=と、彼は東西南北至る處彼を敵視するもの丶みにして、天の彼に命する處の義務を全ふせんと欲せば、彼れ必ず單騎接戰せざるべからざるを知れり、之れに依て彼は一歩も退く事なきのみならず、反て其前に横る處の艱難に依り益々其勇氣を鼓舞し、自信の念を厚ふし、而して此大業を中途にて放擲する事なく、彼は單騎簇る敵の表面に立ち塞がり反對者をして敢て其間隙を窺ふ事能はさらしめたり、又或る時は彼れの事業は輕卒に失し極端過激なるべしと諫諍する者あるも、彼れは此の大業に熱心なるを以て此等の諫諍を聞くに遑なく且つ之れに應ふるに『天下此の殘忍なる罪悪に對する道なきや、余は眞理の如く嚴格にして、正義の如く宥恕する事無かるべし、此問題に關し余は沈着温順なる言論を爲し、彼れ等の無道を忍耐し、曖昧に此事を終る能はず、余は斷して之れを許す事能はさるなり、余は今一歩も退く事能はず、人々の無情無感覺は已に其極度に達せり、今や古人の石像は其基礎より躍り揚り、先人此の無道を憤り墓を排して出でんとす』=と絶叫せり、如此獻身的の事業は天運の順還と共に還り來て、彼れの大膽にして正直なる要求は遂に各地方人士の眠りを醒まし注目する處となり、終に驚くへき健固なる地位を保つに至れり、而して今や北米合衆國の人民は彼に來て彼れの事業を助くるか、否らされは彼に反對して彼と戰ふかの、一ッ二ッの分け目に際會せり、是れ實に米國に於ける三十年前の關ヶ原と云ふも不完全なる

比論には非さるべし、
米國北部諸州に於に、ガーリソン氏の解放者の發行以來九年を經過し、二千に近き奴隷禁止會なる者各地に組織せられ、其後二十年を出ですして、北アメリカ州、セントローレンス川以南、メキシコ灣に至る一帶の沃土は盡く自由の民を以て耕耘せらるゝに至りたり、此の長き試みの時代に於てガーリソン氏の友人の內其終に望みを達する能はずと斷念して、彼れを棄てたりしかとも、氏は決して否らず、當時米國に於て此の奴隷を其本國なるアフリカ州に護送すべしと論じ、或は種々なる條件を附して之れを解放すへしと論ずる者あるにも關はらずガーリソン氏は直ちに米國の地に於て無條件にて解放すへしとの楯を持し、國民義務の大旗を持して、群かる敵の正面に立ち塞がり、遂に全國の志士をして彼れの旗下に降伏せしむるまでは、一歩一脚たりとも退步の色を顯はさゝりし、
第二ガーリソン氏の生涯は社會の騷亂混雜に際するも、猶ほ高尚なる道德的品性を維持し得るものたる事を吾人に敎訓せり、エンデル、フヒリップ氏はガーリソン氏の友人の一人にして其葬式の時氏を讃美して曰く、=『彼は平生の生活、又は一言一句たりとも其反對者より、惡意を挾み、其罪科を見出し之れを批評せんか爲め常に付け狙はれたり、實に如此殘忍なる試みは、何人にても耐へ忍ふ能はさる處なり、嫉妬怨恨は燈を點して、幽頭の間に彼れか過失を求めたり、然れとも天運巡環し、此の大問題も春宵の雪と共に融解するに及でや、彼は國民の手を執て律令を書し、以て國家萬代の憲とせり、嫉妬怨恨は斯く彼を害せんか爲めに四十年間彼を求めしと雖とも、終に彼の名譽を傷け能はさるのみならず、何人と雖も彼の名譽に輝ける甲冑に毒氣を吹き付けること能はざりし』と=
而してガーリソン氏の生涯はイエス、キリストの宗敎を他の宗敎中に冠たらしむる處の精髓なり、夫れキリストの精神は常にキリスト敎の公會より顯はるゝ者に非さるなり、如何となれば當時に在ては何れの敎會も其門戶を閉し、彼を容るゝを拒みたりと雖も、彼は眞

にキリストの徒なり、彼の同情同感の精神は實に濶大にして一國民、一人種に偏せず、普く人類に到達せり、故に彼の主義要領は＝『吾が國は世界なり、故に總ての人類は我が國民なり』＝と如何に彼はキリスト、の曾て垂訓せられし四海兄弟主義を好く理解せるや、彼れは己れの欲せさる處は之れを人に施さず、己の欲する處は必らず之れを他人に施せり、其同胞にして飢寒身に迫る者あるや、彼れは之れと共に苦しみ、彼は奴隷の背に笞打たるゝを見るや之れを己れに感じたり、斯くキリストの如き同情同感の精神は彼を喚起して、此の困難なる事業を維持し以て此の大業を成就せしめたる者なり、

固より其反對者の取りし處の主義は、飽くまで之を悪むと雖も、彼は實に寛大の度量を具へ、甲乙に論なく親切を以て接せり、彼れ新聞記者としては、彼れの反對者に向て常に己れが新聞紙中に其議論を辯駁するに十分なる道を與へたり、朋友としては、愛情深く且つ友誼に富み、今假りに内亂煽動者として見るも、猶ほ太平を好み、無禮亂暴狼藉を奨勵するが如きものに非さるなり、而して常に彼れが献身の事業の終を全ふせん事を希望せり、

オリバジョンソン氏日常のガーリソン氏が私事を叙して曰く＝『彼は家政に向て熱心なるが故に彼の居宅は天國の如し、人之れに入れば不知して快樂の感を起さん』＝と彼は一家團欒の中に兩三輩の友人を加へ相語るを以て無上の愉快とし、如此境遇に在て、彼は恰も小鳥が春暖の空に瀏朗たる美聲を放て歌ふか如く、樂しく、敏く、且つ寛裕にして親切なり、彼は婦女子を待遇する尊恭にして。一家の間常に睦じく生涯一度たりとも婦人の顏に紅を漱かしめたる事なく、貧者不幸者に向ては、常に彼の心と財嚢は開放せり、彼れは又其晩年に至て何れの家を訪づれるも、盡く彼の來訪を喜び、之れを以て一家の名譽とし長く、ガーリソンの名を其子孫に傳ふるに至れり、

當時一般に人民の宗教心は冷淡に流れ懷疑に失するも、ガーリソン氏の宗敎に於ける信仰は實に正確にし

て、彼は神の前に熱心なる信仰と祈禱とを以て生活せり、其の死を論ずるに當てや曰く『宇宙間に在て吾人は、之れを呼で死と稱ふる處の一變化あり余は此の變化を承認するの喜に勝るの喜ひを未だ曾て見さるなり、死とは何ぞや他なし地上存在物の上に於ける、神の大智大悲の現象に過きさるなり、是れ恰も木葉の秋颪に落ち、百花の春風に開くが如く天然自然なり、故に余は死の内に一つも悪の存在を發見せさるなり、蓋し死は萬有の進歩なり昇級なり、肉躰の上に哀むへき事たりと雖も吾人は得て之れを辭する能はさる者なり』と顧て今吾人をして此の人の生涯より學ふ所あらしめよ、曾てガーリソン氏の義務責任を負擔せしが如く、茲に亦吾人の負擔すへき責任あり、固より吾人はガーリソン氏と同様なる事業を爲すへしと命せられざるべしと雖も、成る可く彼か自ら任する處に忠實なりしが如く、吾人は己れの義務を果すに當て成る可く誠實忠信ならしめよ、彼れか人類一般に對する同情同感の精神を確守せしか如く、吾人をして此の周圍に面のあたり接する處の同胞兄弟に向て同情を表はさしめよ、吾人をして其一家或は一國の事業たるを問はす、彼のガーリソン氏はキリストの如き精神を以て社會を裨益せしか如き生涯を遂けしめよ、

余は茲に米國歴史的一人物の生涯に關し、猶ほ多くの事物を陳べんと欲すれとも時に限りあり、又之れか爲に諸君の倦怠を買はん事を恐るゝを以て、茲に之れを省略す、幸にして今吾人は氏の生涯を見て氏を賞讃し、之れに依て吾人の將來を補益するあらは、今夕消費せし時間は強ち無益にはあらさるべし、

終に臨で一二言、以てガーリソン氏の天性を品評せば、氏は人類を助けて益々高尙優美に導きしキリストの如き人物の一人にして、人の子の中に在て最も高潔、最も慈愛あり、最も快活なる眞男兒の心膽を完備せし人物なり、と云ふも敢て過譽に失せさるべし、

右は去る四月八日神田區錦町講義に於てマッコーレイ氏の演說筆記なり

雜録

○宗教家は政治家よりも洒々落々たらざるべからず

胸襟爽然光風霽月の如きを貴ぶは是れ彼れ政治家に於てある所なり昨日は政論場裡に反目嫉視するも今日は手を携へて一堂に談笑す、出でゝは立法議院に奮戰激闘を試るも入て彼我を其居に訪ふときは寸毫其意に介する所なし亦た羨稱に堪へたるにあらずや吾人之を書生の討論場に見る自他論を闘はすこと讎敵啻ならず而して討論を畢り座に復すれば其の親骨肉も及ばざるなり

然り而して吾人之を宗教家に見るに至つて未だ彼れが如きを得るや否やを知らざるものあり表に平和親睦を粧ひ道義家余を措て他に誰をか求むべきと云はぬ計に見するも暗に猜疑嫉妬を抱き他の優勝を誇り人の短所を訐き陰に怨恨憎悪を逞ふして人の失敗を願ひ他の長所を傷け而して恬として愧ぢず欝積忘るゝことを知らざる者なきや否や佛者と基徒とに論なく吾人此輩あるを疑ふ見よ塵俗界裡奮争激闘を事とする者に於て猶ほ洒々落々を貴ぶにあらずや何を以て宗教家にして之に倣ふ能はざる、否な吾人は彼れよりも一層洒々落々たらんことを望まずんばあらざるなり(京都毎日新報)

○孝養

神崎郡八條村字佐生田附甚五郎氏の弟外海鐵次郎といへる人は本年二十七歳なるが丁稚奉公より一人前の商業家となり兼て神戸に於て貿易商店を開き居りしが去る二十三年五月感する所ありとて米國に渡航し現にカリホルニヤ洲サンフランシスコに日本維貨の貿易を營み其取引も手廣くなし居れり然るに同人の實母病氣危篤との電報に接し去る四日歸國し爾來母親の側らに侍し自ら湯藥に從事し日夜看病に餘念なく疾病少し緩や

かなる時は海外の風色など話し只管老親を慰め勞はるに怠りなしといふ世の生意氣なる少年子弟たるもの氏の善行に鑑みる所あれ

◎去る五月十三日發行の茨城日報に左の雜報あり世には僥倖の人もあるものかな！

大久保芳治氏

當市に寄留し居る同氏が彼の「神道は祭天の古俗」事件に付き久米邦武氏田口卯吉氏に大に談判する所あらんとして上京せしも久米氏も田口氏も取合ぬより充分なる談判の結果を得ざりしが同氏には表顯的に其運動のことを中央新聞にて世間に吹聽せしより神道家連中などには同氏を非常なる神道熱心家なりとて尊崇し運動の費用などを心配するものあるに至りしのみか斯る熱心家は是非相應の位置を與へ置くこそ神道の爲めなれとて彼の大洗磯前神社酒列磯前神社宮司の跡釜に周旋するものあるに至りしとは同氏もトント僥倖ものよと神官社會には同氏を且つ羨み且つ評し居るもの多しとのことなり云々

○北海道內神職及び住職現在數

本道中現在の神官は官幣小社に神職二人、國幣小社に仝三人、又祠官は府縣社に二人、鄉社に二十三人、村社に一人、無格社に二人、祠掌は鄉社に八人、村社に十一人にて合計五十一人又現在の住職は天台宗一人、眞言六人、淨土宗四十三人、臨濟宗一人、曹洞宗六十一人、黃蘗宗一人、眞宗五十八人、日蓮宗二十一人にて計百八十五人なりと

○說敎所の設置

昨年中本道廳か許可したる神佛兩說敎所は神道八ヶ所佛道十一ヶ所移轉四ヶ所廢止一ヶ所にて說敎所の設置は開拓使以後本年か其多數を占めたり蓋移住人民の增加に原因するなるべし

◎先月下旬の三重新聞を閱するに、左の如き雜報に接

す、宗敎子も亦該新聞記者と共に世の迷信を憂ふる者の一なり、今や東洋文明の魁首たる我が日本帝國に在て猶ほ如此狡猾兒ありて愚民を迷惑す、是れ獨だに三重縣下に於けるのみならず八道盡く然り、吾子は之れを坐から視るに忍びす、杜鵑の血を吐て雲端に叫ふか如く吾子は火焰を吐て此の狡猾兒を筆誅し、正理を説て此れ等迷信の徒を彼の毒手より救濟せさる可らず、嗚呼！宗敎子等の任も亦重いかな、

○迷信者多し

縣下伊賀地方に於ては客年來天理敎と唱ふる一種の宗敎傳播し一時は愚婦愚夫の迷信する者頗る多く意外の盛况を來せしも元來是等の宗敎たる或は一時の私利を貪ぼらんが爲め人民を瞞着したるに外ならさるより日を逐ふて衰ろへ今は已に其跡を留めざるに至りしより心ある者は大に喜びて居しに此頃又た〳〵金神と稱する邪敎侵入し巧に愚民を惑し居る由なるが其謂所を聞けば如何なる病魔と謂共直ちに癒へ不幸も變じて幸福となるなど言ひ觸らすより愚民は何れも業を止め藥を捨て一意迷信して覺らず甚はだしきに至りては神湯と稱して病の何たるをも顧みず無暗矢鱈に入浴せしむるため折角醫藥の爲めに治せんとする病氣も再び元に復し可惜不治の癈疾となる者も尠からず亦た妄りに金錢を寄進せしめて自己一酌の酒料に充てし如きともありしとかにて有志は大に憂い居る由なるが何とか速やかに退治したきものなり

◎左の一章は京都每日新報社説欄内に於て川野又水氏の道德興敗論の一節にして、目今道義の地に落ち社會腐敗の運命に陷りしを以て一に宗敎家の責めとして評論する所謂世の輕薄者流をして、果して社會德義の興敗は全く宗敎家のみにして負ふへきものなるや否やを明かにせんが爲めに、道義興起の原始を論せられたるものにして宗敎子は頗る川野又水氏と同感のものなれ

は轉載して以て讀者の劉覽に供ふ、

道義興起の原始

今や我邦社會の進歩、暫時にして高度に達せり而して彼の道義の行進に至ては却て正反對の狀を呈せり即ち一方社會の進むに伴ふて他の一方は却歩して漸次退歩するに至る是れ何等の理由ありて然るものなりや人は唯だ單に宗教家の怠慢に歸すと雖も吾人を以て見れば是れ皮想の見のみ深く由來を極めざるものと云はざるべからず宗教論者と局外論者とを問はず徒らに罵詈誹謗以て宗教家を責むるに過ぎず是れ豈に眞正論者の爲す所を盡したるものと謂ふべけんや吾人は今何故に現社會に於て此の如く道義の頽敗に至れるやを討究し以て其の矯正策を求めんと欲するに當り先づ道義てふものは如何なる邊に興起するかを研究せんと欲す

道義は如何なる邊に於て興起するやを研究するに當り吾人は先づ道義なる者は社會の進歩に依て興起する者なるや否やを講ぜざる可らず而して之を講ぜんと欲せば先づ第一に道義興起の原始に遡り道義なるものは如何なる所に原始を發したるやを尋ねざるべからず是れ議論の順序なればなり

道義は社會發生の後にあるべきものにして未だ社會を組成せざる以前にあることなし人類の未だ協力分勞の何者たるを知らず三々五々聚散常なくして瓦礫と同く散在せるの間は之を社會と名けず此の社會以前の人類に在ては道義の何物たるを知らず道理の契否を辨ぜず自己あるを知つて他人あるを知らず父子親族の關係なく己れ一身さへ滿足すれば可なりとなすに過ぎず凡そ道義なるものは自他の間に生出するものにして自己ありて他人あるを知らず父子親族の關係なきに於ては道義は抑も何に由て生ぜん我父なり我子なりとの思念なきは夫妻の定婚なきに由る唯だ人々個々の情慾に隨て夕に遭ひ朝に分るゝものにして禽獸と其行を同ふす既

に定まれる夫妻なし何ぞ父として親み子として愛すべきものあらんや夫妻父子の親愛なし何ぞ其他親族の厚誼あらんや其他郷黨朋友の信義あらんや此間道義てふものゝ見らるべき筈なし然らば則ち道義は社會發生の後に於て見るべき者にして野蠻草昧の所有物にあらざると明なり社會の發生たる生存競爭の爲めに協力分勞の必要を感じ之れに依て一郷一邑の團結を生じ漸くにして社會をなすにあり此の結合たるや一家一族を見ることゝなり父子親族を見ることゝなり又た父を親み子を愛し親族の信義を生ず是れ道義の興起する所以なり支那人は唯だ上古草昧の世を貴ぶの風あり我邦と雖も間々古代純朴の時を慕ひ道義は却て純木の世に盛んなるものゝ如く妄想し世の進歩に隨て道義は薄らくべきものと思ふに至るあり或へるの甚しきものと謂ふべし現時と雖も大陸各地に散在せる蠻人中には社會を組成せずして三々五々に離散し道義の如何を知らざるあり以て道義の社會發生の後ち進化に伴隨して興起すべきものなるを知らん社會の進むに隨て道義の振興するの理亦た推して知るべきなり

○新敎を開基せんとす

元西京眞宗本願寺大學林の敎授藤野神龍師(七十五)は博識非凡の聞へ高き僧侶なるが元來師は岩國光福寺の住職にして幼にして西京大學林に遊ひ印度に渡航し佛敎の蘊奥を窮めて歸朝し興門法主の侍講となり維新以來泰西の諸敎を攻窮し哲學を修めたり彼の島地默雷大洲鐵然等の如きも師が門生たり然れども師は釋迦敎を以て經全の眞理となさず理哲諸學の原理に基きたる一の新敎を開基せんと欲し此回輜衣を脱し佛耶儒の三敎を統合したる綜合的宗敎を創立するよしなるか先づ其意見を公にする初めとして光福寺に於て諸難眞宗とか云へる破邪的著述に從事中なりと云ふ師か佛敎を排斥する重なる點は佛敎は智力一邊にして情感の性質なく

耶蘇教は情感一邊にして智力性質なく何れも皆な完全無缺不世不變の宗教となす可からすと云ふに在りとぞ」右は五月廿五日防長新聞に見ゆる處にして、宗教子は之れを讀で其好友否な良師を得し事を喜ふものなり、吾儕は斯かる英傑の出でん事を待つや久し、幸にして今此の新報に接す、今や我か國に於て東西兩洋の思想を鎔和分折して完全なる新思想を作るの時期已に到來し此の大業を企つるの士出づ、宗教子は喜び勇で吾儕の一臂を添ふるに吝ならさるなり、勉めよや藤野師！勉めよや！

彙報

●日本ユニテリアン第一協會は去月中毎日曜日午前十時より定期の集會ありて、クレイ、マッコーレイ氏、ウ井ルリアム、アイ、ローレンス氏、古莊三郎氏、及び神田佐一郎氏等の說教あり、且つ說教後は常に有志者の質問に應するを以て昨今入會者もあり、且つ入會企望者續て起るへき摸樣なり、且つ又本月內の役員會に於て將來該協會の運動を擴張し每日曜日に於て一つの自由宗教研究會なるものを組織し、同志相會してユニテリアン教々義を深く研究するのみならず、該會は其名目の如く我が國に在て最初のユニテリアン教會なれば、其一擧一動は大に將來該教會の慣例にもなる事なれは、冠婚葬祭の事を始め一切の事物に關し、豫め一定の法を設けさる可からされば、成る可く我が日本帝國國風に伴ふて萬事改良進步せしめんとの計畫を以て、該研究會々員等は各自其受け持ちたる處に從ひ研究調査の上、同會に報告し、同會員一同贊成の上、日本ユニテリアン第一協會の共賛を經て、之れを將來に實行せんとの目的を以て該會の創立者等は目下東西に奔走し居れる由、

●藥研堀ユニテリアン教會は、設立後前川太郎氏（舊高田）は牧會の任に在て常に盡力せり、毎日曜日午前十時に於て說教あり、又隔周日曜日午後七時より社交道德に關する演說あり、其他同會の發起者の一人なる贇田剛橋氏最も有爲の人物にして、前川氏の補助に依り藥研堀に一女學校を設立し、商法主義に非ずして眞正なる教育主義を以て近隣の子女に高等なる家政教育を授けんと計畫し、近々認可せらるべき運びに至れり、且つ同校は已に卅四五名の入學志願者も之れある由、將來我か國の婦女子教育の爲め、且つ贇田、前川兩氏の爲め一日も迅かに此の校の開扉せられん事を希望して止まさるなり、

●東京自由神學校も本月十日より暑中休暇となるを以て、目下生徒は各科目に從て試驗中なれば各々必死の勉强を爲せり、又去月廿四日に於て＝神なる思想の起原、性質、及び其價値＝と云ふ論題にて作文せしめたるに、生徒は各自其得意の議論をば英文にて綴り校長クレイ、マッコーレイ氏へ差し出たされたりければ、校長は夫れ〳〵點見の上米國の或る新聞紙へ投ずる由、尤も優等の文のみに限る、

右神學校書籍室へ今般米國ユニテリアン協會の有志者より若干部の英書を寄送せられたり、中には隨分有名なる著述もありて、將來同校の生徒に少からさる利益を與ふべしと、因に云ふ先般校長マッコーレイ氏は米國の友人に書物の寄送を乞へり其文中に曰く、＝御手元に在て不要の書物は矢張り日本に在て不用なれは成る可く貴君等の尊重する有益の書物のみ御惠投被下度候＝云々以て近着寄送の書籍を察するに足るべし、

●地方の近狀、去る五月上旬、自由神學校々長、クレイ、マッコーレイ氏は二周間の暇を得て勢州に漫遊せられ、歸路杖を三州豐橋町に寄す、同所には當春以來有志者六七名ありて常に時事の通信をなし互に相連絡せ

し所なるを以てなり、氏は同所に停杖一兩日有志者等の名殘りをのこして歸京せらる、同所の有志者は總て本會との通信事務一切を擧げて須佐宇平氏に依托せるを以て、本會は常に須佐氏幷に腰越氏等より毎周同地方の通信に接す、同氏等は將來彼の地に自由宗教の一團躰を組織するの目的を以て屢々本會員の派出を促かさる、併し目下適當なる人物を撰定中なれは、遠からすして彼の地にユニテリアン弘道會の傳道者を派遣する事あるべし、當時同所の有志者は三河國豊橋町大字八町三百六十三番地を以て通信所に定めたり

●美濃國苗木町の有志者林武四郎氏も熱心なる求道者なれは、彼の地より時々書を寄せて遊説者の來訪を企望せる由申越されたれは、彼の地も亦遠からすして自由宗教の和風に沐し、以て年來の迷夢を覺醒する所あるべし、

●其他北海道に在て各地方に熱心なる求道者起りたればは何れユニテリアン教師の錫を運ぶ事もあるべし

[illegible]是等の諸點[illegible]

社説

宗教の發達に關する科學の力

ニユートン、エム、マーン

科學の進歩が宗教の發達を促したる其効力の大なる次第は少しく學問の考へあらん者の皆能く知る所にして今更申す迄もなき事ながら最近五十年間に於ては殊に著しく宗教思想を變化して其敎義を人々日々の生活上に應用するに至れり彼の進化説の一たび世に現はれしより此説に基き人の理想法は大に發達して科學に哲學に各々其新説を出して學者社會の面目を一新したり尤も前世紀よりして理學者中稍々新説を唱へて早晩此學面に一變動を來たすならんとの趣きは既に示したれ共愈々之れを見るに至りしは實に當世紀の中半則ち千八百五十九年ダルウヰン氏が始めて宇宙の原則を説き確然たる證據を擧けて進化説なる者を示めしたる時にして此の大家に續て間も無く一種の哲學者現はれ右の進化説を有形無形の現象に應用して哲學上に一機軸を出したる人あり其の名をスペンサーと云ふ此の二大家が科學上より至大の概括力を持ち來て學者社會に一大刺擊を與ふる折柄頑迷守舊の宗教家中頗る怨恨の情を懷きて自ら戒心するものありしは固より當然怪むに足らず、何となれば此の日進の學勢に觸れて神學上に受くる所の影響決して容易ならず若し此新説の一般世人の認許する所となり愈々實地に行はるゝに至らば舊神學派の基礎は自から破られざるを得ざればなり、果して然り宇宙創造の舊義解は忽ち打破せられて一片の空談となりアダムイーブの事跡も又一小説の虛談に歸し彼等は終に立脚の地を失ひ其常に唱へて利器となす超自然なる一遁辭も何んと無く光を失ひて頗る怪しむべきの感を世人に與ふるに至れり右事情の舊神學派の諸士をして愈々以て恐懼の念を惹き起さしめたる其有樣は世人の能く知る所なり當時ゆにてりあん敎徒の人々すら尚ほ且つ過去現在の宇宙の事物悉く一定の秩序を得

て又彼の不可思議なるものなきに至らば基督教は終に打破せられて其成立を失ふに至らんとの感を懷きしもの或は無きにあらざりし左りながら人の思想は歲月の經過と共に着々其歩を進めて最早今日となりては「ゆにてりあん教」が時の新思想に調和して能く之を應用するのみならず稍々進步したる「をるそどつくす」(則ち自稱正統教派」も又幾分か之れに調和せんと勉むるの傾向を呈したるは我輩の窃に喜ふ所なり扨て此の如くにして其結果は新神學派の成長となり今や我輩は其新活劇を目擊せんとするの氣運に達し破壞の時代は既に經過したるを以て地上は誠に淸淨潔白となれり是より此の淸淨潔白なる地上に新殿堂を建立して新法を説き新教を布かんとす而して其法其教なるものは之を舊來の法教に比して思想の活大なる事、情愛の深き事、志望の高尙なる事、固より同年の論にあらざるを信ず」抑も科學硏究の結果は概して人心に理解の力を與ふる者なり其次第は理學者の心常に僧侶に比して理解の力に富めるを見て知るべし盖し理學者は業務上其身寧ろ實物に接し心常に之れに向ふを以てなり然れども今日は之れ理學者のみならず僧侶も亦科學の硏究を怠たるべからず思ふに今の時に當つて理解力に富まざるべからざるの人ありとせば他なし其人は必ず僧侶ならざるを得ず實に宗教に向つてコーパルニカス以來宇宙の原則に注意すべし神學も亦此原則の支配を肯せざるを得ずとの事實を示して其前途を覺悟せしめたる功德は之を科學進步の結果に歸せざるを得ず而して諸科學の或は直接に或は間接に宗教に影響を與へて其思想を矯正する處あらしめたる中にも天文學、地質學、及び比較宗教學の如きは其主もなる者とす即ち宇宙と人との關係に付き一新説を出して人は宇宙の靈長にして宇宙の萬物は則ち此靈長の爲めに造れたるものなれば萬物一切之れが用たらざるべからずとの舊説を打破したるが如き實に是れ天文學の力なり若し夫れ當今の天文學者にして神に向つて禮拜を爲さんとするものあらば其人は必ず新思想を懷きて新祈禱書を手にするならん、左りながら地質學は我輩の眼下に論より證據を示

して尙ほ一層の攻擊を舊神學派に與へし其論鋒の向ふ所は夫の世界と人間の創造を以て今を去る凡そ六千年時代にありと記載せる經典上の一節にあり科學進步の今日之を地質學上より觀察して此世界の創造期限を六千年とは愚か數百萬年の以前にありと云ふ爭ふべからざる證據の爲めに昨日まで嚴然たる經典上の一節も今は唯だ世人の一笑に附せられ其光明の幾分を失ふに至りしは之を氣の毒と云ふの外なし又今より五十年以前に於ては曾つて我輩の聞く事なかりし比較宗教學も其後次第に進步して諸々文明の事物は何れも皆經典を始め宗教上の諸制度、職務、儀式等の發達に助力せざるはなしとの事實を示せり我輩は今此等經典以下諸々の箇條を彼れ是れ比較し仔細に之れを觀察して凡そ宗教なるものは一として進化の主義に伴ひ人性に發生せざる者なしと信する自說の愈々誤らざるを覺ふに至れり又經濟學は我輩が惠與を爲さんとするに當り動もすれば其法宜しきを得ずして往々惠與の目的を誤り結局無益に歸するのみならず無智の人民をして愚に慣れ懶惰の不始末なからしめんが爲め其方法に關して多くの利益を與へし斯くの如きは已に世人の能く知る所なれば今又多言を要せず唯だ彼の事實の眞僞を辨別せずして濫りに惠與を勸むるが如き教祖傳中の一節は最早今日無用たり唯れ一人として之れに從ふ者なかるべし左りながら我輩今日の有樣は將さに是れより進まんとする其第一着步に過きされば固より未だ滿足すべからざるのみならず今後愈々科學の進步して基督教徒の益々眞誠なる慈心に富まん事を望まざるを得ず

終りに臨みて科學の進步が宗教に與へたる功德に就き一言以て之れを約すれば宗教をして宗教の宗教たる本色を現はし其光明を放たしめ之れを健全なる地位に進めたるにあり蓋し從來宗教の所爲不幸にも往々其本色を失ひ時に或は發熱狂躰の姿を呈せし事ありしも今後之れを治療して其本性に服せしむるものは唯だ是れ科學の力なるを信ず科學の進步につれて發達する眞誠なる我基督教徒は其心常に正しくして理解の力に乏しからず實に科學は智力の救世主と云ふも可ならん其力は

人心を健全無病に進め社會殊に宗教社會に洪大無量の功德を有するものなりと我輩の信ずる所を聊か事實に徵して一言するものなり

論　林

人種競爭論

菊池武德

社會の組織の進歩するに從ひ漸く國家の躰制を成し、各々一政府の下に統治せられて或は英吉利、佛蘭西と云ひ、或は支那、日本と云ふ、邦國（ステート）なるもの即ち是なり、夫れ邦國は各自その繁榮安全を希圖せざるはなし、故に其内を治め外に對せんが爲め任意に法律を設定するの權理あるは勿論、正當防禦の原則に背かざる限りは他を侵略するも亦公法上是認する所なり、左れば國家の主權なるものは毫も他の制限を受く可きに非ざるや明白なりと雖も、所謂無制限とは放恣亂暴の義にあらず、人々は個々に自主の權あり、隨て他の自主を犯す可らざるの義務あると均しく、國と國との關係も亦公法上の道理には服從せざる可らざるの義務あり、畢竟國家に主權の存在するは、國民の繁榮安全を計らんが爲め社會組織上の必要に出でたるのみ、國際の義務は怠る可らず、博愛の公義は捨つ可らず、何となれば天の斯人を生ずるや一視同仁、人の相交るや四海兄弟、其間更に厚薄輕重の別なければなり、若し國際の公法に背き博愛の公義を捨て、白人種と云ひ黄人種と稱して區別を立て、同じく各自の邦國を成すにも拘はらず、白人種は白人種の邦國に偏し、黄人種は黄人種の邦國に偏し、宛然人種の爭をなすに至ては、是れ強て天意に戻り同類の人間を以て異類と認むるなり、僻見も亦甚だしからずや。

日本開國の以前に當り、外國人の舶來する者あれば之を呼ぶに夷狄を以てしたり、當時外人は我が夷狄なる文字を解せしや否やを知らざれども、其待遇の往々禽獸に對するが如きを見て定めて大に憤激せしことならん、今日の我國人も亦顧みて赧然たらざるを得ず、蓋し何故に憤激し又何故に赧然たるや、他なし、日本人

は當時の大理に通せずして同類の人間を異類視したればなり、今夫れ白人種國(米國及濠洲等)が彼の支那の勞働者を忌むの餘り、一概に呼ぶに黄人種を以てして動もすれば絶交を宣告せんとするが如き、又日本の條約改正の遲々たるが如き、又日清以外の東洋諸小國に對するが如き、彷彿として當年の夷狄呼はりを學ぶものに非ざる歟、黄人種は今や憤激して措かず、而して憐む爾が他年一日赧然たるの時ある可きを。

奴隷解放の論は何れより來りしや、人類博愛の公義より來れり、奴隷解放は何故に賞賛せられて而して之を拒むの辭なかりしや、人類博愛の公義に據りたればなり、何人が奴隷を使用せしや、白人種なり、何人が奴隷を解放せしや、白人種なり、然らば則ち白人種は理論上博愛の何たるを知了する而已ならず、事實上博愛の應用を知了する者なり、夫れ奴隷即ち黒人種は公法上の所謂邦國に屬せざるの民族なり、而も博愛の公義は倘ほ止む可らず、況んや歴々たる黄人種に於てをや、奴隷解放果して是ならば黄人種排斥の如きは非の極と云はざる可らず。

露西亞の侵略主義は宇内の共に悪む所なり、列國の公敵として之を責め烏拉山中に屏息せしめざる可らずと論する所なり、何故に之を悪んで屏息せしめんと欲するや、彼れ他國の自主權を犯し其繁昌安全を妨害する而已ならず、希臘教を以て世界の人心を縛しスラボニック人種を以て滿天下を支配せんと欲すればなり、然るに白人種の列國は露西亞を悪んで心に之を天下の公敵と視做しながら、自ら其東洋諸國に對するの筆法を見れば、曰く黄色人種なり、曰く彼れ耶蘇教國民にあらずと知らず露西亞を悪むの心と東洋諸國に對するの心とは二様の一心なる歟、アヽ是れ最大の矛盾と謂ふ可きに非ずや。

或は謂はん、國に正當防禦の權あり、露西亞の侵略主義に抗ずる、支那人の移住を排斥する、皆是れ自國の繁昌安全を希圖せんが爲め正當に防禦するのみ、而して奴隷解放の如きは防禦の必要あるに非ず、故に好んで慈仁を爲すなりと、博愛の程度と正當防禦の範圍と

は暫く之を可なりとせん、獨り怪む何故に支那人と言はずして黄人種と稱するや、白人種國ならば假令ひ支那の如きものあるも猶ほ之を排斥すると能はざらん、否々支那勞働者排斥の如きは黄白を區別するの一例として揭げたるのみ、其正當防禦なるや否やを論ずるに非ず、全躰に於て泰西白人種國が東洋黄人種國を待つに恰も異類を以てするは各般の事實に徵して明瞭なり、一種心得難き筆法を差向くるの例證は殆んど枚擧に遑あらず、支那人排斥或は正當防禦ならん、米國の如きは寧ろ博愛の公義に富むの國ならん、唯夫れ白人種と黄人種、耶蘇敎國民と非耶蘇敎國民、此般の關係に至ては余輩決して正當防禦の辨解を容さゞるなり、黄人種は支那以外に平ならざる者多しと知る可し。

白人種は智力躰力ともに黄人種に優れり、故に黄人種に勝つなりと言はゞ是れ自然的合理競爭なり、若し夫れ白人互に偏僻するの心を以て、或は連合して不當の權利を貪り或は漫に異類として排斥を企つるに至ては、是れ人爲的不理競爭なり、否人盛んにして天に勝つなり、人間の食物として鷄を割き牛を屠ると何の相違か之れあらん、自然的合理競爭は當然なるも人爲的不理競爭を以て文明世界に横行するは、余輩實に之を醜とす。

由是觀之所謂人種競爭は天意に戻り公法に背くの不人的所行にして、亦實に白人種が知りつゝ自ら其心を欺くの所爲なり、人種競爭は斷して之を制抑せざる可らずと雖も、扨如何にせば可ならん歟、公法の理論は薄弱にして威力なし、寧ろ博愛の公義に問ふて彼れ白人種の宗敎心に訴へんに、抑も前に所謂自然的合理競爭は即ち是れ優勝劣敗の理數にして、人類の進步の爲めには欠く可らざるの常道なれども人生の事は獨り此理數のみを以て規す可らず、別に衆人安堵の約束を遂ぐるに非らざれば人類の進步あれども社會の平和は得て保つ可らず、此故に衆人安堵の約束を遂げんが爲め、優者をして獨り勝たしめず劣者をして獨り敗れしめず、優劣の間を調和して極度の勝敗なからしむるものは是れぞ宗敎の道なりと云ふ、此說に從へば余輩が既

に當然の事として許したる自然的合理競爭とても、亦必ずしも絶對的に合理當然なるに非ず、自ら衆人安堵の約束を守り宗教の道に從はざる可らざるに似たり、合理競爭にして猶ほ且つ此の如くなりとせば、不理競爭即ち人種競爭の如きは、苟も宗教心ある者の爲すに忍びざる筈ならずや、若し之れをしも忍ぶ可しとせば、世に博愛の公義なるものは影だも見る可らず、顧ふに白人種は宗教心に富む者なり、何ぞ其本心を叩いて而して大に省みる所あらざらんや、是れ人類社會の爲めに宗教家の盡力を要する最大急須なり。

按ずるに宗教殊に耶蘇教の理は天に基く、天の人に於けるや一視同仁、黄白を以て互に異類すべきに非ざるや論なし、今白人種の黄人種と對する耶蘇教國民と云ひ非耶蘇國民と云ひ以て異類するものゝ如し、知らず耶蘇教なるものは白人種特有の宗教なる歟、果して然らば其教道を黄人種に傳ふるも亦非なり、既に之を傳ふる上は生存場裡にも亦黄人種なりとて異類視す可らざるなり、日々の實行上に於ては黄人種を以て恰も天惠に浴す可らざる者と擯斥し、而して口頭筆端のみ僅に耶蘇教の弘布を務めんと欲せば、誰か其矛盾に驚かざらん、耶蘇教の本義に詳かならざる者を濟度することそ本意なれ、白人種の黄人種に對して所謂人種競爭をなすが如きは、天意を欺き兼て耶蘇教を逆用するものと云ふ可し、是れ亦宗教家の着目す可き要點ならずや、宗教家にして精誠盡瘁する所あらば庶幾くは博愛の公義を擴張し其制裁を強くして、由て以て所謂人種競爭の邪道に陥らざることを得ん、今日は時機稍々晩れ既に罪業を重ねたるもの少小ならずと雖も、未だ敢て救ふ可らざるに非ず、之を救はざれば耶蘇教家も亦同じく佛面魔心の誹りを免れざる可き歟、而して人類社會に公義なるもの無からんとす、余輩は博愛の天理の爲めに悲む。

上來人種競爭の非道を論じて宗教家の一顧を希望するに切なりしと雖も、是れ皆永遠に着目したる理想界の談にして、人類の競爭に於ける大躰の傾向を動かさんと庶幾するの意に外なきのみ、目前實際の論に至ては

則ち然らず、前記の千百言は殆んど空論同樣にして、實は各國が商利を貪ぼるの慾心に訴ふることそ上策なれ、黄人種なりとて商利の關係にして重大ならば焉んぞ能く之を擯斥するに忍びんや、見よ彼の英國が支那と結托して淺からざるは何の故ぞ、左れば黄人種が全躰に於て白人種に異類視せらるゝの遺憾は萬々なれども、一部特別の場合即ち我が日本の如き進んで白人と同等の待遇を得んと欲せば、唯須らく彼と商利の關係を深くして、慾情の邊より擯けて擯く可らず離れて離る可らざるの交際をなす可し、此事たるや自ら別問題にして特別の小策略なり全躰の大議論に非ず、國際の事なり人類の談に非ざれば暫く擱き、爰には單に宗教家の猛省を促して其教を乞ふと云爾。

教育學の地位

土谷忠治

夫れ普通教育は國家の原基なり。一朝其原基にして宜しきを失はんか。國家の衰頽昭々乎として。鏡影の相應ずるが如し。莖幹倒れて、枝葉何ぞ獨り繁茂するを得んや。余儕夙に信ず、「國家の於教育、猶木之有枝。教育之於國家、猶木之有本。傷其本、枝從而亡。」と善哉言哉、取て以て教育の必要を悟るに足る。苟も國家の原基、即ち教育を以て自ら任ずる者は、須らく一定の識見を有して、以て其任に當らざる可らず。世人輙もすれば普通教育を冷淡輕々視するものありと雖も、之れ誤れるの甚しきものなり。然れども之れ強ちに誤れる人の誤れるにあらず、自ら其任に當る者の、世人を其迷路に誘導したるの罪のみ、自ら信ずるの薄き者如何ぞ人の尊信を受くるを得んや、教育家にして人の尊信なくんば如何ぞ其成功を期すべけんや、世の教育者須らく茲に猛省せずして可ならんや。

夫れ我國は急遽の進歩を以て政海一革、立憲代議政躰の美擧を見。法律の發達や日々改良を加へ、六大法典既に發布せられ。サイエンスの進歩博士學士の輩出を見る日一日より多く。普通教育の整備、到處咿唔の聲を聞き。女子教育の進歩、男女同權を主唱せしめ。其他宗教に、工業に、商業に、其發達の結果は、日進改

良の運に向ふ、亦盛ならずや、之れ果して祝すべきか將た愁ふべきか、今日我國の文物制度諸般の現像に就て、最も着實丁重に觀察する時は、皮相上大に喜ぶべきが如しと雖ども、反て其内部に在りては、余は寧之を以て悲みとなさゞるを得ざるものあり、進むに急なるものは退くも亦速かなり。我國の進化は即ち長足なり、故に何ぞ以て完美なる開明となすを得んや。我國の文明は舶來的なり、彼國の文物制度を直輸入したるなり。實に其品質や彼の國に於ては、善良完美なるべしと雖ども、未だ以て風俗習慣を異にする、我國に於ての適否は一概に論じ難きものあらん、然るを世には隨観隨從、遂には西洋心醉の奴となり、其適否を撿するの暇なく、全部飲み即ち咀嚼するなく、唯妄に之を飲食し、猶消化機の害をなすと一般、内面夜叉外面如菩薩たる劇藥を服用する者と、何ぞ擇ばんや。然れども之偶然にあらず、所謂國家の原基を以て自ら任ずる者の、罪免れざる所抄しとせず。是等は社會の罪跡にして、道德上の重科を免るべからざるなり。斯る罪人は早く教育の理法を研究して、其改良を計り、以て世人に謝するか、將た慚死以て、天に謝せざる可からず。

其教育上の理法を研究し、以て明治照代の相續者をして、正當に發達せしむるには、先つ其教育の地位の如何を觀察して、後教育すべきなり。教育の理法を研究するは、先其大方針を確立して後、始めて完全を得るものなり、即ち教育は如何なる人類に向て、又如何なる人類として施すべきかの點之れなり。前者は即ち教育の範圍とも云ふべきものにして、世説既に一决せしも、後者に至りては、或は國家的の眼光を以て論じ、或は個人的の觀察に傾き、未だ其正鵠を得たるものあらざるは、吾儕の常に痛惜して措かざる所なり、請ふ聊か之を論ぜん、讀者幸に一讀の勞を厭ふ勿れ。世の個人主義と云ひ、國家主義と云ふ、素より二あるにあらず、歸着する所唯一のみ、然るに各兩立して、相下らざる者は何ぞや、即ち一は眼中個人の二字有て、國家あるを忘れ、一は其眼光を狹隘にして、國家の二字

にのみ拘泥し、國家は個人より組織せらるゝを顧みるに遑あらざるの致す處なり、二者皆否なり、夫れ一個人は即ち國家の人類なり、國家は個人の集合團躰なり、其個人と國家との關係に於ける、恰も一村と一家とに於けるが如し、一家の存亡は一村の存亡なり、個人の消長は一國家の消長を來す。之を教育上に就て考ふるに、國家主義者の見は、一個の人類たるを知らざるものなり、抑も人類は一個の人類のみならず又一家の人類なり、進では一郡村の人類にして又一國家の人類なり、個人と國家とは敢て分離すべきものにあらざること、明々乎として。一點の疑を容るべきことにあらざるなり。

何をか教育上個人主義と云ひ、何をか教育上の國家主義と云ふか、夫れ既に斯くの如く、其注目する地位大に異なれり。以下聊か其各義の弊害を指摘する所あらん。夫れ人あれば、必ず其之を產みたる所の父母なかるべからず、既に我あり父母ある、必ず其住家なかる可らず、住家あれば、必ず一團躰即ち一村なかるべからず、一村あれば必ず一郡あり、一國一洲ある、之れ敢て吾儕の喋々を要せざるなり、夫れ既に然り、然らば人類は、人類と云ふと共に一國の人類なる意味を含有すること、論理上明言する所、故に其教育を施すべきに於ても、必ず完全なる各個の人類たらしむる目的を以てすると同時に、國家の人類たる範圍を脫するを得べからざるなり、何をか其個人主義の弊害と云ふ、余儕は之れを細論するに暇あらずと雖も、一例を擧げて之を證せんに、我國の古代と今世の現狀如何、我國は果して進化せるか、神武の帝建國以來、二千有餘年、未だ嘗て外ッ國の、凌辱を受けしとなき日本國、皇統連綿、世界に比ひなき蜻蜓州、道德堅固の大八州、之を擧げて社會の奴隷たらしめんとす、之れ誰の罪ぞ。觀よ我國の今日は、文弱の弊風滔々として風を揚げ、尙武的氣象、道德的觀念を擧げて、地平線下に陷落せしめたるを、是等は實に教育を以て、個人的の人類にのみ課すべき者として、其國家の有無を念頭より、放出したるに據らずんばあらざるなり、嗚呼之れ

自身の境遇を忘れ、歴史の如何を思はず、學理のみの研究に傾注し、遂に尊歐の氣風を養成したるに外ならず、是を以て日本固有の氣質は漸く衰へて、又挽回すべからざるに至る、斯る例證豈敢へて我國のみに限らんや。何をか國家主義教育の弊と云ふ、吾儕は多言を用ひず、一言以て之を辨ぜんとす、即ち攘夷的の人物を養成し、又救ふ可らざるに至る、之れ國家あるを知て、個人たるを知らず、自身以外に人なしと思意するによるなり。兩者偏傾の弊たる夫れ既に斯くの如し、豈一歩を進め、其中庸を得ずして止むべけんや。吾儕の眼を以てする時は、スペンサーと云ひ、ゼボンと云ひ、ベイン、バルドウヰン、サルレーと云ふ、皆其説く所誤れりと云はんのみ、實に彼の諸士は、聊か國家の觀念薄弱の地に生れ、……成長し、……生活し、未だ國家の何たるに注意を專傾するの境遇を得ざりき、是余の常に諸士の爲に惜む所なり。又翻て我國を觀るに、或は國の教育と云ひ、日本の教育と云ひて、喋々論究する者ありと雖も、是又其一を知て二を知らざる者の所行なり、即ち教育と云ふ意味は、既に國家教育の義を含有するにあらずや、夫れ國家教育なるものは、教育中の一部分のみ、恰も躰育、德育、智育等に併行する者なり、敢て今日世人の云ふが如き、意義を有する者にあらざるなり。吾儕も其國家教育と、教育學との關係、教育上の個人主義と同家主義とを併立せしむる方策に至りては、一定の見界なきにあらず、然れども本論の範圍外に渉るの恐あれば、後日を俟て詳論する所あらん。

宗教的生涯

古莊三郎

人の生涯には、種々の趣ありて、嚴肅なるものあり、豪放なるものあり、神聖なるものあり、野鄙なるものあり、畢竟するに、其人平生守るところの道、聞くところの教、實に之が嚮導たるなり、されば道と教とは、人の生涯を形づくる摸型にして、圓滿的生涯も、怨嗟的生涯も、樂天的生涯も、厭世的生涯も、偏に摸型の結構に由るものと知るべし、今一々世人生涯の状態を

なく、道德主義の存するあらば、國家を泰山の安きに置き社會を安然の位置に居らしむる、敢て難きとにあらずと、夫れ然り、豈に夫れ然らんや、

夫れ社會革明なるものは、一部人士の敢て好く爲す所にあらず、假令へ方面に當て立働く即ち其人を以て、惟一の活働者の如く思惟せらるゝも、實際に於ては敢て然らざるなり、試に見よ我が社會の大部を占むるもの農商工の下民なりとす、彼等若し放肆、無賴にして、政綱紊亂の時に乘じ、四方に蜂起し、有志者の進路を妨ぐるが如きあらば、如何なる豪傑のあるあるも豈に今日あるを期す可けんや、然るに彼れ多數の下民が、大義を辨へて勤王に向ひ、暗々の裡に正を守りたる、實に佛敎に由て修養せられたる生涯之れが力たりしや、更に疑ふべからざるなり、道德の力固より大なりとす、宗敎の力敢て是れに讓らざるなり、道德家は社會一方の手にして、佛敎徒は實に他の一方の手の力たるなり。社會は上士のみにあらず、其實力は却て下民多數にあるなり。下民を導きて今日の美風あらしめたるは、實に宗敎の力なりとす。然れば今日眞正の宗敎をとり、之に添ふるに道理の研究を以てせば、是れ一方の手を以て働くに非らず、双手を用ふるものなれば其力たるや實に高大なりと云ふ可し。宗敎豈に等閑に附し去る可けんや、

又佛敎徒の生涯中に見るべきものは、彼等意向の如何に係はらず、慈善心に富めることなり、貧民を助け、鰥寡孤獨を憐み、同情同感の情操を養へる盖し佛敎徒を最とす。儒敎の人、道に精しく、德に高くとも人を憫れみ物を憫れむの情は佛敎徒に劣る萬々なりとす。花の美はしきは吾人の喜ぶ所なり、然れども果を納むるは亦一層の愉快なりとす。此風は獨り佛敎家に止らず、耶蘇敎徒中、其生涯の美にして艷なりしもの尠からず、ジョンハフードの監獄改良に於ける、フロレンスナイチンゲル孃の、妙齡孱弱の身を以て、殘忍、無賴、兇猛、暴戾の徒を敎化したるが如き、其他枚擧するに遑あらず宗敎的生涯の美妙なる實に稱賛措く能はざるなり。然れども細かに佛、耶二敎徒の行爲を觀察し來れば感情に偏向したる點、道理に適合せ

ざる點尠なからず是れ余が大に惜む所なりとす。今論を結ぶに當り諸君に勸告するあらんとす。宗教的生涯は美妙なるものなり。天國とは惟だ此生涯の發作せる狀躰を云ふなり、されど迷信に陷らざるを勉めよ、迷信を避くるは道理の考究にありとす、ユニテリアン教は實に此望を充たすものなり、イエス曰く人に一杯の水を與ふるものは天に於て大なるものなりと。此宗教的の生涯豈道理に背かんや豈人情に戻らんや

教會歷史と信者

三　井　亘

「潜かに出でゝ幽谷に行くに四面寂寞として人語なく谷中獨り枯骨の累々たるを見るのみ、神の我に命ずるがまゝに枯骨に向て語を放てば死骨忽ち動きて音を生じ骨と骨と相聯り筋肉生じ皮之れを蔽ひけり、此時氣息未だ其の中にあらざりしが神の命ずるがまゝ再びなしければ氣息其の中に入りて皆生き忽ち立ちて多くの群衆をなしたり」とは是れ豫言者エゼキエルが南柯の夢なりき

熟ら既往に遡りて歷史を追想するに當りては吾人も亦たエゼキエルたらざるを得ざるものあるなり歷史上個々の事蹟は累々として疊積し我眼前に橫はると雖ども一目して彼等は數百千年以前の者たるを知るべく寂然として聲なし、然れども一たび冥想して個々の歷史的事蹟の相聯絡する所以を考へて再び之を地下に呼び起し其の歷史を支配し歷史を活動せしむる大精神あるを察するに至りては個々の事蹟は最早累々たる枯骨にあらずして其のさながら死せるが如きものも復活して活動するあるを知るなり

今世の我、今世の世人是れ何物ぞや是れ皆數千百年來活動して止まざる世の歷史の末端に連ならざるものにあらざるはなし、今世の基督教會に連れる我、基督教會に連れる信徒は何者ぞや皆耶蘇基督より出でたる歷史的發達の其の末業に屬せざるはなきなり

我の我たる所以のものを善く理解せんと欲せば之を我が自覺の心に質さゞるを得ざるなり、今世の世界なり或は更に區域して之を云はんに今世の教會なりを善く

理解せんと欲せば之を今世に於ける敎會の自覺即ち今世に於ける敎會の活動せる團躰に質せざるべからざるなり而して吾人の自覺心なる者は偶然に突如として何等の根底もなく生じたるにあらず記臆や經歴したる事蹟のあるありて之を喚起せずんばあらざるなり凡そ事を爲し其の正に務むべき所を務めんと欲する者は必ず先づ我の我たる所以のものを知らざるべからず、己れを知らずして事を爲さんと欲するは輕佻の譏あるを免るべからず、されば又た今日敎會にあるの人は其の職分の何たるを問はず皆な基督敎の信徒として務むべき所を務むるに於ても亦た今日の敎會を知らざるべからず、若し今日の敎會を知らずして今日の敎會の爲に務むる所あらんとするは難きなり然り而して今日の敎會を理解せんには吾人は從來の歴史を知らざるべからざるなり

故に從來に於ける敎會の歴史を知るは今日の敎會の爲めに運動を爲し得るの路なり加之敎會の歴史を知り其の歴史的發達の末端に連なる我を知るに於ては其の位地の如何なるものなるかを明らに知るなり其の位地を知るは則ち復た敎會の爲めに務むべき所を知り之を愛するの心情を强盛ならしむる所以なり、蓋し此の事たるや國民敎育の上に於て愛國心に盛なる人民を養成するに當りても亦た同じきとにして猥りに言を誇張し愛國の民たらざるべからず忠君の臣たらざるべからずと無形の意義を陳列して以て此の心を養成せんとせば偶々以て虚勢を搆へ僞善を扮ひ墓を白く塗り外を美しくするの弊を增すべきのみ眞に能く國民をして其の祖國を愛し祖國の爲めに盡くすあるに至らしむる者は祖國の歴史に通曉し其の今日ある所以を明かにし善く今日の祖國を理解し自己か此れに連らなるの位地を知るにあるなり若し國民にして祖國の歴史と恰も同化したらんには此の祖國を愛せざらんと欲するも得ざるなり殊に此の事たる我國の如き皇統連綿として萬世に亘り一家團欒たる人民を成す萬國無比の國躰に於て然るべきや知るべきなり

如此歴史と國民との關係する所は大なり之に等しく敎

會歷史と信徒との關係も亦た甚だ大なるものあるなりされば歐米に於ける敎會歷史は我國に於ける基督敎の信徒の爲めに又た殊に役者たるもの丶爲めに甚だ緊要なるものと云ふべきや論を待たざるなり然れども是れよりも更に直接に吾人と關係を有し吾人の爲めに緊要なるものは我國に於ける基督敎會歷史なりと云ふべし其の然る所以に至りては再び喋々せざるも余が前言に於て明白なるを得べし

十六世紀の後半に於て我國に傳道せるは重に「イェズイッテン」派なりしが德川政府の烱眼なる終に之を撲滅せり其の歷史も亦た嘗て我國に善く傳はらず反て歐文となりて歐州に行はれたり其の翻譯は僅かに我邦人をして我國に於ける十六世紀の基督敎歷史を窺ふを得さしめたり勿論此の歷史たるや今日我國に於ける基督敎と命脈を通ずる所なきが故に直接の關係なきものとして見るも可なり而して今日の我基督敎會と最も直接の關係あるものは此の世紀に於ける新傳道なりと云ふべし蓋し新傳道は安政五年（千八百五十九年）議論紛然として上下騷然たるの間に井伊氏が責を一身に負ひ外國と假條約を締結せし時に其の端緒を開きしものにして此の時既に合衆國の監督敎會はリシンス氏、ウイリアムス氏を宣敎師とし送りて長崎にありしとかや之に次で同年十月ヘボン氏來り十一月ブラウン氏シモンス氏フルベッキ氏來り翌萬延元年四月（千八百六十年）浸禮敎會のジョブル氏來る是れ外國宣敎師中の先登者なり爾來既に星霜を重ぬる卅有數年其間に一歲の小兒は生長して卅有數歲の有爲活潑なる壯年とはなり得るなり、されば我基督敎會も其の生長なからずや余は其の生長の比較的に甚だ大なるを信ずるなり信徒の數より云ふも元治元年（千八百六十四年）に始めて一人の受洗者を出だせし以來今日は既に三萬の信徒あるもあり、內外の役者の數は余其の統計を得ざれども恐くは六七百もあるならん、其の他我基督敎と政治との關係、他宗敎及び學術との關係、實際的事業との關係等は多くの發達變遷を經たり又た我國に於て發達せし基督敎の特色などもあるべし之を研究思考せば實に基督敎會の比

理解せんと欲せば之を今世に於ける教會の自覺即ち今世に於ける教會の活動せる團躰に質せざるべからざるなり而して吾人の自覺心なる者は偶然に突如として何等の根底もなく生じたるにあらず記憶や經歷したる事蹟のあるありて之を喚起せずんばあらざるなり凡そ事を爲し其の正に務むべき所を務めんと欲する者は必ず先づ我の我たる所以のものを知らざるべからず、己れを知らずして事を爲さんと欲するは輕佻の譏あるを免るべからず、されば又た今日教會にあるの人は其の職分の何たるを問はず皆な基督教の信徒として務むべき所を務むるに於ても亦た今日の教會を知らざるべからず、若し今日の教會を知らずして今日の教會の爲に務むる所あらんとするは難きなり然り而して今日の教會を理解せんには吾人は從來の歷史を知らざるべからざるなり

故に從來に於ける教會の歷史を知るは今日の教會の爲めに運動を爲し得るの路なり加之教會の歷史を知り其の歷史的發達の末端に連なる我を知るに於ては其の位地の如何なるものなるかを明らかに知るなり其の位地を知るは則ち復た教會の爲めに務むべき所を知り之を愛するの心情を强盛ならしむる所以なり、蓋し此の事たるや國民教育の上に於て愛國心に盛なる人民を養成するに當りても亦た同じきことにして猥りに言を誇張し愛國の民たらざるべからず忠君の臣たらざるべからずと無形の意義を陳列して以て此の心を養成せんとせば偶々以て虛勢を搆へ僞善を扮ひ墓を白く塗り外を美しくするの弊を增すべきのみ眞に能く國民をして其の祖國を愛し祖國の爲めに盡くすあるに至らしむる者は祖國の歷史に通曉し其の今日ある所以を明かにし善く今日の祖國を理解し自己か此れに連らなるの位地を知るにあるなり若し國民にして祖國の歷史と恰も同化したらんには此の祖國を愛せざらんと欲するも得ざるなり殊に此の事たる我國の如き皇統連綿として萬世に亘り一家團欒たる人民を成す萬國無比の國躰に於て然るべきや知るべきなり

如此歷史と國民との關係する所は大なり之に等しく教

會歷史と信徒との關係も亦た甚だ大なるものあるなりされば歐米に於ける教會歷史は我國に於ける基督敎の信徒の爲めに又た殊に役者たるもの丶爲めに甚だ緊要なるものと云ふべきや論を待たざるなり然れども是れよりも更に直接に吾人と關係を有し吾人の爲めに緊要なるものは我國に於ける基督敎會歷史なりと云ふべし其の然る所以に至りては再び喋々せざるも余が前言に於て明白なるを得べし

十六世紀の後半に於て我國に傳道せるは重に「イェズイッテン」派なりしが德川政府の烱眼なる終に之を撲滅せり其の歷史も亦た嘗て我國に善く傳はらず反て歐文となりて歐州に行はれたり其の翻譯は僅かに我邦人をして我國に於ける十六世紀の基督敎歷史を窺ふを得さしめたり勿論此の歷史たるや今日我國に於ける基督敎と命脈を通ずる所なきが故に直接の關係なきものとして見るも可なり而して今日の我基督敎會と最も直接の關係あるものは此の世紀に於ける新傳道なりと云ふべし蓋し新傳道は安政五年(千八百五十九年)議論紛然として上下騷然たるの間に井伊氏が責を一身に負ひ外國と假條約を締結せし時に其の端緒を開きしものにして此の時既に合衆國の監督敎會はリシンス氏、ウイリアムス氏を宣敎師とし送りて長崎にありしとかや之に次で同年十月ヘボン氏來り十一月ブラウン氏シモンス氏フルベッキ氏來り翌萬延元年四月(千八百六十年)浸禮敎會のジョブル氏來る是れ外國宣敎師中の先登者なり爾來既に星霜を重ぬる卅有數年其間に一歲の小兒は生長して卅有數歲の有爲活潑なる壯年とはなり得るなり、されば我基督敎會も其の生長なからずや余は其の生長の比較的に甚だ大なるを信ずるなり信徒の數より云ふも元治元年(千八百六十四年)に始めて一人の受洗者を出だせし以來今日は既に三萬の信徒あるもあり、内外の役者の數は余其の統計を得ざれども恐くは六七百もあるならん、其の他我基督敎と政治との關係、他宗敎及び學術との關係、實際的事業との關係等は多くの發達變遷を經たり又た我國に於て發達せし基督敎の特色などもあるべし之を研究思考せば實に基督敎會の比

較的に甚だ大なる發達をなせるものを發見すべく其の中に神靈の生命を感知し、或は學ぶ所あり或は戒むべき所を知り己れが位置を知り務むべき所を知らん、若し一言以て之を盡くすべしとせば我日本基督敎會を愛するを知るに至るべし

かくも我日本基督敎會歷史は我基督敎信徒特に役者とは重大なる關係あるにも關らず今日尙ほ我國に我基督敎會歷史なきは甚だ遺憾のことにあらずや思ふに日本基督敎會歷史の嚆矢となすべきものは獨逸國にて著述せられたるものなるべしと信ず即ちポッツダムの說法者リッテル氏(Ritter)の著「日本に於ける「プロテスタント」傳道の三十年」(Dreissig Jahre Protestantischer Mission in Japan. 1890 Berlin) ならん同氏は甚だ觀察の力に富み善く洞見する所あり加之系統的序述の法を得たれば其の歷史は坐ながら日本に在りて其の史を編むかの感あらしむ京都同志社の敎授アルブレヒト氏は一昨年此の書を英語に翻譯せられたりと聞けば其の出版も近々にあらんか

余が聞く所に由れば日本に於ける希臘敎會は二三年前より其の敎會歷史の編纂の爲め材料を蒐集しつゝありとか又た「日曜叢誌」は嘗て大に廣告して日本基督敎會歷史の材料となるべきものを集めんとせしと其の後は如何になりしか又た近頃木村七十郎氏は長崎に於ける敎會史を著述せんと企てられ其の一文載せて護敎にありと殊に日本基督敎會歷史の爲めには生字引とも稱すべき博士フルベッキ氏は本年の箱根夏期學校に於て「日本初代の基督敎史」と題して三回の演說をなさるゝ由なれば其は甚だ有益のものなるべし、此れ等は實に我基督敎社會の爲めに好計畫と云ふべし然れども未だ以て一系統的の日本基督敎會歷史を望むべからず余は神の恩惠により我日本の基督敎會は適當の方法と適當の人を得て此の一大事業を成すを得んことを切望するなり素より余は「ロマンチックル」に非らず又た他者をして「ロマンチックル」たらしめんと欲する者にも非らず又た唯だ過去を追想して其の情感の中に生活するを是なりとなす者にも非らずと雖ども我過去の歷史は大に吾

人今世人を利する既に論せしが如きものなり又た我過去を知り依て現在を知るは世人が年來心憂する救勢回復の爲め大に力あるべきを信ずるなり

厭世主義

坂東太郎

悲哀は人生斷つべからざるの情緣なり、人生未だ古より悲哀を見ざるの國あらず、家あらず、人あらず、痛苦伴ひ、慘憺加はり、遂に古への詩人をして「人の生れて艱難を受くるは火の子の上に飛ぶが如し」と謳はしむるに到る、所謂厭世家とは特に此側面よりして人生を悲觀するもの、人生既に此悲哀あり、焉ぞ此悲觀あるを怪むに足らんや、蓋し不幸、災厄、艱難、痛苦の境界は屢人をして內顧反省の機會を得せしめ端然、肅然、眞率、謹嚴の心を以て「自己」「人生」「宇宙」「存在」等の問題の前に立たしむるとあるものなり、身を塵世的俗流に投じ、旋渦奔湍に捲かれて殆ど人の人たる所以を忘れ、射利狡猾一念凝りて又他を顧みるの遑なきもの、時ありて悲哀の淵に沈み、爲めに其道念を發起し、一蹶直に神明の光を仰望するが如きの例歷々として古へより乏しからず、これを以てこれを見れば悲哀は人生の要素なり、故に吾人は一個人の悲嘆を見る每に、必ず常に同情、善誘を期せざるあらず、夫の厭世主義は一般人類悲嘆の聲なり、豈に漫に其偏矯を嘲笑し去るべけんや、雲煙過眼徒に斯る悲觀の人生に存する所以を輕視するは寧ろ吾人の快とせざる所なり、

蓋し厭世主義は一の觀世說なり、觀世說の系統的たるものを望まんには、必ずや形而上的の根據を有せざるべからず、然れども形而上的根據とて必ずしも演繹的に觀世說を生み出すの原因にあらず、却て觀世說の後に生じたる假說に過ぎざるとありと雖、余は暫く是を不問に措きて厭世主義が如何なる形而上的の根據を有するやを尋ねんと欲す、厭世的觀世說の根據古來時と處を異にするに隨ひ必しも其轍を同うせず、或は人生を以て眞如實相の假現となす佛者の說あり、或は世界を以て無鐵砲なる盲目意志の司配する處となす近世歐洲の厭世哲學あり、然も宇宙と人生を評價して極めて

與くするの一事は總ての厭世的觀世說に通有なる點なり、空の空、空の空なる哉、都て空なり、日の下に人の勞して爲す所の諸の動作は其身に何の益かあらん、是れ總て厭世主義の起る所以なりとす。

厭世主義の觀世說既に此の如くなりとせば、其實際的生活に影響する所も大凡推知すべきのみ。世界何物ぞ。人生何物ぞ。人生若し假現の幻夢に過ぎず、猶ほ水面の一波一漣偶然に起て偶然に靜まり、風吹き止んでさらに一點の痕跡を殘さゞるが如きものならば、吾人が孜々として思辨し、語言し、動作する所果して何が爲めぞ、良心何物ぞ、道德何物ぞ、吾人が自らを測らずして、徒に奮勵し、經營し、努力するは寧ろ至愚の事にあらずや、われは只われを驅る慾望推力の自然に任すべきのみ、天下豈に犧牲獻身、克己惓抑と云ふが如き痴事あらんや、是れ即ち厭世主義が實際の生活に及ぼすべき影響の第一着歩なり、厭世家が君子に仁義あり、僧に法あるを以て、身に虱あり、家に鼠あると等しく、其物につきて其物を費し害ふものゝ中に數へ、若しくは信をも守らじ禮義をも思はじなど揚言するも素より至當のことにして絲毫も怪しむに足らざるなり、道德既に破壞せらる、直に之に繼ぐものはエピキュリアン一派の行樂主義（ユーデモニズム）なり、既にわれを以て推力の自然に委す、慾望われを驅れば、われ慾望に從て是を充すを事とすべきのみ。われ等今日食飲すべし、人生只行樂せんのみとは厭世主義が實際の生活に及ぼすべき影響の第二着なり、世或は行樂主義を以て樂天主義の兄弟分となすものありと雖、是れ甚だ淺薄なる見解と云はざるべからず、行樂主義實は厭世主義の產兒なり、行樂家決して世を樂しむにあらず、却て渠等は既に世に絕望したるなり、世若し行樂よりも高尚なる實在なしとせば、是れ豈絕望すべきの世にあらずや、渠等の眼若し行樂よりも高尚なる實在を見ると能はずんば、世豈に渠等の爲めに樂しからんや、人若し之を疑はゞ、請ふ試みに行いて行樂家に問へ、行樂果して卿等をして滿足を得せしむる乎。卿等果して眞に行樂を樂しめる乎と、

然れども行樂家は未だ厭世家の半熟なるものに過ず、眞心、道徳既に實在にあらずば、行樂、豈尙實在たるの理あらんや、既に道徳を棄てゝ顧みず、倘ほ戀々として行樂を離るゝこと能はざるもの、未だ全く世を厭ひたるものとは云ふべからず、且つ夫れ慾望の自然に隨ふと稱し、反て慾望を充たすが爲めに數々たるもの、豈に自らを推力の自然に委したるものと云ふべけんや、既に人生を以て大洋の一波一涙に比し、假の間の夢幻と悟了したるもの、何の興ありてか其中の行樂を事とせん、此に於てか一切虛無萬事頓着の主義となり、全然「我」と云ふ一個の存在を滅却して、之を絕對、無限、眞如、實相てふものゝ中に融化し去り、可不可、賢愚、得失の境を解脫して、所謂天地の正に乘じ、六氣の辨に御し、以て無窮に遊ぶを事とせんとす、是れ厭世主義が實際の生活に及ぼすべき影響の窮極なり、桑門謝世雲水を友とするの徒は概ね此流の厭世家なり、人或は曰はん、既に一切虛無を旨とし、「我」と云ふ一個の存在を滅却せんと欲せば、渠等何を苦んでか飮食被服敢て此生を保つことをするものぞ、生を保て已を虛ふせんとするは、寧ろ食を斷ち、身に刄して、直に「我」を滅却するの勝れるに若かんやと、然れども自ら執意して殊更に我が生を滅さんとするは我意の最も甚だしきもの、豈に無我の旨にかなひたりと云ふべけんや、且つ夫れ肉塊の活動すると活動せざると、「我」の有無に於て何ぞ關せん、眞に虛無の旨を得たるもの既に我なく、已なし、食するもわれの食するにあらず、一個の有機躰中に空間生じ、外來の物質之を塡充したるのみ、衣るも我の衣るにあらず、只一の物躰が他の物躰に依て圍繞纏綿せられたるのみ、一事をなすにせよ、なさゞるにせよ、殊更に執意して然るものは即ち我意なり、雪の降る日は寒くも感じ、花の降る日はうかれもするこそ却て虛無の旨を得たるものと云ふべけれ、

ある人法然上人に念佛の時睡におかされて行を怠り侍る事いかゞして此のさはりをやめ侍らんと申しければ目の覺めたらん程念佛し給へと答へられたりけるいとたふとかりけり（徒然草）

上人の一言咀嚼し來れば無我的生活の意義悉く其中に含蓄せられて又餘蘊なし、厭世主義亦以て此に至れば消極的無意識的の樂天主義となる、

厭世主義の窮極する所終に此の如し、是れ果して正當の觀世說なる乎、余は今之を形而上的に論評するの遑なし、然れども哲學は社會人心の反映なりと云へば、暫く其淵源に遡て主觀的の原因を窮めんと欲す、厭世主義の淵源する所果して人情の自然にある乎、是れ余が主に研究せんと欲する所の問題なり。

蓋し人普通の境遇にあり、普通の感識を以て宇宙、社會、自己に對するときは、決して厭世家にもあらず、又樂天家にもあらず、此世界に災害あり、此人生に悲哀あるは何人の常識も之を打ち消す能はざる所、一たび天道是耶非耶の疑を懷かざるものは蓋し甚だ少かるべしと雖、之を非と斷じ了るものは又更に少なし、現世の境遇に於て天道の是を成立せしむること能はざるもの、想像を來世に馳せて自ら安心の地を求むることあるは、自然の人情寧ろ樂天に傾くの徵にあらずや、夫の一切虛無、無我自然の生活の如きも、是れ唯厭世主義の理想として見るべきのみ、未だ現實其境に到達したるものはあらず、又其境に到達さるゝの時もあるべからず、人は到底自ら活動せざるべからざるものなり、其活動するや先天的心識の法則に從はざるべからざるものなり、無我自然と云ふが如きは、畢竟するに實際の意義なき空言に過ぎず、強いて是に意義を附會し、實際の生活に應用せんと欲せば、單に宇宙の大法に從て自らを處するの謂ひなりとするあるのみ、試みに之を基督教徒の用語に飜譯せば如何、是れ即ち天父の旨を奉ずると同意義にあらずや、更に常識をして是を言はしめば、單に良心の命令に從ふといふべきのみにあらずや、此に於てか知る、道德の大法終に滅却すべからず、厭世的觀世說が常識を矯めて到達したる結果は即ち常識其物の變躰に過ぎざるを、一切虛無を旨とし、君子の仁義を以て身の虱、家の鼠に比したるもの、時として又仁義道德の教を述べたりとて、世界の破壞を以て世界の救なりとせる厭世哲學者が、其破壞

を遂るの徑路として文華道德の進歩を唱道したりとて、是れ偶〻變を去て常に就けるのみ、余は理の自然として毫も之を怪しむとをせざるなり、「萬物道あり、宇宙は活く、其靈吾人の中にありては識となり、吾人の外にありては法となる、」世豈に盲目且意志の司配する處ならんや、道の此世に透徹するは區々厭世的觀世說の否定する能はざる所なり、

厭世的觀世說既に人情の自然として視るべからず、厭世主義の此世に存する果して何等の理由に淵源するものぞ、

或は曰く厭世主義は人生無常の悲觀より起ると、古來厭世家とし云へば不思議にも主として人生の無常を悲觀せざるものなきが如し、人生まことに無常なり、無常の悲觀或は厭世主義の起因たるべし、然れども單に人の一期が草上の露、風前の燈の如く、永劫常住を期すべからずと云ふ時間的の概念のみにては、未だ厭世主義の起因として視るに足らず、抑も無常を悲しむは何が故ぞ、是れ其常ならんとを冀ふにあらずや、誰か其厭ふもの、常ならんとを冀ふものぞ、何某法師が人の命は雨の晴間をもまつものかはと、人のとゞむるをも聽かず、簑笠して思ひ立てりし人の許に行きけんは、是れ無常の爲めに世を厭へるにあらずして、却て世を惜しみたるものと云ふべきなり、余謂へらく「世は定めなきこそいみじけれ」と云ふこそ眞に厭世主義の厭世主義たる所以なれと、

然れども人生の無常なるは單に其時期の無常なるのみにあらず、其中の快樂無常なり、其中の幸福無常なり、其中の功名、其中の事業亦無常なり、是等の無常總括して有限（ファイナイトネッス）と稱すべし、人生の災害、悲痛多くは有限より起る、剛毅の氣なきもの是に堪ゆると能はずして其下に屈服し、人生を以て痛苦、困厄の凝體となすとあらん、人生素より失意多し、世事意の如くならざるもの十に八九、吾人の計畫する所多くはバベル塔の轍を蹈んで終る、功名の奴は是に感傷し、人生を以て失敗の塲と憤るともあらん、是等は素より一種の厭世家たるに相違なし、然れども眞の厭世主義は單に軟弱漢

が不幸に嘆息するの聲にもあらず、失意の徒が世を嘲て自ら快くするの矯語にもあらず。厭世主義は一の眞面目なる觀世説なり。余謂へらく眞正なる厭世主義の淵源は軟弱漢、失意者の口頭より遙かに深遠なる處に於てあり、更に大なる無常を觀するにあらずんば決して斯る眞面目なる觀世説を生ずると能はずと

傳記

ラアモハム、ロー井の傳

當世紀の初めに當つて印度に有名なる學者あり、其名をラアモハム、ロー井と云ふ同國社會の改良に頗る力を用ひたる中にも宗教の事に至ては又一段の見識を有して大に研究する所あり終に惟一神の眞理たることを發見し此眞理に基き自から一宗を開き其開祖となり著書に説法に熱心以て同胞國民の迷惑を散ぜんと力めたれ共時の人民未開にして未だラ氏の意を悟るに至らず爲めに氏は當時人民の信ずる所とならず到る所に蔑視せられて布教の術もなく空しく彼の世の人となりしは今より五十年以前の事なりしが僅かに五十年後の今日「ブラモソメジ」(ラ氏の敎會)の事は全國殆んど毎戸の談柄となり頗る勢力を振ふの傾向ありと云ふ則ち是れ惟一神信仰の發達にして我輩の聞て窃かに喜ぶ所なり過般同國カルカッターに於て「ブラモソメジ」の人々開祖ラ氏の爲めに祭典を催ふし其時祭司某氏の爲したる演説はラ氏生前の所行を述べたる者にして恰も氏の傳記とも云ふべく其人物の一斑を察するに足るべければ今左に譯載して讀者の高覽に供す

諸君よ我輩の信仰する「ブラモソメジ」の開祖ラアモアム、ロー井氏の祭典を今日此所に於て催ふすに當り、來りて此盛典を祝せんが爲め會せられたる諸君に對し余は今神の尊稱と精神に於て諸君の深き信仰を謝すると同時に開祖ラ氏の生前に於ける功德を諸君の面前に述べ以て聊か氏の靈を慰せんとするの榮を得たるは余の謹んで謝する所なり

諸君は見ずやアルピン及びヒマラヤの溪間に流動する氷塊を見ずや其流動誠に遲々として一見殆んど靜止するが如く仔細に注目するにあらざれば得て其實相を知る能はずと云へども思ふに自然の法則は到底其靜止を許さず次弟〳〵に流動して終に全く水底に熔解するに至る蓋し人の力も又往々自然力の働きに類することあり今此の氷塊の流動して其熔解する有樣は恰も人事の開明進步に誘はれて其妄想の散ずる狀態に異ならずラアモハム、ロー井氏以來僅に五十年を經過したる今日我國民の進步は彼の氷塊の流動する如く誠に遲々たるにも拘はらず其方向は一步一步と開明に趣き過去五十年以前に於ては我印度人民の無智なる、事理を解するの力に乏しくして徒らに蔑視したるラアモハム、ロー井氏の功德を今は諸君と追慕して此祭典を催ふすの氣運に達せり而して其氏を慕ふの念は啻に此所にある我輩のみならず今や印度全國の人民は都鄙の別なく宗派の異同に拘はらず異口同音に氏の功德を稱し之を追慕して止まず蓋し其然る所以の者は人智稍々開けて又昔日の印度人にあらず幾分か事理に通して其迷惑を散じたるに依るならんと云へども氏の功德の非凡なりしにあらずんば焉んぞ能く此の如きに至らんや

偖て氏の性質に就き述ぶべきもの多くある中にも其能力の非凡にして博學多才理解の力に乏しからざりしは之を既往未開の當時に顧みて今日世人の驚歎する所なり例へは言語の如き梵語を始め亞剌比亞、ペルシヤ、及英國等數國の語に通じ殊に英語の如きは殆んど獨修能く之れに熟するに至れり而して其才能の發達は宗教の研究大に之れを促したりと云ふ然れ共氏は決して妄りに宗教を信せず去りとて又輕々しく之を蔑視するにもあらず唯だ深く其眞理のある所を究め自から信して然る後取捨撰擇を決せり其性質の着實にして國家思想に富める先づ第一に自國の宗教を研究して大に得る所あり時に「アパニセード」をベンガルに譯し之を同胞に示して自國の古代に於ける宗教の有樣を知らしめしより「アパニセード」は印度國凡そ改良の摸範となり一時「ブラモソメヂ」は之れが研究の外餘念なかりし其結果

は各宗統一の説となり既にして又印度古代の人民は惟一神の信仰者なりし事を發見し尋てマホメット教の經典に移り之れにても亦惟一神信仰の眞理なる事を見出し更に聖典に轉じて深く研究したる末彼の基督を以て神視するの點に至つて頗る疑を起し思らく我も人なり基督も亦人ならずや人を以て神となし之を拜するは迷ひの甚しき者なりと大に悟る所あり愈以て惟一神の眞理たる事を確然心に認め終に聖典の出版に着手するに至れり今日基督教の事を談ずる誠に容易なりと云へども當時印度人の蒙昧にして事理を解せざる其聖典を見る事恰もサタンの之れに於けるが如き時勢に當つて幾多の論難攻撃に打勝ち之を出版するは當時の事情に照し實に大事業にして至極の困難なりしと云はざるを得ず然れども氏は能く之を仕遂たり斯くの如く精勵能く事に耐へ理解の能力に富める點よりラ氏の性質を觀察すれば氏は全く理屈一偏の人物にして恰も理論の一器械なりしが如しと云へども又此理解の能力を有すると同時に情の力に乏しからずして信仰に深く宗教心に淺さかりざりし且つ其特性とも云ふべきは力めて俗界の榮華を避け以て眞理の所在を探究したるにあり今日ベンガル土人の唱歌往々厭世の意を含む者あるは又幾分か此に源因せさるなきや然れ共今我輩は古今の人物に指を屈して改良者の名を呈するに當り之れを形容するにラ氏に向つて最良の二字を加ふるは敢て辭せざる所なり蓋し氏の事務に老練なる、宗教を始め政治に教育に其他諸般の改良皆調和を主とし同時に自國舊來の風俗習慣にして其取るべき者は力めて之れを保存し自國の舊記に依り國民の本性に基き其已に久しく腐敗したる印度人民の風俗習慣幷に諸制度の片々たる者を取り蒐め之れを精撰して改良の基本となし其實を擧げんと力めたるが如し左れば若し今日氏をして在らしめば彼の歐洲流儀の印度婦人を養成するが如きは氏の決して肯ぜざる所なるべし尤も古來印度の習慣なる夫死して其寡婦を燒き殺すと云ふ慘忍無情の惡習慣は勉めて之れを攻撃し又社會の進歩に有害なる階級制度に向ては常に其反對を試みたりと云へ共元來氏の性質は純然た

る印度男子の精神、印度國民たるの思想に富み此精神と思想は氏の死に至る迄斷乎として變ぜざるのみならず老ひて益々壯んなるの趣きありし僅に十四五年の時よりしてヒマラヤ山を越へチベツト地方に旅行する事凡そ六年其始めて歸國したるは廿歳の頃なりしと云ふ余は未だ曾つて斯くの如き一少年の身を以て斯る大旅行を爲したる者あるを聞かず稍々長ずるに及んで其平生の議論と云ひ又著書と云ひ何れも時弊を看破し其識見の世俗に超絶せしを以て說く所多く時俗に容らずして當時國民の信を得る能はざりしと云へども所謂千歳の後を待たずして自然の法則は時勢の進歩を促し僅かに五十年後の今日却つて國民の追慕する所となれり其博學多才にして事理に通じ活潑精勵事に臨んで屈せず斷乎として困難に打勝つの氣力に至つては之を古今の人物に比較して余は多く其比を見ざるなり古今英雄豪傑の所行多くは時勢に卓絶すと云ふ思ふにラ氏の如きは其人なるか當時國民の智識未だ氏の所行を解するに至らずして頻りに之れを非難し甚しきは惡行雜言暴行を加へて毫も假借することなかりしにも拘はらず平然として之れを甘受したる氏の寛仁大度は我輩の今より回想して慚愧措く能はざる所なり余は今此祭典に會し聊か氏の功德を述べ併せて我輩印度國人民の氏を冷遇したる昔日の無禮を伏して其の靈前に謝する者なり云々

雜録

○德行美談

人の德行を聞て喜びその惡行を見て怒るは人間自然の本性とも云ふべきか善惡の所行共に人心を刺衝して之を德性に感化する其力は一見或は甲乙なきが如しと云へども人々日々の動作に就き細に之を觀察すれば人の惡を見て戒むるの力は其善行を聞て感化せらるゝの効に及ばざるが如し、我輩は爰に世間德行の聞へある人々の所行を記したる報道を蒐めて德行美談と題し續々紙上に掲載してその人の德性を表すると同時に又其餘德に感化せらるゝの人あらんこと

を切望するものなり

○孝子　山形縣西置賜郡小國村大字増岡齋藤勇吉は性温和にして忍耐強く幼時より父母に事へて孝養を盡し能く家事を修めて勵精怠らず近隣に交はりて最も信あり勇吉十五歳の時其母難産にして療養届かず死去したれば勇吉は父の愁歎落膽の餘り或は病を發せん事を恐れて晝夜傍を離れず父の意を慰め遑あれば母の靈前に詣して生けるに仕ふるが如し安政四年九月父後妻を娶る勇吉欣喜色に現はれ繼母に事ふること實母に於けるが如く一家能く和合するも如何せん繼薄縁にして翌年二月離別となりたれば勇吉痛く之を憂へ父に勸めて再び後妻を娶らしめ之に對して孝養を力むること前の如し繼母先年他へ嫁せし節産む所の女子六才なるを携帯し來る勇吉只管ら憐愛を加へ女兒を視る實妹の如し父母其篤志に感じ一家益々親睦し室家のあいだ和風洋々たり後ち父追々老年に及び諸所の神社佛閣を參拜せんことを望むこと切なり勇吉家富めるにあらざれども父母の意を空しからしめざらんことを欲して衣食の費を節して旅費を調へ殘る方なく支度を整へ父母をして廻國の念を果さしめたり然るに明治十七年中繼母不圖中症に罹りて起居自由ならず折節勇吉の妻は同年三月中病死したれば勇吉は獨身を以て繼母の病ひを看護し憂苦一身に集まり來たるも毫も屈せず心を鐵石に固めて益々孝養を勵み居たるが昊天この孝子を憐れまず二十一年五月に至り父又た中症に罹り父母共に起居自由ならず枕を並べて病蓐にあり勇吉の困難一層度を進めたれ共泰然として更らに屈する色なく醫藥食事の調理は勿論大小便の始末に至るまで絶へて他人を煩はすことなく看護躰養至らざるところなけれ共老病次第に衰弱して醫藥の効更らに之れなく父七兵衛は終に其年十一月果敢なく瞑目したれば勇吉悲哀措く所を知らず死躰を守り飲食を廢して晴涙に咽び共に消へんなんと哀みければ親類交々之れを諫めて幸ふじて葬儀を取り行はしめたり其れより後ち勇吉に病母を看護するの傍ら暇あれば父の墓前に詣すること日に二回風雨と云へども怠ることなく哀傷度に過ぎて顔容枯槁憔悴するに至

れりと云ふ孝子の眞情左もありなん勇吉の性質は前にも云ふごとく温順朴實にして村人の望み深ければ村吏撰擧の際には助役に當撰すること屢々なれども病母の看病に怠りあらんことを憂へて事實を明かにして固辭して聞かざれば村民も亦た之れを强ゆる能はず唯其の孝心深きに感ぜぬ者はなしと云ふ左れば勇吉の如きは實に一鄕の龜鑑ともなるべきものなればとて同人の履歷を巨細に取り調らべ去四月二十七日に同村の村役塲より其筋へ進達に及びたる由なるが澆季の世には珍らしき男と云ふべし

○孝子の資本金　東京赤坂區赤坂新阪町五十九番地の孝子羽鳥榮太郎と云ふ者あり其孝行の廉を以て曩に府廳より下賜の賞與金と各慈善者より給與せられたる惠み金とを合せ金四拾九圓拾錢となりたれば此金員猥りに消費せず他日榮太郎が成長の後商業資本に充てたしとて其管理方を實父福太郎より區長へ申出でたれば區長は三井銀行へ懇談したるに同行は之れを感賞し同行員加藤氏より金九拾錢を補足し合計五拾圓となり特別を以て年六歩利にて之を預りたるまでの事實は已に或る新聞紙上にも登載せしが其後尙ほ各所より左記の如く續々金品を惠與するものあるを以て金員は前同樣區長を經由して同行に預け入れたり又孝子榮太郎が將來の敎育方は同區公立赤阪小學校長內藤清太郎氏が區長と協議の上一切引請其需用品等も同校長內藤氏と區長とに於て總て給與し稼業を缺かず又自費を要せずして毎日稼業を仕舞ひ夕飯後より八時頃迄修身讀書習字算術等懇篤なる敎授を受くれば本人は一層心を勵まし益々孝道怠りなき由殊勝と云ふべし而して其惠與金品は左の如し

一金拾錢　無名
一金拾錢　麴町區下二番町七十一番地　谷口藍田
一金貳拾錢　無名
一金三拾錢　無名
一金拾錢　無名
一金貳圓　無名
一西洋紙百二十枚　無名

一鉛筆一二本　無名
一金貳拾錢　下野都賀郡小山町八十五番地　渡邊勝藏
一金三圓　赤坂區赤坂中ノ町十六番地　佐久間元次郎　同區田町七丁目三番地　大石榮三郎
一兒童少年一冊　京橋區築地三丁目六十三番地　山本貫通
一半紙五帖　無名
一忠孝義一冊　日本橋區本石町　博文館
一親の恩一冊　同　博文館

合計金額六圓物品七點

○孝女　山形市飯沼新町に年久しく棲む河島友七と云ふ者は股引甲掛などの仕立を業とするものなるが二年越の長病にて多くもあらぬ家具家財を殘りなく賣盡しモハヤ米薪の料に充つべきものとてはあらざるに感心なるは長女のとし(十六年)なり今春以來夜な〳〵近邊の川筋にゆき十二時頃迄下ゲ針をなし翌朝未明に引上げ獲たる魚をば賣歩き其外父の看護や人仕事母のおかねと共々に疲れも知らず打働らきて四人の弟妹へも湯なり粥なり分ち與へ花の盛りの身を襤の中に埋めて只一筋に孝と悌とに心を竭すは澆季の世に珍らしとて近處合壁の人々も大ひに稱し居れりと云ふ

○慈善家　宮城縣遠田郡涌谷町慈善家遠藤七四郎氏は仙臺市大町五丁目大內源太左衛門氏の愛岐二縣無告の孤兒十數名呼下せしより之を借受け撫育したしとの趣再應書面を以て申越したる末此程態々來仙強て二名の孤兒を借受け勇み立て連歸りしと最と殊勝の事にこそ

○藍綬褒章下賜　去月十四日賞勳局に於て公同の事務に勉勵せし廉にて藍綬褒章を下賜せし者左の如し

山形縣羽前國東村山郡藏增村長　白田省吾

資性溫厚平素勤儉を主とし村民をして之れに化せしむるを勗む明治十二より戶長等の職を奉じ町村制實施の際本村長に撰ばれ能く地方制度の主旨を體認し專ら自治の發達を圖り備荒貯蓄の法を復興し堤防を修築する等多年公同の事務に誠實勤勉し其勞效顯著なりとす依て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

○篤行の人　福岡縣福岡雁林町八番地の二に住める人力挽業江藤保(嘉永五年八月)は舊福岡藩士族なりしも

種々不幸打續き十數年前よりは一段の疲弊に陷りたるを以て止なく挽車夫職業を爲に至り老母及伯父の兩人從弟一人弟妹兩人及び妻子を加へて十四人の多家內なるも活路の手助けともなるべきは只弟と妻女とにて夜を日につぎて裁縫の針の仕事や洗張僅かばかりの內職のみ去れば保が熱汗を流して奮勵勞働せざる時は中〳〵に養育する事能はざる艱難なるにも係らず一家團欒、夫和婦隨、孫兒を愛撫し老者を慰安し更に風波の起りし抔云ふは曾てなき趣きなり殊に納稅の如きに至つても未だ一たびも納期を過ちし事なしとぞ實に奇特の人と云ふべし

○孝子　鳥取縣會見郡福米村大字東福原村河部彌平長女フサ(三十一年)は曾て母に死別し唯父子にして貧しく暮し居たるがフサ十八歲のとき同村にて親戚なる松太郎とか云ふ養子をなし一女子を擧げたるも其後松太郎は故あつて離緣せし爾來固く節操を守り假りにも淫奔がましき行跡なくたゞ農業に勉强し朝には霧を拂つて耕耘に身を委ね夕べは鷄鳴を聞て紡績の業を止む其働きや人の及ぶ所にあらずと而して父彌平は別に老餘の快樂なければとて豫て好む所の酒を購ひ之を隨意に與へ其他意に叶ふものは貧苦の中にも之を求めて進め一として老父の意に逆ふなければ一家和順笑語の聲を聞くのみ殊に幼女シナ本年僅かに十歲なるが悉皆炊事の勞を取り傍ら母に隨て田圃の手傳をなし更に仝年輩の遊戲等に交はらずして母の歡心を得んと勉むる抔實に父子の孝心歎賞するに餘ありと

○貞婦　愛媛縣周布郡田野村大字佐伯利太郎の女房おせい(三十七年)が身の上にぞある今は昔おせいが佐伯に嫁せし頃は同村大字田野にて「とび屋」と呼ばれ人に知られし富有の身なりしがおせいは此頃より姑めに對しては孝養を盡し亭主に對しては貞實あり忽諸にも粗忽の事なきより一際人目に留まりて良い嫁なりとの評判もありけり然るに亭主利太郎は農家に生れながら商業を好み矢鱈と手を出せし結果より失敗に失敗を重さね果ては財產の大概を蕩盡したるより此儘打捨ては一家の大事と之に少しく心を取り直ほし八九年前より右の長

野に移り住み少しの資金を投して水車業を營みさゝやかなる荒物店さへ開きしが神の冥護や盡きざりけん業運漸く開けて少しの蓄財も出來たるより利太郎も亦商賣心を起して種々と手を出し果ては正しからぬと云ふ商賣にも身を投し婦人の關係さへ出來て年に似合ぬ色氣三昧より根が多くもあらぬ蓄財も見る〳〵盡き果てゝ又もや浣ふた如き貧の神人の歯せぬと云ふ身になりぬ去れとおせいは少しも之を恨みとせず事和かに夫を諫め利害を說きて後生の爲めに少しは心を入れ替へ餘年を送り給へよかしなと諭すのみか身骨を碎きて家事の爲めに働き夫へは又も心の狂はぬ樣にと曾て深く誓ひしが某女を妾として我家に引き入れ浪風起てす暮せしが持つたか病の利太郎殿又もや同村のお何とて年まだ若き婦にかゝり合ひ血道をあげての血道におせいの心配一方ならずお何さへ家へ入るなれば家業を勵み下さるなら私に異存はないほどにも姑めとも相談の上前の妾に暇とらしてお何を入るゝ事となせしは今より三年以前のことなりける世の婦女の常として兎角あらぬ事に嫉妬を起すか多きにおせいが此優しき心には誰とて羨やまぬ者なかりける斯くて自由勝にすごす內にもおせいは一家の難儀を身に引き請けて姑への孝養亭主への貞節一日も怠たりなかりしが子なきより諸方より貰ひうけし三人の赤兒を抱きて薄き蒲團に寒氣を凌く處など見る者誰一人として潸かぬ者とそなかりしとぞ其の後家運愈々傾き二三年前水車さへ人手に渡すの仕誼となりしがおせいは今や苦中の厤境に陷り姑を始め亭主から兒迄を餓して人間らしくもなきことゝ人に笑はれんが心ならずとて愈身を粉にして漸く傾きし家運を挽回せしが夫利太郎猶ほ心を持ちかへぬよりおせいも今は餘りの事とゝ思ひしが夫に貞節を盡すが女の美德かは知らねとも今のお身持にては何時になりても家の立ち行く筈なければ辛棒も是迄に御座候云々と書置にし實家に立ち歸りしを知りては姑を始め村の者大に驚き邪のやうな嫁を歸しては神佛の前にも恥かしとて手を替へ品を替へ歸緣を賴みしにおせいにも元來夫を怨みしにあらねば心さへ入れ替ゆることとならば兎も角

とて勇ましく歸緣せしはツイ二ケ月ほど以前のことなりと

○忠臣は孝子の門に出づ

左の一編は赤穗四十七義士の一人なる大高源吾氏が亡君復讐の事に决したる當時古鄕の老母に贈りたる書翰なりと云ふ我輩は今此れを一讀して氏の孝心自から紙上に溢るゝを覺へ轉た感涙に堪へざるなり古語に曰く忠臣は孝子の門に出づと大高源吾氏其人の如きを云ふか讀者以て如何となす（語句讀難も一切原文に依る）

私事今度江戶へくだり申ぞんねん、かねても御ものがたり申上候とほり、一すぢにとの樣御いきどほりをさんじたてまつり、御家の御ちじよくをすゝぎ申たき一筋にて御座候、かつは士の道をもたて、忠の爲め命をすて、先祖の名をもあらはし申にて御座候、もちろん大勢の御家來にて御座候らへば、いかほどか御厚おんの士も御座候ところ、さしての御懇意にもあそばし下されざる、人なみの私に候はゞ、此節たいていに忠をもぞんじながらへ候て、そもじ樣御存命のあいだは、御やういく仕罷在候ても世のそしり有まじき我等にては御座候へども、なまじひに御そばちかき御奉公相つとめ、御尊顏はいし奉り、あさ夕とも今以てかたとき忘れたてまつらず、誠に大切なる御身をすてさせられ、忘れがたき御家をも思召はなれさせ候て、御うつぷんとげられ候はんと思召つめられ候相手を、御うちそんじあまつさへあさましき御ちやうがいとげられ候だん、御うんのつきられ候とは申ながら、無念至極、おそれながら其時の御心底おしはかり奉り候へば、骨にとほり候隨て、一日かたときもやすき心無御座候、されども御たんりよにて、時節と申じ、處と申し、ひとかたならぬ御ぶてうほうゆへ、天下の御いきどほり深く、御ちをきに仰付られ候事に御座候へば、力およひ申さぬこと、まつたく天下へ御うらみ申あぐべき樣無御座候義に候ゆへ、御城はしさいなくさしあげ申たる事に御座候、是れ天下にたいし奉り候て、いぎをぞんじ奉り申さぬゆへにて御座候、まかし殿樣御らんしんとも無御座、上野介殿へ御いしゆ御座候由にて、御切つけ被

成たる事に候へば、其人はまさしくかたきにて候、主人の命をすてられ候程の御いきどほり御座候かたきを、あんおんにさしおき可申樣むかしより、もろこし我てうともに、武士の道にあらぬ事にて候、それゆへさつそくかたきの方へとりかけ可申ところ、大學樣御閉門にて候へば、御めんなされ候時分、もしや殿樣御あと少々にても被仰付、上野介殿方へも、何とか品もつきて、大學樣ぐわいぶんよく、世間もあそばし候樣にも罷成候て、殿樣こそ右の通に候とも、御家はのこり申事に候はゞ、われ〳〵は出家しやもんと成るか、又は自害仕候ても、いきどほりは休め候はんと、此節までにおしき月日をもおくり候所、そのかひなく、安藝國に御座被成候閉門おゆるしと申名ばかりにて御座候、もつとも年月過ぎ候はゞ、何とぞ御世に出させられ候事も御座あるべく候はんが、よし左樣相成候ても、此節にて殿樣御あとは絶へ申たる事に御座候へば、此上前後を見合申候は、おく病の仕る所にて、武士の本意ならぬ事に御座候、此上にも天下に御訴訟申上、何とぞ相手方へ御手あても下り、大學樣にも世唱ひよく、御とりたて被遊被下候樣に、一命にかけて御なげき申あげぜひ御とりあげ無之候はゞ、その時相手かたへは取かけ可申由、しきりに相談の衆も御座候尤も一理御座候樣にも候へども、中々左樣のとたうがましき事可仕道理とぞんじ不申、その上御ねがい申あげ、御とりあげ無御座候時、相手かたへ取かゝり申候だん、ひとへに天下に御うらみ申上候にもひとしく御座候しかれば以ての外に大學樣はじめ、御一門のかた〴〵樣までも、御ためよろしからぬ事にて候ゆへ、たゞ一筋に殿樣おいきどほりをはらし奉り候より外の心無御座候、だん〳〵右申のこし候如く、武士の道をたて候て、御しゆうのあだをむくひ申までにて、まつたく天下にたいしたてまつり、御うらみ申上るにては無御座候、しかれどもいかなる思召御座候て、天下に御うらみ申上たるも同前にてわれ〳〵共の親妻子、御たゝり御座候とも、力および申さず候萬一左樣の事に成候はゞ、かねて仰せられ候通り、何分にも上よりの御下知の通り、

ゑんじやうに御かくご可被成候御はやまり候て、御身をわれと御あやまち被成候御事など、くれ〴〵も有まじき御事にて候まゝ、必ず〳〵左樣に御心得可被成候世の常の女の如くに、彼是れと御なげきの色も見えさせられ、おろかにおはしまし候はゞ、いかばかり氣の毒にて、心もひかされ候はんを、さすがに常々の御覺悟ほど御座被成候て、思召切、かへりて、けなげなる御すゝめにもあづかり候事、さて〳〵今生の仕合、未來のよろこび、何事かこれに過ぎ申候はんや、あつぱれ我々兄弟は、士のめうりにかなひ申たる儀と、淺からぬ本望にぞんじたてまつり候、さきにての首尾のほど、御心にかけさせられまじく候、私は三十一、幸右衞門二十七九十郎二十三、いづれも〳〵くつきやうの者どもにて候、たやすく本望をとげ、亡君の御心をやすめ奉り、未來ゑんまの金札のみやげにそなへ可申候まゝ、御心やすく思召、たゞ〳〵御そくさいにて、何事も時節を御まち可被成候、御よはひもいたう御かたぶき、幾ほどあるまじき御身に、さぞ御心ほそく、便もあらぬかたに、とぼしく月日を御おくりあそばし候はんとぞんじたてまつり候へば、いかばかり心うく候へども、其だん力および不申候、時にのぞみ候ては、主命をもそむき、父母をかたにかけ候て、いかなる山のおく、野の末よにげかくれ、又主君のために、父母の命をも失ない申事義と申ものゝ、止みがたきためしにて、是等の道理くらからぬそもじ樣にておはしまし候へども、筆にまかせて申のこし候九十郎母公、お千代へも、より〳〵は仰きかされ候て、必ず〳〵おろかにも悲み申さぬ樣、たがひに御力をそへさせられ候べく候さいはひに御法躰の御身に御座候へば、此後いよ〳〵以て佛のおつとめのみにて、うさもつらきも御まぎれまじく、未來の事あさくれに御忘れなく、世もおだやかに御座候はゞ、寺へもせつ〳〵御參りあそばし候べく候、ひとつは御歩行は御やうじやうにも成可申候うばにもあきらめ候樣に、よく仰られ可被下候かしこ、

元祿十五壬午年九月五日　　大高源吾

母御人樣
まん上

○宣教師配置一覽表

○東京　人口一、五三八、一三一　宗派十七
宣教師總數百五十二人ー一萬百餘に對して一人

一、合衆國長老敎會　宣敎師二十七人
二、米國リホームド敎會　仝　六人
三、蘇國長老敎會　仝　四人
四、米國新監督敎會　仝　十八人
五、英國監督敎會　仝　十九人
六、米國浸禮敎會　仝　十三人
七、米國基督敎會　仝　三人
八、組合敎會　仝　二人
九、米國美以監督敎會　仝　二十四人
十、加奈太美以美敎會　仝　十二人
十一、北米福音敎會　仝　十人
十二、普及福音敎會　仝　四人
十三、普連土敎會　仝　五人
十四、ユニテリアン　仝　三人
十五、宇宙神敎　仝　五人
十六、基督敎會　仝　七人

○大坂　人口三九六、六二〇　宗派七
宣教師總數七十一人ー人口五百五十餘に對して一人

一、合衆國長老敎會　宣敎師　七人
二、カンバルランド長老敎會　仝　十二人
三、米國新監督敎會　仝　六人
四、英國監督敎會　仝　十三人
五、米國浸禮敎會　仝　五人
六、組合敎會　仝　十一人
七、米國南美以美監督敎會　仝　五人

○京都　人口二五四、五九〇　宗派三
宣教師總數二十九人ー人口八千七百餘に對して一人

一、合衆國長老敎會　宣敎師　二人
二、英國監督敎會　仝　二人
三、組合敎會　仝　二十五人

○橫濱　人口八九、五四五　宗派八

宣教師總數三十四人ー人口二千六百餘に對して一人

一、合衆國長老教會　宣教師　三人
二、米國リホームド教會　仝　七人
三、米國女子一致傳道會社　仝　三人
四、英國監督教會　仝　二人
五、米國浸禮教會　仝　十二人
六、米國美以美監督教會　仝　二人
七、新美以教會　仝　二人
八、萬國聯合傳道會社　宣教師　三人

○長崎　人口三八、二三九　宗派三

宣教師總數二十八人ー人口一千三百餘に對して一人

一、米國リホームド教會　宣教師　九人
二、英國監督教會　仝　四人
三、米國美以美監督教會　仝　十五人

○神戸　人口八〇、四四六　宗派五

宣教師總數三十三人ー人口二千四百餘に對して一人

一、合衆國長老教會　宣教師　二人
二、合衆國南長老教會　仝　二人
三、組合教會　仝　十四人
四、萬國聯合傳道教會　仝　一人
五、米國南美以美監督教會　仝　十四人

○金澤　人口　九七、六五三　宗派二

宣教師總數十九人ー人口五千一百餘に對して一人

一、合衆國長老教會　宣教師　十五人
二、加奈太美以美教會　仝　四人

○函館　人口四五、四七七　宗派二

宣教師總數六人ー人口七千五百餘に對して一人

一、英國監督教會　宣教師　二人
二、米國美以美監督教會　仝　四人

○新潟　人口四〇、七〇八　宗派一

宣教師總數七人ー人口五千八百餘に對して一人

一、組合教會　宣教師　七人

○名古屋　人口一三一、四九二　宗派一

宣教師總數十九人ー人口六千九百餘に對して一人

一、合衆國南長老教會　宣教師　五人
二、英國監督教會　仝　二人

三、米國美以美監督教會　仝　四人
四、新美以美教會　仝　八人

○熊本　人口四四、三八四　宗派二
宣教師總數十五人—人口二百九十餘に對して一人
一、英國監督教會　宣教師　五人
二、組合教會　仝　十人

○廣島　人口八一、九一四　宗派四
宣教師總數十五人—人口五百四十餘に對して一人
一、合衆國長老教會　宣教師　五人
二、英國監督教會　仝　一人
三、米國美以美監督教會　仝　四人
四、米國南美以美監督教會　仝　五人

○靜岡　人口三六、八三八　宗派一
宣教師總數四人—人口九千五百餘に對して一人
一、加奈太美以美教會　宗教師　四人

○札幌　人口一五、〇四一　官派二
宣教師總數三人—人口五千餘に對して一人
一、合衆國長老教會　宣教師　一人
二、英國監督教會　仝　二人

○山口　人口一一、四四七　宗派二
宣教師總數八人—人口一千四百餘に對して一人
一、合衆國長老教會　宣教師　五人
二、米國南美以美監督教會　仝　三人

○山口縣長府　人口六、三二四　宗派一
宣教師總數五人—人口一千二百餘に對して一人
一、米國浸禮教會　宣教師　五人

○德島　人口五七、四五六　宗派三
宣教師總數十一人—人口五千二百餘に對して一人
一、合衆國南長老教會　宣教師　五人
二、米國監督教會　仝　一人
三、英國監督教會　仝　五人

○島根縣松江　人口三二、三八一宗派一
宣教師總數四人—人口八千三百餘に對して一人
一、英國監督教會　宣教師　四人

○岐阜　人口二三、三七七　宗派一
宣教師總數一人—人口一萬一千六百餘に對して一人

一、英國監督教會　宣教師　二人

○釧路　人口二、七七九

宣教師總數一人ー人口二千七百餘に對して一人

一、英國監督教會　宣教師　一人

○備後福山　人口一四、六六三　宗派一

宣教師總數一人ー人口一萬四千餘に對して一人

一、英國監督教會　宣教師　一人

○福島　人口九、七二一　宗派二

宣教師總數三人ー人口三千二百餘に對して一人

一、英國監督教會　宣教師　一人

二、米國美以美監督教會　仝　二人

○三重縣上野　人口一二、七八五宗派二

宣教師總數二人ー人口六千三百餘に對して一人

一、カンバルランド長老教會　宣教師　一人

二、英國監督教會　仝　一人

○和歌山　人口五四、八六八　宗派一

宣教師總數一人ー人口五萬四千餘に對して一人

一、カンバルランド長老教會　宣教師　一人

○四日市　人口一一、九三九　宗派一

宣教師總數一人ー人口一萬一千餘に對して一人

一、カンバルランド長老教會　宣教師　一人

○奈良　人口二二、六六六　宗派一

宣教師總數一人ー人口一萬一千三百餘に對して一人

一、英國監督教會　宣教師　二人

○靜岡縣三島　人口八、六九四　宗派一

宣教師總數一人ー人口八千六百餘に對して一人

一、獨立傳道者　宣教師　一人

○甲府　人口一八、四二一　宗派一

宣教師總數三人ー人口六千百餘に對して一人

一、加奈太美以美教會　宣教師　三人

○長野人口一八、二二三　宗派一

宣教師總數一人ー人口一萬八千餘に對して一人

一、加奈太美以美教會　宣教師　一人

○福井　人口三七、三七六　宗派二

宣教師總數三人ー人口一萬二千餘に對して一人

一、合衆國長老教會　宣教師　二人

二、加奈太美以美敎會　仝　一人
○米澤　人口二九、二〇三　宗派一
宣敎師總數二人ー人口一萬四千六百餘に對して一人
一、米國美以美監督敎會　宣敎師　二人
○弘前　人口二八、一七〇　宗派一
宣敎師總數一人ー人口二萬八千餘に對して一人
一、米國美以監督敎會　宣敎師　一人
○鹿兒島　人口四五、〇九七　宗派一
宣敎師總數二人ー人口二萬二千五百餘に對して一人
一、米國美以美監督敎會　宣敎師　二人
○福岡　人口一九、六六三　宗派一
宣敎師總數二人ー人口七千三百餘に對して一人
一、米國美以美監督敎會　宣敎師　二人
○松山　人口二九、四八七　宗派二
宣敎師總數四人ー人口七千三百餘に對して一人
一、組合敎會　宣敎師　二人
二、米國美以美敎會　仝　二人
○密山　人口五三、五五六　宗派一

宣敎師總數二人ー人口二萬六千七百餘に對して一人
一、合衆國長老敎會　宣敎師　二人
○千葉　人口一八、二〇〇　宗派一
宣敎師總數一人ー人口一萬八千二百餘に對して一人
一、合衆國長老敎會　宣敎師　一人
○高知　人口三〇、九八七　宗派一
宣敎師總數七人ー人口四千四百餘に對して一人
一、合衆國南長老敎會　宣敎師　七人
○岡崎　人口一二、七四二　宗派一
宣敎師總數二人ー人口六千三百餘に對して一人
一、合衆國南長老敎會　宣敎師　二人
○盛岡　人口三〇、一一六　宗派一
宣敎師總數三人ー人口一萬三百餘に對して一人
一、米國リホームド敎會　宣敎師　三人
○岡山　人口三二、九八九　宗派一
宣敎師總數七人ー人口四千七百餘に對して一人
一、組合敎會　宣敎師　七人
○仙臺　人口九一、七〇九　宗派三

宣教師總數十八人ー人口五百九十餘に對して一人

一、合衆國リホームド教會　宣教師　八人
二、米國浸禮教會　仝　五人
三、組合教會　仝　五人

○伊勢津　人口一五、八八四　宗派一
宣教師總數五人ー人口三千一百餘に對して一人

一、組合教會　宣教師　五人

○鳥取　人口二八、二七五　宗派一
宣教師總數四人ー七千三百餘に對して一人

一、組合教會　宣教師　四人

○前橋　人口一六、五八五　宗派二
宣教師總數五人ー人口三千三百餘に對して一人

一、米國新監督教會　宣教師　二人
二、組合教會　仝　三人

○根室　人口五、一九一　宗派一
宣教師總數四人ー人口一千二百餘に對して一人

一、米國浸禮教會　宣教師　四人

○下之關　人口三〇、八二五　宗派一
宣教師總數三人ー人口一萬三百餘に對して一人

一、米浸禮教會　宣教師　三人

○小倉　人口一一、五二四　宗派一
宣教師總數四人ー人口四千八百餘に對して一人

一、米國南浸禮教會　宣教師　四人

○正内　人口一九、六六六　宗派一
宣教師總數二人ー人口九千八百餘に對して一人

一、獨立傳道者　宣教師　二人

總計教師の數五百七十二人

○米國諸教派最近統計

近刊の米國浸禱教會年報によれば同會信徒の全數三百二十六萬九千六百〇六人にして昨年に比して十一萬五千五百七十九人の増加にして集金總額は一千八百八十八萬六千五百五十八弗なり○最近米國政府統計によれば同國に於ける荷蘭「リホームド」教會の信徒は九萬二千九百七十八人にして獨逸「リホームド」教會は二十四萬四千十八人なり、同統計によれば「クエーカー」の全數は十萬七千二百八人にして其中八萬六千五百五十五人は正

教派に屬し其他は「ヒクサイト」、「ウ井ルポライト」、「プリミチウ」等の諸派に分裂せしと、猶太敎徒は十三万四百九十六人あり是亦正統派及ひ改革派の二派に分かるゝと云ふ(以上二件いのち)

○英國宣敎師の勇氣

濠洲の北、赤道線に沿ふて橫たはる一大島ニユーギニヤは英、獨、蘭三國の分領する所なれ共暑氣酷烈瘴癘の氣深くして白人の住居する者極めて少なく其內地の如きは未だ充分の探撿も行き屆かず獰惡慓悍なる土蕃は常に跋扈し甚しきに至りては偶ま人を喰ふ種族もありと云ふ今より二年半計り前の事なりき英國の宣敎師にして醫術に巧みなるモンタグ氏は濠洲の主敎者の命に依り英領ニユーギニヤに布敎せんが爲め和蘭領の境界に接する地方に敎會を搆へ布敎に從事しける折柄蘭領ニユーギニヤの土蕃若干は不意に襲ひ來り宣敎師を捕へて其手足を縛し捕虜として奪ひ去れり是等の土人は最も野蠻なる者にして其過半は食人族なれば宣敎師を助けて布敎に從事したる二名の白人は多分土人の爲めに打殺されて腹中に葬られしなるべし宣敎師モンタグ氏も亦一時は同樣の運命を見んとする危險に出逢へり或日氏は樹木に縛り付けられ火把を以て其背に烙印せられたり氏の虜となりしより一年間は嚴しく幽閉せられ僅かに芭蕉又は椰子の實にて飢を凌ぎ生命を繼ぐのみにて少しも自由を得ざりしが一年を經過せしより多少自由の運動を許され或る酋長と親しく交を結ぶに至れり蓋し氏が酋長の歡心を得たるは氏の醫術に長ずるが爲めなるべし斯くて月日を經る內新嘉坡及サラワク府の宣敎師モンタグ氏よりの消息なきを訝かり英國政府に向つて軍艦を派遣せん事を請ひければ英國政府は一艘の軍艦を和蘭政府は二艘の船を派出せり船舶がニユーギニヤの海上に現はれし時氏は海岸を散步中なりしかば之を見るや否や土人をして烽火を上げしめいよ〳〵船の海岸に近つくに及んで氏は土人數名を伴ひて小舟に打乘り本船に達するや否や甲板に飛び移りしにぞ土人は驚きて海岸に逃げ去れり氏は英船にてサラワク府に送致され今や英國に向つて出發中なるが氏の土

審と同居せしは二年半なりと過日の時事新報に見へたり外國宣敎師の布敎に熱心なる死も尙ほ避けず其大膽勇氣は珍らしからぬ事ながら日本宗敎界中或は此一報を讀んで心中窃に恥ずるの人なきか

○亞弗利加大探撿家

基督敎の福音微にして其の民の耳に達せず佛陀の靈光朧にして其國の土を照さず地理學家も其地理を詳にせず博物家も其の鱗介の名を知らず人は兇猛獰悪、國は熱沙荒原人をして坤球の上斯の如き國あるやの感を起さしむる者は亞弗利加内地の狀況なり宜べなり瘴烟蠻雨に櫛浴し毒蛇猛獸と爭闘し以て此の國を探撿せしエミンパシヤ及スタンレー諸氏が皆其の聲名を一世に轟せしとをや而して此の兩氏より一層大膽にて冒險なる探撿家こそ現れたれ其の人を誰とかす曰く二十五歳の一少年ウイリアム、アストル、チヤンラー氏是なり氏は米國の人にして二十一歳の時ハアーバアード大學を卒業し他の友人が種々なる倶樂部に出入して交際社會の快味を甞め海水浴場に暑を洗ひ温泉塲に欝を散し或は倫敦の月に嘯き或は巴里の花を詠ずるとをも顧みず蹶然去て亞弗利加探撿に從事しザンヂバルの隊商と共にマセーランドニ進入しケラマンザラ山を攀ぢ荒原の露に宿し三年の星霜を瘴厲の郷に送り二年以前歐洲に歸り來り今倫敦に滯在し第二の遠征則六月上旬東海岸のウイラランド港より暗黒世界探撿の爲め發する遠征の準備中なり去月中旬某新聞通信者は氏が遠征の順序を聞かむがため氏に面會して之に尋ねたるに氏は其の人に答て曰ふ余が亞弗利加より歐洲に歸りてより爰に二年なり二年の日子短きにあらずと雖も成可く準備を完全になさむと欲したれば亦敢て長きを感ぜざりき若し此の準備を過るときは不名譽と責任は直に余が頭上に落下し來るを思へばなり而して今や輕氣球を除くの外其他の準備は整頓したれば我が一行は六月上旬東亞弗利加の隊商となりてウイラランド港より亞弗利加内地に進入しモントキニア山の北部に入り是より沙漠的隊商となりルドルフ湖及ルドルフ湖と東海岸の間に散布せる名も知らぬ諸湖の間を探撿する筈なり且我が一

行は易搬解舟多分の鐵線及完全なる雲梯を携帶すべし是れ湖中の諸島を探撿し或は道程を遮斷する諸川に假橋を架し或は諸高山特にモントキニア山を攀躋するの用に供する者なり而して此一行の隊商の外一箇の白人余に伴ふ筈なり其の人は海軍中尉ホヂル氏なり氏は墺匈國の有名なる海軍々人にして嘗てテルキー伯に從ひ亞弗利加内地に進入し最も愉快に最も有益なる紀行を著したることあり今回我が一行に伴ひて遠征を試むる所以は單に地理學及動植物學を研究せむとするにあれば余に取りて蓋し無上の好友ならむ

我が一行はウイラランド港より内地に入りタナ河に沿ひてモントキニア山に達する筈なり而してモントキニア山に達せる時は二三周間此の地に滯在して充分に仝山を探撿すべし蓋し此山はテルキー伯ホヂー氏の一行が三角測量に依て海上を抜くこと凡そ一萬八千呎ならんとの測量をなせしに過ぎずして最も世人の知らざる高山なればなり而して此山の北方なる沙漠地方に至りては我々は駱駝を利用し努めて一行の勢力を休養することを計るべし若し此の注意を怠るときはテルキー伯が蒙りたるが如き不幸に逢遇し水の不足なるより病氣に罹りて數十人を失ふに至るべし斯くしてルドルフ湖の南端に達するを得ば我々は充分に此の大湖を探撿し彼の易搬解舟を浮べて湖中諸島嶼を視察すべし又余は中尉ホヂール氏と共に、ニアナム河を探撿すべし此の河は源をアビシニアの某山より發せる者なり斯の如くモントケラア山及ルドルフ湖の北部なるモール地方を視察せし後更に隊商となり東方に進みステフエニー湖に至りて暫時滯留し夫より東北に進みてチユバ河に達する筈なり此の河は闇黑世界中最も闇黑の部分を流るゝ者にして單に此河の探撿のみとするも地理學上に益する所あるべし况して同地方にはアルバアート、ナイアンザ湖よりも大なる湖水あり數個の噴火山ありとのことなれば之を探撿するに於ては必ず地理學に大益を與ふるや必せりされば我々は充分に此の地方を視察し而してチユバ河流に沿ひて海岸に出てラムの海岸に傍ひて歸途に就く者にして二年間に三千五百哩の山河を跋渉す

る筈なり而して其の成不成は天なりラスボリー公リポール氏ゼームス氏の如く失敗するか又ボンダルヂツクソ男の如く骨を荒原の露に曝し萬世不祀の鬼となるか逆め之を今日に豫言する能はずと雖も余は充分成功の希望を有する者なり云々と毎日新聞に見へたり

○曹洞宗兩本山分離の由來

近年佛敎社會に種々の紛擾を醸し先きには日蓮宗管長の撰定に於ける又眞宗財政の事に於ける今又曹洞宗兩本山分離事件の如き佛敎社會の事態甚だ容易ならず我輩日本宗敎社會の爲め切に之れを憂ふる者なり今左に掲くる一編は曹洞宗兩本山分離事件の由來なりと云ふ其要を得たるもの丶如し山形日報に某氏より寄せられたるものなり爰に轉載して(宗敎)讀者の參考に供す這回同宗兩本山分離非分離の紛爭に關する事情は各新聞紙とも多少記載せざるはなき有樣なるが何れも概畧にして要詳を得す又は粗漏にして事實を誤るの憾なき能はす依て前來諸新聞の記事と幾分か重複の點なき能はざるも其の現時の形勢を詳悉せんか爲め些か既往の經歴及び其の原因の存するところを左に述へん

元來此の兩本山分離獨立の原因と云ふは同宗に越前の國永平寺と能登國總持寺との兩本山ありて互ひに紛爭軋轢解けざることとは世人の知る處なるが畢竟如何なる原因に依りて何時の頃より此の紛爭軋轢を生じたるやと云ふに今を距る幾んと三百六十年即ち天文の頃より始めて此の紛爭を釀生し當時より今年今回の紛爭に至るまで前後實に八回の多きに及べり而して其の長きは一回の紛爭首尾十二年に涉り其の短きに於ても三四年を消費せざるはなきの慘境を呈せり斯く永平總持の二大本山が動もすれば紛爭を生じ軋轢を釀して性懲りもなく底止せざるは畢竟兩本山が互に資格權限を爭て互に相讓らざるにあり然らば兩本山が互に資格權限を爭て止まざるの理由如何と云ふに是れ兩本山共に其の開闢の由緒來歷即ち本山の本山たる性格に就て共に對立牾角のものなればなり

今先づ永平寺の方より云はんに同寺は元と曹洞宗を日本に傳來せし道元禪師の開闢地にして云はゞ一宗根基の道場なり依て此の一事に就ては誇れも同寺が一宗大本山たるに異論なきなり而して總持寺に至りては右道元禪師四世の法孫なる瑩山禪師の開闢に係れば此の一事に就ては開闢の前後法系の本末自ら總持寺は永平寺の次位にあらざるべからず

然るに總持寺が斯る前後本末の差あるにも拘らず其の

元亨開闢の昔時より五百數十年を閲するの今日に至るまで嚴然大本山の性格及ひ實力を保全して更に一歩も彼の先開根基の道場たる永平寺に讓らざるものは抑も理由あり同寺は永平寺より後れて開かれたること斯の如く其の方系の次第も斯くの如くなりと雖も同寺の開闢あると共に時の聖主後醍醐天皇深く瑩山禪師を歸崇したまひ十種の勅問に於ける奏對の叡感を動かし奉りしより更に進て勅願所と爲り尋て後村上、後陽成、後奈良、後光明の四帝より優渥なる綸旨を賜り殊に其の最初後醍醐天皇の詔勅に於ては勿體なくも日域無雙の禪苑曹洞出世の道場と云へる綸言あり且總持寺は南禪(臨濟宗五山の上席)第一の上刹に相並ぶの格式を定めさせられたれば此點に於ては彼永平寺の如は先開根基の道場と云と雖其本山職としての資格權限は素より遠く總持寺に及ぶべくもあらず加旃總持寺は後醍醐帝以下五朝天皇の詔勅に基ける本山職の由緒あると共に其宗門に於る寺院法孫の彌漫に於ても全國同宗寺一萬四千箇寺の中總持寺の門末は實に壹萬二千餘の多數を有し永平寺の門末は僅々二千に過ず而て總持寺は其開闢の當初より嚴然出世の道場一宗の本山職たる旗幟を飜して以て全宗門に臨たれども之に反して永平寺に在ては其の開祖の遺訓に依り唯だ山居辨道の地として出世の地と爲し本山職たる榮を荷ふが如きは堅く忌避する所たりしが故に總持寺開闢の時代の如きは永平寺は實に徹々たる山間の一小院たるに過ぎざりしなり爾來彼の慶長元和の頃德川政府起りて天下各宗門に干渉の政略を取るに至るまで兩本山互ひに分離別立して相關係せざりしかど德川政府の干渉に依りて玆に始めて兩派混亂の弊源を開き隨て天文元龜天正の頃に於ける紛爭の淵源をして益々其の餘流の洋汪を促がさしめたり玆を以て永平寺の企望は其先開根基の道場たりと云る唯一の辭柄に依りて他の總持寺と併立犄角に居るを喜ばす總持寺を壓倒滅亡し以て宗門に獨一總本山たらんと欲し總持寺は數朝天皇の由緒と永平寺に幾んど十倍せる門末寺院の實力とに依りて永平寺の下風に立つを屑とせす若し永平寺にして我れを壓倒滅亡せんとするの野心を斷たさるに於ては其の由緒と實力とに依りて斷然分離獨立し以て患害を後世に遺さゝることに努めざるべからずと云ふにあり是れ同宗兩本山が三百六十年來前後八回の大紛爭を生じたる理由及び情勢の概畧なるものなり

兩本山の紛爭は實に斯くの如きの理勢を存す曩に明治

五年大藏省の演達に基き互に協和盟約を締結して兩本山併立制度の端を開き交番管長協同宗制の規を定めたれども徒らに明文上の協和親睦は以て實地上の和合統一を望むべからず彼の協和盟約など云へる明文上協同牾角の勢力も僅々數年を出でざる中に早くも內部實際上に破綻を生じて偏輕偏重優勝劣敗の悲境を現出するに至りたり近來同宗內に喧囂せる曹洞宗改進方案又は一管長兩本山併有制度の目論見など云へる者總て永平寺黨の私曲頗偏より案出せられたる者にして彼の扶宗會兼中會などへる各種の團體は皆此必要に依て起りたるにあらざるはなし茲を以て扶宗會に對しては有志會兼中會に對しては地方及び東京の兩同盟會崛起して彼れと對抗紛爭し以て其猛威猖獗を恣にするを得ざらしむ然れども兩者の軋轢葛藤は日に月に太だしきを加へ宗門終に安寧平和に歸するの望なからんとす此時に當り本年二月の頃勃如として宗內に現出せしものを能山獨立曹洞革新同盟會と云へる一團體と爲す是れ即ち總持寺黨の結合運動せるものにして實に這回に於ける兩本山分離事件の原動力と爲りたるものなり

茲に於て總持寺の直ちに此分離獨立の擧を容認して自ら其旗幟を翻し且猛威の勢力ある各地方同盟會鐵石の志誠ある東京府同盟會も直ちに之に賛同して公私東西皆な此方面に向て運行するの時に際し又茲に永平寺黨の主唱する非分離同志會の如きもの起りて其勢力を頡頏し以て他の各種の分離派に當らんと欲すれども素より敵し得べくもあらず此際に當りて更に他の方面に於ては他の分離非分離の兩派に偏せす中立局外の地位にありと云ふの一小團體生産せしと雖ども是れ又た其勢力微弱にして何程の事をも爲す能はす且其の主唱する所の頗ぶる曖昧模稜なるが爲めか他の之を歯牙に懸くる者すら少なるの有様を免れず

然るに他の一方なる分離派即ち總持寺黨に於ては其本山は全國壹萬數千の末派寺院に令達して金城鐵壁に其志氣を皷舞し其事業の原動者なる革新會は是又全國總持寺末派寺院一般に檄して同意賛成を要求し且地方東京の同盟會は外部より之を應援して益す其猛勢を張らんと欲す既往に於ける分離派の勢力は實に旭日東天に輝くの現象を呈したり

此際に當りて更に眼を一轉して政府と同宗の公務との間に於ける形勢如何を觀察すれば先づ其劈頭に於て管長畔上楳仙師(總持寺貫首)に對する曹洞宗管長認可の解除を爲し之と同時に西有穆山森田悟由の二師に事務取扱を命じたれども西有師は病の故を以て之を辭し其後任は原坦山師に命せられたり然るに森田師は西有師既に辭職の後原師未だ就任せざるの間に於て專斷不法なる諸達書を發したれば總持寺及び其の末派分離派の憤激する所と爲り總持寺に於ては事務取扱が斯くまで專斷不法の處置を以て總持寺を蔑侮し本山貫首の大權を侵害するの行爲に渉る以上は彼れ如何に兩山併立制度を標準として總持寺執事に宗務從事を要求し事務引

績を要求するも決して之に應ずるの義務を有せず且事務取扱の處置既に斯くの如くなる以上は愈よ以て分離獨立の必要急速を感ずるとて夫々強硬政畧の運動を初め其末流に於ける分離派の寺院僧侶幷に檀家信徒も皆な之を喜びて總持寺の決心運動斯くの如く男々しき以上は我等焉んぞ憤發精勵して此の千古の大事業を翼賛せざるの理あらんやと云へる如き勢にて現時愈よ其運動を激成し居れり

以上は曹洞宗兩本山分離事件に關する來歷及び現時の形勢に於ける概要を示せるものなり若し此概要に就て其他を推測せば同事件の來歷及び趨勢か如何なるものなるやを窺知するを得ん

○帝國女學校

今度日本橋區藥研堀町二十二番地に設立したる帝國女學校は贊田剛橋前川太郎氏等の創業に係るものにて其目的は力めて時流の女子教育を避け優美淑德なる日本婦人を養成するにあるよし僅かに去る一日の開校にして日尚ほ淺く其實況如何は未だ知るに由なしと云へども校長教頭幷に內外の諸教員何れも其人を得たりと云へば追々盛大に赴くことゝなるべし

○宗教公論

本願寺文學寮長藤島了穩氏と教頭中西牛郎氏及び生徒等の間に於ける感情の兎角和せずして穩ならざるよし兼て聞き及ぶ所なりしが去月廿九日宗教公論が突然號外を發して右に關する事情の顚末を記し以て輿論に訴ふる所に依れば是非曲直自ら判然たるが如し遺憾ながら今爰に餘白なければ其詳細を記して我(宗教)の讀者に紹介する能はず乞ふ讀者事の委細を知らんと欲せば右號外を一讀すべし

彙　報

○藥研堀教會の景況

藥研堀教會は追々好景況となり日曜日參集者も先月中よりは稍增加の方にて午前の說教には十五六名午後七時よりの演說には殆ど滿堂の來聽者あり又堂外にありて立聽するものも少からず殊に喜ぶべきは日本橋區內の有力家と稱せらるゝ人々より非常の寬待を受くる樣になりて多くの望みある傳道者を生ずるに至りたるとなり又兼て贊田、前川兩氏の計畫中なりし女學校も既に萬端の用意整ひて愈去る一日より授業を始むるの運びに至れり其校規概畧は廣告欄內に揭くるが如し尤も暑中休科も既に近きにあるを以て開校式は來期の授業始と共に擧行する手筈なりと云ふ、

○日本ユニテリアン協會役員補欠撰擧其他數件

去月五日日本ユニテリアン第一協會の小會を開き役員補欠撰擧を行ふに古莊氏幹事に當撰したるも辭せらる暫時幹事を置かざることゝし書記の撰擧を行ふ再ひ同氏當撰す、氏は之を諾せられたる由なり又協會には是非教師なかる可ざるを以て協會員各々教師招聘の勞をとることゝなせり。又日曜の說教暫時內外の有志家に托することゝしたり、又毎日曜日集合も好都合にして入會申込人も次第に其數を加たる由なり。又同協會にては暑中休暇を爲さす說教又は研究會を必す毎日曜日午前十時より開會すると云ふ

宗教　第拾號（明治廿五年八月五日）

社說

米國ユニテリアン聯合年會

近頃米國ボストンに於て開きしユニテリアン教徒の聯合年會に提出したる同會報告書の一班を今此紙上に扱錄して同國ユ教の有様を我（宗教）讀者の高覽に供する蓋し無益にあらざるべし

光陰は矢の如しと云ふ諺の如く我が宗友なる故ドクトル、チャンニング氏の死後今は既に五十年の星霜を經過したり回顧すれば當時自由宗派聯合組織の事に就き氏の熱心なる盡力は其功果して空しからず我ユニテリアンの名稱を冠したる二百ヶ所の教會を氏は其生前に見るを得たり（其教會の多分は我太西洋の沿岸にあり）然る處稍々後年に至りてユ教の狀態敢て退歩と云ふべきにはあらずと云へども之れを氏の生前に比して觀察すれば其外部の形勢殆んど中止の姿を呈したる即ち千八百四十二年乃至同六十五年の間に於ける大切なる此時限の實相を注意して能く之れを吟味する者なく世人の動もすれば輕々に看過して深く之れを究めざるは竊に我輩の遺憾とする所なり今記錄の示す所に依れば千八百二十五年より同四十二年に至る迄設立せられし我教會の數は恰も二百五十ヶ所の多きにも拘はらず之れに次ぐ二十三年間は殆んど一教會の增加だも見る能はざりしは如何にも不思議千萬にして唯其進歩の中止と云ふの外なきが如し、なれども之れ所謂外形進歩の中止にして深く之れを究めて竊に裏面より內部の實相を窺ふときは啻に其運動の停滯せざりしのみならず大に進歩の實効を奏し從來一定の信條に拘泥して唯だ熱心に之れを守り其理由の如何を究めざりし彼の神學熱も此時限に於て稍々其熱度を冷却し往々迷信の弊を悟り高坐の說法に不理由の信條を打破するに至りし如き蓋し其一例として見るを得べし又所說紛々數派に分れて決せざりし各種の問題も多く此時限に於て定められ稍々一致の躰面を得たるに拘はらず其外部の形勢は如何

にも不活潑の姿なりしを以て一見或は其運動を止めたるが如きの觀ありしと云へども裏面の實相は決して然らざりしを知るべし

斯くの如くにして千八百六十五年彼の記臆すべき米國內亂の時に當り我ユニテリアン敎は又一種の刺衝を蒙り大に其活動を促されたり其主動者はドクトル、ベルロー氏にして氏は能く辯論の術に長じ又兼て社交の才に乏しからずして之れを前記チ氏に比すれば更に一致と自由の方針を以て又更に一層の力を用ゐて時論を說破し能く民心を收めたり當時氏と共に宗敎界に奔走して其運動を共にせざりし所の諸氏に在ては勿論、此時限に際して我ユニテリアン敎の一團が如何なる變化を受けたりしや其之れに注意する所自から薄きを以て又何等の所存なかるべしと云へども其共に運動したる人々にても窃かに當時の有樣を回想すれば今昔境遇の異なる心中漠として恰も別天地の如し即ち名は一派のユニテリアン敎徒にてありながら實は別派の如く其敎徒個々別々に別れて運動し思ひ〳〵に方針を執りたるを以て同敎徒の間に懇親の情なく結合の力に乏しき事濱の眞砂の如き當時の有樣より次第〳〵に進步して今は其苦樂利害を共にし我ユ敎の高尙なる目的を達せんが爲めには各敎徒皆戮力協心して毫も辭する所なく其目的を達するに害あらんと思ふ事は如何なる事にても共に之れを戒め其之れに利あらんと思ふ事は如何なる事にても共に之を務めさるはなし隨て懇親の情も加はり結合の力も增し今はユ敎全躰の面目固より昔日の日にあらず、一見或は其進步誠に遲々たるが如しと云へども着々步を進めて止まず其一たび占め得たるの地步は容易に退ぞく事なきを以て之れを彼の輕進して一時に其盛況を呈するものに比すれば確實にして且つ信ずる所更に深きを知るべし抑も我ユニテリアン敎は固と是れ自由一派の宗旨にして其信せざる所を强て信ぜしむる事なく自由に敎義の討議を許し其信否一に各人の自由に一任するものなり此は今茲に多辨を要せざる事ならんと雖とも蓋し人に自由と云ふ者あればこそ又一致と云ふ事もあり自由なくして一致を得んとするは固よ

り無望の望と知るべし或は時に自由なくして一致の姿を呈する事なきにしもあらざるべしと云へども其姿は眞に一時の假相にして心實の一致たるを得ず自由と一致の相須て離るべからざる其證據は從來既に政治社會に於て證せられたる事實にして世人の能く知る所ならんが之れ唯だ政治界に然るのみならず宗教界に於ても倘又斯くの如く二者の決して離るべからざること勿論なり

偖て前記の如くドクトル、ベルロー氏が我ユニテリアン教に對して熱心の盡力ありし其結果としてチヤンニング氏に續て第二の刺衝をユ教の全體に與へ其運動を促したり而して此運動は如何なる局を結びて其成果の利害は如何ん此運動は我ユニテリアン教の進歩を利したるか、將た害したるか、又其力を増したるか、將た減したるか、之れを知らんと欲せば乞ふ活目して社會の一端を觀よ、今の時に當て一種の宗派として世に現はれ苟くも其宗義を擴張して自由に活潑の運動をなさんには茲に一つの欠くべからざる者あり即ち氏の盡力に依て促されたる其運動の成果は此欠くべからざる要件を成立せしめたり之れを何と云ふ曰く中央聯合協會之れなり其影響の及ぼす所直接或は間接に我ユニテリアン教の進歩を促し其之れを奬勵したる利益の著大なる事想像の及ふ所にあらず加之ならず又彼の近隣の各教會を聯合して其懇親を結び宗教心を奬勵して布教事業に至大の便益を與ふる地方聯合會の如きもベ氏の盡力に依て其運動を勵ましたればこそ之れが成立を見るを得べきも若し之れなかりせば蓋し或は其全きを得るに至らざるべし又今日各地方に存在するユニテリアン倶樂部の如きも其成立はベ氏功德の結果に歸せざるを得ず如何となれば米國内亂の終りに當り我人民の間に新しき信仰と熱心を喚び起して之れを奬勵したるベ氏の如き其人を得るにあらざりせば決して其成功を見る能はざればなり蓋し此倶樂部の効益たる有形并に無形に關する諸種の問題に就き恰も其中心となり我輩に向て之れが考究上に至要の便利を與へ常に其得る所少なからずと云へども今其細論を擱き兎に角ベ氏の熱心なる

盡力に由り我ユニテリアン敎が刺衝せられたる其結果は大略斯くの如し此時代を稱してユ敎の再興時代と云ふて可ならん

更に眼を轉じて其之れより出來したる實行上の計畫如何と觀察すれば又大に述ぶべきものあり彼の宗用建築物の事は年一年より其必要を感ずるに至り僅々數年の間にケンブリッヂ神學校の寄附金中其のユニテリアンに屬するもの十三萬弗の多きに達せり今我輩の見込にでは自今十二ヶ月を出でずして十五萬弗に上る事蓋し難からざるを信ず又敎會建築債の如きも既に十萬弗の多きに達し近年新たにユ敎徒となりたる數多の人々は此財本の補助に由り各々其適當なる敎會を新築して自から基礎の難きを覺ふるに至れり偖又宗敎家の本務たる布敎の一法として常に出版する論文の配布は此再興の時代に於て如何なる實況なりしやと云ふに是又最も著しき結果を呈せり今を去る三十六七年以前即ち千八百四十二年と同六十五年の間に於ける其配布の數は僅に五千部に止まり唯だ時に祝意を表するの擧たるに過ぎざりしと云へとも今は其數凡六十倍に達し則ち三十萬部に下らざる多くの論文を配布するに至れり又敎會擴張の有樣を觀察するに此再興時代の以前に於ては其簿冊に登錄するもの一年僅かに一敎會を加ふるか加へざるの間にありしと云へども今は一年數個の增加を見るに至れり蓋し次年の統計表は千八百六十五年に於ける二百六十の敎會を增進して少なくとも四百六十の計數を我輩の目前に示すこととならん又玆に特書すべき一事ありそは從來他敎に於ては北米印度人の爲め力を盡して之れを文明に誘導せんと務めたるに拘はらず獨り我敎派は之れを傍觀して更に盡す所なかりしは多年の間我輩の遺憾とせし所なれども今や其本望を達して設立したるモンタナーの學校は彼等印度上流社會の爲めに尊重せられ同種族に普通の敎育を授け文明の技術を敎へて之れを益する所少なからざる事是なり是れ我輩の大に滿足する所にして又日本に傳道の事に就ては最初人々の大に掛念する所なりしと云へども今は全く其掛念も散じ我人民は同國傳道の必要にして其好結果あ

るべきを信ずるに至れり今や同國に於ける若干の信徒は漸時に成長して將さに組織的の運動を爲さんとするの傾向を呈したれば日本人民自から其教會を建立して自ら傳導の務に當り其費用の如きも未だ全く自費を以て成立する能はざるも又大に自立の氣運に達する蓋し遠きにあらざるべし偖て斯くの如くにして最近廿七年間に於ける我ユニテリアン教の經歷を顧みれば何れの點より見るも其經歷は希望と快樂とを以て滿されたるを見るべし左れば將來ユニテリアン教の歷史を書かんと欲するものは必ず欣然として筆を此時限に勞する事ならん又ドクトル、チヤンニング氏及び氏と同代の人々を以て宗教生活の大源なりとするも其之を實にしたるは實にドクトル、ベルロー氏一派の人々なりしを知るに至らん今我輩は是れ等過去の瀏覽より眼を現在の事實に轉じて一言せん

抑も當十九世紀の過半は恰もユニテリアン教再興の時代にして今尙ほ我輩は其時代の內に在りとの次第は何人も異議なき事實なるべし例へば玆に一種の凝結物ありて過去五十年以前改言すれば當世紀の上半紀に於ては固定して化すべからざりし其物躰も今は漸く鎔解して漂流殆んど歸着する所を知らざとせば即ち宗教に於ける其現狀は斯くの如し人多くは迷信の弊を悟り其從來の固執を抛擲したるも未だ之が代用物を得ずして其守る所を知らず又或は其一度信ぜし所の者は飽く迄之を守て改むるを知らざるにあらず其信條を修正する事の止み難きは心中竊かに認むる所なるべしと雖も恰も神聖なりと信じて久しく奉じ來りし所のものを一朝削除するは何んとなく心に安んぜずして斷行する能はざる者も亦多く之れ有らん併しながら斯くの如きは決して宗教界の健康躰にあらざるべし夫れ人は神の意思に依て創造せられしものなり苟も人として宗教上の信仰及び希望の外に立たんとし或は眞理を信ぜず聖典の探究を以て神意に戻るとなすが如きは迷ひの甚しきものなりと云はざるを得ず是に於てか我輩は二大希望を有す今之を一言すれば曰く其一は古き禮拜堂より數多の迷者を救ひ來つて彼等に正しき信仰を與ふる事曰く其

二は元來我輩と着眼の點を異にし又其本質自から同じからざる所の者をも亦之れを補助する事是なり若し我輩が茲に寛大なる度量を以て自然界及び精神界を達觀し同時に過去を顧りみ將來を察する時は凡そ人類の安全は唯だ至眞と道理の導く所に從て生活するにありとの次第を確信し敢て彼等迷信者の前に明言するを得べし云々

今我輩は右の報告を一讀してユニテリアン教の信仰即ち自由宗教の聯合を此世界に擴張して普く人類に其功德を與へんとの望みを有する該報告者の熱心自から紙上に溢るゝを觀て轉た感嘆の至りに堪へず我輩は確信す今や米國に於てユ教に一段の進歩を開き其一新期限に接する事蓋し遠きにあらざるべきを信ずると同時に日本に於ても又此自由宗教の益々成長して速かに其普ねからんこと切に望む所なり

論　林

宗教の本領と宗教家の覺悟

土　谷　忠　治

其の學の科學たり哲學たるとを問はず、一個の學問と稱するに於ては、必ず其の講究と應行とは、常に密接して離るべからざると車の兩輪に於けるが如し、若し其の一を缺かば、圓滑の活動を爲さゞるのみならず、其の用を爲し能はざるや知るべし、總ての學術皆然り、殊に宗教なるものは、之れを一個の學問として、教理を講究するに於ては、其の深遠にして困難なる、科學上の講究に勝るとも決して劣らざるなり、然れども宗教なるものは如何に困苦して之れを講究ずるも、之れを論究する而已に於ては、決して其の眞價を知るべからず、實に宗教の眞價は之れを應用するに於て顯著なるのみ。今日は宗教界の慌廢なり、衰頽の極なり、今日の宗教家たるものは、皆其の理論として講究し、甲論乙駁するに止まりて、未た其の應用を知らざるものゝ如し、爲に、因て生ずる處の結果、他宗他派を嫌忌して、遂に相反目視するに至る、宗教の衰頽も是に至

りて極まれりと云はざる可らず、世の宗敎家を以て自ら任ずる者、以て得たりと爲し快となすか、之れを良心に問うて疚しき所なきか、已矣哉々々、宗敎家の心は既に腐敗せり、余儕如何に之れに向て大聲疾呼するも、其の理論熱の冷却せざるに於ては、馬耳東風、余儕の深意を解する能はざるを恐るゝなり、余儕今に當て此の過激の語を弄す、宗敎家の唾棄する所にして、之れを口にする余儕も亦潔とせざる所なりと雖ども、余儕をして此の言を吐くの餘義なきに至らしめたるもの、抑も誰の罪ぞ、諸君請ふ之れを自身に問へ。

夫れ宗敎なるものゝ本領は、自己を救ひ他人を濟し、自己を汰し社會を化し、自身を愛するが如く汝の隣人を愛し、汝の隣人を愛するが如く公衆を愛し、實踐窮行以て人に及ぼし、自他萬物を苦界より救ひ出すにはあらざるなきか、抑も是等の本領は、理論の講究に因て得べきか、理論の講究素より貴ぶべし、然れども理論の講究は、中等以上の敎育を受くる者に取りては、大に利益を與ふべしと雖も、決して之を以て中以下の人民寧ろ世界多數の人民を救濟し能はざるなり、自己を救ひ社會を救ふは、之を世上に實行するにあるのみ、然るに今日は之に反し、敎理の研究を以て宗敎家の本務と存す、之れ余儕の解せざる處故に余儕常に思ふ、偶像信者は、諸君の常に之れを賤視するにも關はらず、眞に宗敎の本領を得たるものなりと、未開の宗敎家は以て宗敎家と爲すに足るべきものなり、今の宗敎家は反て職務を盡さゞるの賊なり、宗敎家の假面を裝うて以て、自己の偏見を貫徹せんとする而已、宗敎を踏臺となして以て、自己の地位を高めんとする而已、世は澆季となりぬ、予れ之れを奈何せん、予漁父辭を讀みて之れを解するに苦むや久し矣、今や此の文を草するに至りて、始めて其の意の存する處を知る、其「屈原曰、擧世皆濁、我獨清、衆人皆醉、我獨醒、是以見放」云々「滄浪之水清兮、可以濯吾纓、滄浪之水濁兮、可以濯吾足、遂去不復與言」と云ふに至りては、余儕復何をか云はんや、余儕固より屈原に比すべからず、又

彼と吾とは其の境遇を異にすと雖も、亦大に其の意を得たるものなきにあらず、吾が親愛なる讀者も、定めて予と感を同うするとは、斷じて疑はざる所なり、世の賢名なる諸君、幸に宗教の眞價本領を得ることに注意せよ。終に望みて余儕は、吾が尊信するユニテリアン教會に向て、大に期望なき能はず、幸に教會員の容るゝ所となるや否、抑もユニテリアン教會の運動たる、從來の經歷に因りて徵するに、大に余儕の見解に相反するが如し、教會員以て如何となすか、論者或は云はん、或る一派の宗教家は、常に自己の信者を募らんが爲之れ汲々として、遂に教理の如何を究むるに遑なく、其の弊や遂に固信迷信に陷りて、又救ふべからざるに至る、故を以て吾が科學的宗教を組織する所以なりと、ユニテリアンの創始、發生夫れ或は然らん、然りと雖も、宗教にして若し斯くの如きものならしめば、寧ろ宗教なきに如かざるなり、教理の如何素より貴ぶべし、之れを信ずるに因りて生ずる利害は、實に教理の利害と相比例するものなり、今日は妄信の時代にあらず講究の時代なり、余儕のユニテリアン教と同意なる亦時世の然らしむる所なり、とは云へ若しユニテリアンにして智力上に訴へてのみ講究すべきものとせば、決して宗教にあらずして、哲學なり、其の哲學にあらずして、宗教たるの所以は、智力と感情との最高最大の調和を得て、廣く之を衆生に及ぼすに在り、故に余儕の殊にユニテリアン教に向て望む所のものは、智力に傾かず感情に偏せず、教理の講究に黨せず實行に組みせず、常に均齊調和を得て以て、宗教の眞價を顯著ならしめんとに存するなり。

宗教の本領夫れ斯くの如し、今より一歩を進めて宗教家の覺悟に論及せんとす、世の宗教家たるもの、殊に牧師を以て自ら任ずる者は、大に猛省せざるべからざるなり、宗教の本領に從ふて運動せんと欲する者は、常に博愛主義を以て立ち、常に救世主義を以て處し、常に自他の區分を自己の心頭より放出して、佛者の所謂、慧日諸の闇を破り、眞を採り非を棄て、正を用ひ邪を去り、心常に眞如の月を眺め、神の默示を承順す

るを得て、之れを自他に履行するに在り、人を責めんと欲する者は、先つ己を責め、人を導かんと欲する者は、先つ己を導かざる可らず、之れ古來人の師表たるの難事とする所なり、世の宗教家として、人の模範たらんと欲する者は、須らく堅忍不抜、敢爲勇奮、直言直行、己れの信ずる所之れ標準として、威武に逢ふて屈せず、權勢を見て避けず、一定の方向に向て進まざる可らず、若し然らざれば、汝の欲する所の彼岸に達し、佛者の所普門化益、念聖解脱の實を擧ぐ可らざるや明かなり、夫れ然り、然りと雖も、堅忍不抜、直言直行の結果、遂に流れて、他宗他派に眞理の存するを知るも、感情の向ふ所之れを容るゝに吝にして、即ち固信に陷り、偏頗心の向ふ所講究の自由を妨ぐるに至る、之れ吾儕の宗教家の爲に常に惜む所なり、若し宗教家にして然らずとし、講究の自由を取らんか、必ずや其の信仰心は、堅忍不抜、直言直行、奮進して其の自己の心を、國土衆生に及ぼすを得ざるのみならず、之れに響導せらるゝの國土衆生も、亦一定の信仰を捧ぐるに所なく、今は右し翌は左するの迷路に陷り、其の適當なる所に苦ましむるに至る、之れ其の自己の堅忍確信の力、薄弱なるに基せずんばあらず。

世上總ての事業、其の責任の重大なるだけ夫れ丈け困難にして、事を成す困難なる丈け夫れ丈功果も亦偉大なり、宗教の功徳甚だ大なり、故に其事を成す難且つ澁なり、布教は夫れ斯の如く困難なり、故に其の責任も亦重大なりと云はざる可からず、今日宗教と密接の關係を有し互に相俟て成功を奏すべき、教育家道德家等の、反りて宗教家を敵視するは、夫れ何の故ぞ、一は堅忍確信の極、頑陋に陷り、一は教理の講究之れ事とし、浮萍轉蓬、一定の信仰を有するなきに因らずんばあらざるなり、吾が「宗教」讀者は、果して其の中庸を得て以て、教育と道德等と相一致して、相扶助し、以て大に爲す所あらんとするの勇氣あるか、「宗教」は固より天下の宗教を以て立つものなり、佛者素より吾が黨、耶教亦吾が友なり、敢て相反目視すべきにあらず、唯甲の短を棄てゝ乙の長を採り、丙の長を以て乙

の短を補はんとするにあり、故を以て「宗教」の讀者は、人を容るゝの大量なかる可らず、ユニテリアン信者は、過を改むるに吝なる可らず、「宗教」讀者果して此の度量あるや否、ユニテリアン信者果して此の達識あるや否。

女子教育論

菊池武德

教育の趨勢我が社會を動かしてより、其功績の偉大なるものあると共に其弊害も亦甚だ少なからず、殊に西洋流の教育法を假て俄に適用せしとなれば、或は其過度なる點に於て、或は經濟の點に於て、或は德を養ふの點に於て、往々過不及を免れざりしもの亦止むを得ざるとと云ふ可し。

蓋し教育は人の智德を發達せしむるものなれば、社會人類の進歩の爲めに其ます〳〵高尙完美ならんことこそ願はしけれども、社會の進歩は有形と無形と相俟て平行するに非ざれば不可なるが故に、徒に教育を高尙にして無形の進歩を急ぎたればとて、啻に功なきのみか却て言ふ可らざるの慘害を流すことなしとせず、喩へば猶ほ劍と鞘との如し、社會は鞘にして人心は即ち劍なれば、劍の大、鞘の小と連れ合はざるときは、鞘は必らず破損するを免れざる可し、人或は教育に法外の重きを置きて曰く、社會は人の集合躰なり、人にして進まば社會も亦隨て進むべし、故に教育は人を進むると共に又社會を進むるものなりと、是れ教育を以て萬能力を有するものと認むるの論なれども、社會の實際は獨り教育の力によりて進歩せざるを奈何せんや、教育なるものは社會の進歩の爲めに欠く可らざるの要具なりと雖も、未だ全然社會を搆成すると能はざるなり、社會の進歩に伴はざるの教育は偶々以て社會を害するの媒介たる亦宜ならずや。

輓近の教育法の我が社會に適合せざる點は種々一ならずと雖も、余輩は今立論を專ら社會の治安及風俗の上に止め、特に女子教育に就て一言せん、

教育の風潮は獨り男子のみならず併せて女子社會をも震盪したり、世の論者概ね皆曰く、男子の教育高尙に

過ぎたるが爲め、囊に一錢の貯へなくして口に治國平天下を唱へ、心常に空中に浮搖して靜に生業に就くと能はず、之を以て政治部面の如き殊に紛々擾々を極め、延いて社會の治安に關する容易ならざるものあり、任に敎育に當るもの、宜しく活眼を開きて大に敎育制度を改正せざる可らずと、是れ洵に然り、而して余輩は女子敎育にも亦實に此類あるを認むるなり。

我國多年の慣習により、女子は概して無學なりしなり、女子は男子に附屬して始めて一人の人間たるを得たりしなり、女子の地位境遇は誠に哀れ果敢なきものにして、亦その哀れ果敢なきも止むを得ざるが如し、獨り奈何せん、斯ては社會の進歩に伴ふて女子の職務を全ふすると能はざるが故に、之に敎育を加へて男子と共に家を成すの能力を發達せしむ可きは、極めて必要なるに相違なし、是に於て女子敎育は俄然として勃興し、而も西洋婦人の實例に鑑みて殆んど男子と擇ぶ所なき迄に奬勵したり、蓋し反動の勢こゝに至りたるものならんとは雖も之が爲めに弊害を釀したると實に枚擧に遑あらず、爲めに一時は世論を沸騰せしむるに至りたるは皆人の知る所ならん、爾後幾分か弊害救正策に心を用ふる者なきに非ざるが如しと雖も、今に至り猶ほ依然として毫も改むる所なきは、女子の心徒に高尚に過ぐるの一弊を然りとす、男子の弊も高尚に過ぐるに在り、女子の弊も亦高尚に過ぐるに在り。

女子が高尚に過ぐるの弊たる仔細に數へ來れば一にして足らずと雖も、余輩が社會の爲め最も痛心に堪へざるものは、其良人を擇む標準の高尚に過ぐるに在るなり、抑も男女を問はず其配偶を擇むに當り、賢を好み不肖を避くるは素より當然の所なりと雖も、天下の男子豈賢者のみならんや、彼も不可なり是も思はしからずとて、殆んど自ら量る所なく、一年又一年、遂に婚嫁の機を失して大に悔る者少なしとせず、本人に於ては自ら招くの過ちなりと雖も、其父母の心として、愛娘の婚嫁せざるが爲め情を痛ましむると果して幾千なるや、世に娘を持ちたる親の心を察すれば、女子敎育の高尚に過ぐる、實に社會の大惡害たるを知了するに

足らん。

百年の苦樂他人に依るてふ女子の境遇は、昔も今も日本社會の實際にして、亦實に男女家を成すの法則と云ふ可し、今この法則に戻り父母を傷ましめ、自ら誤るもの、是れ果して女子敎育の精神なる歟、之を往年唯父母の命に從ふて婚嫁に異存を唱へざりしに比すれば、相距る果して如何ぞや、余輩は敢て女子をして無學ならしめよと云ふに非ず、又絕對的に父母の命令に盲從するを以て孝道なりと云ふに非ず、又既に高尙したる心にては、思はしからざる頁人に配偶するは寧ろ配偶なきの優れるに若かずと觀念するも、强ち無理と云ふにも非ず、一切の罪責は繫て敎育法の不適當なるに在るとなれば、敎育家たる者は宜しく社會の實際を顧み、徒に其精神を高尙ならしめずして實用的の敎育を專らとなし、女子の生涯を誤らしめざる樣深く注意ありたきものなり、敎育の弊は男子をして浮浪たらしむるのみならず亦女子をして浮浪たらしむ、女子の浮浪は男子に比して更に痛心す可きものたるを一顧せよ。

小生曾て伊國コッサ氏經濟學を讀む今其面白き所若干を抜譯して貴社に投す宗敎の雜誌に經濟論とは少しく方角違ひの事なれども一種の學說として亦敢て差支へなかるべきを信ず

政治經濟學の釋義

川本永守

俗に往々經濟なる語を解して節儉或は儉約と云ひ又能く整頓したる事物の仕組と解するとあり譬へは宇宙の經濟人躰の經濟なる語の如きは則其一例にして斯る場合に於ては其語中常に秩序平均一致の意義を抱含し又之を文字學上より解する時は家法家族政或は此法此政を論する科學或は術と解し又稍や其意義を狹縮して家產或は家族の富財を取扱ふことゝ解するを得へし而して此れに政治なる形容詞を冠する時は政府の管理或は政府の富財の管理と解し所謂家內經濟なる語と相對するに至る如斯にして政治經濟學なる語は政治學或は財

政學と同意義に解釋することを得べし

然りと雖ども右の俗解及文字學上の釋義は今日一般に政治經濟學に附する科學上の意義と毫も適合せず實に政治經濟學と政治學とは同からず今極端の想像を以て之を解すれば政治經濟學は政府あらずと雖も尙之あり政府より相分離して現存するを得べし而して又財政學とも同じからず何となれば政治經濟學は單に公の富財に關するのみならず其一私人たると公同人たるとを問はず社會一切の富財に關係を有すればなり世人政治經濟學ニ公ノ經濟、內國の經濟、人民の經濟、國民の經濟及國家の經濟等種々の名稱を附すると雖ども要するに政治經濟學は社會に關する富財の秩序を整理し以て其通法を吟味し而して其吟味し得たる通法に因りて公私の富財を管理する原則を推究する科學なり他語を以て之を云へは政治經濟學は社會に關する富財の顯象を二樣の目的を以て研究するものなり二樣の目的とは即一は其顯象の源因を尋ね一は其顯象が公私の安寧に對する關係を考究すると是なり而して又政治經濟學が家事經濟、農事經濟及工業經濟等經濟學上に關する種々の學科と共同の目的を有すと雖ども各其論點を異にするが爲め之を各科に區別せざる可からず抑も各科學を區別し其本質を定め之に一定の地位を與ふるは今日吾人が採る所の要點にして尙且吾人知識の不完全なる萬般の事實を概括する能はざるを以て單に敎授上の必要より又之を分類せざる可らず然らば則政治經濟學は家事經濟之を詳言すれば一家族に關する富財の關係を研究し其家產を處理する良法を尋ね其家族を組織する家員の利益を是れ求むる家事經濟と區別し又諸工業の管理法を論する工業經濟及農事經濟等の諸術を論する藝學と區別せざる可らず其然る所以のものは是等諸學の研究する所は箇々別々の事物に止まり政治經濟學の本分は富財に關する通法及富財と社會との關係を研究するにあれば其論點を異にし研究の範圍更に大なるが爲なり

夫れ如斯政治經濟學は富財に關する社會の顯象を論ずるものなれば社會の組織社會進步の通則を概括論究す

る社會學と密接の關係ありと雖ども一は單に富財の事に關するのみならず社會萬般の事を網羅概論し一は只富財の社會に關する顯象を論究するに限るを以て二者の關係全く區別せざる可らず且又道德學、歷史學、統計學及法律學と區別する所なかる可らず

夫れ吾人の玆に所謂道德とは富財なるものゝ影響が吾人の德行上に及ぼす利害如何を觀察し以て富財の正當なる使用法を論する所のものにして或は之を經濟上の道德論と云ふも可ならん然りと雖ども政治經濟學は之と全く別なるものと知るべし又經濟歷史は經濟上の事實及諸制度を年期を追ふて之を外部の狀態より研究するものにして常に經濟上の顯象と關係を有するものなれども是等の事實を支配する通法の研究とは更に別種のものと知るべし譬へば十九世紀に於る英國の商業史を讀と何の時何の塲合に於ても商業上の活動を支配する法則を研究するとは全く別なるが如し又經濟統計學は秩序ある方法を用いて諸工業上の事實を概括し可成符號を以て之を說明し而して其說明する所は自然の法則即ち必須不變の關係にあらずして外部の狀態より不定偶然の事實を現はすに過ぎず譬へば物價統計表と物價通法とは自ら異なるが如く最近十年間倫敦ハンボルク及ニューヨルクに於ける物價統計表と物價通法とは全く別なるものと知らざる可らず

商法學は諸濟上の事實及諸制度を處理し商業習慣の全躰幷に民法の過半を抱含し經濟上に於ける權理義務即債主負債主の間に存する權義の當否を研究するものにして政治經濟學は是等事實の源始を尋ね富財の通則を推究し之を善良に導くにあり彼の私有財產の本源を法律上より研究し或は伊國法律の條目を吟味すると其法律の利益狀態及區別を示して經濟上に及ぼす影響を判定する事とは是れ又別異の者ならざる可らざるなり

上來の釋義に因りて此學の研究法及び此學に二樣の功用あるを案出するに至れり而して此二樣の功用は共に經濟學中須要の性質を有し必須の觀察を要するなり其一は純理經濟學にして演繹及歸納の二法を用ひ以て學理を攻究するにあり其二は應用經濟學或は之を經濟術

と云ふ其功用は經濟上の顯象を支配する自然法の力を藉り經濟上種々の規定を案出し以て經濟上の活動に光明を與へて其の方向を知らしむるにあり「ミル」氏は此二樣の區別を文法上の直接法と命令法との區別に比較したりしか二者實に密接の關係を有し學は以て應用術の基礎となり術は又學の力を借りて其應用の方向を定め從て二者相共に補助して其の功用を全ふし以て公私の繁榮を直接或は間接に奬勵するの傾向を呈するに至る此に於て科學發達の順序を考察し之を論理の法則に照すに學は術に先ち術は活動に先つて起らざるを得ざるが如し何となれば人民の活動するや先づ其活動の規定なくして活動し得るの筈なし而して其規定は科學の力によらずんば之を定むるを得べき筈なければなり然りと雖ども今之を歴史上の事實に照らすに順序全く之に反して自然の活動先つありて經驗の術之に次き然る後科學起りて終に首尾全きを得るに至る彼の詩を作り樂を奏し疾病を治療し家屋を建築する事の如き是れ皆音學詩學醫學及び建築學の起りし遙か以前にありて存せし事は則其例證とするに足るべし然り而して政治經濟學の探究する所は固より人爲の法則に非ずして所謂自然の法則にありと雖ども之を彼の物理學の諸法則と同視すべからず今之を區別せんが爲め自然法を呼んで通法と云へる事往々是あり又應用經濟學の事を述べんに應用經濟學は富財に關する公私の活動を指定するものにして勿論其主要の部分は公務の事に關係を有すれども或人の考察する如く之が爲め應用經濟學を以て單に政府にのみ關係を有するものなりとするは其當を得たるものにあらざるなり然るに此れに反して國家の富財を有益に支配するの法は時々全く應用經濟學の說く所と一致するを得ざる場合あるを以て或は此學を無用視するものありと雖ども是れ又失當法外なるものゝ如し「セニオル」「ミル」及び「ケアニス」の如きも又之を主張すと雖ども彼等が著書中に述ぶる所の說とは撞着不合するものなりと云ふ可し於此吾人は既に政治經濟學の釋義は畧述したりと考れば尙此上に數多き他人の釋義を縷述するは能く此小冊子の堪ふる所にあらず好し

之を得べしとするも勞益相償はざるものと思考するを以て只其釋義の多數は皆其中庸を誤まり或は不及に失し或は過分に誤まるものとの一言を述べて自ら滿足せざるべからず例へば其不及に失するものは價格或は交易或は商業を以て政治經濟學の本旨なりと論せんとす成程是等は皆經濟學上至要の科目なりと雖ども未だ以て經濟現象の全體を概括するに足らず又或は單に純理經濟學或は應用經濟學の一を以て政治經濟學の全體を總ふるものなりと思考するものありと雖ども是又均しく誤謬なるべし然りと雖ども其之れが釋義を過度に誤るもの尙更に多し例へば政治經濟學は富財の科學則物質的科學なりと釋義するものあり或は此學に一層の重を加はへ更に品位を與へんと欲し誤て此を他の科學に付し道德學政治學或は法學と混同するものあり又往々之を社會學と同一視するものあり其れ如此釋義の區々にして一致せさる所以のものを概言すれば經濟學者が固執の弊にして其情憐むべし彼の「ロセル」の之を悲むも亦尤なる次第なり去れは此釋義論の結果は此學に對する局外者の尊敬を失し尙且つ其論旨も最初之を一見せし時に比ずれは稍々小なる者なれば其雙々並立し難き議論も何の日か同一の方法に因り同一の結論を來たすの時あるべし如此爭論は獨り政治經濟學のみならず尙他の科學釋義中にも吾人の常に實見する所なれども爾來其の進歩に因りて釋義稍々明瞭となり今は早や相當なる疑團の其間に存する樣もあらざるなり

政治經濟學の區別

政治經濟學中諸の敎理は其敎理の基つく所に從て之を別つを得へし而して其敎理の價値は其之か富財の議論に關係を有する割合の多少に應して定むべし余は先つ此に政治經濟學中重なる二箇の區別を說かん是れ既に前條に於て一言せし所にして則第一純理政治經濟學は經濟學上に關する事物の研究則富財より起る社會の現象を研究するものにして其直接の目的は純然たる思考的の方法に因り富財の現象を其內部より研究し以て其源因を尋ね其通法を定むるにあり第二は應用政治經濟學則經濟術は經濟上の現象を研究して富財に向て確定

なる管理法を與へ經濟上の諸制度を案出し以て社會一般の幸福を增進するにあり去れば應用經濟學は事實の源因結果を研究するにあらずして經濟上の規定を定め此か活動を指示するにあれは直接に事の實行に關係するものなり然りと雖とも純理應用二者終局の目的は一般に社會の幸福を進達するにあり尙且應用經濟學を推究すれば純理經濟學に於て發見したる眞理より導き來る所の者なれば純理經濟學の精密深遠なる思想を有するにあらずんば之を會得すると難かるべし扨又此に吾人の注意すべきは學理及活動の區別是なり此區別は隨分科學に通達する人と雖とも往々誤るとあり蓋し學理及應用は全く意匠的の部類に屬し思考の範圍中に存するものなりと雖とも活動則實行は實行者の熟練に存するものなり去れば應用術は實行を指揮し實行者に光明を與へて其只無理の習慣經驗に陷るの弊を防ぐものにして實行と直接の關係を有するものなりと雖とも全く之と同一視すべきものにあらず規定は明に意匠的思想的のものにして其學理の部內に屬するとは純理科學と毫も異ならざるものと知るべし

尙又此に政治經濟學を區別する今一の方法あり此は日耳曼諸學者の專ら採用する所にして上來の方法に類似する所多しと雖とも其區別は全く之と異なりて邦國經濟及政府經濟なるもの丶二に區別せり則左の如し

第一邦國經濟は國民と國民との間に於る經濟上の現象を研究し第二政府經濟或は之を經濟立法或は經濟政治學と云ふ其目的は政治に關する富財の現象を研究するにあるなり而して又之を政權を以て私人富財に關する塲合と國及州邑公同の富財に關する塲合とに別ち一を經濟政治と云ひ他を財政學と稱す然と雖も財政學及び經濟政治學は其原則を唯經濟上より取るにあらずして法律及政治學に基く所多く之れあるを以て今日は之を政治經濟學中より分離して更に一科學となし或は之を行政學中に論ずるに至れり然り而して政治經濟學と經濟政治學との區別は純理經濟學及應用經濟學の區別に均しき者にあらず應用經濟學は公私の兩者に關するものにして假令政府あらざる塲合に於ても尙且人間社會

に存在するを得べしと雖ども經濟政治學は其斯る塲合に存する能はざると勿論なり

扨上來の區別と全く異なる今一の區別は經濟現象の種々の狀態を考究して論據を富財の內部に取るものなり政治經濟學大家の一人なる「ゼー、ビー、セイ」は此の方法に從て富財の現象を生產分配及び消費の三項に別てり而して此區別を經濟學の釋義及其表題にも用ゐたり彼の富財を生產して人民に分配し人民生活の用に供するは則生產分配消費の三項を表明するものにして其順序に從て社會富財の移轉を硏究するを得べきなり而して此區分は多くの經濟學者の採用する所となれり例へは「ロー」及び「マックロック」の如きも則之を採用せり特に近年の經濟學者は右三項に流通則貿易と云へる一項を加へり然り而して富財を彼是の塲所に移轉する之を運漕と云ひ富財を彼是の人に移轉する之を交易と云ふ此交易運漕の現象は所謂流通の因にして經濟上至要の關係を有する項目なれは之を只生產或は分配に附隨する者として論す可らす是れ學者の悉く贊成する所加之「ロッセル」を祖述する記者輩は尚且此に人口論なる一項を加へて更に五項に分てり乍去此一項に至りては同意者甚た少く余も亦之を贊成せさるの至當なるを信するなり蓋し重要なる諸の學理は人口論に關する近來の議論を潤飾し今は殆んと自ら一科學を組成するの度に達し或は既に此に附するに「デモクラヒー」の名を以てし或は又「デモロジー」の名を以てするに至れり又人口論の問題論し盡したりと云ふ可し然りと雖とも余の見る所を以てすれは人口論の經濟上に關する點は只其食物に對する關係のみ去れは之を經濟學上の一項となさんより寧ろ分配論の項中に論するの更に適當なるものにして經濟學上の本論にあらす只之に附隨する一項目たるものと知るへし

又或は「セー」の主持する三樣の區分を一層簡單にし或は種々に之を變更せんと試むるものあり例へば「ロッセル」の如きは生產消費則資本の適用なるものを生產論の項中に論ぜんと欲すと雖とも其一私人の不生產消費に止まるものは健全學、道德學及家事經濟に屬する

者として政治經濟學には全く無縁のものと思考し其公の不生產消費所謂租稅は分配論中に論ずるものとし以て政治經濟學を只生產と分配との二項に分ちて論結せり此說は既に前世紀に於て「ツールゴー」の唱ひし所にして「ミル」氏も亦之が贊成者の一人なり併し氏の議論は多少之に異なる所ありと雖ども氏は千八百四十四年出版の論文を以て之を贊成したり此に又近代の記者にして消費の一項を經濟學の區別中より除去し「ロッセル」の分類に從ひ生產分配の二項に所謂流通の一項を加へて以て之を三項に分たんと欲するものなり則「ミル」氏は經濟原論中に之を述べ氏の後には「チャルブリー」氏あり「ホーセット」氏あり及同夫人あり孰れも氏の分類法に從へり扨又消費の一項を政治經濟學の分類中に加ふるの更に適當なるを知る蓋し「ロッセル」の論せし如く消費の項中に抱含するものにして全く政治經濟學に無緣のものあり且又財政學の如きは之を一科學として研究せざる可らざるものとし消費論中より此等の項目を除去するも尙且消費論は生產及分配上に至大の影響を及ぼす元質を有し將又消費則富財の使用は凡て此れ生產の目的なる事を知らざる可らず扨又此に甲乙二個の分類法あり

第一甲は政治經濟學を別ちて二類とし一は通論にして工業に關する關係を全躰より總括して論じ一は各論にして之を各論に分つて論ず去乍余は今之を贊同する能はず其然る所以のものは此方法は無益に複雜に陷るの欠點ありて政治經濟學に關係なき各種藝術の細目を考案中に提出し來るの危險を有す是れ最も頌揚すべき記者輩の陷りし所の危險にして「ロー」「ロッセル」及び「ナダニー」の如き則ち是なり且又諸般の工業に普通なる現象の考察を誤て特種の工業に關する考案中に導く事往々是なり

第二此方法は重に「フェラヲー」の主張する所にして單獨經濟、社會經濟及び萬國經濟の三部に分てり是れ世人の能く知る私法、內國公法及び萬國公法なる法學上三項の區別に基づくものにして之を前者に比すれば更に複雜の危險あるを知る如何となれば經濟の現象は必

ずしも右三項の狀態を現はすのみならず尙且政治經濟學と混合するの傾向あればなり學士「レーホンド」は「フェラヲー」の有力なる門徒なるが明に此分類法の危險なるを暸察し單獨經濟の一項を排除し以て其師の分類法に變更を加へたり乍去未だ充分ならず何となれば政治經濟學と社會經濟學及び萬國經濟の基づく所の法則とは毫も相類似する所あらざればなり然り而して吾人が法律及政治の點より萬國の有様を看察する時は其間に種々様々の關係ありと雖も今之を經濟上より看察する塲合に於ては是等の關係は全く存在せず所謂萬國經濟中に論する所の自由貿易、通商條約及び殖民の事に關する問題の如きは富財流通の項中に抱含するものなれば經濟現象の性質は寧ろ宇宙的のものにして國民的のものにあらざるを信ず

於是吾人本論を結ぶに當り上來示せし所の分類順序に於ける爭論の實相に注意するの必要あるを覺ふ抑も經濟上の現象は實に不動的のものにあらず絶へず活動する處の一機關にして如何なる方法を用ゐて之を分類するも多少其分類の不精密且つ不規則なる事到底免る可らず然れども勉めて之を分類し人爲に因りて其現象の活動を制止し之を數項に分ち其分ちて所のものを格別に觀察し以て再び之を統一せざる可らず是只吾人が假想の上に基づくものにして經濟學の教授上不得已の必要あるを以てなり

政治經濟學と諸科學との關係

政治經濟學と諸科學との區別は吾人前章に説明し既に讀者の知る所なりしが今又茲に左の順序に因り其關係ある塲合を述べ以て讀者の一讀に供せん則ち第一私の經濟第二道德第三歷史第四統計第五法律第六政治學是なり

第一私の經濟夫れ政治經濟學は富財及諸工業の社會に對する關係を論究する者にして單に一家族或は一工業の事に關係する者にあらずと雖も其分勞分業機械通貨運漕及通信等の事幷に生産の裝置及工業の組織を論ずる塲合に當り私の經濟特に工業經濟より有用なる補助を受くると少からず然れども又政治經濟學に於ても經

濟社會の通法を說明し極て有用なる指示を私の經濟上に與へ其活動の方向を知らしむる者なり去れば近代の經濟學者は私の經濟と政治經濟學の關係を力て詳說せり今左の著書は以て讀者の參考となすに足るべし

第二道德學　政治經濟學は道德學と全く別なるものと雖其應用の場合に於ては之と密接の關係を有す而して應用經濟學は道德學に比して一位讓る所なかる可らず蓋し文明の進步に於て富財なるものは一層高尙なる道德改良の目的を達するの一手段たるに過ぎざれば道德と經濟との間に多少の衝突を來す場合に於ては經濟は常に道德に步を讓らざる可らず例へば製造場に於て婦人及兒童を傭役するに當り經濟上より其之を欲すると否とを問はず道德は常に此間に立つて勞力者の心底を矯正するものなりと知るべし然るに吾人今多少の衝突云々語を用へし所以のものは道德と經濟學との間に一般又は永久の衝突あるべしと想像する能はざればなり或哲學者の能く知る如く正義及公道なるものと利益とは結局調和する能はざるものなりとの說あれども「プロートマン」の說の如く道德と經濟との間に必須避く可らざる衝突ありと思考する事及び「ケレー」「バステア」及「フララバー」の如く經濟上の細目に至る迄勉めて道德との一致を希望する事は是皆共に兩極端の誤謬なりと知らざる可らず而政治經濟學の道德學に比して劣等なる所は只其應用の部に過ぎず純理政治經濟學は經濟幷に道德上の原因を探究するものなれば二者の間に優劣ある能はず加之政治經濟學は道德學に極めて有用なる補助を與ふべし彼の聖敎道德者にして法敎經濟學者なる「ドロ」の政治經濟學は道德學の極て有用なる朋友なりと云ひしは甚だ理あるの言と云ふ可し實に政治經濟學は哲理の何物たるを辨ぜず動もすれば人間ある職分に服從するを欲せさる徒に有形の利益を示して其心底を奬勵し懶惰不用意放蕩及社會の惡制度より起る奴隷の如き道德上に於て有害なる惡事は又經濟上の不利益なる事を明示するものなれは或る道德家の如く經濟上の行爲を以て道德に有害なるものと判定し之を非難するは誠に誤謬なりと云ふへし例へは彼の吝嗇の

有惡なるは之を浪費に比して更に大なり何となれは浪費は經濟上有益の成果を作出するを以て稍恕する所あれはなりと云ひるは吾人の往々讀み且つ聞く所なり然れとも今此等の害惡を經濟上の點より若干の富財を空しく庫中に貯蓄する事則吝嗇と富財の破壞則浪費の害と比較せは吝嗇は浪費に比して其害尙小なりと云はゝ更に適當なるを知る最近三十年來道德と經濟の關係に付き數多の精密なる議論出てたり千八百五十七年道德經濟學佛國學派の懸賞問題中格段に此の事を論したりしか其幾部は皆議論の中庸を失するものゝ如し論者は政治經濟學中に道德學の多分を論入し之を以て科學上の一進歩なりと誇ると雖吾人を以て之を視れは是決して進歩にあらすして其實最も嫌ふ可き退歩の一なりと信ずるなり

第三歴史　政治經濟學は經濟上の適法を論究するものなりと雖とも歴史は之に反して年期を追ふて是等事實の發生を尋ぬるものなり則一は必須に關し他は不定の事件に關するなり然れとも倘政治經濟學は歴史より極めて至要の報告を得既に示したる如く歴史は複雜したる場合に於て經濟現象の法則を明瞭にし以て政治經濟上重なる材料の一たるに相違なし且又歴史は學理を助けて完全ならしめ學理の説明に極て有用なる利益を與ふ學理にして若し此歴史の助けなかりせは自ら之か觀察に從て以て其説の當否を發見せさる可らす然れとも歴史も亦其事實の選擇分類等の場合に當り政治經濟學上より最も有用なる補助を得へきものにして若し此補助なかりせは歴史上の事實は全く解し難きものとなり或は少くとも是等事實の功用を充分に了解すると能はさるに至るへし去れは當今の歴史家は右理由を承知せしか經濟上の事實に一層の注意を加へ經濟學の原理を研究し以て事實の充分なる説明をなさんと勉むるに至れり例へは「クロート」「モンセン」「マッコーレー」及「セーヤー」の著書は此の事實なるを證するに足るへきものなり請ふ讀者左の著書を參考せよ

第四統計學　統計學と政治經濟學との關係は之を歴史との關係に比すれは更に密接なりと雖とも其關係の狀

態は二者共に同しきなり統計學は可成精密なる符號を用ゐて社會上事實の全躰を概括し順序正しく之を示すものにして經濟學上眞理の發見に極めて至要の助を與へ學理の說明及其應用に甚た有用なる事實を供するものなり此を以て政治經濟學は「キユートレツト」「ガーリー」「ドーフロー」「エンジエル」「ワグテル」等か近來統計學に與へたる新說に因りて益せし所少からす乍去統計學も亦經濟學より補助を借らさるを得す經濟學は統計學上事實の比較選擧及ひ批評に有用なる指示を與へ二者關係の親密なる實に兄弟姉妹の如し去れは今日世人か統計學の不完全なるを批難して止ますと雖とも此か爲め二者親密の關係を疎にするに足らさるなり左に記す近著に係る統計學略論は以て讀者の參考となすの價あるへし

第五法律學　法律學は人間箇々の關係より論出し經濟學は社會の富財に關する一般の關係を論するものなりと雖然れども此二科學の間に存する鏈鎖は隨分强力なるものなり去れと如此入込たる趣意に論入するは吾人能く此小冊子の爲し得へき所にあらさるを以て左の順序に從ひ之を略解に伏して讀者の滿足を希はさるを得さるなり

第一萬國公法　政治經濟學は確實公平なる萬國關係之規定に因りて大に利益を導き得へき事を明かにし戰爭又は政治商業等の讐念に起因する彼の孤立制度則ち商賈制度禁制保護及殖民制度の悪結果たる所以を指示し若し已むを得すして戰爭の避く可らさる場合に於ては戰爭中と雖とも力めて人民財產の權理を尊敬すへきの道理を公言して戰爭の害悪を減せんと試む而此原理は學理に於て尙更認むる所なれども又當時萬國公法の實行に於ても稍認むる所となれり而して經濟上より論證する所のものは其論旨專ら實利にあるを以て之か爲め議論に一種の效力を與ふれは何の日か經濟上の實利に基つき萬國法官を任用するの時あるを信するなり

第二憲法　一國の政治と其國人民經濟上の繁榮との間に存する關係は一國の憲法と政治經濟學と互に相

補助する所あるを證するに足るへし實に主眞なる經濟上の成果は眞正なる自由制度より作出し憲法は政治經濟學より至重の影響を受くるものなり其然る所以のものは彼の政治學と經濟學に關する誤解の往々恐る可き有害なる結果を發出するを見て此論の欺かさるを知るへし而して只此謬妄を打破し得へきの眞策は是等科學の明白なる原理を速に擴張するの一あるのみ

第三行政學　憲法如何に美なりと雖とも善良なる行政法の以て之に伴ふなかりせは只一片の死法たるのみ而して此善良なる行政法を作るに當り政治經濟學は與かりて力あるものなり且又行政の其宜しきを得る時は既に腐敗したる制度の中に存在する數多の害惡を治療するを得へき事往々之れあり然り而して行政法を樹立するに當り或は既に現存せる行政法を實行するに當り政治經濟學は實に確然たる規定を是等に與ふるなり是則行政法の基礎として政治經濟を研究する必要を證するに餘りありとす

第四民法　民法と政治經濟學との關係を知らんと欲せは民法の多分は必す經濟上の目的を有する事を回想せは直に之を了解するを得へし而して民法の功用を政治經濟學に與ふる所は諸經濟上の取引より起る法律上の關係を說明するにあり又經濟學の功用を民法に與ふる所は此法の實相を說明するにあり何となれは民法は諸の制度を只其外面より知るに過きされはなり例へは交易と買賣の區別は只其式樣に於て異なるのみ去れと此等の契約は經濟上に於て全く同種のものたるを了解する時は二者の區別を充分に了解する事難からす而して當今法律學の進步は民事法典の改正に與かりて力多しとす彼の利息制限法の殆んと全廢せられたる抵當法の改正及土地貸借法の全變等は是れ皆經濟學進步の結果にして是等は以て民法の改正に經濟學の與かりて力あるとを證するに充分なりとす

第五商法　法學者は民法に於けると同樣商法に於ても亦組合法會社法信約銀行及保險等の制度より起る

法律上の關係を研究し而して此等諸制度の功用及社會に對ずる結果を吟味判定するは經濟學の與さる所なりされは政治經濟學は法律及商業の發達に少からさる影響を與へたり例へは當今經濟上の功用に基つきたる爲替法の法理を說明する「イフルト」の著書は彼の爲替法の歷史に一新紀元をなしたる千八百四十八年日耳曼法の改正に至大の利益を與へたり是を以て近代の法學者は常に經濟上の功用より商法の實質を說明せんと欲せり例へは日耳曼に於て學士「ダブルユーヘンドマン」は千八百六十五年「ヒヘデルブルグ」の出版に懸る某と題する自著に於て右の方法を用ゐたり左記の書物は以て讀者の 參考に便なるへし

第六政治學　政治學と政法經濟學は消極及積極の關係を有するなり一方に於て政治經濟學は政府の諸規則及諸制度の性質に關する說明を行政學より受け又行政學の極めて至要なる部分たる經濟政治學は政治經濟學より欠く可からさる訓言を受くるなり因て政治學の通理を知らんと欲せは讀者須く左に掲くる近著の中に付て之を知るへし　（其書目を略す）

人類の進步

ダブルユ、ゼ、フヲクス

人類は一所に中止して進步の力なきものか或は啻に進步せざるのみならす漸次に退步するものなるか又は無限の進步力を有するものなるかと云ふ此問題を解かんが爲め試に萬國歷史を繙ひて古今の事實を觀察するに古來未だ嘗て現時の狀態に優りし人類ありしを見ず其最も幼稚の時代に於ける人類生活の有樣は唯た一種の耕奴たるに過ぎずして學なく智なく粗衣粗食何んの樂みもなく其家屋と稱すべきものは粗末なる一種々物質を用ひて建設したる小舍にて僅に雨露を凌ぐに止まり固より一定の住所なく水草を負ふて漂泊する無智の蠻民相結んで隊を爲り戰鬪攻擊及び獵獸を以て其平生の職業とし宗旨の本尊は散亂たる天上の星にあらずんば空漠たる雲にして朝夕之れに供物を奉じ只だ其罰を崇

むらん事を恐れ之れに屈拜する無智の情憐むべし去りながら其擧作進退は一に腕力を以て之れを支配し腕力の達する所は即ち情慾の極度にして智力の以て之を制限するものなく無君無政又父子夫婦の別なかりし斯くの如き人類の生活を名づけて我輩は實に野蠻腕力の時代と云ふ之れに次ぐ社會の狀態は前記に比すれば稍々進歩して彼の蠻民の一隊は粗末ながらも一政府の下に統一せられ蠻族專政を受くるに至れり其有樣は之れが酋長たるもの無限の權力を用ひて專恣猛悪只だ我意の欲する所に由て凶器を弄し配下の蠻族を見ること恰も畜類の如く之れを生殺する一に其權内に在り昔時希臘の文明尚ほ幼稚にして一小區域に止まり其未だ普ねからざる時に當て國民殆んど四分の三は憐むべき奴隷の狀態に生息し其生命一に喜怒常なき酋長の方寸に一任して又自から保持する能はず內亂外戰は當時社會の常狀にして人の殆んど之れを怪しむものなかりし降つて羅馬最盛の日に於けるも亦斯くの如く人智尚ほ進まず文明の技術に乏しく哲理に暗く其宗旨の本尊たる神及び之れが儀式は人心を畏懼するに止まり常に外戰を事とし徒らに無名の師を起して人の國を攻め其之れに降伏せざるものは勢ひ滅亡するを以て同國當時の國是なりしと云ふも可ならん此時代に續て世は紛擾、混雜、殘酷の世となり稍々降て國王の人民に對する壓制は日に益々甚しきも僧侶の勢力は尚ほ更に盛んにして常に國王を凌駕するに至れり即ち人民は國王に壓せられ國王は又僧侶に壓せられたるの姿にして獨り人民に至ては其安心の地位を得る能はざりし此時に當て正義公道の何んたる人の之れを言ふ者なく基督教の腐敗も亦人の之に注意するものなかりし轉じて技術の點を見るも土地耕作、家屋の建築、或は金屬の鍛錬等今昔を比較して其の優劣固より同日の談にあらず彼の航海術の如きも昔時僅に沿岸の回航に止まりしものが次第に進歩して終に彼の驚くべき新世界の發明を爲すに至りし其大膽と熟練は既往に於て决して見る能はざる所と云ふべし更らに眼を轉じて科學進歩の有樣を觀察し彼の古代の笑ふべき謬妄と不明なる學説とを取て之れを近時

に於ける確實なる經驗の事實と明了なる學說と倘ほ且つ驚くべき近年の發明等に照し合せて古今人類の狀態を比較すれば其生活の程度は言はずして今の昔に優る所あるを知るべし又政治上に關する諸制度如何と云ふに昔時最良の共和政なりと稱して自由の活大なるを誇りたる其諸制度の精神と實行上の有樣を見れば孰れも皆國民の多數を壓して少數の利益を保護するの趣きあらざるはなし即ち國民の多數は憐むべき奴隸の狀態に生息して殆んど法律の以て之れを保護するものなく時の良政府と稱すべきものと又當今の良政府と稱すべきものを取り之れを双方に並べて其良否優劣を比較すれば古今固より同日の論にあらざるを知る、今日歐洲諸國の隅々まで如何程詮議して其最も惡しき者を取り之れを昔時の良政府に對照するも昔の最良は今の最惡に及ばさるを見る、又宗敎思想に就き其發達の程度德義の高下を觀察するに之れ又其程度の優劣今昔無限の隔たりあるを知るべし例へば今日世人の不德なり不義なりとして擯斥する其不德不義は古人の忌憚なく之れを行ふて顧みざりしのみならず寧ろ名譽として誇りたるが如し蓋し人類の上進して其性情を改良し智識才德を養ひ人の人たる職分を稍々盡すに至りしは誠に近世の事なりと雖も當今の世界は昔時の世界より智あり才あり又其德義に乏しからざるを信ずるに足る今日公正なる裁判は國民に平和と安全を與へ通信の擴張は有益なる慈善の實行を促すに至れり顧ふに其最も良心に富み又智識に乏しからざる古人の必用なりと考へたる奴隸取扱の殘酷なることと羅馬に於て殊に甚しく其老衰して用に堪へざるか或は疾病に惱みて起つ能はざる者は食物を與へずして其餓死する所に任じ敢て顧みざりしは當時同國普通の常狀にして又怪しむ者なかりしが如し伊太利に於ても奴隸酷待の有樣又殆んど之れに類するものありし凡そ斯くの如く慈仁に乏しき殘酷なる社會の狀態は獨り奴隸の待遇に止まらず政治界の競爭に於けるも倘ほ然るを見る貴族平民各々黨派を結んで互に政權を爭ひ其勝敗を決するものは唯た一に腕力の強弱にして弱の肉は常に強の食たり言論文章の何んたるを

醫學士來り學ぶ者頗る多し高頁齋伊東玄卜戸塚靜海伊藤圭介竹內玄同等皆其の門に在り長英其の校舍に入り孜々勉勵すること二年學業大に進む又通詞者吉田權之介を輔けて其の塾の翻譯敎授を掌どる九年三月和蘭貢使例に依り江戸に赴くシーボルト亦從ふ長英初め之に從て歸らんことを鄕に報す而して猶ほ其の切磋琢磨を望む是に於て書を以て猶一年の猶豫を父に請ふ長英の長崎に在るや其の學資大概源造の支給する所に係る江戸の醫山田某なる者あり藥價五十兩を源造に負ひて肥前平戸に往き松原見朴と稱し松浦侯に仕へ國政に參與し權勢頗る盛なり源造之を聞き長英をして代て其の債を取りて學資に充てしむ長英乃ち山田を訪て源造の書を致す山田之を償ふに意なし長英其の守錢奴なるを知り乃ち曰く此の金實に生の學資に充つるものなり若し月に衣食の料を給し生をして力を蘭學に專らにするを得せしむれば則ち足れりと山田曰く藩侯多く蘭書を藏す而して之を解するものなし徒に倉庫の裏に在り卿若し之を讀み之を譯するの任に當らば余當に藩侯に請ひて卿の衣食を給せんと長英心大に喜び之を諾す是より書籍に富み復た采薪の勞なし譯する所の書多し皆有益の書なり是より先きシーボルト氏の江戸より歸るや天文司高橋作左衞門贈る所の日本實測の地圖を携ふる事國禁に觸るゝを以て幕府の爲めに長崎を逐はれ復た我國に來ることなし其の罪に連坐する者數十名長英其の禍の逮に己に及ばんことを恐れ竊かに長崎を去りて薩摩に入る十二年正月に至り頁齋等果して捕はる六月に至て免さる長英之を聞て長崎に歸る長英の不在に際し會々父玄齋病篤きを以て門人野頁貞をして長英を迎へしむ頁貞長英の居る所を知る能はず玄齋終に歿す已にして長英の歸るに及び之を告げて共に歸らんことを勸む長英曰く家君兒をして遠遊せしめしものは將來に期する所あればなり今業將さに成らんとして家君既に逝く遺憾窮りなし事此に及ぶ鄕に歸るも亦爲すことなし我が學ぶ所の書大抵譯して囊中に收む將に江戸に出でゝ之を公けにせんとす若かず家眷を江戸に迎へて共に生を送らんにはと頁貞告げて曰く君を後にして家を棄つる恐らくは

忠孝を缺くなからんかと長英曰く我が志を立つる正に此の時に在り身を立て家を興すは江戸にあらずんば能はず郷に歸らざる何の妨かあらんと亘貞終に去る是の歳長英居を江戸麴町に移し醫療と翻譯に從事す門客四方より集る時に天保元年長英年二十七なり三宅侯の臣渡邊華山長英の才を愛し延て藩の老侯友信の蘭學の師とす長英亦華山の人と爲りを崇み交情頗る厚し共に西學を擴張し實利を興さんと欲し紀藩の儒官遠藤勝助等と謀り一社を設け名けて尙齒會と曰ふ而れとも是通常の尙齒會と異なり老人の會して以て餘歲を樂むものに非ず專ら政治經濟の道を講究し人の諮問を受け其の利害得失等を議するの目的なり天保九年十月英將モリソン渡航の說あり而して其の意互市を開くに在りと時に幕府の諸官預め之を待する方法を議し或は曰く文政年間の故事に依りて之を攘ふべしと衆議未だ決せす是に於て長英私かに華山に謂て曰く彼れ我が漂民を護送し來る我に於て厚く之を謝すべきなり然るを反て之を攘はんとす是れ仁愛の心に悖るのみならず其怨を結び患を貽す之れより大なるはなし恐くは幕府外國の事情を審かにせざるに出るのみと華山之れを然りと爲し乃ち鴃舌小記愼機論を述べ長英又夢物語の一書を著し以て外國の形勢事情を述べ且つ盛にモリソンの豪傑なるとを稱し以て非攘夷を論す而して國政に關するを以て敢て人に示さす密かに之を幕府に上らしむ十年讒者ありて曰く近來蘭學の徒衆人を煽動し上下之れか爲めに誑惑せらる今に於て之れを法に處せざれは測るべからざるに至らんと監察鳥居燿藏之を閣老水野越前守に告げ府下の蘭學者を捕ふるの流言あり既にして華山捕へられて獄に下り長英下曾根氏に隱る而して捕吏已れの家に入り文書を收めて去ると聞き自ら免れざるを知り乃ち後る事を鈴木春山に托し遂に自首して獄に入る

獄吏長英に問て曰く夢物語は夢中の記事なり而して英國の人情風俗を記する詳なり汝甞て彼國に渡航したるとありやと長英曰く未だし吏曰く然らば即ち書中の記事皆な荒唐無稽にして唯た世人を蠱惑するが爲に作りしものなるべしと長英色を正して曰く世上未だ天に昇

り地に潛みし者あらず而して能く天地の理を說くものあり況んや英國の如き舟楫の通する所何ぞ其の國情を知る能はざるの理あらんやと辨論屈せず吏到底言を以て伏する能はざるを度り唯だ獄に幽して其の苦楚の爲に降るの時を待つ長英亦吏の威に勝つ能はざるを知り憂國の衷情に發して他意有るに非すと述べ以て宥恕を請へり

十二月二十八日吏突然長英と華山を召して宣告を爲す長英遂に終身禁錮の刑に處せらる獄に在ると二年餘獄宰と爲る居少しく安し十二年四月三日獄に火あり官悉く罪囚を解散す長英亦其の中にあり或は曰ふ長英獄に在るの日未決の囚徒榮藏なる者に授くるに罪を免かるゝの法を以てす榮藏長英に約して放火し長英をして脫獄せしめたるなりと長英獄を出でゝ舊友大槻俊齋を訪ひ衣劍を乞ひ剃刀を借て髮を剃り伊藤玄朴竹內玄同等の諸友に至りて金錢衣服を乞ひ儼然醫師の裝を爲して去る官其の歸らざるを以て骨相書を發して四方を搜索す鄕里水澤の地特に嚴なり長英都下に潛むと一年明年冬探偵の稍〻緩なるを覗ひ硝石精を以て前額を燒き容貌を變して水澤に往き曩に母を托する所の家を訪ひ母に面して其の不幸を謝し復た江戶に赴く然れども永く留まらず去て名古屋に至る又其の露はれんとするを聞き又逃れて伊豫に走る宇和島藩主擢でゝ譯官となす長英是に於て少しく活計の安きを得乃ち其餘裕を妻孥に贈る居ると三年江戶の友人竊かに書を寄せて探偵の弛みたるを報す長英大に喜び宇和島を出でゝ江戶に歸り姓名を變じて高柳柳之助と曰ひ鈴木春山に寄る春山の知人松下壽醉は閣老水野忠精侯の臣なり大砲鑄造を以て名あり春山爲に介して交らしむ壽醉長英の卓識に服し其の子健作をして火藥の製造火器運用の法を學ばしむ長英亦志を盡し其の蘊奧を傾けて之に授く壽醉大に喜ぶ而して彼高柳なる者は長英なりと知る然れども殊に隱蔽して之を救はんと欲し橫井宗也に謀る宗也乃ち長英を伴なひて幕府の軍務士官勝麟太郞（安房君時に年二十）を訪ひ之を謀る勝氏曰く我は幕府の祿を食むものなり高野氏は幕府の罪人なり我にして高野氏を匿

すは義に於て能はざる所なり然れども高野氏の我に於ける素より仇志なし我必ず之を人に語らず請ふ去て復た來たることなかれと長英其の言に服し其の手づから點竄批評する所の鈐錄外書を贈りて曰く我嘗て君の家に來るの紀念となせよと此の書今仍は勝氏の所藏に係ると云ふ長英後又た姓名を變じて澤三伯と曰ふ是より專ら翻譯に從事し梓に上ぼすもの多し大概人の需に應じて述ぶる所なり就中砲術書の翻譯は殊に其の生計を資けたりと云ふ初め長英其の妻を欺て曰ふ赦に逢ひて獄を出でたり然れども故ありて世人と交はるを欲せず因て客を謝するなりと日を經るに從ひ妻漸く長英の越獄したるを知れども絕て之を問はず時に世上兵を講ずる者多く西洋の兵式益々盛なり長英乃ち兵書を譯して其の需用に應ず嘉永三年薩摩侯啓彬の命を承けて三兵操練の書を譯述す其の文巧妙其の意明確尋常譯書の比に非ず蓋し長英の積學と博通の力の由て致す所なり薩侯之を賞し人に對する每に其の良書を得たるを誇る當時伊東玄朴蘭醫中頗る名望あり嘗て薩侯に謁す侯長英の譯書を出して之を示す玄朴之を見て驚て曰く是れ必ず高野長英の手に出でしものなるべし今の時に當り蘭書を譯する此の如く精確を盡すもの長英を除くの外復た其の人あるを聞ずと侯は其の臣僚の手を經て之を得たるのみ又長英の何人なるを知らず然れども玄朴の言を聞て心竊に長英の才學を慕ひ之を獲んと欲し登城の際遍く人に問ふ幕府の有司之を聽て始めて長英の府下に潜むを知り復び逮捕の事を命す川路左衛門尉其罪全く姦人の搆造する所たるを知り百方之を庇護す事遂に及ばず長英松下壽醉の別業に往きて病者を診するの日偵吏の爲めに發見せらる然れども其の亡はんことを恐れ敢て發せす偶々長英と囚を同うせる囚人の再び罪して縛に就く者あり官之に諭すに能く長英を發見して之を報せば其の罪を免さんことを以てす一日長英の居青山の家に人あり笠深く面を覆ひて至る長英之を見れは先に囚舍を同うせるものなり長英に請ひて曰はく僕再ひ罪を犯して探偵甚た急なりと因て遠く奔らんと欲す願はくは僅少の金額を惠めと長英之を賓とし金を與へて去ら

しむ乍にして捕吏七人長英の家を圍む三人床下に在り二人門より進み二人中庭より向ふ長英豫め戒心あり庭前木葉を布き僅に一路を通す長英食に向ふの時庭に簌々の聲あり怪みて起つ捕卒二人前後來り薄る長英帶る所の短劍を拔て一人を刺し一人を傷く呼て曰はく命なり死すへしと乃ち其の刀を以て頸を刺す捕卒萃りて之を縛すれば巳に絶す實に嘉永三年十月晦日なり長英年四十七妻及び四子弁に松下壽酔松下健作等皆捕へらる其の他長英なるを知りて交る者罰を受くる各々差あり妻は閉錮せられ四子及び家財は妻の弟に附せられ松下父子は流に處せらる長英人となり卓犖不羈性酒を嗜み酔へば則ち高談雄辯人の瑕瑾を指摘す醫術より蘭學に入り終に蘭學者を以て家を立つ勉めて政治經濟の學を擴張し醫術の如きは幾んど餘事となすに至れり然れども世人長英の譯書を賞するに當て亦其醫術を賞せざるはなし蓋し我邦西學を導きしものは長英の功實に崇敬すべきなり獄中に在て記す所鳥の鳴く音文辭功妙是れ長英が漢文に巧なると共に亦和文に通ずるの一斑を見るべきなり

雜　錄

左の一編は自由神學校長クレイ、マッコーレイ氏の寄送に係るものなり茲に掲げて同校に入らんと欲するものゝ參考に供す

自由神學校

宣言、自明治二十五年至明治二十六年

自由神學校次回の學期は本年十月第一木曜日即ち六日を以て始業す入學志願者は此の時に於て其第一年級に編入せらるゝものなり、

自由神學校の目的

本校は米國ユニテリアン同盟會の寛大なる好意に依り、左に示す處の目的を以て設立せらるゝものなり、

一　宗教弁に神學の科學的哲學的攻究を振興し、

二　而して其結果を以て人生の實際に應用せんとするものなり、

抑も此等の目的を撰定せし所以のものは、將來日本に於て宗教並に之れに伴ふ事物の教育に從事せる學校にして特に宗派上の管轄より獨立し、且つ單に口碑的信文或は習慣の束縛より自由なるものを起さんとの企望に外ならざるなり、

一　宗教的天性の人に存するは其固有性にして、隨て永久に存するものにして、成熟せる哲學並に科學より得たる處の最良なる智識に依り之を發達せしむる時は、人生に於て必らず有益なる勢力を發成せしむるを得るものなるや明かなり、而して宗教も亦成る可く無智朦昧と之れに伴ふ處の迷信より解脱せざるべからずして、他の諸學科と等しき方法を以て之れを研究せざるべからざるものなり、

二　本校は高尚なる宗教の哲學的並に科學的研究のみに向て設立せしものに非ずして、必竟眞正なる神學、倫理學等を修むるは單に其智識を得んが爲にあらず、之を以て人生の支配する處の一大勢となさんとを欲するものなり、換言すれば本校の教育は宗教的信仰及び正義の實踐を奬勵するに等しきものにして、尚ほ進んで普通社交上の幸福をも增進せんとするものなり

斯の如く本校の目的を表白するは他なし、吾人は日本國人の子弟を本校に招集するに當り、其父兄をして豫め本校の何物たるを知らしめんとするに外ならさるなり、宗教は過去、現在に在て常に人生の大勢力となりしものにして、吾人は將來に於ても亦斯くあらんとを信ず、當世紀に在て人は『果して宗教は世界日新の智識に依て開導すべきものなるや、或は全く太古朦昧の時代に於て行はれし處の=疑ふべからざる又試驗すべからさる=處の教義にして加るに迷信せる口碑に一任して可なるや』の問題に向て熱心に其答辨を促がせしとは過去の歴史に照すも未だ曾て之れあらざるなり、而して日本人民は他の國民に等しく、否な目下日本人は地球上他の國民に比する時は遙かに熱心に此の問題に對して眞正なる答辨を望みつゝあり、高尚なる箇人的品格或は社會的安寧幸福及び國家的威嚴を保持するか、或は全く之れ等を腐壞せしむるかは、獨だに此問

題に對ふる答辨の如何に在るものなり、自由神學校に於て吾人は其生徒に向ひ成る可く之れが適當なる答辨を指示し、最良なる智識、公明なる信仰及び正義のある處を教示せんことを企望するものなり

生徒たる資格、

本校の生徒たるに必要なる資格は、何人にても品行方正にして須らく本校の目的を賛成し、且つ日本の高等中學以上の學校を卒業せるもの、或は試驗の上此れと同等なる學力を有するものは入學するを得、

以上列擧する處に依れば自由神學校は強ち宗教上の牧師、傳道師の候補者養生所のみにあらざるや明白にして、本校は即ち宗教、倫理、社交上の秩序に關し、人生の高尚なる學課を教授せんとの目的にして、各生徒に向ひ卒業の後ち盡く教職に從事せざるべからざるの條件を強ひざるべし、併し教職の人を生ずるも亦其範圍內に在るものなれば、隨て之れが爲めに特別なる準備を授け又教職の候補者を養生するともあるべし、

本校は右の目的を以て其學科を制定するものにして、其生徒たるものは卒業の後「バチエロル、オフ、チヒニテー」の學位を受るを得るものなり、

本校の役員は總て卒業生に對し、教職の地位を與へざるへからざるの責任を有せず、斯の如き契約は總て日本に於ける內外諸派の傳道會社に一任するものなり、

其他通常生徒にして貸費を要する向きは相當なる契約に依り償還の法を定め本校より小額の貸費を受るを得べし、

學課

當年度の學課は、左に列擧する處の諸課目を包括す

一　宗教哲學、（即ち歷史的、哲學的研究）
二　比較宗教學、
三　聖經の批評的研究、（即ちキリスト教義の解釋）
四　キリスト教歷史、
五　日本在來の諸宗教學、（即ち歷史的、批評的研究）
六　學理的倫理學、
七　社交的倫理學、
八　心理學、

九　哲學史、

右の諸科目の講義は敎授マッコーレイ、同ローレンス氏及び講師ドラッパース氏、リスカム氏、ウヰグモア氏及び大西祝氏、佐治實然氏等の諸講師に依て敎授せらる、大西、佐治兩講師の受持の外は盡く英語を以て敎授す、故に生徒たるものは必らず適當なる英語學上の智識を要するは勿論なり、

本校の生徒は此れ等の學科を修むるに當て、其引證用の書籍は本校の書籍室に備付けあれば、之れを使用するを得べし、其他目下米國にて集聚中の書籍も不日到着すべければ、將來本校は有益なる書籍舘を有するを得るものなり本校生徒は何人に限らす束脩月謝を要せず、

目下本校は東京、々橋區加賀町八番地に於て敎授せりと雖も、已に校舍を新築せんとの計畫を以て、便宜にして適當なる地位を撰定中なれば、遲くも本年冬期迄には着手すべき筈なり、

右の外尙ほ詳細に知らんと欲する諸彥は、東京々橋區築地十九番自由神學校書記ローレンス氏へ宛て御通信あらんことを乞ふ、

校長　クレイ、マッコーレイ

東京芝區三田二丁目

博士ラッド氏の演說

ラッド氏はエール大學の敎授にして夙に哲學社會に錚々の聞あり今般日本內地漫遊の途路上州前橋に於て去月十三日の夜左の演說を爲したるよし上毛新聞に見へたり曰く諸君、今晚諸君の前に立て一塲の演說を爲すことは余の最も榮譽とする所也蓋し余は日本なる問題に就て幾多の考へを有するもの而して前橋は日本中の繁昌地なりと聞く這の地の諸君に對し余の考へを演ぶ豈榮譽にあらざらんや

余は今說敎者として諸君に基督の道を話さんとするものにあらず神學者として基督の敎理を述ぶるものにあらず唯一箇の學者として余の專門とする所の心理學上より上帝を信ずるとは人間の全躰に如何の影響を及ぼすものなるや一箇人として日本人として諸君が上帝を

信ずる事は日本國に如何なる影響を與ふるものなるやを研究せんと欲する也

凡そ人に責任の念慮の發達するは其品性を高尚にするものにして其發達の程度に從ひ人の品性に至大の關係を有するは蓋し爭ふべからざる事實なりとす試に小兒及び青年の有樣を見よ諸君の知らるゝ如く小兒は如何なる事を爲すも己れに責任のある事を知らざるものなれば其品性未だ定まらずと云へとも青年に至ては各々相應の責任を感せざるものなきを以て其品性次第に發達せるにあらずや余が本國に於て青年の中放蕩懶惰なるもの少なからず然も一朝其の父を亡ひ母妹を養ふの責任己れが身上に落ち來る時は曩の放蕩者は變して勤勉者となり前きの懶惰者は變して勞働者となる又政治家にして今迄大言壯語無責任の言論をなし得々然たるもの一度び樞要の地位を得國家の大任を負ふ時は萬事輕卒の事を爲さゝるに至る是れ豈責任を感するの結果人の品性に影響を及ぼす證左にあらずや既に然り人の性に於けるも亦斯くの如し故に高尚なる德義ある人とならんと欲せば宜しく責任の念慮を發せしめざるべからず然り而して眞成なる宗教は人の性に責任の念慮を發せしむるものなれば上帝を信ずる事は卽ち人間を高尚にし善良にするものと謂はざるべからず

借問す、何故に上帝を信ずれば責任の念慮を發達し人の品性を高むるものなるや余は素より上帝を信ずるものゝ外責任なしとは云はず宗敎信者にあらざるも往々責任の念慮を見る彼の商人の如き若し不正の物品を賣却せば其の責任己れに來るにあらずや一家の中にても夫は妻に對し、妻は夫に對し責任を守るが故に其の家風克く整ふにあらずや然れども此等の責任は狹隘にして變化し易きものなり何となれば今日幾多の人を雇ひ商業を盛んになし大なる責任を有したるものも商業の失敗より人に雇はるゝものなれば其の責任消滅すれば也又政黨に屬する人も其の政黨解散の不運に遭遇せば其の責任消滅すれば也是の故に余は斯る責任を稱し狹隘にして變化し易しと云ふ所以なり之れに反し上帝を信ずるより生ずる責任は廣大にして假令ひ地位は易る

も政黨は解散するも永久變化することとなし何んとなればば上帝は在まさゞる時なく在まさゞる所なく全知全能のものなればなり例へば今余は前橋に於て演說しつゝあるなり余の友人は之れを知らざるなり余の大學校は之れを知らざるなり然かも在まさゞる所なき上帝は之れを知るが故に余は上帝に對し美しき話をなすの責任あり斯くの如く上帝を信じ責任を感ずるものは自から其性質を高尙にする事を得啻に然かのみならず他人をして己れを尊信せしむるを得る猶ほ放蕩者の一度び責任を感じ品行を改めたるものは自から其品性を高めたると同時に人をして己れを尊信せしむるが如し未だ上帝を信ぜざるもの豈鑑みざるべけんや

熟々惟ふに今や日本國に困難なる問題あり何ぞや曰く五十年後の日本は如何と云ふこと是れなり成程日本は環海の國にして商業上より云へば隨分將來繁盛の地となるべし去れども充分商業を發達し日本國の繁盛を望まば先づ諸外國と條約の改正をなし通商を自由にし併せて外國商人の信用を博さゞるべからず之れを爲すは只だ日本人が正直善良なる商人となるに在り若し夫れ否らざらんか假令條約は改正するも通商は自由になるも商業の發達は望むべからざるなり然り而して上帝を信じ責任を感ずることは人より尊信を受くるものとせば商業上に於ける外國の信用を得通商を盛んにし日本の繁昌を計らんと欲せば須らく上帝を信ぜざるべからず又政治上に於ても今後五十年を過ぎなば種々なる出來事起り種々なる變化あるべしと雖も人民皆上帝を信じて責任の念慮を發達し品性を高め以て不正不義邪惡を爲さゞるに至らば日本の繁榮得て望むべきなり

且つや上帝を信ずる事は人間生涯に大なる影響を及ぼすものなり蓋し人間の生涯には忍耐、勇氣、安樂の三元素を要す而して是等の三元素は皆上帝を信ずるより生ずるものなり請ふ少しく之れを說かん（一）忍耐　夫れ人は前途如何なる障碍あるも如何なる艱難あるも忍耐を以て正義の道を步まざるべからず余は貴國に參りて色々の美術を見、以爲らく日本の美術は忍耐の結果なりと、特に其の最も巧みなる京都に於て數多の神

社佛閣を見しが中に余の感じたる二ッの彫刻ありたり一は鯉の瀧を上る所にして他は獅子の其の子を千仭の谷に落す所なり嗚呼諸君よ鯉は急流直下の瀑を上り獅子の兒は克く千仭の谷を攀づ、是れ實に忍耐の必要を示したるものにあらざるなきを得んや、我々の生涯は美術なり最も高尙に最も正義に生涯を送らんと欲せば前途急流の瀑あるも千仭の谷あるも忍耐以て進まざるべからず而して信毅の忍耐は上帝を信ずるより生じ蓋し上帝は忍耐の母なり（二）勇氣　米國に於て青年の尤も卑む所のものは詐りと臆病なり恐らくば貴國に於ても然るならん何となれば此の二者は孰れも勇氣の敵なればなり、余は腕力を愛す余の大學に於て學生等が球抛げの遊戯を見る毎に余は大に其勇氣を喜ぶなり特に精神の勇氣に至ては余は一層貴重すべきものなるを信ず、正を踏んで懼れず、義の爲めには水火の中にも入るてふ勇氣は更に尊重すべきを信ず、而して上帝は正しき事は必ず成就し、眞理は必ず行ふ者なれば這の勇記を得るには是非共上帝を信ずるを要す（三）安樂酒を呑み悠々世を送るは安樂なり骨折と苦痛の報酬として生ずるものも安樂なり、敢て問ふ此二者何れが眞正の安樂なるか余は後者を以て眞正の安樂なりと思考す、何となれば安樂は苦痛の結果なればなり、換言せば如何なる苦痛骨折あるも夫れに打勝ちて得し安樂こそ眞正の安樂なれ、而して若し上帝は忍耐の母なりとせば此安樂を得るには上帝を信ぜざるべからず

以上の三者は人の生涯に於て最も必要なるものにして基督を信じ上帝を信じ始めて得らるゝものなれば余は諸君に對し勇氣、忍耐、安樂の母たる上帝を信ぜんことを勸告す　・

終りに臨んで一言せん世の人は死と云ふことに付ては仕方なしとて之れをあきらむるもの多し去れども上帝を信ずるものは明白なる信仰を以て死をあきらむるを得るなり即ち正義は最後の戰勝者なりとの信仰を以て死に打ち勝つことを得るなり是れ豈上帝の給物にあらずや

要するに上帝を信ずるは一ヶ人の品性を高め一國の繁

盛を來ずるものなり故に余は諸君に希望す諸君は一ヶ人として日本國民として最大幸福を得んが爲め上帝を信ぜんことを云々と

故伊藤長六氏の遺書

ユニテリアン教徒の一人なりし伊藤長六氏は過般來病蓐にあり養生怠たる所なかりしと雖藥石終に効を奏せざりしよしの悲報に接し其一人の宗友を失ふたるを悲む今左に掲ぐる一篇は氏の遺筐中にありし遺書なりと云ふ我輩今之れを一讀して氏が平生の人と爲りを知り轉た哀悼の至りに堪へず

余は余に約束せられたる運命により今や斯る剛病に罹りたり何れの時に此世を見棄べきやは固より知り得べき限りにあらず然れども人間既に生あり片時寸刻も死の覺悟なかるべからず病者必ずしも病の爲めにのみ死ぬるものにあらず健者また必ずしも定業の生を全ふするものとも限らず必竟生は是れ死の爲めにして死は即ち永生に入るの門なり余は幸にして死生の秘理を開悟し聊か先人未發の境に造詣したるを信ず故に余は毫末も死を懼れ死を悲まざるのみならず却て死を以て靈性に入るの始めとなし喜んで之に就かんことを望むものなり余が安心立命の地は實に此にあり余は今日死するも明日死するも將た百歳の齡を保つとするも胸懷素より清風明月の如くなれば一點天を恨み人を恨むの念なし余が爲めに余が死を悲むの人は幸に余に斯の如き神聖なる觀念あり斯の如き確乎たる安心あるを知り余が爲めに賤ぐの涙に代ゆるに余が化聖成佛の門に入るの祝歌を以てせよ

一余は余が一年中一派の哲學系統を立てんとの希望を有したり而して未だ腹案の不完全なるを以て其一端すら筆紙に上せず余若し不幸にして之を大成する能はざるに死せば蓋し遺憾の最も大なるものなり然りと云へども世間學識に富める人乏しからず假令余が一新説を出さゞるも他に必ずこれに勝るの名論を爲す人あらん社會の損益より云へば余一人の生死などは誠に些細なる事のみ

一余年來大に考ふる所あり全力を奮て地方教育に從事

せんことを期せり蓋し頗る社會の人心の歸向に感慨する所あり且つは今日の所謂教育なるものが全く其趣旨を誤りたるを憂へての故なりしなり然るに今や此剛病に罹り命既に旦夕迫まるの思あり若し不幸にして此目的を達せざるに永眠するが如き事あらんかこれまた遺憾の最も大なるものなり然れども早晩余が志望を達する丈のことは何人の力によりてか成就するの日あるべしと確信す

一余は地教育に從事するの決心を爲したると同時に斷然郷里付知村に退隱するの準備を爲しつゝありしなり而して學校教育に伴ふに一の輕便なる圖書館を創立するの計畫を爲し双方其設備の方法に付き苦慮する所ありしも未だ其端緒にだも着く能はざりし余若し今日死するが如き事あらばこれまた遺憾に堪へざるものゝ一なり幸に余が父にして余が別に遺言する所を許容し多少の基本財産を寄附するに至らば始めて其事業に着手し得べしと信ず而して之れを監理して其設備を全ふせんが爲め余は余が最も信任する服部彌次郎、曾我藤太郎、三浦文太郎、坪井岸松の四氏に托して之れが委員たらんことを希望す

一余が起草したる論文少なからずと雖も多くは時の問題となれる政治上經濟上の事を論議したるものにして充分に余が思想を吐露し盡したるもの少なし故に余が死後に於て遺稿を纂むが如きは殆んど無益の事なり然れども折角經營慘憺の勞を盡したるものを故紙の中に葬り去るも遺憾なれば長六論集四冊其他經濟雜誌、理財雜誌、專門學會雜誌、公友會雜誌等に散在せる論文短評等の中多少採るべきものあらば一括して余が家に保存し置かんことを望む

枕考漫筆は病中の隨錄に係る頗る杜撰なるものなれども誰にか筆を入れて貰へば新聞などに投じて可なり

蛙の鳴聲は病中の歌集なり以前の分は散佚して不詳中一首か二首は歌もあるべし笑草と思へど是れ又紀念の爲保在せんことを希望す

一拙者此度の病氣に罹り候當初より到底全癒の見込は

無之ものと覺悟相定め居候ひしも斯ては今日までに御老躰に限なき御苦勞相掛候上にて又もや如何ばかり御歎きを加へ候やと推し誠に〳〵勿躰なき事の限りに有之候へばせめて御二方の御前途見屆候まではは存命致し度と堅く念じ居候とは云へ目下の有樣にては中々に剛情も張り通し兼ぬる事有之明日をも知らぬ命などと始終心細き考へのみ起り候へば萬が一御老躰に先立ち旅立致し候樣の事ありては後々の事柄等種々御配慮を煩はすべき義澤山に有之候へば筆の自由ある中に思ひの儘を書き付け置候願はくは幸にして此書御老躰の御眼に掛るが如き時なからん事を切望す

一申すまでもなく人間は老少不定にて病人とて必ず死するに限らず達者なものとて何時如何なる變に出遇ふも知れぬものなれば人間として一番に大切なる事はこの死と云ふことを能々心に土臺付け片時も之れを忘れぬ樣に致す事に有之候この事に付ては不肖ながら多年の御厄介にて相當の學識を得候故略ぼ自分丈けの安心は定め居候勿論如何なる哲學にても宗敎にてもトヾの詰りは人間の死と云ふ事を敎ふるに留るものに候へども此等の理屈はなかなか一朝一夕に說き盡し難き事に候へば殘念ながら之に差扣へ置候畢竟人間の生れ來るは自分の爲めに生れ來たるものにあらず又親親の力のみにて生るべき筈のものにあらず況してや自分が生き死の事を如何程思ひ煩ふとも髮の毛程も之を延べ縮むべきものにあらず全く定まれる業因によつて此世に出たるものにて又定まれる業因によつて此世を去るのみ一口に言へば生れると云ふ事は死ぬる事の始めにて死ぬと云ふは即ち其定まれる道に入るの門に達したるものと云ふても差支なかるべし斯く考ふれば人間として死程樂しきものはなし眞に死と云ふ事を了解して死に就くは人間たるもの一樣に持たねばならぬ目的と思はれ候去ればば生命の長短などは固より彼れ是れ云ふべき限りにあらず浮世の名譽や利慾なども勿論三文の價値もなきものに有之候

右にては到底自分が安心の土臺は言ひ盡し難けれど兎にも角にも御老躰に先達つと云ふは誠に口惜しき事に候へとも死と云ふ事は充分に覺悟致し居り少しも苦痛とも悲嘆とも思はず却て非常なる快樂と心得居候間此心のみは充分に御汲取被下無益の悲嘆等致すまじく樣兩人の姉上始め親戚等へも可然御諭示被下度此段只管に願上候

一拙者不幸にして今日にも相果候へば我家の正しき血統相絶へ候譯に御座候此際家督の相續等は如何にも取計ふべきか此事に付ては拙者に於て非常なる大志願有之候一寸御聞き相成候のみにては定めて御驚駭の御事と存候得共次に申陳る理由よく〳〵御熟讀被下御許容被遊候へば拙者死後の本懷之に勝るもの無之と存候大志願と申すは別義に無之拙者萬一死去致候上は野尻の家は斷絶致す者となし凡ての財產を擧て別に書遺置候圖書館の基本財產と致す事に有之候元々右圖書館の設立は拙者年來の希望にして是非とも其成就を見て死に度と存居候程なりしも何分にも計畵少く遠大に有之候故全快の上々々々々と相待居候ひしが今日の有樣にては到底自ら周旋して之を大成する譯には參り兼る事と覺悟致し候間せめてはこの志望だけは何所にても殘し置度と存じ別紙服部氏へ對する書中委細に其顚末殘置候付ては右圖書館は何百年の末までも拙者の紀念として付知村青年社會の知識開發に幾分の補助を與ふる樣に致し度從て年々相當の書籍を購求するの必要もあれば定りたる基本財產を備へ置き其收入にて經濟相立候へば永久に維持の方法も付きたるものと存候百餘年來、も引續きたる家系を絶ち殊に代々の當主たりし方々が非常の辛苦を積まれたる故今日の資產を保つを得たる譯なるに一朝斯の如き大變革を行ふは殊に以て祖先へも濟まざる樣に見へ候へども其實此業にして目的通りに成就致し候節は却て祖先の靈に對し誇るべき廉も候はんかと存候元來人間が財產を蓄ふると云ふは其蓄ふると云ふ事が目的ではなく蓄へたる財產を最も利益の多き方角へ使用するのが眞の目的にて有之候

一生涯爪にて火を燈す程の儉約をして巨萬の財產を蓄へたとした所之を自分の爲めに使はず况して公利公益の爲にも支出せぬ樣なことにては何の役にも立たぬ譯にて斯の如き人間は世の中の厄介物と云はなければならぬ殊更自分一代が如何程に骨を折て蓄財の事を勉めたとて孫子の代まで同樣に行くと云ふ事も請合ひ難ければ實は馬鹿々々しき限りに有之候詰る所財產は世界の血液を循還せしむる器械と云ふても差支なければ之を成る丈利益ある樣に活用さするのが社會に對するの義務なりと云て可然とは存候右の次第なれば西洋などにては大商人や大農家が死する時は必ず其財產の全部又は一部を學校病院圖書館等の爲めに寄附する事が習慣と相成居候夫故に米國などにては今日非常の有名なる大學にて元は全く一私人の遺產より成立たるもの澤山に有之候由屢々耳に致し候日本にては未だ斯の如き習慣無之候へば一口に云ば頗る珍らしき事の樣に候へども全く見込の無き家督を(拙者の眼にては見込ある相續人無之と存候)其儘に致し何の役にも立てずと濟ますよりは少くも一村丈の公益に相成事に致し後世まで先例を殘す樣に致したる方財產處置の目的にも且つは先祖代々の御本意にも違ふまじと考へられ候尚申度事山程有之候へども充分には言ひ盡し難し書外宜敷御推察被下度候(以下略す)

御兩方樣　　長六

○死生の覺悟

死生の悟りが開けぬと云ふは餘り至愚故詳かに云はん、十八の死が惜しければ三十の死も惜し、八九十百になりても、是れで足たと云ふ事なし、草蟲水蟲の如く、半年の命の者もあり、是れを以て短とせず、松柏の如く、數百年の命もあり、是れを以て長とせず、天地の悠久なるに比せば、松柏も一時蠅なり、只伯夷などの如き人は周より漢唐明宋を經、清に至て未だ滅せず若當時大公望の恩に感じて西山に餓死せずば、百迄死せずとも短命と云ふべし、何年限り生きたれば氣が濟む事か前の目當でもあることか、浦島武內も今は死

人なり、人間僅か五十年人生七十古來稀、何か腹のいへる樣な事は遺て死なねば成佛は出來ぬぞ、吾今より當世流の尊攘家へは一言も應答せぬが、古人に對し耻かし敷事はない足下輩若し膽あらば古人へ耻かし、今人へは五月蠅さし、此世に居て何を樂しむか、陳も凡夫の淺猿さ併耻を知らずと孔子曰、志士仁人有殺身爲仁とか、孟子云、舍生取義有也とか云て、見臺を叩て大聲する儒者もある、其うるさいも知らずに一生送るものもある、足下輩も其仲間なりと（右は品川彌二郎氏が少壯の時曾て國事上の議論より生死の覺悟を吉田松陰氏に質したる其答を松陰氏より與へし一篇なりと云ふ）

○原坦山師の終焉

禪門の碩學原坦山老師は去月二十七日午後享年七十四歲を以て溘然遠逝せりと云ふ其死に先き立ち門人遺言を乞ひしに（死だ後ちの事を何にするか）と答へて自から左の書面を認め

拙者義即刻臨終仕候條此段御通知に及び候也

七月二十七日午後三時三十分　原坦山

之れを曹洞宗務局同大學林其他知己の人々へ送り終つて恰も眠むるが如くなりしが凡そ三十分を經て全く絕息したる由にて毫も病ありしにあらず只だ木の葉の枯葉するが如き有樣なりしと宗教社會の一偉人を失ふたるを惜まずんばあらず今同氏の逸事なりとて日本に記する所に依れば（坦山少ふして經子を修め頗る造詣する所あり、帷を下して弟子に敎ゆ、駒込の吉祥寺に學寮あり、年來關左八州禪派子弟の就學の處とす、坦山聘せられて此に經子を講じ、傍ら文章を授く、其講莛に臨むや屢々口を極めて佛法を誹謗す、時の住持に高僧某師あり、今ま其名を忘れたり、夙に禪派の推尊する所たり、坦山の屢々佛道を誹罵するを聽き、一日從容坦山に謂て云く、君の議論を聽けば、知ずして我道を斥くるもの丶如し、我道元と斯の如く妄ならざるなり、老衲君と斯道を論ぜんと欲す可ならん歟、坦山曰く可なり、老僧又謂て曰く過ちて改むるに吝なるは君子の道に非ず、又佛者の道に非ず、吾とも今道を論ず、我

說非ならんか、衲應に還俗して君に從へし、若し又君の論究せんか、宜しく入道して衲に從ふべし、坦山曰く可なりと、乃ち共に道を論ずる事一宵一日、坦山の言窮まる、老師侍僧を呼で曰く速に原君の頭髮を剃薙せよと、侍僧命に應じ剃刀を把りて直ちに坦山に向ふ、坦山無言、頭を延べて只だ其爲に任ず、これより坦山大に佛道を講じ、後ち終に妙諦を得たりと云ふ

明治五六年の頃か、敎部省各宗に命じ共同して宣敎に從事せしむ、坦山亦擇まれて講師となる、坦山講敎每に心外無說を說き、一心以外別に所謂阿彌陀なるものあらずと云ふ、眞宗の徒之れを聞て憚ばず、衆論囂々坦山即ち講師を釋て去る、これより市に隱れ賣卜に化して口を糊すること數年、其間禪林一派の徒殆んど知らざるもの丶如し、後ち大學に於て印度哲學の科を設置するに及び之れが講師を求む、坦山の右に出づる者あらず、乃ち請て之に托す。禪派の幹事之れを聞き俄かに之れに敎正を授く、坦山笑て曰く、賣卜に隱るれば一鉢の飯米なく、大學に師たれば敎正の袈裟ありと

坦山居常佛仙論を唱ふ之を聽けば世の所謂佛仙論に異なり、其說に謂へらく正覺を得たる之れを佛と云ひ、天壽を全ふする之れを仙と云ふ、佛や仙や人々以て庶幾すべしと寔に有見の言なり

坦山嘗て語て曰く

余少して越後に遊ぶ、越人余に告けて曰く某村（今其名を忘る）に近頃一老僧の菴を結びて來り住するあり、日に菴を出で丶托鉢す、僅に一二合の米を得れば乃ち歸り去て菴に入る、鄕人其德を慕ひ近ごろは布施を齎らし其菴を訪ふ者多し、老僧一日の食外には嘗て一芥も受くる所あらず、而も食を饋る者の絕えざるが爲めに頃ろは復た戶外に出でずと余聽て之れを奇なりとし、往て之れを訪ふ、其人鶴髮童顏齡七十左右、道を說く深遠幽玄、寔に聞ける所に違はず、乃ち從て道を問ひ益を得る事極めて多し既にして辭して訣る、去後之れを人に聞けば老師一日瓢然菴を棄て丶去り、其行く所を知らす、これより二十年を經、一日小田原の市に入る、老僧の行脚し

來たる者に會す、之を諦視すれば廿年前越後某村の溝中に余が爲め道を講ぜし老師なり、相見て大に歡び、携へて一寺に投じ、對話一夕、復た東西に別る、此時老師の顏容音聲身躰の健と毫も昔日に異なるあらず、是れ我所謂大壽を全ふするの仙者ならんと坦山當時其人の名をも並せ說く、惜い哉今ま亦之を忘れたり

明治十五六年の頃なりき、越中一僧東京なる曹洞宗の宗務局に出で、一姦僧の爲めに住寺を奪はれたることを訴へ之が審理を求む、宗務局に坐するの諸僧亦多く姦僧の賄賂を啗ひて其曲直を明にせず、時に坦山一宗の重ずる所となれば、寃者往て之れを坦山に訴へ其救護を求む、坦山之を却けて曰く、佛徒にして家なきは佛徒の常なり、吾人已むを得ずして時ありてか寺觀を管す、元と是れ吾人の望む所にあらず、今ま人あり子に代りて觀寺の任に當る、子たる者亦た之れが爲めに歡ぶべし、何の苦しむ所ありて亦これを訴ふることを爲すやと訴者默して退きしと

○三條公父子の逸事

京都府下綴喜郡上津屋村伊佐松太郎氏の家は其昔後醍醐天皇笠置山行在の時馳せ集まりて官軍に從ひし勤王家伊佐九郎次郎氏の後にして氏は其末裔なるが爲め先年京都府士族に列せられたり然るに同氏の邸地は三條家の領分にして安政五年の夏別格官幣梨木神社祭神贈右大臣三條實萬公幕府の忌諱に觸れたる時落飾して澹空と稱し右の伊佐氏が家に閑居せしが翌安政六年五月徒然の餘り左の歌を詠じて同家に贈りたり

朝な夕な心にかゝる浮雲の
はれまだになきさみだれの頃　實萬

贈正一位實美公は實に父の卿此の家に寓し玉ひし砌り同家に誕生ありしものにて同家は三條家には深き因緣ある舊家なれば兩公の詠歌數多ある中に實美公の梨木神社祭神の五月雨の詠歌あり

上津屋村なる伊佐が家にやどりて
昔時を思ひ出でゝ

こゝにきて昔を思ひいづみ川

かわらぬ宿をみるぞうれしき　實美

實萬公皇威挽回に力を盡し時運至らず終に落飾の身となり皇都の外に隔てらるゝことゝなり其年十月六日に薨去あり未だ皇威復古を見ざりしと云へども實美公父の忠誠を繼ぎ終に今日の盛世を見るに至る伊佐氏は世々農を以て業となし今尙ほ其業を繼ぎ居ると云ふ

〇德行美談　（第二回）

〇婦女の龜鑑　島根縣邇摩郡靜間村に竹下廣八と呼べる者ありその妻ユミは資性温良にして平素行儀正しく幼より父母に事へて孝なりしが十一歳の時母を喪ひ十五歳にして夫廣八を迎へたるに翌年廣八は甚しき黴毒症にかゝりたるにぞユミは日々懇篤に看護して種々治療に手を盡せしも其甲斐なく益々難症となり果ては起居さへ自由ならざるに至りしのみか二十五歳の時には父さへ死去して一家漸く貧困に陷りたり廣八は病床にありて日夜ユミの辛苦するを見最と氣の毒に思ふ餘り頻りに夫婦の緣を解かんとを諭せしもユミは之れを肯んせず一旦夫婦の緣を結びたる上は如何なる憂き目を見るも今更ら妻として夫の難儀を他所にするは婦の道にあらずとて其れより一層治療に意を傾け自分の衣服より家具等迄も賣却して藥石を求め居りしが終に家務をば一切養子に托しをきて己れは夫を扶けつゝ四國九州等を巡り神社佛閣に詣てゝその平癒を祈るなど千苦萬艱貞節を守ること十有餘年間實に一日の如くなりしが幸ひにも文久年度に至り廣八の病は全く快服したるに依り是れより夫妻共々また家に還り業を勵み茲に再び家產を興し今は地所一町餘畝歩を有し一家十八和合團欒の樂みを享くるに至りしは實にユミが女德を全ふせしに因るものなりとて此程同縣知事より木杯一箇を賞賜せりと云ふ

〇貞婦賞金を賜はる　新潟縣中蒲原郡石山村岡田彌惣治妻筒井ミヨ稟性温厚にして明治三年彌惣治に嫁して より家政を一身に負擔し孝貞の道を盡す同十八年以來病父の看護に怠たらず傍ら農業に黽勉し或は菜蔬を鬻ぎ或は傭役に服し其取得を以て病父の嗜好を進むる等辛苦經營其志操八年一日の如く鄕黨稱揚して措かず實に奇特の至りなりとて今回本縣より金三圓を下賜せられたりと

〇孝子　鳥取縣鳥取市新鑄物師町岡島文三郎長男卯太郎(廿三年)なる者あり幼にして母を失ひ其後繼母の養育を受けしが其性德行至孝近隣の賞賛して止まざる所なり總べて繼母子の間は思しからざるを以て普通とな

せる今日斯る善行あるは特に嘉みすべき事なりされば
にや同町受持巡査は豫て彼れが行跡に注目しありて其の父母に事ふる實に至らざるなく唯感ずるに堪へたりとて目下其筋へ上申し之れが褒賞を請求せんとその手續を爲し居れりと

○孝子木杯を賜はる　新潟縣西頸城郡須澤村小川太次郎は稟性篤實品行方正にして養母に事へ明治十八年以來病母の看護に力を盡し家計裕かならざるも其嗜む所之を供給し或は寺院に背負ふて參詣し說敎を聽聞せしむるなど其孝行八年一日の如し鄉黨稱揚して措かず洵に奇特なりとて同縣知事より木杯一組を下賜せられたりと

○孝子の上申　新潟縣古志郡東山村大字小栗山第六十四番戶平民黑崎六藏(四十)は明治五年父團藏(八十)に代りて家督を相續し同八年母を喪ひしが性至孝にして能く父に事へ極めて貧しければ他人の田地を借受けて耕作し餘暇には近傍へ出でゝ日雇稼をなし居るが曾て人と物爭ひせる事なく一意父に孝を竭し耕作又は日雇稼に出づる時は妻に父の奉持を托し歸れば先づ第一に父の無事なる顔を見てこよなき歡となし父の佛寺に詣るときは我が背に負ひて伴れ行き己は家に歸りて手仕事を營み父の歸る比には再び寺に詣り父を脊負ひて歸るを例とす昨年父が八十八の祝をなすにも平生己れが働き溜めたる金にて村一同へ夫相當の祝を配り又父が年少の頃より植へ置きし杉のいたく成長したるを以て新家を建築し父を此處に住ませんとて此頃は專ら其建築に取掛り居れり又父に奉ずる食物は家貧なれば心に任せねど此も勤めて新しきものを選び衣類の如きも成るべく新調のものを父に上り己は父の古着を受けて着用し居るとぞ同村長は此程斯孝子の事を縣知事に具申したりといふ

○社寺院統計

左に記す社寺及び神官と住職の數は其筋の調査に係るものなり蓋し其概數を示したるものならんと云へども前號に掲載したる宣敎師配置の數と比較せば(宗敎)讀者の又一參考ともなるべきか

神宮	一	神官	六十一
官幣大社	三十四	同	百二十三
同　中社	二十四	同	六十三
同　小社	八	同	十六
別格官幣社	二十一	同	五十八
國幣大中小社	七十五	同	二百〇九

府縣社	四百五十七	同	七百三十九
郷　社	三千四百六十七	同	四千〇三十二
村　社	五萬二千四百二十三	同	九千〇三十五
境内各社	十三萬六千七百四十二	同	三百〇七
合十九萬三千二百四十二社		合	一萬四千六百四十三人
天台宗	四千八百〇九	住職	二千八百〇五
眞言宗	一萬三千〇六十四	同	七千〇六十七
淨土宗	八千三百〇一	同	五千九百九十二
臨濟宗	六千百五十	同	四千二百五十二
曹洞宗	一萬四千七十七	同	一萬千百五十六
黄檗宗	六百〇三	同	三百十六
眞　宗	一萬九千百四十二	同	一萬六千八百七十六
日蓮宗	五千〇六十四	同	三千五百五十二
時　宗	五百十五	同	三百六十五
融通念佛宗	三百五十七	同	二百〇〇
法相宗	四十八	同	十四
華嚴宗	二十一	同	十
境内佛堂	三萬五千九百五六	同	十
合十萬八千百〇九ヶ寺		合	五萬三千六百〇六八

〇寺院僧侶の減少

寺院僧侶の減少は未だ佛教全體の盛衰をトするに足らずと云へども亦世態人情の變遷を察するに足るべし聞く京都市に於ては今より四百年前寛政四年の統計に依れば各宗寺院の數は千二百二十一ヶ寺ありしが明治廿二年の統計には八百九十七ヶ寺となれり若し之をして實或は實に近きものとせば前後四百年間に於て凡そ三百二十四ヶ寺の減少にして即ち毎年殆んど一ヶ寺減少の割合なり若し此趣きを以て將來を推すときは今より九百年の後には全く京都市内に佛寺の跡を絶つに至るならんと云ふものあり

〇天主教の信者

日本全國に於ける天主教信者は六萬五千三百八十餘人あり宣教師は八十三人にて傳導師三百九十餘人あり大教會二十八小教會二百十七聖堂七十六假聖堂八十八大學校一、小學校五十九、神學校三、女學校三、育兒院五百十九、手工場十八、施藥院十二、施療院三、

國體發刊の趣旨

敬神家の計畫中なる國體新聞は今度左の如き發刊趣旨書を公にしたり

國體は本朝歴史の實跡に徵章し天壤無窮の皇運を萬世に扶翼せんとする一の日刊新聞なり故に名づけて國體と稱す

國體は明治廿三年十月三十一日の勅語を以て綱領となす若し之れに背かんか國體は之れを正すに侃々餘力を遺さゝるなり教學若し之れに悖らんか國體は之れを矯むるに堂々譴責を怠らざるなり百事百行皆又然り
國體は政府に諂はず政黨に衒はず硬軟緩急只實事の問題にありて豫め眼中に敵なし故に偏せず黨せず立論主として公平無私を期す
國體は船頭の逃ぶ所馬蹄の極まる所之を愛撫し之を抱養す是れ皇祖皇宗の懿訓なり智識を世界に求むるも亦此聖謨に率由するに外ならざるべし故に我國體は此の聖旨を奉職して其の所長を萬國に取るは敢て之れを拒まざるなり
以上羅列する所は發刊の前途に際り將來に嚮ひて僅々其要領を誓ふのみ萬丈の氣焔を吐き八洲の光輝を放たんとするが如きは發刊の曉を竢ちて知るべし

○訓誡

人の一生は重荷を負て遠き道を行くが如しいそぐべからず不自由を常と思へば不足なし心に望み起らば困窮したる時を思ひ出す可し堪忍は無事長久の基ひ怒は敵と思へ勝事ばかり知てまくる事を知らざれば害其身に至る己れを責めて人を責めるな及ばざるは過ぎざるよりまさると(德川將軍家康の訓誡至言なりと云ふべし)

○無鐵砲

一日豐太閤侍臣に向ひ、世の中に何物が最も恐るべきぞと問ひけるに、甲は虎狼ぞと答へ、乙は獅子ぞと答へけるを太閤うちけしして虎、狼、獅子もまた恐るべけれども未だ最も恐るべきものにあらず、世の中に無鐵砲ほど恐るべきものはなしと、示したりと今我輩は太閤足下に向て反問せん足下の朝鮮征伐は如何んと

○北海禁酒會

北海禁酒會にては去月七日午後七時半より札幌區南三條西六丁目なる札幌會舘に於て月次會を開き會員青木侚德同本多澄雲會頭伊藤一隆氏等の演説あり終て更に會員の相談會を開きし時に同會書記須々木邦造氏の報告に據れば同會員現在數は千五百人にして本年前半期間の新入會者三百十七人内除名及び死亡二十一人なりと

○弘法大師一代記の演劇

眞言宗の僧侶田中某は耶蘇教々運の盛なるより大に苦心し唯に説教のみにてはマダルシとて宗祖弘法大師の一代記を演じ身自ら大師となり門弟廿餘名を引連れ演劇を開くことに一決し去月六日赤坂の福錄座にて開場

したりと云ふ其の布敎に熱心なるは嘉すべしと雖も其の手段卑野言ふ可らず批評の價値なし傳へ聞く某は爲めに現住職を奪はれ僧籍より退去せられたりと當然の處置と云ふべし

○社會敎育論

凡そ敎育なるものゝ階級を大別すれば三つとなる最初を家庭の敎育と云ひ其次を學校の敎育と云ひ又其次を社會の敎育と云ふ一國の良民たるものは必ず此三段の敎育を經過せざるべからず而して其何種に屬する者を最も大切なりやと云ふに何れも皆甲乙なきが如しと云へども之れを人事の實際に徵するに如何に家庭の敎育進歩したればとて又學校の敎育高尙なればとて社會の敎育にして之れと其歩を同ふせざる時は家庭も學校も到底其成果の著しきを見る能はず山名次郎氏は玆に見る所ありしか近頃社會敎育論を著はし學校敎育が時の社會に背馳する所以の弊害を痛論せり所論の細目に就ては間々異論なきにあらずと云へども其大體に至つては我輩の贊成する所なり全著を十章に分論し初めに社會敎育の必用を說き以下の諸章、論何れも社會に關せざるはなし即ち左に其序文の要領を記す以て本論の全躰を窺ふに足るべし曰く敎育の目的は個人の幸福を增進し社會の風紀を維持し以て國家富强の基を開くに在り然りと雖百般の人事一として社會の現象反影にあらざるなし、而して敎育も亦社會人事の一なれば之に依りて社會の改良進歩を圖らんと欲せば苟も敎育者たるもの敎育と社會との關係を明かにせざる時は其目的を達すること能はず、之れと同時に時の社會にして風紀紊亂し組織善良ならず敎育の目的と氷炭相容れざることあらば是れ亦敎育の目的を達する事能はざ故に敎育と社會とは輔車相依り唇齒相助け敎育は社會を敎育し社會は敎育を補助する所なかるべからず熟々維新以來我日本社會の有樣を按ずるに世態人情の變化啻だに桑滄のみならず、百般の事漸く複雜を加へ亦た昔日簡易の日本にあらず、而して之と共に人心の澆季德義の破頽愈々增々窮りなからんとす。蓋我政府の心を敎育に用ふる深しと云ふべし我人民の敎育に於ける亦た熱心なりと云ふべし、然り而して學校敎員の云ふ所を聞けば假令學校に於て如何に懇篤丁寧なる敎育を盡すも其甲斐なしとて浩歎大息の餘り熱涙を揮ひ苦情を鳴すもの滔々として皆な然らざるはなし是れ他なし我社會の制裁風俗儼密ならざるの故にあらずや、去れば此時に當り眞に敎育の實施普及を圖らんと欲せば大に社會の

風俗を一洗し勉めて教育と背馳する所なからしめざるべからず、而して之を爲さんと欲せば先づ社會上流士人の自ら克己率先して社會に善良なる。風紀を作るに在り、是れ我輩が本書を草する所以の一なり。世の進歩するに從ひ貧富の度漸々懸隔して富者愈々富み貧者増々貧に而して貧者日に多きを加へ是等の細民は無學に一生を終へ遂には衣食の道を得る能はず胥ひ率ひて黨與を爲し其甚しきものは或は發して社會黨となり共産黨となるに至る、其形跡既に歐米に顯はれ今や彼國識者の大に注意する所となれり、而して之を未だ發せざるに防がんと欲せば社會の組織をして學校に昇らずして教育の德澤に浴せしむるの道を講ずるの外あるべからず是れ我輩が本書を草する所以の二なり且夫れ人の道を知り學を講ずる之を行ふて其實を擧ぐるにあり、然るに滔々たる社會の俗情は其道を枉げ其の學を晦まし其志を行ふ事能はざらしむるあらば是れ實に人世最大の遺憾と云はざるべからず、日本今日の社會は惡聲惡臭世を擧げて然らざるはなし君子の心を以て之を聞き之を見る時は一日寸時も安處するに堪へざるもの多し、然れ共風潮の勢は一人一個の能く左右する所にあらず、茲に於てか定見なきものは之に傚ひ識者も止むを得ずして之に從ふに至る淺間敷事の限りと云ふの外なし而して其因る所を究むれば我日本社會風紀の紊亂維新以來俗をなして矯正する所なきが故なり是れ我輩が本書を草する所以の三なり云々と

彙報

○第一ユニテリアン協會

第一ユニテリアン協會に於ては暑中炎熱の候にも拘はらず毎日曜日には必ず内外人の演説會を催し終つてユ教に關する種々樣々の質議問答等あり毎會相應の來會者もありて自然に心を同教に傾くるもの增加の趣きありと云ふ去る三十一日の日曜日には(讀學佛具眼鈔)と云ふ問題にて同書の見解に付佐治實然氏の爲されし一場の演説は頗る聽衆に滿足を與へたる由且つ自今折々同氏の演説あるよしなれば時に氏に乞ふて其論文を紙上に掲載することあるべし

神田佐一郎氏は教用にて先般參州豐橋に赴むかれ同地の有志者に接してユ教に關する種々の問答ありたるよし

論林

宗教の扶堅者

古莊三郎

大凡そ宗教を扶堅せんと欲するものは。豪膽の氣。救世の志なかるべからず。苟も此慷慨なく。此志操なく。漫りに宗教扶堅者を以て任ぜんとするが如きは。非望の甚しきものにして。實に宗教の罪人たるなり。今日宗教の勢力盛大ならざるにあらずと雖。之を實際に徴し。之を統計に照すに。昔時に比して萎靡不振の觀あるは蔽ふべからざる事實なりとす。宗教家たるもの深く考へずして可ならむや。

それ士の最も愧る所のものは。身を殺して仁を爲す能はざるに在り、況して人。職に在りて。其職の爲に身を捨る能はず。苟且偸安。唯だ生命是れ惜み。女子の所爲を學ぶ者に於ては。敢て評すべき言なきなり。軍人の社會に尊敬を受る。其軍人たるが故にあらずして其生平決死の生涯を送るにあり。一度將の命降るや。其何故たるを問ふことなく。白刃の交る所。或は彈雨硝雲の中。驀地に走せ向ふなり。彼は云ふ。死を知れども生を知らずと。其豪膽の氣。其勇壯の心。是れ實に軍人の眞價たるものなり。若し彼れに敵を見て走るの自由あらば。世人決して尊敬の意を表せさるべし。死＝死は實に軍人の冠たるなり。宗教の扶堅者は心靈界の軍人なり。世間幾多の人を罪惡の敵より救ひ出さゞるべからず。此敵や最も強大にして。人を滅亡沈淪の淵に沈め或は人を罪惡の囹圄に捕へ。其勢當るべからず。之を救ふ果して誰の任なる乎」或人曰く宗教上最も大切なるは信仰の心なり。信仰あらば勇氣も起るべく、叉身を犧牲に供するとを得べし、故に祈禱と斷食を以て其信仰に至らんことを願ふべしと。是れ一理あることなり。然れども人苟も自己の決意なく唯だ他に求めて茲に達することあらんや。信仰とは人の決意の稱に他ならさるなり。決意は勇氣あらざれば起らず、

勇氣ありて初めて死を怖れざるの信仰の結果あるべし、勇氣は獻身的の行爲の根本、宗敎的動作の原力たるなり。然れば宗敎の扶堅者にとりて最必要なるものは豪膽の氣力是なり。名譽、權勢、富貴、利達を離れて淸貧の生涯に安んずる勇氣なきときは能はさるなり。身を挺して世の人を救はんとの大願も勇氣なき人は能せさるなり。吾人は常に義を好めども、勇なき故に常に世を恐れ時を憚る。此慷慨は實に大切なるものなり、宗敎の扶堅たるもの勇氣なくして何ぞ能く其職を全ふするとを得ん、宗敎の生涯は實に勇氣の生涯たるなり、身を敎職に置き且つ宗敎の扶堅者を以て任するものは常に勇を養はざるべからす、今や宗敎の役者漸く安逸を貪り、俗人と共に榮利巷に走らんとす、宗敎の衰頽決して不思議にはあらさるなり、

熟々紀元前の人と第十九世紀文明時代の人とを照比するに。人の位置に於ては更に變ることなし、今日に在ては幾多の機械發明せられ。深淵なる哲理、玄妙なる學說解明せらるれども。個人の罪惡。社會の惡事更に其跡を絕ず。詐僞、詭譎、竊盜、凶殺、不孝、不悌、不情、不慈、其他敗德の所業枚擧するに遑あらず。この人類の在らん限り、此社會の存する限り。誰か宗敎を無用なりと唱ることを得ん。實に惡と罪とを巧に隱蔽せる人類は。宗敎の力に依らされば善美高尙なる位置に進む能はざるなり。然れば宗敎は吾人にとりて一日も缺くへからざるものにして。恰も糧の人に於るか如く。人の生命なりと云ふとも敢て誣言にあらざるなり。此能力ある宗敎、此至重なる宗敎。今や凡庸の手に弄せられ。無氣無力者の、玩弄物たらんとす、豈に能く光輝を放つことあらんや、宗敎は實踐の敎義なり、空議空談にあらず。故に英靈底の漢之を唱ふれは沛然として人心を濕ふし。俗人の手に觸れ愈々敗腐を極む、然るに世上往々宗敎を誤り認めて、愚夫愚婦の道とし。識者の信ずべからさるものと定め、故に如何なる人の是を傳ふるも敢て咎めす。全く之を不問に惜くが如し、是れ大なる誤解なりと信ず。宗敎は天下大通の道なり、然れば其繫るところ廣大にして。又其旨甚た深し、覩

よ一事一業を遂る中々容易の事にあらず。此大道を論とす宗教の扶堅者にして。美食を求め、大厦を喜び。生命を惜み。安逸を願ひ。冬は爐邊に眠り、夏は涼しき地を擇り。悠々閑々の人の敢て能する所にあらざるなり。初め佛道の我邦に傳るや、高貴の人多く是に歸化したれども未た一人の是か爲に身を捨てゝ、其妙味を擇りしものなかりしが、世降りて漸く其の深意現れ身を佛門に捨て、誓て衆生を濟度せんとの大願を起すもの出來にけり。最澄、空海の徒實に其人なりとす、此二人は天下の大豪傑にして、佛の慈悲を說くとゝもに自から之を勤め。遂に其精神は發して叡山根本中堂となり。高野山金剛峯寺の大伽藍となり、信徒を得る幾百萬。勇氣凛然向ふ所敵なく、六十州の草は其法の風に偃せり。今日の佛教は二師の賜と云ふべし、嗚呼一片の丹心凝つて献身的の生涯と作り、信念の發するところ安脚の慈悲心となり、血涙の注く所。是れ佛教の領地なりし。今より之を思へば其德實に富嶽の高きよりも高く。勇氣勃々大川の決するよりも激じ。今日の凡僧是を思ふて豈に愧死せざらんや、二師は實に豪傑なりし。由之宗教の生涯を歩むことを得たり。降て親鸞、日蓮の二豪傑あり、此の二師は實に亂世の中に生れたれども衆生救濟の大願を起し、劍戞聲々の中に稱名を念し。傳道の困難敢て之を意とせず、道を守り、節を持し、害の爲に怖れす。利の爲に屈せす諄々として佛道の奥義を講せり。日蓮云へるとあり、予程法華經の爲めに苦められたる者はあるまじ。島に流さるゝ三度。難に逢ふこと三十餘度と、彼れが他宗教を駡りて自法を弘布したるの勇氣、世を救はんが爲めに盡したるの業、實に感歎措く能はざるなり、信心堅固なる僧侶は當時幾萬もありしならん、然れども日蓮獨り弘教の功を奏せり、親鸞も亦能く大宗旨を扶堅せり。是蓋し偶然に玆に至れるにあらず。由て大に來るところのものあるなり、

抑宗教の扶堅者たるに必要なる性格は先きに陳へたるが如く豪膽の氣力、大海の度量、捨身の氣質これなり、覗よ釋迦牟尼が二十九歲にしてカヒラヴアスター太子

の位を捨て。最愛の父母妻子を振り棄て。宮殿樓閣の美を惜まず、ウルウエラの山に遁れ。五年間の難行苦行、食を絶ち道を討ねたり。是れ何の爲ぞや。惟だ人を悲哀痛苦の生涯より救出し之れを「ニルヴナー」(涅槃)に至らしめん爲めなり、其苦心其勤勞實に今日より想像するだも能はざるなり。爾來其敎の爲に盡したる實に言に盡し難し。野は彼が床にして。天は彼の覆なりき、此れ佛陀の佛陀たる所なりとす。基督佛陀に遅るゝこと六百二十三年ユダヤに生る三十歳にして救世の志を起し。荒野に逃れて靜かに道を修し、心を練る三年有餘一旦豁然悟る處あり。一家の説を爲して傳道す。猶太敎徒大に之を嫌厭し、迫害攻撃至らざることなく、これを殺すにあらざれば已まざりし。然れども敢て之に屈するなく。侃々諤々正義を説きて。人を服せしめ。救世を以て其任とし。遂に猶太人の暴虐の手に捕へられ其敎理の爲めに斃るゝに至れり。其勇氣。其精神。其豪膽、其自信の强き。實に言を以て語り難し、

如此宗敎は皆豪傑の創設するところにして。又豪傑にあらざれば之を扶竪する能はざるなり。近年に至りては宗敎の扶竪者漸く其價値を減せり、是れ宗敎其物が次第に其勢力を減殺せらるゝの原因にして。實に悲歎に堪へざる所なりとす。今にして宗敎の扶竪者たるもの深く玆に鑑み。獻身的の覺悟を興し、斷然勇を鼓して、其職に向はずんば。宗敎は増々其光を失ふに至らん、富留那の辯、ソクラテスの智。敢て宗敎者に入用ならず、勇氣膽力、是れ今日に必要なるものなり。言行の一致せざるも勇氣なきに由るなり。身を捨てざるも勇氣なきに由るなり。高壇に登りては巧に慈善の美はしきと、人互に相愛すべきを語れとも、其身は敢て之を行はず、慈善も相愛も皆是れ人の爲にして。敢て己を誨ゆることなきときは、是れ僞善者にして。決して宗敎を説く人の行爲にあるまじきことなり、

今日宗敎扶竪者たる人の上を見るに、吾人の意に快とせさること尠なからず、又往々其性格なくして、惟だ習慣的に此大敎職に就くものなきにしもあらず。豈に

慷慨せさらんとするも得けんや。宗教は神聖なり、侵すべからす、今や俗人の爲めに其名を害せられたり、宗教の前途實に思ふへきなり、

宗教の扶堅者の責任如此大なり、宜しく天下の憂ひに先ちて憂ひ、天下の樂みに後れて樂むの心あるべし。幾多の貧民は一の慰籍なくして血涙に咽鳴す。之を救ふ人なき乎、罪尙未だ社會の中にあり。豪膽なる宗教の扶堅者起つて祖師の跡を學べ。榮華歡樂は爾の望むべきものにあらざるなり。高壇と祈禱を以て滿足する勿れ。今日起つものは誰れぞ。耶蘇教佛教徒中起つて宗教の眞扶堅者たる者はなき乎、

ゆにてりあん教に付

エッチ、エー、ホワイトマーン

「ゆにてりあん教」は單に人の信仰より成立するものなるか或は思想的一種の運動なるかと云ふに比較上寧ろ前者にあらずして後者に屬するものなりとは云へども尙ほ叉積極的信仰の多分を有するものなり而して其消極的なるは未だ新らしき信仰の成立を見ざるに先ち徒らに舊物を破壞するを拒否する場合に限ぎれり此點に付き吾人は先進の改良者と其意見の異なる所あるを見ず蓋しヂーサス、ポール及ルーテル等は何れも古來有名の改良者として世に知られたるものなるが彼等は常に數多の迷信に反對して之れを打破し以て其の正覺を期したるにも拘はらず之れに代用する更に一層の善良なるものを見出すに非ざれば容易に舊物を抛擲することなかりし其の動作誠に着實なりと云ふべし今日吾人の爲す所叉過激無遠慮なることを誡め勉めて着實なる彼等の動作に傚はんと欲す蓋し破壞唯だ其の一事は本來吾人の望む所にあらざればなり然れども其力の及ばん限りは人の心に眞理の光明を放ち之れをして人生至善の境界に達せしめんことは常に吾人の勉むる所なるを以て自然に古き信仰の衰へて其の迷信の散ずるを見る時は叉甚だ滿足せざるを得ず就中眞理の探究に依り其の結果として假令宗旨の舊說に抵觸し之れを打破することあるも爲めに現時將來に於ける人間の生活に關

する諸種の疑問を解くの助けを得ることあらば吾人は其探究し得たる眞理の光を毫も忌避することなく益々進んで其奥妙に至らんことを勉めざるを得ず或る論者の如く徒に眞理の探究を避けて不學自から甘んじ又他をして曚昧ならしむるは吾人の决して望む所にあらず唯だ吾人は天帝より賦與せられたる心の力を用ひて神と人との間及び同胞相互の關係は果して如何なるものなるや正確に之れを了解せんことを勉むるものなれば假令從來眞理として人の異義なく信用せし事柄にても爾來探究の結果に依り其果して眞理にあらざるを發見するときは斷然之れを抛擲するは吾人平素の覺悟にして又敢て怪むに足らず凡そ事物の進歩に際し無用無益の物質を廢棄するは固より免る可らざるの順序にして宗旨上の事も尙ほ又斯くの如く此の順序に從はざるを得ず蓋し宗旨は一種進歩の力を有するものなりと云へども其力は宗旨自から有するに非らずして實に人力の研究を要するものなれば人若し迷信固執の弊を一除して虛心平氣に沈思熟考して之れが探究を怠らざれば常に宗旨の默示則ち神及び天顯の示現を得る事難からざるを信ず

夫れ斯くの如く宗旨の進歩は宗旨自ら爲すものにあらずして人の力にありとの意見は當今普通の說に異なり彼の幾千年以前の所述に屬する記錄を以て信仰の基礎となし宗旨一切の事は皆之れに依て定められたればとて苟も之れを是非して其の當否を探究するを唯た之れ憚る所のものに在つては固より前記の諸說に反對ならんと云へども右記錄以外の事物に依つて眞理の實相を發見し其實相に導かれたる吾人の思想は智識狹隘なる數百年以前の人々が不完全なる道理と事實に基づき書き綴りたる其記載の示教を以て一定不變の者なりとして信奉する能はざるを如何せん、抑〻聖書は吾人謹んで之れを尊敬すと云へども其の之れを尊敬すると同時に又其の書中の事柄を是非辨別することなく一切之れを妄信するは固より吾人の本意にあらずして且つ尊敬の本意にもあらざるべし當時人性の狹隘にして人智の未だ進まざる今より之れを見る時は聖書中往々欠點あり

又眞理あり玉石混合一概に之を非とする能はざるは勿論又是とする能はずと云へども眞理の光りは輝々として書中の一部に現はるゝを見る然れども其の光は狹隘なる人性に依り稍々屈折せられて十分の光を發するを得ず故に吾人は之れを目して幾分の價値を存したる眞理となす凡そ完全なる眞理たらんには其眞理は人心に通じ意思及び感情と相和して之れを支配するに至る、人若し默思熟考して神の靈妙なる言葉に接するときは其嚴肅にして且つ情愛深き音調は自然に其人の品位を高め其高められたる品位は其信仰と調和し希望と愛情をして更に高尙の度に至らしむべし而して之れが爲め人は其天性を害せらるゝとなきは勿論、思想、想像、感情、是等三者の働きを平均且つ靈妙ならしむべし時に彼の人心中に浮現する一閃の光りは之れ即ち自然の光明にして其光明の暗所に達すると同時に人の名譽、意思、嘆美及び思考に觸れて之れを喚起することある其光明は何れの點より來るも新らしき眞理の一たび人の心に發して其活働愈々大なる時は又愈々其の意思想像を左右するに至るべし偖て斯くの如くにして吾人の疑問は聖書の全部に涉るにあらずして唯た其の眞理と認むる最良の部分にあり而して其眞理は何れの點に存するか探究勉めて選ぶ所なかるべからず約して之れを言へば聖書中唯た其眞理にして且つ永久の部分を選びて之れを採用し其の事の虛妄にして一時の現象に屬するものは一切之れを拋擲するにあり聖書の用方果して斯くの如くなる時は啻たに事の正當なるのみならず其の吾人に稗益を與ふる少々ならずして聖書は決して詭計の者にあらずとなり吾人は朝夕之れを讀んで生活の友となし其助けに依つて勉强、忍耐、人事生活の浮沈と戰ひ幾多の誘惑、幾多の艱難に打勝つべし斯の如くにして聖書は徒らに信條の空文にあらずとなり神の惠みの下に在つて眞實にして且つ高尙なる生活の案內者として有力有益の者なるに至るべし然る時は新舊約全書は實に吾人の爲め最寶の遺物となり吾人は之れに向つて神及び眞理の探究上吾人に與ふる功德を謝せざるを得ず實に神及び人に對する吾人の信仰より起る其の

功德は洪大無限にして人の心に一度植ゑ付けられたる神の威力は早晩其の光りを發して人間一切の不善を征服し終に吾人の子孫をして愛情深き神の膝下に至らしむるの時あるべし人は其の生時に當つて上帝より賦與せられたる權理公道を有す即ち天賦の權理公道は人爲を以て永遠無極に沒し得べきにあらず蓋し人の心をして神の心に至らしめんとする其の事は結局破壞の能く之を制する能はざる者あればなり其の趣きは人間天賦の容貌に着色して如何に之れを汚さんとするも之れ唯た一時の事にして其の容貌は依然として尙ほ天賦を損するごとなく何れの日か本來の眞色を現はすの時あるが如し左れば人間は現時に於けるよりは將來に於ては更に高尙なる思想と生活の狀態に進み神の惠みに依りて天賦當然の人間たるに至るの時あるべしとは吾人の固く信ずる所なり思想的運動なる「ゆにてりあん」に付き吾人の所見斯の如くにして益々其の贊同者の多きを見るに至れり凡そ人たるものは思想の自由を有するものにして徒らに之れを束縛せんとするも固より能はず却つて其反動を呈するは古來の實驗にして人の思想は常に思想的運動の範圍にある其の現象は文明の進歩と共に運動力の益々盛んなるを見るに至れり然れば今は只だ時の疑問にして「ゆにてりあん」思想的運動が最後の勝利を制し以て人心相互の信仰、感情相結んで眞理と情愛の大海を發見するは夫れ將た何れの時なるか唯だ其の時期を待つあるのみ、

然れども吾人は思想的運動と同時に之れに對する生活的運動亦無きを得ず彼の「人は思ふが如く亦あるべし」との格言は實に十全の眞理を含む夫れ行は思の結果にして先づ思想的運動あれば必ず其實行なかるべからず前記吾人の所見は則ち之れを實行に試み之れを以て人性生活の狀態を改良せんとするにあり夫れ人は天性神聖なるものにして上帝は其父たり基督は其の案內者たり故に上帝も尊びて其則りに從ひ天賦に一致するの性質を現はすに至るは固より必須の理にして尙ほ且つ其性質の次第に發達して慈善事業の實行に及び其の意向は寧ろ現在に存し彼の想像的無限の苦難を遙か未來に

救はんより目下の惡事惡業より普く人性を濟度せんとの念願更に強き傾向を有す凡そ此の世界に於て人間最貴の生活は道徳及び宗旨界の範圍にあり古來基督生活の有樣を見るに其の能く之れを人事に寫し出したる未だ今日より盛んなるを見ず其の影響は世界至る所に波及せざるはなし尙ほ且つ其事は外形一片の儀式に非らずして能く其の精神を現はし人は皆其生活の正當にして慈善事業の欠くべからざるを感ずるに至れり誠に人世の慶事と云ふべし吾人の思想的及び生活的運動の狀形略ぼ斯くの如くにして彼の數百年以前の未開不文の時代に於ける信條に對し儀式的信仰を以て人或は基督敎徒と爲す然れども斯くの如きは吾人の所謂基督敎徒に非らす其儀式に加ふるに能く基督の精神を有するもの唯だ之れを眞の基督敎徒と云ふ而して今此精神を有する所の人は其何國の人たるを問はず其信條の何んたるに拘はらず吾人は之れを同胞と呼ぶ若し此の人にして其の精神を有すると同時に亦基督の生活を用ゆるものなれば之れ即ち一個の基督敎徒と云ふべし

吾人の生涯

土谷忠治

噫苦痛、辛慘、艱苦、吾人の生涯を擧げて憂愁の府となす、是れ厭世主義者の眼中に映じ來るの現象なり、是に於て彼れ等頻りに叫むて曰く、噫厭世主義なる哉、吾れ死するに如かずと、吾人之れを聞いて太だ惑ふ。噫落膽、沮喪、失敗、吾人の境遇を率ゐて失望の淵となす、是れ絕望主義者の心裡に描き出すの幻影なり、是に於て彼れ等頻りに泣いて曰く、噫絕望主義なる哉、吾が事遂に終はれりと、吾人之れを聞いて太だ怪む。總て人類をして此喜ぶべく樂むべきの世界を捨てゝ、早死を祈るもの、其歸する所皆此社會をして浮世とし、苦海とするによらざるはなし、然るに茲に亦一の早死を祈るの原因たるものあり、即ち今日我が國の佛敎信徒の或者是れなり、彼れ等は曰く、噫極樂よ〳〵吾れ其の如何なる所あるを知らずと雖ども、兎に角に其の樂園たることを我れ尊僧に聞く、我れ速に死して尊僧の爲めに極樂淨土に導かれんと、其の言太だ善し、然りと雖ども彼れ等の引導を受けんと欲するもの必ずし

も道理心に訴へて然るにあらず、眞理的感情に訴へて然るにあらず、唯彼れ等の云ふ所は迷信にあるのみ、彼の尊僧の云ふ所亦眞理に非ざるなり、唯老爺老婆をして其の有難味を感ぜしめ以て自己の榮利榮譽を計らんとするのみ、

厭世、絶望、祈死、吾れ之れを知らずと雖ども、我れは兎に角に、人間萬事塞翁が馬、敢へて絶つべく厭ふべく、又其の死を祈るべきに非るを知るなり、然るに殊に此の厭世、絶望の哀々たる悼歌が、有爲飛動、春秋猶富める弁冠者流の口に上るのみならず、彼の聞くも猶忌ましき早死を祈るとの、既に爻老者を平甚し、今や漸く吾が青年社會に侵入せんとするに至りては、吾れ其爲す所を知らざるなり。

社會は實に希望の源泉なり、噫希望よ〳〵、吾れ汝の爲めに働き汝の爲めに嬉しむ、吾人汝と別れて他に勞苦なく快樂なきなり、人の千辛萬苦を排して、東奔西馳、刻苦奮勵して止まざるもの、其の希望を達せんと欲するが爲めのみ、熙々たる春風の笑顏を翳し、啞々たる快樂の歎聲を漏らす、亦是れ希望の靈光あるの爲めのみ、人にして希望なくんば、社會の事終れるなり。然り而して、常人の頭腦に上り來る唯一の希望は、高位高官、金銀財寶なり。噫高位高官吾れ其の貴きを知り、金銀財寶吾れ其の價を知る、是に於てか吾子共に之れを望むに至るは自然の理數なり、吾子の希望は一に高位高官、金銀財寶の支配する所とならんとす、吾れ其の何の故たるを知らずと雖も、兎に角に其が爲めに奴隷と做り了せんとするを知るなり。

人生僅か五十年、後は野となれ山となれ、吾れ之れを知らすとせば、彼の青年が生涯の千願萬望、此の瞬間に蒐集し來り、其の極流れて猜忌、怨羨、不平、不滿、懦弱、放逸等の惡魔となり、滿腔の妄想掃へども去り難く、生きては苦海の人となり、死しては墮落の鬼となる、是れ今日の社會に徵して、其の虚ならざるを證すべきなり。然れども彼れ等厭世主義者の希望は無數なり、人生は僅か五十年、如何ぞ能く是れ等無數の希望、此の一瞬間に達するを得べきものかは、然るを彼等

は猶無數の希望を抱持して、此の一瞬間に達するにあらずんば、再び自己の滿足を來し能はずとする、何ぞ其の識見の狹隘なるや、人生は決して此の五十年に止まらず、過去、現在、未來を通じて吾人は吾人なり、正成は正成なり、秀吉は秀吉なり、那翁は那翁なり、孔子は孔子、基督は基督、釋迦は釋迦、馬哈默德は馬哈默德なり、豈敢へて一生を以て吾が事既に終れりとなさんや。知るや知らずや、昨日の原因は今日の結果を生じ、今日の生活は明日の原因にして、今日の善根は即時に於て或は翌日に於て其の繁榮を見るなるを、汝の結果は死期に於て判せらるゝなり、古人言あり「死は汝が最上の裁判官なり」と、汝が落膽、沮喪は汝が死せざる間に顯はるべきものにあらさるを知り得て、創めて快樂を知るべきなり。

知足安分は是れ吾子が希望を撥する快樂の琴線なり、遺敎經に「知足の人は地上に臥すと雖とも猶安樂なり、不知足のものは天堂に處すと雖とも亦意に稱はず」と、噫知足安分なる哉、吾れ汝と共に樂しみ、汝と共に喜ぶ、吾れ汝を措いて他に快樂を求めざるなり、汝は能く吾れに安心立命の地を與ふ、吾れ既に安心立命の地あり、他に求むべきなし、吾れは今十を以て足り、翌は五を以て甘んじ、三四亦然り、敢へて望外の望を企てざるなり。

吾れ既に希望あり、障碍の事ある是れ免るべからざるの理數なり、豈是れあるが爲めに沮喪せんや、踟躕せんや、又況んや高位高官、金銀財寶は、人生の高遠なる最終希望に非らざるに於てをや、今や世人の希望は目前の私利私慾に奔る、故に往々にして失墜落膽し、遂に厭世、祈死主義起る、吾れには公利公益の深遠なる最終希望あり、成功失墜は死後に於て之れを見る可きのみ、彼れ如何に千萬の希望を描き來るも、達せざるものは達せざるなり、祈らずと雖とも、達すべきものは達するなり。唯其の結果を急がんよりは、寧ろ基礎を固むべし、此の基礎を固むるは知足安分の要を知るに在り、知足安分を知るは過去、現在、未來を通じて眞理は眞理なり、靈魂は決して滅するものに非るを悟る

に在り。汝一度此の心して行かば、行路坦々として易く、平々として安からん。噫汝の希望は目前に在り、吾れの希望は眞理にあり、汝にして若し眞の幸福を知らんと欲せば、吾れと共に來れ、然らば汝其の成功を欲せざるも、自然は汝に幸福を與へて、汝の芳名千歳に赫々たらん。吁吾が親愛なる後來有望の青年よ、吾れは諸君と共に祈らん。

　心だに誠の道にかなひなば
　　祈らずとても神や護らむ

リバイバルにつきて

赤司繁太郎

先頃、信仰復活の長崎に在りてより、延ひて福岡に、熊本に、神戸に、宇和島に、其他各地に起れり。是が爲めに信仰復活につき辨論したるものも亦少なからず。實に信仰復活は一時、吾基督敎會を賑はせしものなり、予が此の文を草する所以は、世の所謂信仰復活なるものは、道理に逆戻せし所なきや、あらずやを講究して、信徒諸君の敎訓を乞はんと欲してなり、リバイバリスト諸君敎訓をなすに嗇なること勿れ。

予も亦世人と同しく、信仰復活の起ることあるを信ずるものなり、然れとも世に所謂信仰復活なるものを察するに、彼等は叫喚し、哀慟し、痛哭し、或は囈語を發し、或は聞くに忍びざるの言を大言して恬として恥辱とせす、或は隣人を煽動して以前の罪惡を吐きて、却て喜ひとなすが如し。而して彼等は聖靈の降臨なりとなし、歡喜雀躍たり。以上の如きことにして信仰復活の眞想なりせは、予は全く賛成の意を表する能はざるなり。いでや、其理由の一二を掲げん。

所謂リバイバリストなるものは、信仰を誤解せるものゝ如し、夫れ信仰なるものは、智情意の三、其一を缺ぐ可からざるなり。若し其一を缺かんか其信仰不完全たるを免かれず。今情を缺きたりとせんか、其信仰冷々淡々たることと希臘の哲學者と同じきものとなりうせん。智を缺かんか、其信仰盲者とならん。然るにかの信仰復活の時は、人皆情の一方に偏せり、或記者は感

情愈高き時、行爲は愈平靜なるを期すべしと、然れども、最早其行爲の平靜ならんことを期するは智なり。今日のリバイバルを看よ、彼等は其聖靈の降臨ありとするときは殆んと狂せるなり。この時に當り其行爲の平靜ならんことを期するを忠告する無益なり。予も或記者の言ふが如き信仰復活には幾分の賛成なきにあらざるなり。今予が論するは今日の情に偏したるものなるを論するを讀者乞ふわするゝ勿れ。唯情のみの信仰は基督敎たるを要せず。其他野蠻盲昧なる宗敎至る處にあり。是に反して、日本に敷かんとする福音は基督敎に非ずんば不可なりとせば、何ぞかゝるリバイバルを要せん。

彼等は人間の靈と、神の靈と全く相一致することなきが如く考ふるなり。何が故に然るか、彼等は聖靈の降ありて予に宿れりと、而して其聖靈の降臨ありたるときに於ては我靈なるものなきなり。かのイエス及ひ使徒ポーロの吾人々類を神の子と稱せしは何の故ぞ、吾人の靈、神より出たるものなればなり。然らは吾人の靈は神の靈より全く別なるものに非ず、若し神の救により漸々其の靈を發達せしめば神の靈に近づくを得べし、何ぞ我の靈を失なひて別ならざる神の靈を宿するを要ぜんや。否我を失しなは必ずしも神の靈を受くると定まらざるなり。普通世の稱する所によれは我を失したるものは狂なり。狂は野蠻の地に於ては、惡魔の仕事（わざ）なりと云ひ、或は神々の宿りたりと云ふ。かのリバイバル亦是れに類することなきか。或人はポーロの改信を稱して、リバイパル的なりと稱す、然れともそは非常の錯誤なり、ポーロの心理的發達を知らざるものゝ言なり、かのポーロとても唯一時に聖靈の降臨を得たりしに非ず、其以前より早く改信の途につきしなり、而して沙漠中に至りて幻象を視しは、以前より發達し來りたる心理的の有樣にして、決して怪しむに足らざるなり。

信仰は一時に高まるとも、直ちに冷々淡々と變するときは、餘り賞すべきに非ざるなり。又信仰にして唯一時の偶然なる出來事に際し起りたるものならんには、永

く斷續すること困難にして、直ちに冷却すること多し、今日に於て、かの數年以前に當りてありたりしリバイバルにより改信したるものが、再び不信の狀態に陷いることの多きは、心ある基督敎信徒の憂ふる所に非ずや、彼等多くは不信の域に至るは何か故ぞ、其理由は數多あるへきも其重なる源因は、唯偶然の事によりて改信し、其信仰薄弱なるが故なり。かの歷史上信仰强固、如何なる迫害を事ともせす、困難の衝に當り、彝倫の頽亂を救ひ、道德の腐敗を矯正したるイエス、ポーロ、ルーテル、ツウ井ングリー、カルヴ井ン、フス等は、己れに在る神の靈を發達せしめ、只偶然のリバイバルに依りて信仰を起したるに非ずして、多くの誘惑と戰ひ、多くの試錬を經、始めて斯の如きに至りしなり。大器晩成とは又信仰の上にも適用せらるべきの語なり。

所謂信仰復活は神の愛を汚すものなり、夫れ神の慈愛は永遠限りなく、常に偏ねきものなり。神の靈は常に吾人と共に存在するものなり。然るに彼等は始めて聖靈の降臨を受けたるが如く考ふるなり。若し吾人にして神の愛に感するならんには、一同に相集り狂呼、暴亂せずとも靜寂にして、其愛を感謝して可ならん。其罪を悔悟して可ならん。實に靜肅其秩序を失せざるは基督敎の主義とする處なり。ポーロも哥林多人に「兄弟よ爾曹あつまれるときにおの〳〵に、或は頌歌あり、或は敎誨あり、或は方言あり、或は默示あり、或は繙譯あり、悉く德を建んために之をなすへし、もし方言を語るものあらば二人また多とも三人に過ず次序に循りて語り、之を譯するもの一人あるべし。云々。それ神は亂の神に非ず、平和の神なり」と、彼等基督敎を祖述せんとするものにして、己れ自ら狂暴すること、斯の如し。予は敢て言はんとす、彼等は基督耶蘇の意を害し、ポーロの精神に戻るものなりと。

人は活物なり、死物に非ず。若し死物なりとせんか、一たひ變するときは、再ひ長く變することなかるべし。然れとも、活物なるが故に、其生活の間、一度悔改して信仰を起すとも、再び不信の域に至ることなきを保

すべからず。實に一度信仰を起したりとて、直ちに更生を完ふせりといふ可からず。其信仰を起すは、唯更生に至るの道に上りしなり。而して其間、或は眠り、或は將に死せんとすることあらん、この時に當りて、再ひ悔改し、再ひ信仰の復活を計る可からざる、予が言を待たざるべし。予が信仰の復活に有り得べきものなり。否有らざる可からずと云ふもの、即ち是れが爲めなり。斯の如き信仰の復活は、唯再ひするに止まらず、幾度も繰返し〳〵て死に達して止まんのみ。論者よりバイバリスト諸君よ、諸君の賢明なる、何を以て悟らざる。かの世に所謂リバイバルなるものは狂愚の行のみ。早く迷信を脱して、眞の信仰に復活して、己れの罪を潔め、人を救ひに導びくを勵めよ。是れ、キリスト、イエスの意なり。

禮式の弛張は社會の隆替

山名次郎

人間の會合せる一團の有機體を稱して社會と云ふ然れどもその社會に進歩せるものと進歩せざるものとあり進歩せざる社會は恰も下等動物の神經の接續連關を欠ぎ四肢五體箇々に生命を有して頭を切るも手足其他は依然活動して痛痒を感ずることと少なきが如く其組織簡單にして粗雜なり之に反して進歩せし社會は動物の上等なるに從ひ神經の接續は全身殘る隈なく行き渡りて僅に皮膚を摩し或は手足の一端を傷くれば其害滿身に及ぶが如く其組織複雜密接にして周到の關係を爲す然り而して社會の簡單純一にしてその未だ進歩せざるに當りては社會は粗雜ながらも其組織の簡單なるが爲めに却て別段の故障困難を見ること無けれども其既に進歩するに及んでは複雜なる機關の各所に種々の困難故障を生じ時あつてか不治の病に陷ること無きにあらず此の困難を未發に防ぎ不治の病に陷るなからしめ能く社會をして統一結合せしめて散漫の憂なからしめんと欲せば敎育の力は其最も有力のものと云ふべし蓋し敎育の文明社會の統一結合に必要なるは譬へば猶ほ人の學識思慮に富めるものは自ら神經鋭敏なるを以て其人

に非常の健康を要するが如きものなり然れども敎育の中にも種々ありて所謂敎育一邊に傾く時は社會の安寧を保ち幸福を增さんと欲して却て人間社會に複雜を加へ種々の病症を引起し困難故障の源因となることなきにあらず去れば敎育に依りて社會の幸福を增進し安寧を保つとの意味は世人が一般に敎育とは學問即敎育と心得る所のものにあらずして一般世人の最も輕視して顧みざる所の德育なることを知らざるべからず熟々各國の歷史を按するに人情の浮薄社會の腐敗は世の進むに從ひ烈しきを加へ文明なる意味は澆季腐敗と云へることゝ同一の意義にあらざるやの感なきにあらず故に智識學問に一段の進步ある時は智識學問の指導者たる德育に一倍或は二倍の進步を以てせざる時は此社會は唯だ混亂動搖するのみにして智育は適々以て姦智邪謀の媒介となるに過ず

我國の俗古來敦厚潔白を以て稱せらる然るに嘉永開國以來文學技藝其他諸般の事物我の彼に及ばざるもの多く取長捨短の弊は其勢烈しくして我敦厚潔白の風俗を委棄して顧みざるのみならず一方には敦厚の風俗の打破せらるゝに乘じて獨り智育の一事は上下一般に流行して忠信孝弟の道を語るものを以て迂腐の輩となし德行の人を以て愚者となし其人に智識學問の有無を唯だ是れ問ふの有樣となれり斯る有樣に陷りしは西洋文明の外相を瞥見して之れに誤られ一般の大勢に驅れて玆に至りし事なれども抑も亦た我文部當局者達識高逸の士なく世間の風潮に同して過度なる智育の一方に力を込めしと、社會の長老たる人の私行脩らざりしこと、宗敎社會に大膽識を備へたる人無しと我國風俗の根元たる佛敎の衰へたること、之が大源因たらずんばあらず去れば今日の塲合に於て日本の敎育上最も着眼すべきは何ものなりやと云へば問はずして德育に力を致すにあり

德育を振作するにも其方法一二にして足らず或は之を倫理の說に訴へ或は古人の訓誡に依るものあるべく其手段種々あるべけれども先づ樣々の理窟を止め今日唯今より躬行實踐との大躰の主義を定め日常の行爲動作

言語應待凡て浮薄輕佻の念を去りて眞面目に事を爲すの念を起すを第一着手となし喜んで眞面目なる即ち眞摯の動作を爲し眞摯の言語を發し眞摯の應待を爲さしむるの法を講ずるは最も簡便にして最も有力なる方法なるべし然らば之を爲す如何せば可ならんと云ふに先づ日常の禮式極めて嚴粛ならざるべからず而して之れを和らぐるに正粛にして和樂せる音樂なかるべからず孔子の敎に禮樂射御書數なる事あり此六藝は儒敎の根本骨子にして儒敎の簡明なる説明は此六藝なりと云ふも不可なかるべし偖て此大切なる六藝の中に於て禮と樂とは其始めに配置せり禮を始めとし之れに次くに樂を以てし以下順を追ふて併置せり其配置の順は後世學者の配置せしものなるや否や明かならざれども兎に角に其順序は治道の要領を得たるものと云はざるべからず凡そ物は始めて進む必ず正ならざるべからず是に於て先づ禮を以て始めに置く然れども禮は嚴に失するの嫌あり是に於てか和ぐるに樂を以てす樂は和樂に失するの恐れあり是に於てか之れを制すに射御の勇武活潑を以てす射御は武に過ぐるの恐れあり是に於て書數の如き思慮を密ならしむるものを以てす其順序配置の巧みなる寛嚴宜しきを得たりと云ふべし殊に其禮と樂とを以て其始めに置きしが如きは人情を調和し社會を統括するに於て此二者の必要を認めたるものにして以下射御書數の如き智育に關する所のもの既に禮樂の薫和を以て一點浮薄の念を起すことなく喜んで其道に進み其智を用ひ曾て姦智邪謀の源因たることなきに至る西洋の禮法（エチクエット）に凡そ宴會の席等に招かるゝに當り禮服を着すべき塲合に若し通常服を着して來る者あれば假令其人の如何なる人たりとも玄關に於て拒絶して入らざらしめ或は襟飾の曲り又はボタンの外るゝものあれば注意を與へ注意を與へられたる當人は非常の疎忽として愧るが如きは禮法の嚴重なる一斑なり西洋の文明を一見する時は其人情風俗は唯だ猾智に長じ紊亂せるが如しと云へども其裏面を穿つ時は其風俗習慣の嚴重なる驚くべきものあり必竟するに文明の進歩するに從ひ社會の秩序安寧を保たんと欲せば日常禮法の最嚴正にし

て犯すべからざるの一事は東西を通じ古今を分たず社會の安寧幸福を保つの一大要素と云ふべし然るに維新以來我社會の有様は澆季浮薄滔々俗を爲して極りなく一般の民心は紛々として小功利小名譽に握促し一國の利害を忘れて自個一人の私を爲さんとし曾て確然不抜の精神を以て遠大悠久の謀をなすものなく社會は今や根底より土崩瓦解の暴力を呈するに至れり是れ敎育家宗敎家に其人無きに依ると云へとも要するに社會を統一するに必要なる禮法の先づ破れ加ふるに適當なる音樂なく輕佻の獨り人情風俗を破壞混亂するに委したるの結果なれば世の敎育宗敎家たるもの及び世の先輩長者たる人の此邊に注意するあらは日常の禮法瑣事にして迂俗に似たりと云へども又以て從來の敦厚潔白の風を維持し日本社會の健全を致し國家の安寧幸福を增進することを得ん

經濟學（接續）

川本永守

第一　論理法に因りて眞理を發見する之を創製法と云ひ論理法に因りて眞理を他人に傳ふる之を指示或は敎授法と云ふ抑も創製法の重要なるは獨り哲理上の研究に於けるのみならず尙且其他の諸科學に於けると亦同様なり而して敎授法は單に敎育上の價を有するものと知るべし今夫れ論理法の通理は論理學上の範圍に屬するにも拘はらず其之を述へんと欲する所以のものは從件政治經濟學の研究法に關し絶へざる數多の爭論を調和せんが爲めなり而して余は先づ第一に論理上に於て正反對たる演繹及歸納の區別を說かんに演繹法は理論の鏈鎖に因りて通般の原理を推究し毫も外部の事實に因らず純然たる道理に因りて通般より格別に論究するものにして其前提の眞理完全にして推理の順序正當なるときは必ず或結果を推究するに實に精密なる法則なり之に反して歸納法は現象の觀察に基き抽除的の方法を用ひて其現象を支配する所の法則を發見せんと求むるものにして所謂歸納論理則ち經驗に基づく所の理論に因りて格別より通般に及ぼすものなり而して之れを演繹法に比すれば更に不確實にして其結論は只眞理に

近きと云ふに過ぎず完然且確實なる結果に至らんことを到底期すべからざるものとす

是に於て科學の研究或は演繹法を用ゆるものあり或は歸納法を用ゆるものあり其演繹法を用ゆるものを演繹科學と云ひ其歸納法を用ゆるものを歸納科學と云ふ而して又演繹歸納の兩法の幾部を用ひて研究する諸科學あり然り純然たる演繹科學即精密科學の部に屬するものは特に數理的諸科學及哲理的諸科學の幾部なりとす則數學、代數的解剖、幾何學及抽除的數學の各部是なり今夫れ數學の精密なる所以の者は第一演繹法の功用第二符號字の功用に歸せざる可からず符號字は其簡約なる事其美麗なる事倘且論理の誤謬を發見して之を改正するに便利なる事普通學の能く及ぶ所にあらざる也

上來は是れ純然演繹法を用ひて研究する事を得へき演繹科學にして其純然たる歸納法に因りて研究すべきものとは格物の諸科學なり此等の科學は今日迄單に說明的の階級に止まり只現象を概括するに過ぎず例へば地質學及氣象學の如きは今日進步の著しきにも拘はらず倘歸納法科學の部內に存するなり又社會學中統計學の如きも則然り假令數學的定奪の功用をなすと雖倘ほ且つ歸納法科學の範圍を超へざるなり

歸納法及演繹法の幾部を併用する科學は先づ歸納法に因り道理を尋ね次に演繹法に因りて此眞理の結果を發見せんと勉むるものなり稍進步したる理學及博物學は則此部に屬するなり例へば理化學機械學及天文學の如き則然り斯る科學は其發端を歸納に取り次に演繹の階級に達するの順序にして之を稍廣き意義に解すれば精密科學と呼び以て抽除的數學の例に加ふるを得べきなり而して又區別あり此區別たるや區別其物に關して重要なるものと知るべし則觀察と推理に基く所の科學にして或は漠然之を經驗科學と呼ぶものありと雖余は今此科學を別つて二となす第一觀察科學第二經驗科學是れなり第一觀察科學とは事物自然の現象を其儘觀察研究し敢て人爲の變更に服せざるものを云ふ而して此等の內に只人間の五管に因りて觀察するものあり又天文學及氣象學等の如き精密なる機械の補助を借り得べ

きものあり第二經驗科學とは觀察を用ひ人爲に因りて其現象を絶へず經驗する所のものを云ふ例へば理科學の如きは則然り其進歩の多分は經驗の功に歸せざるべからざるものなり

第二　社會學は此を理學及數學に比すれば未だ幼稚不進歩のものなるを以て此學の研究法に關しては尙更學者の爭ふ所あり而して其爭論は論理の性質に關し深遠なる思考を有し多少取るべきものありと雖論者多くは哲學の思想に乏しく或は一定の方向なく只好事の考を以て漠然之を研究するに過ぎざれば其是か良結果を得ること甚だ稀なり余は今玆に諸般の社會學に適用するを得べき研究法を博く論ずるの暇なきを以て之れに關する若干の著書を揭げて讀者の便に供せんとす則ち左の如し(書目は略す)

第三　研究法の爭は政治經濟學に關して絶へざる所のものにして或は此學を以て全く演繹科學と云ふ者あり或は全く演繹科學にあらざるも其過半は演繹科學と云ふものあり更に近代の記者輩は是れを歸納及び觀察科學と云ふ此輩は皆此學を以て今日迄唯だ經驗に因りて進歩したりと考ふる者の如し而して又之を演繹及歸納科學なりと云ふ者あり斯る爭論の難點は唯純理的政治經濟學上に存して其應用上に及ばざる事明なり如何となれば應用經濟學に觀察の必要なるは何人も疑はざる所なればなり況んや之れを實地に應用するの場合に於てをや此に於て余は此學に至當なる研究法を論ずるに當りて先づ此學の性質如何を考察せざるべからず如何となれば是が研究法は必ず此學に一致せざる可からざればなり次に此學の進歩に關して有力なる諸大家の採用したる研究法幷に此學と他の諸科學特に今日、其研究法の完全の度に達したる理學との關係を考察せざるべからず是れケヤチスが千八百五十七年ロンドン出版政治經濟學の性質及び其研究法と題する自著中に述ぶる所の意見にして余が今爰に論ずる所は則多く此に基くものなり彼の經濟學中極めて確實なる學說にして且つ難點なる流通及分配の諸說の如き是れ皆僅々二三の前提より發端したる演繹法の功たる事を知るべし左れば

今其論究の順序を述べんに
第一人間をして活動せしむる所のものは之を經濟上より觀察すれば只是私利なる意思に基するを知る此意志は以て(第一)忍苦則煩勞を避け(第二)愉快則富財を欲し(第三)是を以て可成些少の煩勞を用ひて可成多量の富財を得んと欲するに在り他語を以て之を云へば最少の盡力を以て最大の結果を得んと欲するに在るなり
第二土地は人間の住居し勞働し及び植物幷に物質の泉源なるに其力自然に限ある事則(第一)地產力(第二)地積(第三)比較的地力(第四)永續的地力に際限ある事
第三性理及ひ心理上に於て人間は若干の速力を以て人口を增加するの傾向を有し若し之を妨害するものなかりせば人口は無限に增加して止まざる事
右三條の前定に基づき推究したる結果は彼の經濟學上に至要の關係を有する價格借料及人口論にして價格及借料は第一第二の前提より推究し人口論は第二第三の前提より推究したる結果なり去れば是等の前提より推究したる右三學說の價値を知らんと欲せば勢先づ是が研究上の價値を吟味せざるべからず則之れを吟味すれば是等の學說は皆確實なる事實に基きたるものにして如何にも第一第二の問題は實際に於て日常自ら其傾向あるを見吾人の性情より須臾も離るべからざるものと信ず然るに第二の問題に至りては吾人自ら經驗に由りて之を證するを得べきなり今日吾人が資本と勞力を絕へず最良の土地に適用するにあらずして其耕作等の漸々劣等に及ぼす等の事實は則地力に自然の際限あることを證す是れ地代の依て起る所以なり
然るに右の三前提は政治經濟學の因て基つく所にして今唯だ此三前提の事實にのみ付て考察する時は其前定の確實なる事或は吾人の性情に照して吾人自から之を確知し或は直接且つ確實なる事實を以て之を證明するを得べし是を以て是を視れば政治經濟學は最も進步したる理學に比較しては勿論數學に比較するも尙且つ確定なるものと斷定せざるを得ず如何となれば最も進步したる理學に於ても直接に其前提の證據を發見する能はず而して極て煩勞なる手段に因りて之を發見せざる

得ず又數學上の解釋及其原則に於けるも單に假想の上に基づくもの往々是あればなり然りと雖此等の前提にして如何に相違なきにもせよ是れを實際の現象に照す時は不完全にして且つ不充分のものと云はざるべからず例へば吾人人間をして括動せしむる所の意思は之を經濟上の事情より推すも唯た此れ私利私心のみにあらす其間に同感慈悲習慣及忠義心なるものありて多少吾人の私利心を變更し或は全く之を亡滅することあり又價格賃銀の法則及移住等の如きも是等の感情其他經濟以外に屬する偶然の源因に因りて動かさるゝ事往々是あり又農事に關する諸科學の進歩は多少地力漸減の結果を妨げ或は之れを遲緩ならしむるの傾向あり又或は人の先見及自愛なるもの他の事情と合して人口の增加を緩漫ならしむる事往々是あり之を要するに正當なる前提に起り正當なる議論に由りて推究したる經濟上の結論は科學上眞理のものにして法則たるの性質を有するものなり然りと雖も其法則は他の源因の之を妨げざる塲合に於てのみ生出し來る結果の源因を證明するものなれば是又一の假想たるなり尙且此妨害たる源因は理學に於けるが如く經濟學に於ては發見する能はず而して經濟學上之を呼びて妨害質と云ふ然りと雖も其法則の假想たるが爲め之を以て理學に劣れるものとなす可からず如何となれば理學も亦假想に基づき實際の現象と相違する法則に因らざる可からざる事極めて多ければなり去れば今此を以て科學研究の精密ならざる證據となすに足らざるべし例へば放出物の實際は平均及び不絕の運動をなさず又精密なる角度を顯はさす又完全なる圓形を顯さずと雖も此等を以て未だ運行重力及抵抗力の法則を誤謬のものとなすに足らさるなり然りと雖も理學上に於ては此妨害質を算除することを得べきも社會學に於ては之をなす能はず是れ明に經濟學の理學に及ばざる所なりと知るべし

若し夫れ經濟學者にして歸納法を用ひんと欲する時は僅々たる觀察力に因り非常に複雜したる難解の事實を吟味せざる可からず而して其事實の源因は常に社會中に隱伏し或は不定のものにして又は之を發見すると極

めて容易の事にあらざれば立法者及行政者が經濟上の實驗は只吾人爲し得べきの試驗にして其試驗は實に狹隘なる範圍に限り且非常の注意を加へざるべからず去れば經濟上の原理を創製するに當り演繹法を用ひて歸納法の煩雜を避くるを得べき政治經濟學上の長所は以て此學の理學に及ばざる短所則妨害質を算除する能はざる不足を償ふ能はざる事萬々なり此事は上に掲げしリユー氏の著書に能く論ぜし所にして今尙政治經濟學を經驗科學の一に加へんと欲するもの多く是れあり

右の次第なるを以て假令其前提に誤謬なきにもせよ實際の現象を變更する偶然の源因則妨害質ありて之を妨害するも經濟學上之を除去する能はざるを以て之を研究するには必ず歸納法を用ひて其不足を補はざる可からず他語を以て之を云へば觀察及論理則歸納及演繹法は二樣の目的を以て相合せざる可からず則推理に基づく法則の證據を得る事、觀察に基づく現象の源因を說明する事、の二目的是なり斯る觀察の其擧證の爲めなると將た發見の爲めなるとを問はず或は經濟學者自から之を爲すことあり或は歷史又は統計上に付き之を知ることあり實に統計學は近來の進步に因り政治經濟學の一新機械となれり若し夫れ歸納法の結果にして確實なる事實の之を證するあらば其結果は以て政治經濟學從來の前提を變するに足るべしと認めさるべからず乍去如此にして假令其結論の事實に一致することありと雖其結論は實に科學上の精密且つ論理の價値を失ふの危險に陷るの掛念あるを免れざるべし

扨て上來を約言せば論理の性質稍々乾燥且陰微なるものにして政治經濟學は其通理の發見大概推理に依るを以て之を演繹科學と云ふと雖も尙且同時に歸納科學たり之れ其單に應用の規定を立つる場合のみならず演繹法を用ひて發見したる原理の證據を尋ぬる場合に於ても亦然るなり歸納法は經濟上の新主義就中生產に關する諸原理の發明には欠くべからざるの必要なるものにして實にモンゴルが言ひし如く生產上の原理には演繹法は全く無益のものなりとす此に因りて之を見れば政治經濟上の研究法は演繹歸納の兩法を幷用せざる可か

らざる事明にして只殘る所の疑問は二法を使用する區域の一點に存するなり乍去此區域論も亦容易ならざるものと知るべし如何となれば適當なる推理觀察の力を有せず誤て政治經濟學は今尙ほ經驗科學の中に置かんと欲するものあるが如く實に複雜陰微の論旨なればなり是則有力なる經濟學者ケレーが自から其實例を示す所なり

第四本論の主意に密接の關係を有するものは此學の諸說に數學を應用するの可否如何にあり或人は誤つて之を研究法の問題なりとすと雖是唯た數學及符號を此科學に應用するは果して便なるや否やの議論にして敢て研究法の議論にあらざるべしと信ず此數字及符號は往々純理演繹科學及ひ僅に演繹の階級に達せし諸科學に應用して有益のものと知られたり去れば吾人少しく之を論ぜん

鄙見を以て之を言へば政治經濟學は數字を用ひて說明するを得べきが如き論旨を有する緻密なる科學にあらず又決して如此科學たる能はざるべし蓋し左に示せし政治經濟學は純理演繹科學にあらずして而して其前提は緻密なる可量的のものにあらず其不量物に關するこ と往々是れあり必ずしも其結論は數字を以て表證すると能はざるなり近來緻密なる秤量の功用は化學をして更に完全の度に進歩せしめたりと雖政治經濟學に於ては斯る緻密の結果を提出すると能はず彼の饑饉に際して穀物の價格は必す常に其供給の欠乏の割合に比して更に騰貴の有樣あるは吾人の能く知る所なり他語を以て之を言へば今年の收獲は之を昨年に比して恰も半額なるも其價格の割合は蓋し是れに越ゆる事あり乍去此割合外の騰貴を促すもの必ず他に原因の存するあるを以て吾人は今此騰貴の割合を推知すると能はず而して斯る原因中には食物欠乏の恐懼其欠乏に代用する産物の節儉就中實際の欠乏に比して之を恐るゝ度合の更に大なると等の諸個條を抱含すれば之が精密なる結果を判定するは實に吾人の能く知る所にあらざるなり左れば政治經濟學は數字應用のものたるに過ぎずとし直に之を此に應用するを得べしと信じ或は信ぜんと欲する

經濟學者あらば其人は實に過てりと云ふべし乍去今若干の範圍を限る時は或は之れに數字を應用することと能はざるにあらず而して其結果は少なくとも學論を簡易にし以て之れを發達し且叉假想に因りて學理を說明するに當り極めて有益のものと知られたり斯る目的に付ては彼のリカルドフェララー其他有力なる經濟學者の使用せし長たらしき厭ふべき數字に比すれば代數符合は實に優等のものなるべし今此科學に數字を應用し多少の功を奏せしものはコールノースーゼンホユールモンゴル及ホーボー等と知るべし其他尙是れあれども略して記せず乍去吾人は今數字を應用して此の科學の科學たる性質を更に加へん程の重要なる學理の發見を促せしや否やは讀者の自から判斷に任せん吾人を以て之れを見れば斯る結果ありしとも思はれざるなり

第五古來久敷法律學上の爭點たりしが今を距る三拾年の頃よりして日耳曼經濟學者の中に始まり續て他方の經濟學者間に蔓延せり而して此條や歷史派及理學派の間に存するものにして其議論の性質は經濟學研究法の爭ひにあらずと雖も是叉至要の一問題なり則其爭點は經濟學なるものは完全なる通般の原理を有するや或は其原理は時に因り國に因り叉其國文明の有樣に應じて異なるや否やにあり彼のヒルデブンドニース就中ロッセルの如きは歷史派の贊成者にして此派の爲めに大に此主義を論述發達したり叉佛國に於てはロッセルの飜譯者なるオララスキー伊國に於てはコグニイデーデーマルチー及びスチヤタリラの如きは自から稱して歷史派と公言せり然らは則余は今此に所謂歷史派の得失に關し聊か意見を述べんとす法律學に於ける歷史派は完全なる通般の法理あるを認めずして只國民感情の結果たる人爲法の現存を許すに過ぎざるが是と均しく政治經濟學上に於ける新派則歷史派は經濟學上に於て各國何の場合にも適用するを得べき原理の存するものあらずとし只各國各自に特用するを得べき邦國經濟なるものを認めて之を國民の智識道德及歷史の狀態幷に邦國文明の楷級に限り經濟上假想的の原理は只其論者の自國に現はれたる事情に因りて誤謬且つ不完全なる推究

の結果に過ぎずとなせり夫れ如斯を以て歴史派經濟學者は經濟現象の種々の階級を説明し以て種々の時代に適當すべき原理と應用法とを發見する勞を取らざるべからず然りと雖吾人は又一方に於て左の點に注意せざる可らず

純理科學の眞理と應用科學則ち應用術の原理を混ずべからさるの一事なり夫れ純理科學は殆んど完全通般のものなりと雖も應用科學は其應用の場合に當り是非とも其時其場の異なれる種々の有樣を思考の中に取らざる可らず今此點に付て考ふれば時に臨みて其學の用法を異にするは獨り歴史派特有の箇條にあらざるべし例へば久しく保護税の下に支配せられたる邦國に自由貿易の主義を應用するに當り臨時の有樣に應じ一時の手段を用ひて之に多少の取捨をなすの已むを得ざるは自由貿易の學理上に於ても許す所なり時と處と其文明の有樣は其性質上に於て變化極りなきものと雖も人間社會の自然の傾向は古來同じきものにして又現在も同樣なり然らば必ず未來も同一なりと思考せざる可からず戰鬪の器械及び軍事の制度に變向の絶へざるを以て兵法及軍法の不成立を證するに足らざるべし然らば則既に示せし經濟現象の變化を以て毫も價格賃金及利潤等に自然の法則あらざるものなりとの證據と爲すに足らざるなり今其政治經濟學を以て只事實を述ぶるに過ぎざるものとなさんと欲するは恰も其最も實際上の功用を打破し且つ誤つて政治經濟學は實際上に應用する通則を具ふるの力なきものと公言するに等しきなり若し政治經濟學にして通則を有せざるものとせば已に引例として屢示したる彼の博物科學の比較論も亦功なきものゝ如し如何となれば有機無機を問はず凡そ博物學は皆其通法を有すればなり彼のロッセルの言に赤子の食物は大人の用に立たずと云ひしにマセタカリヤの之に答へて滋養の功能は長幼共に同じきものにして植物學の目的は其之を支配する通法を判定するにありと言ひしは確實なる答と云ふ可し然りと雖も歴史派が經濟學の進歩に力を致せしこと又少なからず其理論家に對する駁論稍々過激に失するものなきにあらずと雖も兎に

角歴史派は此經濟學の進步に一鞭を加へたるものにあらざるを得ず特に歴史派中有名なるロセッルの如きは歴史地理及統計上より極めて有用なる說明を呈出し尙ほ且つ種々の時代に於ける經濟上進步の性質を解剖して大に此學を潤飾し遂に從來忽視せられたる經濟制度史及び經濟學史の編纂に至頁なる材頁と强き刺擊を與へたり而して其歴史は吾人をして經濟上に於ける過去の有樣を知らしむるのみならず尙ほ經濟學現在の狀態を詳にし合せて未來の方針を知らしむるものなり彼のハゴーサビクニーニバーモニセン及其の門徒等が貴重なる羅馬法律史を吾人に與へし如く恰もロッセル及其門徒等は精密なる經濟歴史を出版して大に吾人に利益を與へたり夫れ然り然らは則政治經濟學は過度なる意匠主義と稍陳腐に屬する事實主業との中庸を採用せざる可からずと結論するを得べし又政治經濟學は過去を說き未來を照し科學上原理の通般なるを認むると同時に又一時の手段を許し歴史派の誤謬なる管見を認めざるべからず而してロッセル派の著書と所謂理學派の有力なる著書とを比較し見るべし如斯にして歴史派が吾人の前に提出する數多經濟上の說明は日耳曼其國に於てハーマン及びローが說く所の通理を變更するに足らざるものなることを確知するを得べきなり云々(止)

傳　記

高野渡邊二氏の如きは實に西洋の文明を我國に輸入したる卒先者の主なるものにして明治の新天地に與つて力あるは勿論、其希望の濶大にして高尙なる且つ其豪邁不屈の精神に至つては唯だ驚嘆の外なきなり惜哉時の未だ至らざる二氏共に其末路を能くする能はざりしは亦是非もなき次第にして今昔時勢の異なる、其處措は固より探て今日倣ふべきに非ずと云へども其大膽にして苦心艱難に堪ゆるの勇氣に至ては之を宗敎界に政治界に其他何んたる事業に拘はらず有爲男子の宜しく倣ふべきものなりと思ふて前號以來掲載せり讀んで之れを利すると利せざるは讀者の着眼如何にあるのみ

○渡邊華山の傳

渡邊華山名は定靜字は子安一の字は伯登通稱は登、華山は其の號又寓繪堂、全樂、昨非居士、金暾居士、隨安居士の號あり世々三宅土佐守（田原侯）に仕へて徵祿を食む華山寛政五年江戸邸に生る少にして大志あり藩儒鷹見爽鳩に就て學ぶ頗る書史に涉獵す兼て洋學に通じ又書を善くす一日友人某來り談じて曰く子儒たらんと欲す誠に善し然りと雖ども今や子貧なり儒を學ばんよりは寧ろ畵を學びて早く黃金を得るの勝るに如かずと華山性至孝父母に事ふる甚だ努む友人の言を聞き感じて曰く儒を學びて以て天下に爲すあらんとす父母の飢寒を如何せん姑く憾を飮みて畵に從事せんと乃宋紫山金子金陵谷文晁の諸家に從て畵法を學ぶ家貧にして良紙を贖ふ能はず日に錢十六文乃至二十四文を投じて美濃紙を買ひ以て畵を寫す晚に諸派を折衷し古法に法りて一家を成す精巧人に冠たり世大に之を珍重す華山好みて墨竹を作る詩を題して曰く鄭老畵ㇾ蘭不ㇾ畵ㇾ土、有ㇾ爲者必有ㇾ不ㇾ爲、醉來寫ㇾ竹似二蘆葉一、不ㇾ作二鷗波無節枝一、と常に曰く畵を賣りて以て自から給す是れ止むを得ざるなり一日畵を作らざれば一日の窮を增す一身の窮は亦忍ぶべし父母妻弟の困窮を奈何せんと又佐藤一齋に就て文學を修む天保三年の夏祿百石を加へ年寄格に進む華山心を民政に用ゆ是に至りて救治する所多し又田原沿海の地方を經歷し海防忽にすべからざるを察し海外諸國の旗章及び軍艦の圖を作て之を沿海の戍吏に示す蓋し緩急に備へしめんとするなり既にして江戸に歸り益々蘭學を修め西洋の事情を講究するを力む而して事務鞅掌力を洋學に專にする能はざるを憂ふ時に都下の名士尙齒會の擧あり天保九年十月十五日を以て期となす華山亦約す華山の友高野瑞皐の門人內田彌太郎奧村喜三郎と云ふ者あり共に幕府の小吏なり才學あり算數に通ず喜三郎我國の航海術未だ開けず往々船を覆し人を傷ふことあるを憂ひ泰西の航海術を攻めんと欲す新に經緯器を製す將に尙齒會に出し衆評を博して而して幕府に献ぜんとす是の日齎らして瑞皐を訪ひ與に會に抵る會中幕吏芳賀市三郎と云ふ者あり近ごろ

巡見使となり上野下野甲斐信濃等の諸州を歴て歸る夜に及て衆談時事に及ふ時に蘭人事を長崎に訴ふ市三郎密かに其書を寫して懷にす乃ち之を出して坐に示し且つ語りて曰く其書の略に云ふ長崎に在る蘭國の甲比丹(船將)謹みて鎭臺久世加賀守公の執事に白す今英將摩利遜日本の漂民七名を護送して日本に至る長崎を經ずして浦賀に至る實は事に托して互市を請ふなりと鎭臺之れを幕府に呈す閣老水野越前守忠邦謂ふ宜しく文化中魯使冷泊涅士を逐ふ例に倣ふべしと評定所亦議して曰く英人猖獗妄りに互市を爲すに托して妖敎を傳播せんと謀る之を遠ざくべし今又た漂民を送ると稱して都城接近の地に來らんとす其の意測るべからず小蟲を濟はんと欲して大蟲を殺すは策の得たるものにあら非ず漂民を救はんと欲して億兆を傷ふ勿れ宜しく一擧して之れを驅逐せんのみと華山之を聞て曰く吾少にして長崎に至り蘭人に從て聞く所あり聞くが如くんば今回英國の使摩利遜は彼の國有名の士なり其著書已に我が國に舶來し現に官庫に藏む今彼來る其の人と爲り冷泊涅士の比にあらず而して幕府外國の事情を審かにせず英人を海寇視す彼萬里の風波を冒して來る之を攘はゞ怨を結ぶこと必せり吾輩外國の書を講ずるものは今日の爲なり當に書を著して世人の迷夢を覺すべしと乃ち鴃舌小記、愼機論、蕃論私記等を作る而して未だ人に示さゞるなり瑞皐亦市三郎の言に據り夢物語を著はし甲乙の問答を設け夢に托して所見を述べ專ら攘夷の得策に非ざるを論ず亦世に公にせざるなり嘗て竊かに同志に示す而し一狗虛を吠へて萬犬實を傳へ其の書傳播して之を續成するものあるに至る時に佐渡奉行川路左衛門尉聖謨伊豆の代官江川太郎左衛門等幕府に上書して攘夷を諫む會々幕府監察鳥井耀藏(林大學頭衡第三子)に命じて近海の船舶砲臺を巡視せしむ太郎左衛門事に熟するを以て之に副たらしむ耀藏平生洋學を惡み謂へらく摩利遜我國に染願して而して蕃學の徒其の害心を知らず妄りに西洋を尊信し彼の强を唱へて幕府を恐喝す今に於て夢物語の著者を誅し以て後を懲すに如かずと太郎左衛門華山等と交はり洋學を善くす又慷慨の士

なり故に耀藏と合はず病と稱して出てず幕府の吏小笠原貢藏と云ふ者あり嘗て蝦夷の戍中にあり粗々外國の事を知る耀藏乃ち召して房總の岸を測量せしむ其の術鹵莽誤多し太郎左衛門乃ち彌太郎嘉三郎を召し己に代て之を測らしむ貢藏之を怒り喜三郎を耀藏に讒す耀藏乃ち之を斥く彌太郎獨り猶ほ事を執る其數術に精しきを以て測量に練れずと雖も黽勉從事し二月を以て業を竣ふ後數歳洋學の徒小笠原島を拓き物產を殖して以て國用に供せんと欲し將に之を幕府に請はんとする者あり花井虎一と云ふ者は嘗て貢藏と同僚たり貢藏是れを以て相善し乃ち虎一を誘ひて曰く子蕃學の徒を劾せば重く用ひられんと虎一大に喜び耀藏に告げて曰く近年蕃學瀰蔓し島津黑田三宅兩松平(伊豆守及び內記)の諸侯下曾根金三郎江川太郎左衛門羽倉外記の諸旗士古賀小太郎遠藤藤助立原甚太郎(杏所)大內五左衛門望月毛莊司郡平渡邊華山齋藤八郎左兵衛門本木道平の諸儒より浮屠に於ては常陸の無量壽寺市人に於ては本石町の驛舍彦兵衛及び鞣工秀三等に至るまで相扇して而して奥村喜三郎之れが幇保たり無人島を開くと稱して竊かに外國に通せんと謀る其擧近きに在り事遷延せば禍害測られず宜しく今に及びて之を誅し以て禍原を絕たんと耀藏之れを水野忠邦に白す忠邦聞て大に驚き吏に命じて此の輩を逮捕せしむ華山亦執へられて獄に繫がる幕府反逆を以て之を鞫問す瑞皐華山實に彦兵衛と識らず江川羽倉奥村も亦開島の議に關せず夢物語の事を瑞皐に責む瑞皐答ふるに道路の說に據るを以てし市三郎の事を言はず天保十年十二月幕府瑞皐を處するに禁獄終身を以てす華山は書を著はし時政を誹謗するに坐し處するに死罪を以てす而して其の歉歳民を賑恤するを以て死一等を減ず喜三郎太郎左衛門外記は則免るゝを得たり而して花井虎一は浮言を皇張するに坐して禁錮せらる華山後宥されて國に幽せらる世人皆以て冤となす華山幽中に在つて怨色なし嘗て國詩を賦して曰く「とり積みて世を炭竈の煙たきは己が焚添ふ薪なりけり」と數々書を裁して朋友と贈答す幕府幽囚の妄に書翰を往復するを藩侯に讓む侯怠弛を以て譴を得華山曰

く侯吾を以て罪を幕府に得吾何ぞ生を偸むをせんと即ち自殺す年四十九時に天保十二年十月十一日なり侯實は姫路侯(酒井雅樂頭)の弟なり出で丶三宅氏を嗣ぐ嘗て其實子を立て丶嗣となさんとす華山諫めて曰く三宅本姓は兒島氏高德公より出て丶爾來其胤を絕たず先公實弟あり而して公を養て嗣となす公宜しく姪を以て嗣となすべし則事順に從ふ今乃ち私愛を以て實子を立てんとす臣敢て命を奉ぜず當に臣を誅して後に嗣がしむべしと辭氣愿端剴切なり侯乃ち感悟して姪を立つ是に至て華山此の事を追想し其の主家を累すを慙ぢ自から死すと云ふ死するの前豫め書を作り親戚朋友に贈り以て永訣をなす前一日魯生邯鄲夢裡の圖を作て自から喩す謂ふ我君の爲めに謀て忠ならず親の爲めに計て孝ならずと書を其の子に遺して曰く餓死すと雖も二君に仕ふる勿れ愼みて祖母に事へよ汝の母は不幸の人なり宜しく孝を盡すべし汝の父は罪人なり必ず墓碑を建つること勿れと自から不忠不孝渡邊登の七字を書して死す是の日母氏華山の久しく見へざるを怪み婦をして之を視せしむ婦樓に登れば則ち既に死す鮮血席に滿つ婦大に驚て母氏に告ぐ母氏至り其の咽を刺して死するを視て怪みて曰く兒何爲れぞ腹を割かずして咽を刺し婦女子の所爲をなして死すると乃其の衣帶を解き其の屍を撿すれば先づ肚を屠り白布を以て之れを纒ひ衣襟を斂めて其の上に帶し然る後咽を貫ぬき死する者なり母氏之れを視哀顏に笑を含みて曰く眞に我兒なりと華山人となり肥大長面豐顋音吐鐘の如し常に長刀短袴して市中を行く識らざる者は以て武人となす晚に西洋畫法を學び嘗て自から肖像を作る其の文を作る筆を把れば立どころに成る思を費やさゞるもの丶如し一日友人の家を訪ひ西洋の地球圖を閱して賞嘆止まず午前より晡昏に至て諦視飯を喫せず茶を飲まず燭を點じて始て止む常に書を讀て夜半に至る得意の所に至れば則呵々大に笑ふ人と談論する者の如し華山の門に從て畫を學ぶもの頗る多し福田半香、椿々山、山本琹谷、井上竹逸等其の巨擘となす華山嘗て半香椿山の二人に語て曰く本邦傳ふる所漢人の畫眞跡甚だ少なし今目擊する所を以て

すれば雲烟は則ち王石谷を第一とし花卉は則南田惲を第一とす雲烟は佶(半香の名)の長ずる所花卉は弼(椿山の名)の長ずる所亦各其得意とする所に從て其技を成すべし嘗て其の所藏の書畵數百を藩侯に獻ず或人竊かに謂て曰く君積年心を用ひて蒐聚する所の者今悉く擧げて侯に獻ず以て惜むべしとせざるか華山笑て曰く大に惜む所なるが故に侯に獻ずるのみ子孫若し其の貴ぶ可きを知らずして之を重せず或は散佚し或は蠹魚に付せば余が丹精何の益あらん若し子孫にして其の貴ぶべきを知る者あらば亦余の如く之を集むべきのみと或人其大志公益を思ふを感し默して而して去ると云ふ

雜録

○自由神學校の始業近きにあり

夏期休業中なりし京橋加賀町八番地に假設する自由神學校の性質、目的及び其學科は前號の紙上に掲載したるクレーマツコーレー氏より寄せられし宣言にて讀者の一覽を得たる事ならんが其始業は來月六日にして昨今入學試驗の申込或は其手續の問合等陸續絶へざるよし元來同校は他の私立學校と異なり其目的營利にあらずして實に公德を旨とするものなれば其授業料の如きは勿論出すを要せず云はゞ慈善學校とも云べきものにして只管ら懇切を盡して內外何れも知名の敎師打揃ふて敎授の任に當る事なれば眞に學問に從事せんとする少年輩の爲めには屈強の場所なるべし

○基督組合敎會關係の學校

目下我邦に於ける基督組合敎會及びアメリカン、ボールド(傳道會社)と直接幷に間接に關係を有する學校は左の如くなりと云ふ

名稱	設立年月日	位地	敎員	生徒	設立以來卒業生
同志社	明治八年	京都	三五	六二二	二六四
同志社女學校	同九年	同	八	八八	二九
看病婦學校	同一九年	同	八	二〇	二七
英和女學校	同八年	神戸	九	一三五	六九
女子傳道學校	同一七年	同	六	三二	二四
彰榮幼稚園	同二二年	同	五	九二	

同　師範科	同	同	同	四	七	一〇
松山女學校	同	一八年	伊豫	七	三六	
梅花女學校	同	一一年	大阪	一二	一七五	二九
泰西學館	同	一九年	同	七	九一	四
順正女學校	同	一三年	高梁	四	一〇一	五〇
山陽女學校	同	一九年	岡山	七	六四	一八
薇陽學院	同	二二年	同	七	五〇	
新潟女學校	同	二〇年	新潟	六	五〇	九
北越學院	同	二五年	同	七		
鳥取女學校	同	二〇年	鳥取	八	六〇	九
熊本英學校	同	二一年	熊本	九	一五〇	三
同　女學校	同	二二年	同	七	六五	
共愛女學校	同	二二年	前橋	五	二三	
私立英學校	同	二四年	津	三	二二	

〇淨土宗教師員數

淨土宗教師教師補所住府縣別にして其人員は左の如し

府縣名	教師	教師補	府縣名	教師	教師補
北海道		四九	東京府	四	五六五
京都府	六	六一三	大坂府	一	五一三
神奈川		二八〇	兵庫縣		二五七
長崎縣		五六	新潟縣		一〇八
埼玉縣	一	一三五	群馬縣		六七
千葉縣		一四七	茨城縣	一	九二
栃木縣	一	五六	奈良縣		二八七
三重縣		三〇一	愛知縣		四一四
靜岡縣		一五二	山梨縣		七五
滋賀縣		四九六	岐阜縣		一三三
長野縣		二五六	宮城縣		四〇
福島縣	一	八六	岩手縣		二九
青森縣		八二	山形縣		七二
秋田縣		五六	福井縣		九三
石川縣		四四	富山縣		一〇〇
鳥取縣		五二	島根縣		一〇一
岡山縣		二四	廣島縣		七三
山口縣		一九一	和歌山		一七四
德島縣		一六	香川縣		二九
愛媛縣		六三	高知縣		五
福岡縣		二六二	大分縣		六六
佐賀縣		七九	熊本縣		六四
宮崎縣		一三	鹿兒島		二
沖繩縣			合計		一五八六八六八八

○故原坦山師の逸事

坦山師は俗稱新井頁作磐城平の產、年十五江戶に遊び聖堂に入る頴三樹等と時を同ふす在學中誤て一女と通ぜ世に坦山の遁世此に因すと云ふものあれども然らず其事實は某女と伉儷を約したるに他人の爲めに其女を横姦せられ憤懣抑ゆる能はず之を殺して怨を報ぜんと欲し刀を携へて其家に至れば彼れ他出して在らず頁作眦を決して歸宅を待つ偶然床頭の一軸某和尙の箴言を見て飜然大悟急に寓に歸りて苦學始めに倍す業成り吉祥寺の學寮に試講するや學力超凡盛んに孔孟の道義を說き頻りに佛法を詆誹して跋扈を極めたりしかば學寮の衆徒舌を卷きて驚きたり時に越後寮の寮主曉璨和尙佛法の蘊奥を極め兼て漢學に精通す頁作頻りに佛法を罵倒すと聞き延て道論をなす辨難數日頁作遂に敗れ曉璨の弟子とならんことを乞ふ乃ち名を坦山と改め沙門に入る

坦山江戶を去りて京都に在るや奕堂和尙と山居し奕堂去るの後二條關白公の祈願寺の住職となる其性卓犖不羈關白に無禮を加へ有司に附せられしも狂人として赦さるゝことを得たり是れより狂翁の號あり

後ち叡山に上りて律部を學び山を下りて東山に入り蝸廬を結んで之れに居る蝸廬は自から作り自から名けたるものにして方六尺の車上纔に雨露を凌ぐの蓋を設け中を四區に分つ廣さ各三尺一區は其居室一區は其書房一區は其庖厨一區は雜具の室前に日月の窓を穿ち眞に天地間の一蝸廬なり之を東山日燬き邊に曳きもてゆき適意の處に止まりて書を讀み經を寫す糧盡れば市に出で丶托鉢し一日の米を得れば退て蝸中に隱る斯くの如きもの數年其江戶に歸るや恰も維新の變に際す貧困を支ふるに由なく淺草に居し賣卜を以て纔に口を糊せり既にして本願寺學寮の講師に聘せらる相州最乘寺の住職となり大學印度哲學科を置くや其講師に聘せられ尋て學士會院の一員となる

師爲人磊落不羈奇行奇言多し又少ふして醫籍を涉獵したるに依り心性に關する新說多し嘗て左右の弟子に語りて曰く余齡四十一に至るまで淫慾の念を離脫する能

はざりしと師にして始めて聞くを得べきの語師常に曰く古昔宗教の書を編する皆な一小説的なり基督に於けるも釋典に於けるも同一轍なり佛書萬卷を積むも取るべきの眞理は有數萬斛の砂中に眞金を撈するが如しと老師臨終の際弟子に向て死後其曾て認めたる未來記を公にせんことを望む是れ親近の高弟も嘗て知らざる所道友大內青巒弟子兒嶋碩邦の兩氏等相計り近日其遺稿を編輯するの企あれは未來記も早晚發見せられて梓に上るべしと云ふ

○天海僧正

家康を輔佐して德川二百有餘年間治政の基を開きたる天海僧正の二百五十回忌に相當するを以て今度日光輪王寺に於て法會の執行あるよしなるが左に揭ぐる一篇は同僧正の略傳なりと云ふ

慈眼大師法諱は天海世に南光坊天海大僧正を以て稱せらる足利將軍十三代義澄公の遺子母は蘆名の族三浦氏奧州會津郡高田鄉の人なり誕時未詳（或說には則ち後柏原天皇永正八年九月なりと云ふ）歲十一にして鄉の辨譽法師に從つて薙染す天文の初め叡山に登り神藏寺實全上人の室に入て台教を學習し或は出て四方に遊歷し兼て神儒の道に通ず元龜二年叡山兵燹の後叡衆亮信豪盛等と甲州の太守武田信玄の第に會して大に論皷を鳴らす天縱の智辯三百の論衆舌を捲いて信伏し英雄心を傾けて悅隨す此より名聲朝野に喧傳す慶長十二年山門大衆確執事を東照公に言す公兩衆の一舌なるを以て將に大師を探題執行たらしめんとす大衆亦請して叡兵南光坊に移らしむ同十三年東照公施藥院宗伯を介して始めて大師を駿府に引見す時に公侍臣に謂て曰く氣宇俊偉なり相知ることの晚きを憾むと是歲駿府に台徒を聚めて大に論席を張る公天質聰明特に台教の深致を嘉賞したまふ駿城論談蓋し之を權輿とす同十四年後陽成帝の詔りを奉じて入內し法問の奏對懸河聖耳を洗ふて叡感斜ならず勅して法服と燕尾帽弁に鳩杖を賜ふ尋て叡岳の廣學竪義を再興し衆の請に依り特に勅して新題者たらしむ是歲擢でられて權僧正に任ず同十六年更に僧正に進み毘沙門堂の室を賜ふ是歲再び駿府に入て東

照公に謁し一實神道の玄旨を傳授せらる（此より以來奕世の將軍展轉相傳へて之を崇奉すと云ふ）公の崇敬此より日に倍蓰す同十七年關東の靈刹たるを以て武洲仙派の伽藍を再興す東照公新に糾繩して營建す（後に東叡山中に移す）元和元年再び宮に入て後陽成上皇に亦一實神道の奥義を授け奉つる上皇宮殿を賜て之を褒賞したまふ（恩賜の宮殿は臺麓滋賀院の舊殿是なり）同二年四月東照公薨ずるに臨んで後事を大師に託す是歲七月宮中御懺法講の御導師を勸め了て特に大僧正に任ず同三年四月東照公駿河國久能山より下野國日光山に改葬し神廟燦爛擧山輪奐たり是れ公の遺囑と第二主台德公の鈞命を受て之を果す（蓋し談山權現「藤原鎌足公」の故事に倣ふと云ふ）後水尾天皇寛永元年勅を奉じて我東叡山を江戶城中の鬼門に開創し禁闕の叡山に擬して以て闔城の鎭護となし寛永寺の勅額を賜ふ同十三年第三主大猷公の鈞命を受けて叡山の伽藍を修營す同十五年幕府の台命に依り大師親ら東照公緣起を撰述し林氏の異見を推破して大敎を顯揚せり同二十年大師病あり大猷公數々床に臨んで看護優渥なり此歲冬十月二日東叡山に示寂す世壽未詳（或說に依るときは則ち世壽一百三十三法臘百二十二と云ふ）遺命に依り日光山に葬る（蓋し生前曾て東照公と深契あるに由ると云ふ）正保元年大樹大猷公大師の廟を台麓晃嶺東叡の三山に建てゝ追崇せらる後光明天皇慶安元年四月十一日特に勅して慈眼大師の徽號を諡らる

○世界宗敎大會議

明年米國シカゴの世界覽博會を機とし世界宗敎大會議を開かんとて左の目的書を同會長神學博士ヂョン、ヘンリー、ハルロース氏より本邦神道實行管長芝田禮一氏の許へ送達したりと云ふ我輩今之れを一讀して其大躰は敢て異論なきのみならず賛成の意を表する者なりと云へども僅々數月に過ぎざる一塲の會議に於て斯る大目的を達することの只難きを恐る去りながら又幾分か世界各宗各派の人々が懇心を結ぶの一端緖とも成るべきか玆に掲げて我讀者の一覽に供するのみ

宗敎大會議の目的

當委員會にては評議員の代議員と熟議の上宗教大會議の目的を定め之を建議すること左の如し

第一　本會の目的は今回初めて全世界中歷史上著名なる大宗教の重なる代議員の集會を催すにあり

第二　諸種の宗教は如何なる眞理及び幾多の眞理を包含して之を共同に布教するかを諸人に知らしむるにあり

第三　相互に友情を以て交り又互に相知ることに依りて異種の宗教を奉ずる信者間に同胞心を起さしむるにあり若し夫れ各派の利害相關せざるを以て旨とし或は徒に形式上外面上一致を務むるが如きは我輩の目的とする所に非ざるなり

第四　演説に最も堪能なる人をして各宗教及び耶蘇各派が自ら信奉し布教する所の重要にして特色を有する眞理を一々説示せしむるにあり

第五　有神教の確固たる基礎を示し人間が靈魂不滅を信ずる理由を明にし以て物質的哲學に反對する勢力を集めて之を強固にするにあり

第六　宗教が文學、技藝、商業、政治、民衆の家政及び社交的生活に及ぼす所の精神的若くば他の影響は如何之を波羅門教、佛教、儒教、波斯教、回教、猶太教、及び其他の諸教を代表する重なる學者及び耶蘇教諸派の代表者より十分に且つ精密に探知するにあり

第七　各宗教は世界の他の宗教に如何なる資料を與へしか又與ふるを得べきかを研究するにあり

第八　地球上重なる國民の信奉する宗教の現狀を精確に調査し之を記錄に明示して永く世に知らしむるにあり

第九　當時の大問題殊に禁酒、勞働、教育、貧富、に關する問題は宗教に依りて如何に説明せらるべきかを有力家に諮詢して之を査覈するにあり

第十　列國の平和を永久に保たんが爲め地球上の國民をして一層親密ならしむるにあり

○德行美談（第三回）

○三見の孝行　因幡國邑美郡行德村に藤岡久四郞と云へる民ありさらぬだに家貧くもして其日の烟りさへ立て

難きに其妻某はあしきことをなして家を出で、久四郎は眼を病みて明を失ひしかは、今は一家唯坐して餓死するを待つのみなりけり、子三人あり、長を嘉一郎と云ふ、年未だ七歳に滿たず、然れども深く之を患へ如何にもして家計を立てんものと思ひ、近村の家々に就て糠を買ひ之を問屋に持ちゆき僅々の利を得て以て父と弟妹とを養ふ其苦心勞力數年一日の如し、嘉一郎の至孝斯の如きを以て弟妹亦其感染する所となりたることそ嘉すべけれ、其時妹こうは漸く十歳の春を迎へ、他家の兒なれば蝶よ花よと愛くしまれ、身は錦繡につゝまれて遊藝戯具唯其好む所、氣儘勝手に日月を送るべきに、不幸にも其身貧窮の家に生れ萬事に不自由なるをも恨とせざるのみならず、自ら請ふて子守奉公に出で、いさゝの給銀を得て兄に贈り以て家計の一助に供し、弟秀藏は九歳にしていとゝ稚なかりけるが、又早起遲眠兄の商業をたすけて日夜奔走することそ殊勝の至りと謂ふべけれ、三子の孝養斯くの如きを以て、父久四郎今は安く日を送るを得るに至りたれども座ながらにして養を受くるは吾本意にあらずと盲目なれども又草鞋を造り嘉一郎の勞を分たんとせり、是に於てか父子の親愛いと厚く一家の和睦又熟せり蓋し嘉一郎至孝の致す所聞く者感嘆せざるはなしと云ふ、嗚呼三兒元是僻邑の小民眼に丁字なく固より孝悌の何物たるを知らず、而して其天禀の美性自ら發して斯嘉行あり世の奉養を受け學業に從事し年已に壯に及ぶも未だ曾て一の嘉行なきもの豈に心に愧ぢざらんや

○義僕賞與せらる　下ノ川嘉助と云ふものあり元と廣島縣備後國沼隈郡藤江中組の農下ノ川由兵衛の長男にして幼少の頃眼病に罹り遂に治せず安政二年諸國神社佛閣巡拜として生國を發し翌年八月本縣身延山に參詣し其歸途山梨縣北巨摩郡篠尾村平田八郎左衛門方に一泊を乞ひしが因緣となり爾來同家に僕事し盲目の身を以て主家の事を辨ずる卅餘年の久しき一日の如し其の行蹟衆庶の龜鑑となるべしとて先頃相當同郡長より賞譽方上申に及ばれし由にて去る二十三日本縣知事より左の通り賞賜せられたり

北巨摩郡篠尾村　下ノ川　嘉　助

資性温厚盲目の身を以て安政三年益次郎養父八郎左衛門の僕となり平素爨炊米麥の出納とを擔掌し細心玆に從事し兼て夜を守り米麥の舂挽は多く冬夜に於てし曾て倦色なし又病者ある時は懇切看護族者猶及ばず其勞役に服し所得ある時は些細と雖も消費せず皆之を主家に納むる三十有餘年間終始一日の如く忠誠主に事へ候段寔に奇特に付爲其賞金五圓下賜候事

明治二十五年七月二十三日

山梨縣知事中島錫胤

○珍らしき婦人　靜岡縣駿東郡片濱村松長の渡邊喜十郎氏の祖母おこのといふは今年七十八の高齡なるが年齡三十一の時本夫周助に死なれし後は殊に貞操を堅く守り家も本夫が存生中より不自由なき生活なれば村内の者へはいふもさら貧困の者ありと聽けば必ずや品物を施し慈善の件のみに意を傾け村内の褒者となりし夫婦も子といふ者なくて周助は終りたれば縁者より喜兵衞と云ふ者を養子としそれに妻を迎へ身代を悉皆讓りし後喜兵衞夫婦は子を擧げたれば嬉し喜びて喜十郎と名をつけ兩親よりも愛し育るに一家皆このおこのの行ひを見習ひ能く節儉を守り和合し生活目出たさも全くおこのが四十七年堅固に子孫を薰陶し實に村内の龜鑑となれるにてそれが爲め松長には曾て醜聞あるを聞かずと云ふ

○少年の龜鑑　少年の龜鑑として感ずべきは山形鍛冶町遠藤捴三郎の三男豐次郎(十二)なり父捴三郎は鍛冶職なれども家内は夫婦小供で七人暮しなれば此不景氣に漸く口を糊するに過ぎず思ふ樣に子供の敎育とて出來ざるも三男の豐次郎は見る所ありとて七歳の時より學校に登せるが未だ一回だも落第したることなき程の勉强家なるのみか特に感ぞべきは每年夏期に至るや學校より歸る間もなく氷賣に出掛け夜晝賣り歩行き相當の利益を受け其の錢にて筆紙墨書籍など買ひ求め一錢だも父に迷惑を掛けず父の捴三郎は豐次郎も十二になりたれば見習奉公に出さんと相談するを是非に三年の間通學したしとの願に其意に任せたるより一層の勉强

をなし一日も休むことゝてなければ高等二年にまで上りたるも父の惣三郎は不景氣のことゝて授業料を納め兼ね壹圓七拾錢餘も怠納になりしを豊次郎は例年の如く夏期の初より氷を賣りて壹圓七拾錢の怠納は夏期休暇前に納め尙ほ休暇中に賣りたる利益を以て筆紙墨を買ひ其餘分にして弟も入學させ弟の授業料をも納め呉れんと勵み居るよし

○孝子と貞女　大坂府下住吉郡百濟村大字鷹合村に住む助田石松といふは今年十一の小供ながら天性至孝にして父母に事へ弟妹を大切にすること大人も及ばぬ行爲あり一昨年の六月頃より其父吉兵衛病氣に罹り昨年十二月死亡せし後は其日の烟さへ立て兼ぬるを母と與に業を營み一日半時も怠りなきは奇特なりとて山田府知事より金一圓の賞賜あり又日根郡市村の橋本すゑ(三十一)と云ふは舅に事ふること尋常ならず良人某の死去せし後親類縁者より入夫してはなどゝ勸むるものありても貞女兩夫に見えずの敎を守りて更に浮きたる心を起さず亡夫の遺兒三人を養育しながら朝夕星を戴いて耕作に從事すること數年一日の如くなるは此れも奇特なりとて同じく金一圓を下賜せられしと

○孝女　新潟市秣川岸通一町目三十番戸畠山キミの養女ツル(三十五年)は不幸にして三人まで夫を迎へしも何れも一子を擧げては死去したればツルは獨身にて養母及び三人の子供を相手になし永々病臥せる養母を看護し晝は米舂を爲し夜には氷雪を賣り歩き雨降る夜は家にありて賃仕事を爲し晝夜間斷なく稼ぎ養母の看病までもなく子供等の養育も怠らねば近隣の者孰れも感じ合へるよし

○水戸烈公の楠氏追慕の詠歌

德川二百有餘年間文學の最も盛んなりしは文化、文政降つて天保の間に在り當時碩學高儒の輩出するもの乏しからぞ小山田與淸氏の如きは即ち其の一にして左の詠歌は水戸烈公が楠氏の誠忠を追慕して詠ぜられしを氏の添削したるものにて其の遺稿の一節なりと云ふ七月十六日あつさたへがたし朝とく藤田彪まふできて水戸烈公の御詠草を添削し奉るべきよしを傳ふ御詠草

の寫

　楠正成の五百回成と聞てよめる

五百年の昔したひていまも我

　　臣の臣たる道ぞつくさむ

御對書

御詠草かしこまりて拜見つかうまつりぬめでたき御作にて申すべき事も候はねどおなじくは道ぞを道をに遊ばし候方可然候はゞ又は果ての句道つくさましなどゝ遊ばしてもよろしくそもじは御かへ遊ばし候方可然候

御事書

　楠正成の五百回忌にあたるよし聞てよめる

と遊ばし候方可然候あなかしこ

十七日御通事よりせうそこして昨日の御詠御よみ直し遊ばし候をいかゞ候べからん再添削し奉れとのおほせを傳ふ御詠草の寫

　楠正成五百回忌に當れるをきゝて

五百年のむかしを今になしもせば

　　臣の臣たる友とちきらん

御答書

御再詠謹で拜見つかうまつりぬ昨日の御詠よりも立まさり楠公に御對し遊ばし候御意深く御たけも高くいうに承りかんじ奉りぬされど

　五百年の昔を今になしもせば

と申御句昇平の今の御世に御はゞかり遊さるべくや候らはん彼靜ごぜが鶴岡の廻廊にて舞曲の時むかしを今に成すよしもがなと申す古歌を吟じ候ひしに右幕下御けしきすさまじかりしためしも候へば俗難の御心しらひ遊ばさるべくやさて

　むかしに我も生れなば

と歟又は

　むかしなりせばわれもまた

と歟遊ばし候方しかるべくや候らはん又

御事書の

　當れるを聞てと申語

　當れりと聞きてと歟

　當れるよし聞てと歟

遊ばさるべく候あなかしこ
十八日小石川舘の御通事加藤傳九郎仰を傳へて御詠草添削の事をいひおこせぬ寫

太田道灌三百五十回忌にあたるよし聞て

世にしるく今もかほりの殘るかな
むさしの花と君をおもへば

おもひ出でいまはた忍ぶ相撲なる
糟屋の秋のふりしむかしを

年ふりしその世の事もしのばれて
袖うちしめる秋のむらさめ

御答書

御詠草謹て拜見つかうまつりぬ三首ともめで度御歌意もとほり詞の御用たがひもなくいうなる御作とかんじ奉りぬ御詞書はためでたく少も申べき事候はず端の御詠の果の句

きゝし人の名と歎きゝし君の名と歎遊ばし候はゞことにいうにや候らん中の御詠の下句

糟屋の里の秋の昔しをと遊ばし候てはいかゞ奥の御詠

年ふりしむかしを忍ぶむらさめに袖さへしめるむさしのゝ秋」などゝ遊ばし候はゞ道灌懷古の意深くや聞え候らんされど三首とも少も御讀みあやまりなどは候はねば本のまゝにてくるしからず候をなほいかで〳〵とよくぼり奉らんよりかうよしなし事きこえあげ奉る愚痴の田舍翁が死罪いづくにかさりて候はんさて又かしこみ〳〵もまうす三首の中もとの御詠のまゝにておもひ出で云云第一世にしるく云々第二年ふりし云々第三と承まり奉りぬ老漁が申すむねを御用候はんには世にしるく云々第一おもひ出で云々第二年ふりし云々第三と承り侍りぬ三首ともとり〳〵にめでたく候へば三首懷紙に遊ばし候方可然や候らはん三首懷紙書法の事もしるしたる書候へば御覽に奉るべくやあなかしこ

○寶物保存に付

左の一談は宮内省寶物取調べ委員青山氏の談話なりといふ其の調査の順序幷に分類法の如何にも適切な

るを覺ふ
寳物保存大躰の目的、國寳とすべき物品が段々海外に散逸し又は湮滅に屬するに付ては其筋にても種々協議の末宮內省の一部に寳物取調局を置く事となりしが是れは明治廿一年の事にて其の前は獨り海外に散逸するのみならず我國內に於ける亂雜は言語に絕へたる程なり即ち社寺の神官僧侶は社寺の寳物を一己の所有と心得其寳藏物をば私に質入又は抵當として借金の資となし甚しきは賣却して恬然顧みざるものありて實に我國寳物の運命は一髮千鈞を引くよりも危かりしなり玆に於て寳物局の設けあり寳物の叢淵たる京都、奈良地方の社寺を始め次に和歌山鎌倉等の各社寺寳物調査に着手せり、此調査は以て海外散逸の弊を喰ひ止むるを得るや否やを掛念するものあれど一旦調査を遂げ國寳と見止むる物は品物の地質、寸尺、個數、年數、作者等を詳記して全國寳物精細簿に謄錄する故萬一紛失賊難等に係るも搜索の便を得ること少からざるのみならず該物品は猥りに神官僧侶等が動かし能はざる成規なれば取締上頗る便益あり今實例を擧ぐれば先年某縣某郡秘藏の佛躰が何時の間にか逃走し、警察の手を經て再び歸山したりとなり此品は國寳と見止め鑑査狀をも交附しある貴重品なるゆゑ該鑑査狀寳物精細簿は搜索上少からざる資料を與へたりと云ふ寳物取調は古物のみに限れりと談了するものは十中八九にして到所古物取調べ云々と口外せざるなきも山は高きが故にか貴らざると同じく物の古きが故に寳らとせず現に輓近三四十年內外のものにして國寳として鑑査狀を交附せしこと一二に止らず而かして天平寳字即ち百有餘年の古物も國寳とせざることあり又眞僞如何を以て寳物と非寳物の標準となす儕輩あるも雪舟元信等の繪畵なればとて拙畵ならんには敢て國寳の列に加へず却て等顏光起永德探幽等の筆になりたるものが其出來によりては雪舟元信等を凌駕することあり又彫刻に就て一言すれば定朝運慶等は何れも妙技なるも時としては湛慶善慶等の手になりたる佛躰よりも出來惡しき事あり其他美術工藝建築等に至るも亦然り要するに其物自から

の出來不出來如何によりて判定する故物の眞僞人の近古は敢て問ふ所にあらず然るに右述ぶる如き障碍は國寳の前途を遮ぎり徒らに逡巡せしむ今の鑑査の任に當るもの亦難矣哉以上を寳物取調の目的に關する概略とす今述べたる目的を以て取調べ果して國寳なりと認むるもの丶品種は之を左の各部門に區別す

第一　古文書　第二　繪畫　第三　彫刻
第四　工藝　第五　建築　第六　書蹟

第一我國の治亂盛衰興敗等の歷史に要用なる書類海の內外を問はざるは勿論なり

第二は巨勢宅間春日土佐雪舟狩野住吉光琳谷菱川宮川歌川丸山四條等其他流派の如何を問はず苟くも佳幅額面卷物等の何たるを論ぜず此部門とす

第三は佛躰置物根附け等の如き刀にて彫刻したるものは此部門に入る

第四は蒔繪の硯箱印籠香盆堆朱香合又は曲輪の香合陶器德利鉢皿湯呑風呂掛瓶刀劔馬具織物等とす

第五は殿堂廊廓とす

第六は文章の巧拙如何に關せず字躰の巧妙なるものを云ふ即ち法華經又は觀音經等は同一の文章なるも弘法大師菅公小野篁行成等の手になりたるものは文章其の物を稱するにあらずして字躰其物を稱するなり

「シガゴデーリー、ニユース」より國會に譯出したる福嶋少佐遠征の一記事は記者の云ふ如く殆ど小說に類するものあり盖し同少佐をして古今未曾有の此大旅行を思立たしめたる其原因果して此くの如き事實なるや否やは知る可らずと云へども兎に角軍人の氣象自ら其の擧動に現れ一讀頗る快を覺ふ、深遠なる學理考究の傍ら瀏覽又其欝を散ずるの價値あるべし

〇福島少佐の遠征　（國會）

獨逸伯林府の日本公使館付武官福島少佐は獨逸首府より淸國上海迄陸上長途の騎馬行を試むることに决し、本年十一月下旬此の遠征の途に上る、此の間の距離實に一萬キロメートルに亘れり。此の驚るべき騎馬行は中途に於て馬を易へず、徹頭徹尾、一馬を以て其目的

を達せんと期するに在り、故に愈々此の行を全ふしたる上は、騎者と其名譽を此馬と共に頒たざるべからず。此の行は發途の日より七ヶ月以内に終る豫定にして、歐洲の諸新聞紙皆此の行に多少の注意を喚起せり、然れども其の行の感慨なることは未だ一般に承認せられざる所たり。福島少佐は身長高からずと雖も、躰格能く稱ひ、純乎たる日本人の標本なりとす、年未だ三十(記者云ふ、氏は三十五六歳なり)を過ぎざれども、已に歩兵少佐の列に加はる、是れ同少佐の聰明にして且つ軍人たる資格に長ずる所あるに依る。氏や累進して現官に上り、且つ在伯林の日本公使館付武官に任ずるの榮譽を得たるも全く之れが爲めのみ。此の勇敢にして且つ大志ある少佐は已に其行の三分一を終り、毎日平均の行程は六十二キロメートルに及べり、而して今や露國及び西伯利亞間の境界に達したり。聞く福島少佐は名家に生れ有名なる長州藩閥の子孫たり、(記者云ふ氏は舊信州松本藩士なり)而して今回少佐が此の行を起すに決したるは全く一時の虛想に發し、日本政府の補助を得て玆に至りたるものなりとの說が今日に至るまて一般に行はるゝが如し、然れども其實然らず、此行實に一婦人の愛に基けるもの、而かも其婦人は絕世の美人なり。福島少佐は頗る交際社會に出入するとを好み、伯林都門の豪遊に慣熟し昨冬中の宮廷の踏舞會を始めとし、苟くも交際季節に行はるゝ宴會には必ず出席せざるなかりき、其人と爲り快活にして溫雅愛すべきを以て、交際社會に人望甚だ高く、此交遊中に於て普露西の名將フオン。ポッドビルスキー氏の令妹と相知れり。此貴孃は絕世の佳人にして伯林交際社會に稱せられしものなれば、少佐は一見、眷戀措く能はず、終始眼眸を此貴孃に注射して餘念あらざる姿は忽ち傍人の眼に觸れたるより、甲傳へ乙和して未ざ幾何ならざるに、此の風說交際社會中の一談柄となり、同少佐は何故に我交際社會女王中の絕美人を懸想するに至りしやと口耳相屬し、貴婦人等は扇面の上に微笑を含みて縉士等は少佐の後背に立ちて冷笑せり。此の如くして數月を經過しポッドビルスキー孃の

一家は少佐が同孃に意あることを悦ばず、同孃も亦躊躇するの色あり、而して同孃の舍兄は俾斯麥公爵が編成せし有名なる聯隊付の武官なれば、福島少佐が其令妹に愛を求むるの情あることを見て寧ろ憤怒するの狀あり。然れども此日本人が公然求婚の儀を提出するまでは固より斷乎たる所分に出づる能はざるを舍兄の心中には唯だ怨み居りたりける。

福島少佐が懸想せし美人の舍兄ポドブリスキー氏は令妹の爲めに少佐を遠けんことを謀り、即ち同僚の士官等を語らひて、一夜伯林の一倶樂部に遊び、豫て打合せし所に依り、少佐にシャムパン酒を甚だ勸めて大醉せしめ、且つ少佐を窘め呉れんと相談一決したり。偖少佐は歩兵士官なりと雖も、平素人に語るは騎馬の達人と云ふに在り。少佐は追々酒の廻るに從ひ騎馬の自負を始め出せしに、元來獨逸人は日本の武人を以て騎馬に慣れずと爲し、頗る之れを輕蔑し居れば、少佐が眞正なる騎馬の達人たることを信ぜざりしが斯る間に少佐は醉に乘じて謂へる樣我れ能く伯林より上海まで馬を易へずして陸上の旅行を七ヶ月間以內に仕遂ぐべしと。其場に居合せし獨逸の軍人等は少佐の談を面白き事に思ひしも、始めの程は眞面目の言にあらずと爲せしに少佐は醉の廻るに從ひ斷乎として此事を云ひ張り、屹度此行を仕遂げて見すべしと自負措かざるより、茲に初めて獨逸軍人等は少佐の言が一時の戲にあらざるを承認し、且つ少佐にして愈々此の行を仕遂ぐるならば賭するも妨げなしとて、遂に之に一萬マルクの金額を賭するとはなりぬ。若し此行にして果して獨逸人に依り發意されたることならんには獨逸の軍人等は能く二千マルク以上の金額を賭するの膽氣なかるべきも、此行を爲す者が日本人なるより輕侮して彼等は輙ち一萬マルクと打て出でし次第なれ。已にして少佐は其の醉の醒めし時、始めて愚なることを言ひ出してけりと思ひけれども、少佐固より武健敢爲の性あり、一たび言ひ出せしことは斷乎として復た跡に引くの人物にあらず、然れば此處に少佐は彼の日本男兒が從容として自裁に臨むの高貴なる精神を發揮し、斷然曩の己

れを侮蔑せし者共を驚服する所あらんと自決し、玆に愈々長途の騎馬行に上る事とはなりぬ。少佐は此行に用ふる駿馬を選擇するに際し英國上等種の十歲馬を特に伯林府内にて買求めたり、行李已に整ふに臨みて、少佐は軍服を纒ひ、此の駿馬に跨り愈々出發したるに、其服裝は恰も佛國の騎砲兵士官に類したりき。少佐は下襦袢の着換の外佩刀及び二箇の短銃を携へ、彈藥の準備を十分に爲し置きたれは、此れが爲め尠少ならざる金額を費せしことと知るべきなり。此行や露國を經過したる上、西伯利亞を横斷し、轉じて淸國上海に出づるに在り。少佐が此の行に付き獨逸軍人と賭せしは昨年十二月の事なりしに、此行は本年一月下旬に起り七月に至りて露國を通過し、已に西伯利亞の境界線に達したり。少佐が獨逸の國土を離れ、初めて露國の地を踏みしはクトノウ府に在り、即ち同地に駐在する露國の射擊第四聯隊付士官等は特に少佐の膽氣を稱揚したりしとぞ。ヴィルナ府に於ても均しく軍人の喝采を博し、同地以外は道路非常に悪しく、且つ時恰も嚴冬に際し、大雪氷塊の爲めに道を妨げられて、實に行路難を極めたり。少佐はヴィルナを距る二十哩の地に於て危險なる經驗に遭遇せり、即ち鬱蒼たる松林を通過する際日已に暮れて途遠く、闇黑咫尺を辨ぜざりし際、少佐は尙も馬を急がして進行せるに、午前一二時の頃に至り松樹の蔭より一點の火光を認めければ、少佐は以爲らく是れ一躰の樵夫が林中に日を暮したるより松火を點じて煖を取り居る者と、而して焉んぞ知らんや此等の人物正に顯れ强賊なりしことを」福島少佐は林中の松火に疑ひを抱きつ馬を前めけるに、忽ちにして一路幅狹き處の兩側を蔽へる深樹の闇中より數名の曲者飛び出で、内一人は矢庭に馬の口を取り、他の數名は騎者を執へ强て鞍上より引摺り御さんと務めぬ。此時少佐は實に其馬の慧敏なりしが爲め自から救ふことを得たり、即ち馬は咄嗟の間に奮然として後脚にて躍り上り、曲者をして爲す所を知らざらしめ、且つ數名の手をきびしく蹴飛ばしたり、此際少佐は拳銃を擬して自ら防き、馬に一活を入れて急に鞭を加へ、一氣呵

成に疾く驅り去れり。已にして少佐は僅かに次の宿驛なるヤルナックに達せし時、林中にて我が出逢ひたる曲者は有名なる一種の强賊にして、現に二週間前も此强賊は追捕に向ひし憲兵二名を殺害し、露國政府は若し此を縛し來るものあらば、其賞與として巨額を與ふべしと告諭し居ると聞けり。少佐がヤルナック府に達せし時、同地の人民は少佐の冐險談を聞きて、初めの程は容易に此れを信ずる色なかりしも、愈々實說なるを知るに及びて、皆少佐及び其名馬の勇を頻りに稱して止まず且つ幸に殺戮を免れしことを少佐の爲めに頗る祝したりと云ふ。已にして此冐險騎者が露都聖彼得堡府に達するに及び、同地人民は皆此を歡迎し、露國皇帝は謁を賜ひ、少佐召に應じて伺候せし時、皇帝は親しく少佐の勇膽忍耐を稱揚し玉ひたる由にて、近衛隊士官等は此れを遇するに貴賓の禮を以てし、一般の社會亦其厚遇に扶くる所あり、福島少佐の名に一時露都に喧傳せり。莫斯科府に於ても少佐又非常の歡迎を受け、同地市會は特に少佐の名譽を表し、其他市民一般に待遇至らざる所なかりき云々と。

○正誤　前號の目錄中論林欄内に「町田忠治」とあるは「土谷忠治」と正誤す

彙　報

日本ゆにてりあん第一協會にては夏期炎熱にも拘はらず每日曜日には必ず古莊三郞佐治實然氏等の演說ありて每會相應の聽衆ありしが最早殘暑も散じて冷氣に赴きたれば追々西洋人の出席演說もあるよし

同會員マッコーレー氏は過般來北海道に避暑せられしが不日歸京すと云ふ

同ローレンス氏も病氣の爲め同道に轉地療養中なりしが稍々快方のよし

同前川太郞氏は夏期初旬來群馬金澤等の諸縣及び京坂の地方を巡遊せられしが去月末無恙歸京せられたり

論林

心身運動の區域を論して富豪家に告ぐ

菊池武德

片田舍の山里に至りて細民生活の有樣を見れば茅屋に住して襤褸を纏ひ咫尺の天地に齷齪して貧夢の間に死生する者多し都人士は常に之を憐み等しく人類にてありながらサテ／＼果敢なき境遇かなとて歎息せざるはなし廣き世界の事々物々は文明開化の春に遇ふて到る所に快樂の種多しと雖も此等の細民に至ては其幸福の求むべきを知らずして終生草木と共に枯槁し社會にあれども猶ほ無きが如し境遇習慣の然らしむる所、天賦を空ふするものにして之を稱して形躰上の下等種族と云ふ又彼の政事に狂奔する者を見れば自由と呼び改進と唱へて黨派の掛引に良心を欺き勢權の競爭に萬事を犧牲にするも復た顧る所なきが如し心ある人は其内部の事情を視察して竊に彼輩が局量の狹きに驚きサテ／＼勇ましき所行かなとは每度苦笑して排斥する所なり社會の人事その數多し商事なり產業なり一として名利の伴はざるはなけれども政事家輩の眼孔は或る一點に偏注して心の範圍を縮むるのみならず熱爭の極、往々公私を混淆して人間交際の幸福を滅せんとするに至る迷信風潮に驅逐せらるゝの致す所なれども胸中些の餘地を殘さずして凝て思案に能はざるが如き之を稱して精神上の下等種族と云はざる可らず即ち一は形躰に於て不具たるを免れず一は精神に於て陋愚たるを免れば之を人間の本色に照すに兩樣ともに不幸の人と認めざる可らず蓋し何故に之を不幸と云ふや心身運動の區域を縮少すればなり坐して動かざれば足に痺を生じ凝て解けざれば心に迷を起す左れば人の上下幸不幸は第一に心身運動の區域如何によりて判せざる可らず

世に黃金なるものありて人生の至寶たり之に富む者は心の儘をも行ひ得べく之に乏しきものは願ふて一も叶

はざるを常とす片田舎の山里より花の錦の都に來り又海を超えて歐米漫遊にもと思へども費用に堪へざる者は復た如何ともす可らず政治家が黨熱の餘炎を拂はんとして或は植物に遊び或は文學を弄ばんと欲すと雖も財産に餘裕なければ右の保養も叶ひ難し唯夫れ心身の運動は人生に欠く可らざるの要あるが故に假令へ黃金に裕かならざる者にても種々に工風を運して成るべく其區域を擴めんと欲するの常なるに然るに今の我國の富豪家は此邊に付て如何に其心事を定むるものなるや蓄財富致以て今日に至りたるは素より稱するに堪へたりと雖も其裕かなる財産を以て其心身を保養せんとするに却て貧窮の人に劣る様のとはなきや萬能の力を有する黃金を抱いて將た何事をか爲さんとする願ふに形體上の事は山間の農夫を憐むに足らん歟なれども爲す所多くは鄙俗にして見るに忍びず之に付て我輩少しく說ありと雖も爰には暫く之を擱き主として彼等精神上の運動を如何と尋ぬるに日夕唯富を重ねんと欲するのみにして胸中他に更に何等の觀念もなきが如し曾て高尙なる思志を涵養したる者に非されば只管金の計算を思ふも或は自然の所なるべしと雖も爲めに陋として人の人たる所以を空ふするに至ては是れ亦精神上の下等種族と視做さゝる可らず幸にして人生の至寶たる黃金に富めばこそ其威によりて世間の尊敬を買ふとなれども身の本來に價値あるに非ず財産の多寡に從つて輕重せらるゝ迄のとなれば今日百萬圓の身代の者が明日に至り五十萬圓に減するときは其身も同時に五十萬圓の價値となり無一錢となれば又隨て無き人となるべし人か金か區別判然たらざるの奇觀を呈するも畢竟するに心の區域の狹きが故のみ形躰上の言語を假て之を評すれば不具なり精神上の文字を用ゐて之を云へば陋愚なり而して試に之に語るに夫の細民の境遇を以てする時は其生命の果敢なきを賤しみ政治家の狂奔を云へば其爭論の淺ましきを笑ふ要は皆心身運動の區域如何に歸するとにして夫子の如きは財産に偏して其最も果敢なく淺ましき人たるの次第を解せず故に我輩は富豪の爲めに精神保養の法を案するに哲學にても理學にても書

籍に目を晒すとを得は此上はなけれども讀書若し行はれ難しとならば俳諧發句の嗜みにても可なり結局これも叶はずとあれば神佛を信心しても後生を祈るも敢て無効に非さるべし兎も角も財産に凝るの心を融化して思想的區域を擴むるの一事は富豪に大切の心掛なれば我輩は其實行の速かならんを勸告せざるを得ず漫に財産の大を以て俗に外見を誇ると雖も枯木に花は似合はしからざるとを知るべきなり

孝の本義奈何

土谷忠治

忠孝は我國特有の美德、是日本の日本たる所以なり。不レ愛二其親一、而愛二他人一者、謂二之悖德一。不レ敬二其親一、而敬二他人一者、謂二之悖禮一。然り而して親を愛し親を敬するが爲めに、他人を殘害するに至りては則不可。頃日大分縣速見郡杵築村に明治の郭巨、現時の劉安を出せり、或者は之を見て大に喜ばん、或者は之を聞いて大に感ぜん、然とも社會は之を以て罪科となし、而も重懲役九年に處せり、吾人は誠に斯く有るべきを豫期せり、彼れ河野義平の其親の病の平癒を祈るは甚だ善し、其故を以て妻を殺すに至りては、慘戾も亦極まれり矣と謂ふ可し、然るに彼れ義平は之を以て、忍ぶ可らざるを忍びたる非常捧身的純孝子を以て自任するなり其言に曰く、

佛の敎には父母の大恩は滄溟海より深く父母の育みて呉れたればこそ我が身といふ者もある事にて父母無き時は生命も無き道理であり升、昔唐土の郭巨は母の食の乏しきを憂ひて我子を土中に埋めんとし又楊威は母を思うて虎の前に我が命を捨てんとしたといふ說敎を聞きましたが私も常々から何か一つ親の洪恩に報ひんものと思ひ子はまた出來もし人の子を貰ひても育てらるれど兩親と云ふ者は取替への無きものと思ひまして孝を盡さんと存じて居ました

又曰く

私は全く母が眼病を癒す爲めと思ふて致しました事で御座りますから此上はどうぞ私が體は勢一盃拷問に掛けて一日も早く兩親の許にお歸へしなされて下

さりませ

依是觀是、彼れ儀平は寧ろ之を憐む可きの徒。其の茲に至らしめたる敎誡こそ、甚だ懼る可きなり。世の古風道德家以て奈何となす乎。

社交及政治倶樂部

T. K.

智識を交換し得るも交際の賜ものなり、世務を諮詢し得るも交際の賜ものなり、憂苦を分ち歡樂を共にする皆是れ交際の賜ものに非すや社交倶樂部なるものは則ち此等の賜もの を享受せんと欲する の意に出づと雖も、更に一歩を進めて言へば、人は交際的動物なり、交際已むときは人も亦已む、社交倶樂部なるものは夫の交際の賜ものを目的とするよりは寧ろ交際と云へる天賦の發動と認めて可ならん然るに爰に政社政黨なるものあり、政事的希望を抱きて相會同するものなれば是れ即ち政事思想の發動なり、一種特別の人意に基くものなり、而して社交倶樂部は自然の天賦に基くものに非すや、其區別明々白々なるに拘はらず、我國の實際を見れば政治倶樂部あるのみにして社交倶樂部の幾んど希なるは何ぞや、否社交倶樂部の名を冠するものも率ね政事的の志望を蓄へ、若くば初めは社交倶樂部にてもイツしか政化し去るもの比々みな是れなるは何ぞや、知らず日本には政事の要用ありて社交の要用なしと云ふ乎。

凡そ社交は人間の天賦に於て欠く可らざるものなりと雖も、倶樂部をなして日の幾部分を消費するは、人により或は堪へざる者もあらん、夫の政治家輩は政治を以て職業となす者なり、其職業の繁忙なるが爲めに社交倶樂部の如き自ら等閑ならざるを得ずと云はば、是れ亦一應の理由なきに非ざれども、所謂繁忙とは實際に於て何程の繁忙なるや、素より時の事情により一定す可らずと雖も、政事の用談は擱き、本來寤寐唯政事を是れ思ふのみなるが故に、何となく繁忙を覺ゆるのみか談、政事に非されば意を牽くに足らず又口を開くこと能はざるが故には非さる歟、或は初め社交倶樂部を組織するにも同一味の人相集り、其同一味は率ね政事的

同一味なるより、倶樂部の方向も次第に政事的に傾き果は政社となすの相談も容易に纏結するもあらん、一は社交倶樂部の振はさる由縁、一は政事倶樂部の多き由縁なりと雖も、之を要するに今の我社會の人々が政治に偏して餘地なきの效す所に非ざるはなし、是も時勢の風潮と思へばソレ迄なれども、政事倶樂部は敵を作るに傾き、社交倶樂部は友を作るを主とす、此點より極言すれば政事倶樂部は所謂交際と云へる事の反對なり、左ればこそ其同一味の外は途上相遇ふも反目嫉視するの有樣にして、内に含んでは軋轢となり外に發しては騷動となり、社會の風景を殺了すること容易ならず、然れば則ち之を救治するの法如何と云ふに、政事倶樂部なるものは其性質に於て敵を作るを免れざるが故に、他の一方に於て社交倶樂部を利用し、以て政爭の熱を緩和するの外ある可らず、今日の如く政界の百事圓滑を欠くの場合に際しては、社交倶樂部の賜ものたる智識交換、世務諮詢將た分憂共樂等の如き、積極的の所望を言ふに遑あらず、唯社交上の獘を減す可き消極的の作用をなすを得ば、其功績豈また鮮少なりとせんや、人或は政熱緩和の言を聞きて到底無益の迂説と視倣すもあらん歟なれども、現に政事以外の社交を樂みて之が爲めに極端の政爭に走ることなく又極端の政獘に陷るを免れ、世を傷けずして身に益したるの實例は枚擧に堪へず、夫れ山に住する者は山を知らず、政界に籠城して社會の一般を視察することなくんば、獘を獘とせず、利の利たるを解せざる敢て怪むに足らさるのみ、ア、天下豈一日も社交倶樂部なかる可んや、不幸にして今や政事倶樂部の併呑する所たり、人、天に勝ち、政事、交際を破る、心ある者の一顧を要する所ならずや。

宗教理學の軋轢

石　毛　生

余元來宗教のことに暗し隨て左の拙譯もまた章をなさずと雖ども謹て大方の示教を乞はんが爲め爰に宗教紙上の餘白を汚す

今日文明社會に於ける智識の戰場に最も世人の注目せ

ざるべからざる一大顯像とは理學發見と無形上より隱然と人民を統宰せる所の宗敎とが互に精を練り矛を橫へ若し乘ずべきの機あらば之によりて一戰端を開き勝を世に誇らんが爲め互に空隙を窺ひつゝあること是なり彼等は新聞に雜誌に書物に討議論駁せざるなく其甚しきは婦女兒童をして耳を傾けしむるに至れり然りと雖も理學と宗敎とが互に入れざる斯くの如きは果して到底相抱合し難きの原由ありて然る乎アークデーコン氏曰く「吾人が今日正に講究すべき一大問題は宗敎と理學とを一致協合せしむるにあり即ち今代の人をして宗敎に歸依せしめんとすれば彼等の尊信する宗敎が確乎たる理學上の基礎を有することを知らしめずんば決して之を誘導する能はざるに至らん」と然り而して今代の理學宗敎の軋轢なるものは一宗敎が他宗との可否優劣如何を論ずるにあらずして凡て宗敎が因て以て基礎とする所の理想の正否に關するを以て論議する者なれは昔日の宗敎爭鬪と大に異る所あるなり否な宗敎なるものが存在するは誠に學理上に於て之を許すべきものなるか或は學理上之を許すべからざるものなるかと云ふにあるを以て宗敎の存亡は此の一戰にある事なれば之を論定するは容易ならざる事と謂ふべし昔日宗敎を攻擊するの武器は罵詈嘲弄にして彼の行爲異樣なるを唯題目となしたり故に之が防禦の方法は堅忍不拔の精神を以て時の來るを待のみ今日は之に反して宗敎の學理に合ひるか、一定の主義を有するかと云ふにあるを以て亦昔日の如く安然たること能はざるなり約言すれば今日の宗敎攻擊は外形にあらず內部にあり而して恐るべきは十八世紀に於ける佛國の宗敎改革の如く迅速急激なるにあらずして遲々として宗敎の基本、を攻擊し來る所のものにあり

地球の方圓、地球の動靜、地球の創造及び地球の廻轉等は彼等兩者が大活劇を演ずるの處なりしが今や殆と理學の大勝を全ふし以後萬物の統宰者たるの名譽を得て今後宗敎なるものが成り立んには理學の指示に從はざるべからざるに至らんとするの傾行あり是に於て乎理學が宗敎に對する責任や輕からざるなり何んとなれば

元來兩者の反對にして取るに足らざる一時偶發に起りたる想像に留らば理學の勢力たる次第に狹隘薄弱に陷らざるべからず之に反して理學上より宗教が天意天則を發表するものなるや否を發見するを得ば理學が世に利益を與ふるや實に少小ならざればなり

之に因て是を見れば理學と宗教をして合同せしむるは急務なりと雖も之が爲め地質學の進歩せるの今日地球創造に關し已に地質學上の定論あれば最早之を論ずるは無用の辨たるを免れず此の上は吾人の目的とする所は彼の兩者は根を同ふする枝の如く外形は異るも內實を見れば之を分界するものなく且つ兩者は利害を共にするものとすれば後來如何に成り行くべきかを探究せざるべからず換言すれば理學と宗教の二者は是非とも反對せざるべからざる性質のものなるや否やを吟味し斯道に志すものに些か注意を乞はんと欲するにあり

熟々考ふるに理學と宗教とは之を探究し來れば別に理論上水火の相容れざるが如きあるを見ざるなり今日迄彼等のなせる軋轢は數百年に渉れりと雖も其反對の由て來る所以を察するに甚だ不分明にして之を正當に評し之を宗教たるの名義の上、理學たるの名義の上より觀察すれば何んが故に苦んで相容れざるか未だ之を知るの理由を見ざるなり何んとなれば宗教に關する一定の解釋を下せるものあるを知らず理學の宗教と異る點を論證せるものなく又宗教と理學が同一物なるかを論ぜしものもなければなり思ふに理學とは覆載萬物の探究によりて連續すべき系統を有する智識を云ひ宗教とは之を概論すれば無形物に對する人類精神的の識感を發表したるなり而して此の精神的の識感を明はすには人種と時代とによりて相異らざるを得ず野蠻蒙昧の時代には錯雜にして其勢ひ弱かりしも世運の進むにつれて純粹潔白なるものとなり其勢ひ亦從て強く且つ高尙の趣を呈するを以て世を益するは勿論のことなり卽ち野蠻時代には日月星辰を恐れて之を貴び或は動物植物の如きものをも敬したりしも文明に赴くに及んで一種の神を認めて之に禮し之に服し以て不知不識道德の標準とはなりぬ

上論の如く理學は宇宙萬物を探究して眞理を發見すべきものならば人類精神的の識感により起り來れる宗敎に關し反對すべきのみならず宗敎は理學の部分に屬し一科學を設けざるべからざる一元素なり、見よ恩謝尊信の習慣の如きは何れの時代何れの國と雖も之れあらざるなし亞米利加印度人の如きメキシコ人の如きは未だ舊世界と交通せざる以前より既に已に宗敎的の精神を有し神を敬することを知り戰爭に人を囚ふれば之を神に供せしは歷史上の事實にして決して疑ふべからざなりされば舊世界新世界を問はず文野を論ぜず何れの國何れの人種と雖も宗敎のありたると明かなり又文明の今日に至る迄宗敎なるもの丶傳はり來りしを見れば實に一大妙事否宗敎の事たる理學上花木の發達混虫の變化を論ずるが如く宗敎なるもの丶存在せる十分なる證にして正に宗敎學の起らざるべからざるに至りしなり夫れ然り然るを以て宗敎は化學物理學の如く既に理學の部分に屬せざるべからず故に若し宗敎の顯像にして疑はしきものあれば物理化學の如く之を硏磨し昔日の如く之を擯斥し之を罵倒せんとするか如きは理學の爲めに取らざるの所爲なり然り而して此の方法たる互に他方をして能く自己の是非正邪を吟味する所あらしめざるべからず一言すれば互に寛大を以て他を遇し以て探究の順序を立て丶異同の依て生ずる所を討議せしむるにあり是れ彼等兩者が異同を生ずるは其主義相反するの故にあらざるを以て後來協同一致を來さしむるの機會を與へしむるの便あればなり且つ又彼等をして完全なる區域に到らしめんとすれば恐らく此の方法より勝れるものあるを知らざるなり

然らば理學は何れの方向を取て探究の順序を立てんか今日世界人民の神とする所のもの或は精靈なるもの丶如きは理學の確定する能はざる所なり然らば理學は斯るもの丶存否を確むる能はざるを以て神或は精靈等の存在を否認すべきや否や之を否認するにあらざるも深妙にして之が探究を貫徹する能はざるなり然れども之を放棄するは些か理學の職分に反するの感なき能はず蓋し理學上の智識たる限りなきものにして之が使用

の方法により益々發達するを得ればなり若し然らずんば精神的無形の事實には理學の立ち入るべからざるものにして理學の範圍外なりと云ふに同じ取りも直さず理學は深妙なる所を探ぐり探ぐりて其奥義の存在を詳にすることを欲せざると同じくして理學の面目を汚すと云はさるを得す

宗敎も亦其理學に反すべきの個條あるの理なし之を以て獨り誇稱するも理學に反するの宗敎は眞の宗敎にあらざるなり故に學理を離れて宗敎なく叉宗敎を外物視するの理學は適當なる理學にあらざるなり

是に於て乎知る理學と宗敎とは互に衝突すべき理由なきのみならず將に抱合一致の運動をなさゞるべからざることを、然るに今日迄彼等が互に厭ひ互に容れずして相軋轢せし所以のものは蓋し左の理由に外ならざるなり

（未完）

叢　談

左に掲ぐる數談は某氏の所談なりとて友人高木氏より寄せられたり例を卑近に取り妙に哲理を說く、說の當否は我輩敢て保證せず

○雀蝶變化

雀蝶に謂て曰く汝の俗性を見れば菜虫なり汝むかしは畠にまろび自由にかけまわる事もならず漸く菜の葉に取付て蠢々としてありつらん今化して蝶となり花を尋ね香を追ひ飛び自在の身となりぬ昔に比すれば其樂み幾何ぞや今我小鳥なりといへども翅あり足ありて心の儘に飛行く然るに我九月は海水に入て蛤になるといへる風聞あり彼蛤を見るに目鼻もなく手足もなし甲を冠りておりおり舌を出せども何を喰と云ふ事を知らず極寒にも水中に轉びまわり砂に埋れ居る計なり我かゝる身になりたらば如何はせん、なまじひに生れながらの蛤ならば此のはずの事と思ひ居るべけれども一度雀に生をうけ山林の樂しみを極めたる身の變化して水中の艱苦をしのぎ潮の大小に依て、瘦つ肥つ、するなれば、いかばかりか昔し戀しく迷惑ならんと今より此の事を

思はれて歎き悲しむのみ汝はいかなる善果ありてか菜虫より立身してかゝる自由の身とはなる我はいかなる悪因在てか飛鳥より下落して異な者になるとよと涙を流せば蝶聞て云ふ歎く事なかれ汝が下落にも非らず我が立身にも非らず夫氣集りて物となり變化して形をかへ我何の心かあらんや菜虫より化して蝶といへども其時如何様にして變化したる事を覺へずまして菜虫の時の事は絶て忘れたり今思へば定めて其時は菜虫相應に暮したるなるべし昔し莊子夢に蝶となりて飛行く莊子夢中に蝶の心になりて我は元人なりと云ふ事を知らず夢覺めて後は本の莊子なり却て云ふ莊子夢に蝶となりたるか今又蝶が夢に莊子となりたるかと變化の理又如斯汝九月變化して蛤になる時は天氣自然に動て覺へず海に入るなるべし此時に至りて何の心かあらんや思ふに醉て眠る如くなるべし既に蛤になりて後は其雀の心は絶へてなくなり自から蛤の心になり極寒にも水中を家として寒き事もなく轉びまわりて相應に渡るならん形變すれば心氣共に變するは理の常なり理は形象なく氣中に存す既に雀の形あり雀の氣あれば雀の理存す又た蛤の形あり蛤の氣ある時は蛤の理存す形の心は其の形に隨ふものなり形滅する時は此の形の心はなし昔し老父あり臨終に及ふとき旦那坊主來たりて念佛を勸めければ老父眼を開き萬物無より生じて無に歸す何ぞ輪廻流轉する事あらんやと云ふ坊主云ふ萬一ありたる時は如何し給はん唯理をまげて念佛を申給へと老父頭を振りて縦へ生れけると云ふ事ありとも絶て苦しみにもならず御坊は母の胎内にありし時の事を覺へ給ふか生るゝ時は如何様の心持にありしぞ語り給へと云ふ坊主腹を立て誰か一人之れを覺へたるものあらん其方は覺へ給ふかと云ふ老父が云ふ我も不覺近く生るゝ時の事さへ覺へたる者なく、まして遠き前生の事誰か覺へたる者あらんや然らば此後又何に生れたりとも今の心は絶へて無くなり蟻になりとも鼠になりとも其生たるものゝ心になりて相應に暮すべし一生は夢の如しと云ふ來世も亦一生なり是れも亦夢の如くにてぞあらん然らば生をへだてゝしれぬ事を今より苦勞にするも愚痴な

り只死ぬ思ひで死ぬるが當下の一念ならん是れ即ち成佛なりと云へば坊主言葉なくして退きぬ今藷蕷變化して鱣となり腐草化して螢となる試に鱣と螢とに向て問ふも何ぞ山のいもと腐草の心を知らんや藷預腐草又何の業報かあらんや陰陽のあつまりて形をなし其形氣の内を運て動止語默の用をなす生氣盡て形を離る是れを死と云ふ此の形に生氣ある故に喜怒好惡の心あり此の形死して後は生氣盡きぬ何に依つてか此心殘らんや火の熾なるも薪に付て燃るなり薪盡る時は火自から滅す餘烟ありと云へども久しき事能はず此火滅すと云へども亦金石の中より出て火は轉はる既に消へたる火金石の中へかくるゝにやあらず汝默識すべし言語の盡す所にあらず

○蟬蛻至樂

蟬樹上より下りて其蛻に謂て曰く我と汝と本一躰にして土中にあり今我汝を辭して樹上に吟じ美陰を得て樂しめり我汝を憎みて捨つるにあらず然れども我か力汝を如何んともする事能はず汝憮々我を恨まん汝の情を察して毎に恨怩たるのみ蛻が曰く汝甚た惑へり天地の間物皆命あり智力の及ぶ所に非らず其上汝羽翼を生じ美陰に吟じて樂むと云へども思ひ寄らず鳥の來つて喰はん事を恐る此樂みあれば必ず此憂あること世の中の常なり今我れ精神氣血共に汝に讓り大際を明けて無事に樂しむのみ又何をか求めん生を好まず死を憎まず吉凶榮辱自からしる、時に風に吹かるれば隨て飛び行き風止めば我も亦止む物と逆ふ事なし形破れ足折れても痛まず恐るゝ事なし王公の富貴も顧みるに足らず其實は我れなきが故に此苦樂得失の境を免れたり佛の寂滅爲樂と云ふものも默して識るべし蟬が曰く汝は誠に解蛻の人なり我れ露を飲みて世に求めなしと雖も未だ生物たる事を免れず願くば人世に處するの道を聞かん蛻が云ふ我が知る所にあらず然りと云へども竊に聞く事あり造化我れを生じて我れ其の中に遊ぶ死生禍福は命なり是れを受けては其の心を繫累し是れを恐れては其の心を苦しむ其の力らの及ばざる所を思ひ其の智の能はざる所を憂ふる者は愚のいたりなり只だ物に爭はず

り忽ちに去る何の定まる所あらんや況んやうるさき娑婆世界動けば百苦身に隨ひ千愁心に集まる只た風塵をさけて江湖に歸隱し世の善悪を餘所に見て閑に生涯を過さんこそ願はしき事なれと云ふ蜉蝣が云ふ萬物無より生じて無に歸する事と誰もしりたる事なり然れども此の形を受けて生れ出てしより死ぬる迄の間には物あれば則ありとて此形に付ての職分あり其職に隨つて其中に遊ふものを君子と云ふ其職を勤めずして其形に私するものを小人と云ふ其上嬉しき悲しき面白き事吉凶禍福榮枯盛衰にいたるまで此れ我を生みたる造物者と云ふ親父のなさしむる處なり汝水にうかびて閑かに暮すも汝の才覺に非らず我が命の短かきも我が不養生にもあらず皆彼の親父の指圖なり然れども彼親父豈に汝を愛し我を憎みて如斯ならんや己れが受くる處の氣數の自然にしておやじにも心なく我も知らざる所なり天無心にして施し我無心にして受けたる身なれば又無心にして造化の中に遊び無心にして終はるべき事なり然るを私智才覺を用ひ我が勝手に能き事計りを工夫して日々おやじといさこふ然れともおやじのゆるし給はざる事は徒らに心を勞するのみならず思ひの外に手違ひ出來しした丶か憂き目にあふとあり此理にくらき者、たま〳〵巧にて仕あてたる事あらば是れを常と心得て私智才覺を自慢し役々として生涯をくるしむものなり

○鷺烏巧拙

鷺と烏と遊ぶ烏が云ふ汝を見るに長き首あり何ぞ重寶になるかと思へば左にあらず不斷首を縮めて寒そふにすくみ居る飛時のつり合ひになる計りと見へたり脛ぎの長きは鰌をふむためか併も不調法なる足元なり「鷺の如し〳〵」と云ふ諺は汝より初まれり汝世に於て何の能かある我は人家に凶事あれば往て未然に告けしらしむ然るに人に奇特とは言はずして却て烏鳴きが悪しきなど云て我を不祥の物として忌み嫌ふ是れ程心得ぬ事はなしと云ふ鷺が云ふ汝人に凶を告るとて恩にきする、人の烏鳴きが悪しきとていやがるも共に非なり然るに其德なく其實なくして人を正し人の非を告る時は聞者信せず却つて我をそしれりとして忌み嫌ふは人の

情なり汝の常を見るに鼠を取らんとて人家の屋根をむしり畑に蒔付植付たる物をつゝきあらし人の秘藏する樹木の菓を盗む何なりとも人の爲して置く物遠慮もなく取り喰ふて人に憎まるゝのみなり其の鳴聲さへ餘の鳥よりもやかましく人のいやがるは尤もなり汝の人に凶を告ぐると云ふも其の德あり其實ありて告ぐるには非らず雨氣に感じて青蛙の鳴くが如し汝の鳴く故に凶事の來るにも非らず只汝不祥の氣ある故に人家に不祥の事あれバ汝必ず其氣に感して其の處へ集まり鳴くのみなり是れ同聲相應じ同氣相求むるものなり何ぞ之れを以て人に恩ありとせんや人も亦汝を奇特と思はんや凡べて汝のみに限らず人も亦然り我に不祥のある者は必ず好みて人の不祥をいふものなり故に其云ふ處は是れなりといへども人之れを忌み悪む我不調法なるは天性なり分を越へて才覺を用ひる者は必ず禍を招く諺に「鵜の眞似する烏は水をのむと」云へり我は只だ我が分を守りて一生愚ならんこそ其天性に從ふとは云ふべし

〇至　樂

無休濟と云ふ者あり身極めて貧なり常に大黒天を信じて福を祈れども徴るしなし或夜の夢に處は何國ともしらず七福神集まり給ひ青羅紗黄羅紗猩々皮色の物敷などや金銀の銚子かはらけ種々の酒肴取り調へ箏三味線謠舞ふ男女の藝者を集め其の遊興品々なり又傍を見ればあさましく瘦せ衰ひ身にはつゞれを着し乞食の樣なるものども豆腐の粕など握みくらひ羨やましそふに閒き居たり其の中より六七人列をはなれて飛びしざり岩の鼻に腰を掛け清水の流れに足を洗ひ腹を打ちて歌ひ一一節切の樣なる物を取り出し心靜かに吹きならす其の音色悠々として何を羨やむ氣色もなく却つて七福神の遊興より裕かに見へたり無休濟不思義に思ひ側近かく立ち寄つて御身いかなる人なれば其の樣見苦しくして歴々七福神の美を盡したる前にて誰れに憚かる心もなくゆふ〳〵として興を催ふし給ふはおくゆかしさよと云ふ彼の男共答へて曰く能くこそ心付給ふものかな其の心即ち悟りの元なり何を見ても聞いても心の付かぬ者は堯舜孔子と相宿しても常に進む事はなきものな

り我々は貧乏神なり我れ何ぞ彼の福神に耻づることあらんや彼れと我と皆命なり加之のみならず彼れ等は天子公卿大名高家偖ては富有の町人などに親しみ種々の榮耀をなすと云へども成徳の人に親む事なし我々は形は如斯なりと雖も唐土にては巢父許由孔門にては顔淵閔子騫原憲などにしたしみて簞瓢陋巷を以て王公の富貴にも不易のたのしみを知れり故に汝等何程奢りて錦繡を幕にして美味を喰ひ世樂を盡すと云へども藁一束とも思はぬなり汝の貧なるは命分なりいかほど大黑を信じて七福神に祈るとも彼れ等汝に親む事能はざる者は天のゆるさぬ處あればなり天のゆるさぬ所は彼れ等も自由にならぬ事なり汝の小豆飯は食はれ損なり汝の朝夕親しむ者はあれに群れ居たる餓飢の樣なる貧乏神どもなり是れ等も外より來て汝に取り付きたるにはあらず汝の生れ出づる時に腹の中より同道して來る者共なればこそ落しても退者にあらず打殺しても死ぬ者にあらず是を氣數の命と云ふ然れども汝此の理を知つて心に徹し貧窮の中に居てよく其の樂しみを失はずは貧乏神どもヽ汝と共に樂んで七福神に耻る事なし我々は巢父許由顔子閔子原憲などヽ親しむ故に化して今も其樂しみを失はずとて又腹を拍て唄ひ遊ぶ無休濟驚て云ふ寔に難有御敎へなり然れども我れ其の樂しむ所を知らず願くば其道を示し給ひ貧神の曰く昔し歐陽公曰く天下の至美與至樂を得ずして兼者多しと云へり何をか至美と云ふ身富貴に居て金銀財寳多く衣食美を盡し上の恩寵ありて其權勢盛んにして其の欲する所達せずと云ふ事なし是れ人情の榮とする所にして世間の羨やむ所なり何をか至樂と云ふ無慾にして足る事を知り至公無我にして物と是非を爭はず我が心の本然を知りて生死禍福の爲めに惑はず生は生にまかして其の道を盡し死は死にまかせて其の歸を安んず富貴を羨やまず貧賤を厭はず喜怒好惡に念を止むる事なく吉凶榮辱其のあふ所に隨つて悠々として造化の中に遊ぶ者は天下の至樂なり吾が心を以て天下を包括す天下を以て我が心に得るものなし富貴福祿は外にあるものなり是れを求めて得るとあり得ざるとあり必らずとすべからず至樂は

我れに有るものなり心を專らにして是れを求むれば得すと云ふ事なし只だ人迷ひて求めざるのみ孔子曰く仁遠からんや我れ仁を欲すれば仁斯に至ると仁は即ち至樂なり求めても得べからざる物を强ひて求むる時は却つて己れを苦しめ生涯物の爲めにつかはれて安んずる事を知らず名を求むれば名の爲めにつかはれ金銀を求むれば金銀の爲めにつかはれ器を好むものは器の爲めに使はれ色を好む者は色の爲めに使はれ吾が大切な心を以て他の奴僕とする事を知らず終日是れに心を用ひて勞す今の人は此に巧なき者を智ありと云ふ古の人は是れを愚者小人と云ふ茲に心を用ひる時は至樂と日々に遠ざかる僅かに至樂の地を窺ひ知る者は富貴福祿を求むるに心なし古より賢人君子富貴なるは稀なり偶々高位高祿を得るもの自から求むるにあらず其の人の才德かくれなくして上より擧げ用ひらるゝ故に止むを得ずして受くるのみ然れども小人の心と常に合はず故に多くは讒にあふて退けらるゝと云へども我が至樂に於ては一毫も妨げなし故に此の時に當つて富貴福祿を棄つるに破れたる履を捨つるが如し富貴福祿よりも重寶あるもの我れに有るが故なり賢者は富貴福祿却つて身の桎梏となる事を知つて與れども辭して受けざる者多し許由嚴子陵孔門の顏淵閔子騫漆張開の類是れなり

雜　錄

○新法典と倫理

大日本敎育會に於て杉浦重剛氏の發議に係る新法典と倫理の關係論は甲乙二說に分かれ甲は能勢榮氏の一派乙は元良勇次郎氏の一派にして各々意見を呈し該委員會に於て討議の末結局甲說を採用する事に決したるよし其の要領は左の報告書にあり

○法典と倫理との關係に付調查報告書　(甲案)

謹んで新法典を閱し、其の倫理に關係する點を撿するに、或る論者の謂へる如く、其の全編歐洲の制に據り、其の國情習俗の同じからざるものを生吞活剝して、裁を取る處なきものとも見へず、其の人事編の如きも祖先の家制を排却し、極端なる個人本位の法制を設け、數

千年來の國俗を擲つて顧みざるものとも見へず、去りとて新法典は極めて倫常を重んじ、我國特種の涵養發達を成せる國情風習俗に一々適應せしめたる者とも見るを得ざるなり。」

今其の二三の例を擧ぐれば、人事編第二十六條の定むむる所の直系の親屬は相互に養料を給する義務を負擔すと云ふ事を推論する時は、家を去りたる父又母にも養料を給する義務を生ずるなり、此の事は從來の慣例に據れば、或る場合に於ては養料を給せざる事あり、之れを給するは給すべき必要あるなり、之れを給せざるは給すべからざる事情あるなり。豫め之れを規定せざるが爲めに臨機應變其の宜しきを得て親子間の紛爭を避け、比較的に圓滑の生存を全うするを得たるなり。又人事編第百三條庶子は父母の婚姻に因りて嫡出子と爲すことの如きも、我が國の慣例に據れば、或は妾服の子、或は公然婚姻を爲さずして生める子を嫡子となすことありと雖も、之を正式の婚姻を爲したる本妻の生める子に比すれば、良心の制裁と社會の制裁とに對して恥づる所なきにあらざるなり。然るに今之を法律に規定して公然之れを認許するときは畜妾私通を不德とせず、庶子私生子を恥辱とせざるに至らざるも知るべからざるなり。」

又人事編第百四十九條親權父之れを行ふ、父死亡し又は親權を行ふ能はざるときは母之れを行ふとのことも又慣例習風に從ふを主とし、敢へて一定の法文を以て束縛せず、母權を父權に代らしめ若しくは後見人を置きて財産を管理せしむる等、家々の便宜に任すも親族の制裁と社會の制裁とは此の邊の關係を調停するに充分の力あるべし。」

以上揭ぐる所の條項は我が國舊來の慣例に違背するものに非らずと雖も、從來是等の事柄に就きては一定の定律なきが爲めに吾人は互に平生守る處の德道心に訴へ、社會の制裁に依りて事を處し、大に不便を感ぜざりしなり、然るに今之れを法律に規定し、斯く爲すべしと命令するときは、民衆は偏に法文を楯とし、親子兄弟夫婦法廷に相爭ふ者を生じ、親族間の道德は漸く

廢頽し、切角從來維持したる本邦親族間の美風を放擲するに至らんか、是れ頗る憂ふべきことなり。」

財産取得編第三百六十七條の夫婦間の贈與は、婚姻繼續中何時にても、之を廢罷することを得べしとの事、及ひ債權擔保編第二百十六條の婦は夫の不動産に關し、法律上の抵當を有すとの事等も、以上述ぶる所と同一の理を以て推論することを得べし。」

結論　民法の如きは彼の歐洲に於けるが如き、法律を以て治國の要道と爲す、諸國に於ては實に一日も缺くべからざるものにして、國民皆之れに據りて日常の行爲を規制す、然れども一方に宗教の制裁ありて社會の德義を維持するが故に、法律を以て惡事を爲す限界と爲すが如きもの未だ甚だ多からざるなり。東洋諸國殊に我國は道德を以て治國の要具となし重きを法律に置かざるものなり。而して國民一般宗教に淡泊なるを以て道德の外に國民の行爲を規制するものなきなり、是れ畏くも我至仁なる　天皇陛下斯道に於ける勅語を下し給ひたる所以なるか、然るに今歐洲の所爲に倣ひ民法を以て國民の行爲を規制するときは、人々之れを以て日常の行爲の標準と爲し、親子相訴へ夫婦法廷に爭ひ、固有の良風美俗一朝蕩盡するに至るも知るべからず。吾人は徹頭徹尾勅語の趣旨を奉戴し道德を以て日常行爲の標準と爲し、以て幸福を享受し、安全の生活を營まんことを希ふものなり。身心の安全を法律の保護に一任するが如きことを欲せざるなり。」

若し然らば民法の實施は我が國に必要なきか、否、然らず、我が國の文物日進月歩するに從ひ、社會人事漸次複雜を加へ、單に道德のみに據ること能はざる場合も漸次增加すべければ、早晚人民相互の關係を規定し、其の爭論を未萠に防ぎ、或は其の爭論の是非を判定するもの即ち民法の必要あるべきなり。然れども目下我が國民衆の需用に應ずべきものは、道德の範圍に影響を及ぼし、固有の良風俗を壞ることなくして、惡事を未萠に防ぎ是非を判定するの要具たるものならざるべからず、法典は國家百世の大事なり、輕忽に之れを實施すべき者にあらざるなり

(而して乙案の要は左の如し茲に附記して參考に資す)

愚考する所に依れば延期論者が新法典は倫常を壞亂するとなすの理由とする所は皆社會學上及び倫理學上未定の問題なり、然るに延期論者は風俗慣例のみを重んし其改良すべきものと然らさるものとの區別をなさず獨斷的に父尊母卑を標準とし、人情忍び難き迄も家利を重んじ、又民法中昧若不義者のために設けたる二三ケ條の爲めに人倫を重んずるの美風日本の地を拂ふに至ることを斷言せり、是れ人倫の眞の性質を知らざるもの丶如し、人倫は斯く容易に動かさる丶ものに非らざるなり吾人元より修正論及び實施論を是非するに非らず、或は修正して此の新法典に比して尙ほ善良なる法典を得能ふや否やは知らず、然りと云へども唯新法典は忠孝の道に戾るとの斷言の非なるを認むるものなり、蓋し日本の德義今日震はずと云へども未だ最下等の倫理標準たる二三の法文の爲めに人民は倫理的感情を失ひ德義日本の地を拂ふが如きことあらざるは人情性質に於て有る可からざることなり故に新法典は倫常を壞亂すとは獨斷的確定に過ぎざるなり

○宗敎心の程度

智識乏しくして信仰に厚きものあり信仰厚からざるも智識に富むものあり一方に偏重して其の中庸を得ざるより生ずる所の弊害は實に恐るべきものなり就中宗敎上の迷信に於て然りとす然れども智識の度合と信仰其事の種類に至つては常に相待つて其の釣合を保つものなり例へば甲智の人に向つて乙智が有する信仰を授けんとするも甲の決して肯んずる所と爲らず乙の甲に於けるも亦斯くの如し彼の成田の不動淺草の觀音信者に向つて如何に(ゆにてりあん敎徒)たらしめんとするも固より難し其難き割合は恰も(ゆ敎徒)の不動、觀音を信ずる能はざると均しきなり今左に掲ぐる墨西其人の雨乞は略ぼ其人智の一端を察し宗敎心の程度を卜するに足るべし「或る墨西其中央鐵道の沿線なるトルリオンと云へる處にてはステーションへ細斷したる一人の男の死骸を持ち來たりて在りたり畢竟此男こそ去年の旱魃を來したる所の魔法使なりと思ひ違へられたれば

なり左りながら是れしきの事は此の頃カスタナスに於ける出來事に比すれば誠に些細の事のみカスタナス州に於ては殆んど一年の間、雨降らざりければ土地の人民は作物の收穫皆無の心配は偖置き己れの咽さへ乾き上る境界に立ち至りて生命を保つ法を考ふるに忙はしき程の始末なりけりとニウサンサルヴアドールの（エルプエブロカトリツコ）新聞はカスタナス府知事兼州知事の決定に成りたる條々を掲載したり即ち左の如し

「去年の全一歳中には驟雨一度來りたるのみにして茲年の夏は神に祈禱し之れを讃美したるにも拘はらず一度として雨の降りたる事なく是れを以て此のカスタナス全州の繁昌の繫る所の作物の收穫は全損なり此の成行を以て考ふるに無上の造物主は此の州に對して行を失したる者と認定するに由つて左の條々を命ずるものなり

第一條　若しも此の命令の發布せる日より慥かに八日の間に大雨せざれば誰も說敎を聽きに行かず亦祈禱をも唱へざる可し

第二條　若しも八日の後に至つて尙ほ八日の間、雨降らざれば寺も禮拜堂も燒き棄て經文、念珠其の外、一切禮拜の道具は毀ち盡くす可し

第三條　若しも亦第三期の八日の間に雨降らざれば坊主も納所も尼も入道も其雌雄を問はず一切之れを斬に處すべく且現在の罪業犯の者へは大赦を行ふべし是れ無上の造物主をして正鵠を誤またず罪の在る所に罰を被らす事を會得せしめんが爲めなり

此の如く驚くべき命令の發したる日より四日の後に沛然として數年に無き大雨の降りたるこそ奇怪なれ」

○親を思ふの餘り

大分縣に河野義平なるものあり多年老母の眼病を苦慮し如何にもして之れを平癒せんと思ふの一念より奇異の俗說を信じ佛法の迷信に陷入り終に其の子を殺さんとして遂げず無慘にも其の妻を絞殺して國法の罪人と爲り身は九年の懲役に處せられたりと云ふ之れ近頃有名なる人膽事件にして聞くも誠に憫れの次第なり今左に義平が法廷に於て爲したる申述の要領を揭ぐ畢竟其

の起りを尋ぬれば唯だ無智の信仰に偏し智識の之に伴はざる結果にして其の心底は誠に憫むべしといへども如何せん所業の國法に照して罪の免るべからざるものあればなり然れども義平は只だ之れ無智の一農夫其の之をして玆に至らしめたるものは果して誰ぞ固より漠として證據の得べきものあるにあらずといへども身苟くも德心改良の任に當るものは大に注意する處なかるべからず殊に愚民に對する敎化に就ては深く其の注意を要す我輩は日夜德心の改良に力を用ゆるものなりと云へども然れども無智の道德は常に其の弊害を恐れ世の迷信を憂ふるや甚だ切なり

人膽を與へたら母が眼も治ふと思ひ色々考へて見ましたけれど中々手に入りませんから寧そ娘マツヱ（本年舊三月生）を殺ろして膽を取り夫れを母に與たへんと思ひ度々手を掛けて見ましたれど一度は畑の中にも連れ行きて殺しかけ其外にも手を掛んとして是れが親子今生の訣れかと思ひました事は度々あります…妻を殺した刄物は家にありました刀を兼ねて用意の爲め杵築の裁判所の脇の鍛冶屋に賴みて四錢で半分に切て貰ひ置ました小刀で截りました…どふかなして今一度母親のあの眼病を治して上げたら快やう寺にでも參られるものわしがマツヱ可愛ひ程親は子を思ふて呉れる其の親の爲め此の子を殺して…

七月二十八日夕飯の濟みました後妻スギは此の頃癪あんばいで乳も出ませぬ故私はマツヱを抱きて隣りの弟の妻に乳を貰ひに行き乳を吞ませて歸りました上ほんに今夜こそ此子を殺して年來の本望を遂げ母親に膽を進めて眼病を癒させんと覺悟しましたがスギは私が顏色の變つたのを見て仔細を問ひます故包まず斯々の次第にて我が年來の願望をも今夜こそ遂げ得んと語り聽かせましたらスギの申しますにはどふあつても人間は一度生れて來た不屑に死なねばならぬからだ老ひたるも若きも一度は皆死ぬ身の上夫れ程までに思ひ込んだお前の本望何んにも知らぬマツヱを死なさうよりマツヱの代りに私を殺して呉れと申します故遂に殺さう殺されやうと云ふ約束が出來ました其の日は田の草とり

に出で草臥て居ました歟少し睡りましてスギより起されましたが私も兼て覺悟の上で御座ります故眞逆の時氣後れせぬ樣心得て居ましたから直ぐ覺めましたがスギは一番鷄が鳴たから夜の明けるにも間もなければ早く西方浄土に急ぎたいと申しまして‥‥妻は衣類等新たらしきものと着換へて居ました‥‥妻の喉を絞めた白木綿は私の帶にて一方の端を妻すぎが持ち一方の端を持ちました‥‥妻は立派に覺悟して居りました‥‥妻の胸を截ると血と共に出た膽を取りました‥‥二階から小鍋を取り御し細く截りて釜屋で烹て居ましたら截口から出る息の音に妹が醒して驚き姉さんは病氣の起りたるならんとて二階に上りますからヤレ暫く待て呉れマア此處に來いと云ましたれば妹は不審顏にて問ひますから事實を告げ且つ之を烹て母にあげる迄どうぞ騒いで呉れるなと言ひましたれど妹は大聲を立てゝ泣き出しました‥‥妻は初め泣きましたれど巳に覺悟を極めて殺さるゝ時は泣きもせず身動きもせずに居りました‥‥膽は母は常に麥飯が嫌らいであり升から米の飯を焚き其の菜に烹て上げたといふて進める積りでありました‥‥母には膽の藥になることなど申しました事はありません‥‥妻は別段に言ひ置も致しませんが只た娘マツヱをどうぞ大事に成長させて呉れ度き由を述べ物を與へて呉れとの事を申しました‥‥スギの申しますには私しの前指が鏡臺の中の引き出しに入れてあるからどうぞあれをマツヱに遺りて母が形身と思ひ又マツヱを呉々も大事にして成長させて呉れとの事を申しました‥‥（陪席判事より其方は京都本願寺に參詣した時或る醫師の家に於て膽が眼病の藥となる事を聞いたとあるが左樣なるか）との問に對し‥‥別段醫師よりは聞きませんが膽は眼病に妙藥なれど中々錢金で手に入ることの出來ぬものといふ事は聞ました‥‥（陪席判事より其の方の妻が死ぬといふ事を決したる後其方は睡りたるか）との問に對し‥‥私は妻に彌陀本願の理を說きて聽かせました云々

‥‥○古代印度宗教概論

左の一篇は大鳥圭介氏の所說なりと云ふ其の說く處

の當否は敢て之を保證せずと云へども暫く掲げて讀者の參考に供す又比較研究上の一助とも爲るべきか

古代印度宗教を類別すれば左の如し

第一　婆羅摩教即ち温都宗門　一億八千萬人
第二　教釋　附禪宗
第三　回々教　四千一百人
第四　事火教（パルシー）　シック教　七萬人

世界に行はるゝ宗教中に四種の别あり、第一を獨神教、即ちモノセイズムとし、第二を多神教、即ちポリセイズムとし、第三を萬神教、即ちパンセイズムとし、第四を無神教、即ちアセイズムとす、

第一　婆羅摩教

婆羅摩教は、温都人種の信奉する宗教にて、印度全域の住民二億四千萬中にて、大約一億八千五百萬人即ちアリヤ人種の尊崇する所なり、其由來を尋ぬるに、是れ素と是聖教韋陁に依るものにて、其聖教に四編あり、曰くリッグ韋陁、曰くヤーシユル韋陁、曰くサマ韋陁、曰くアサルウァ韋陁是なり、各編分て上下の二部と爲す、其上部を詩賦、即ち韻語(Sanhitas)とし、其の下部を戒律(Brahmanas)とす、共に神の啓示に出でしものとす、其詩賦韻語は、信徒の志願欲望を吐露するものにて、之に由りて、當時人民社會の情況を推知すべし、其戒律は、宗教の禮義法典に關する事を書せるものなり、四編は皆梵語、即ちサンスクリットを以て書し、就中リッグ韋陁中にて最も古く、且つ梵語典籍中にて、最も古きものなり、（温都人は、之を天地開闢以前より存する者とし、或は紀元前三千年の者とす、）此典籍は、紀元前一千四百年（自今三千二百年前）の頃に成りしものにて、其要領は、信徒の天地間の萬象中に出現せる諸神に對し、祈禱するの文なり、諸神中最も尊きものは、インドラにて、即ち天神又雨神なり、（帝釋は即ち是なり）次にアグニは火神なり、又スルヤァ、ミトラは日神なり、ソマは月神なり、マルツは風神なり、其他神類甚だ多し、今枚擧するに遑あらず、

因陀羅（インドラ）（帝釋）は、雨神水神にて、其降す所の雨量は、毎年收穫の豐歉に關するを以て、農夫の爲には、活計の種なれば、沙漠に近き地にては、之を尊信すること甚

しきなり、是より前、温都族の中央亞西亞の寒地高原、又雪山の西北に居りしときは、火神を尊敬したれども、南方に出しときは、耕作に水を要すること、大切なるに至りしかば、今は火神よりも、水神の德を尊重するに至れり、是れ火神の功德の漸次に減じて、因陁羅を以て、神中の第一位と爲せし所以なり、而して其後恒河の邊に遷るに及びては、因陁羅の雨恩も、亦大に其威力を減じ遂に人皆婆羅門の三神、即ち造化神(ブラマー)、保護神(ヴヰシユヌー)、破滅神(シーワー)を信仰することゝ爲れり、三神の席次にては、保護神は第二席に位すと雖も、此世に出現の順にては、第一に位し、其形は前世界の敗墟を浸せる水面の上に眠り、其臍内より一莖の蓮花を抽し、造化神は即ち其蓮花中より生し、隨て造化神は、原素と世界を創造し、破滅神并に人類を作り、婆羅門淨行は其頭より生じ、王族武人は其臂より生じ、商估又農夫は其股より生じ、首陁羅即奴族は其足より生ずるものと爲せり、而して造化神の像は四首四手を具へ、一手には匕を持ち、一手には念珠を持ち、一手には水餅を持ち、又一手には聖經、即ち韋陀を持ち、其立像は金泥、又は朱を以て塗れり、保護神、破滅神の形は坐像にて、亦四手を有す、

婆羅摩敎なるものは、半は獨神敎、半ば萬神敎なり、後世の所見にては、婆羅摩敎に二象あり、一は奥妙哲學の旨趣にて、少數人の所信なり、一は外形にて、衆人の遵奉する所なり、天下愚昧、荒誕を信ずるもの多く、學義事理に通ずるもの寡きを以て、二象の別、愈隔絶するに至れり、抑々韋陀の神學に基づき、哲學上より說く所の婆羅摩敎は、無形の萬神敎(パンセイズム)（萬物を以て上帝と爲す敎）にて、天地間自然に成る神靈、即ち婆羅摩即中立者と名つくるものゝ外、本來一物もあるなく、自餘のものは、皆其幻影なりとす、故に神の外に一物なく、萬物は即ち神なり、人類、動、植、共に無限の變生を受け、終に升りて、或は神と爲るべし、而して、神、人、動、植、及神靈より發生する萬象は、元其本元なる婆羅摩中に吸收さるゝ爲に現はるゝものにて、而して畢竟に其吸收に歸して、滅了するものとす、是れ此宗門の本主義なり、

故に偶像を拜し、多神を信ずるは、哲學派碩學の痛く排斥する所にて、夫の偶像を以て表する諸神は、唯天地に充滿する一靈魂の變態を示すに過ぎず、之に向て拜するは、怯弱なる人心を慰むる一方便なるのみ、其經典は神の獨一なることを證し、神性の洪大なることを讃し、神靈は萬靈中の最も靈なるもの、慈愛者中の最も慈愛なるものなり云々、

婆羅門は等級の遺制に由り、宗教の主宰なれども、後世に至りては、其權變じて社會上に關するや大にして、今は眞に教會の職掌を行ふもの甚だ多からず、但各人生涯の大事に關する禮式の時は、必らず名賓主宰として上班に列するは、昔時に異なることなし、其の大事と稱するは、婚儀、葬禮、新米の食式神、糸授與式（人等中にて上三級、即ち二生の人は、幼年のとき、空想神糸を授けて、之を社會に入るの徵とす、但し首陁羅は、其一生なるを以て、此賜を受くる能はず、）等是れなり、

韋陁に記せる太古の三神は、水神、火神、日神なれども、婆羅門人の次第に東遷するに由りて、其生計と住地との變更するあり、遂に此三神の德を以て足れりとせず、更に後代に至り、一元三禮の神を立るに至れり、一元三禮は第一にブラマー、即ち造化神、第二にウ井スニユー、即ち保護神又遍通神、第三にシーウァ即ち破滅神改新神なり、但其造化神は、萬人の均しく尊崇する所なれども、其德の高尙卓絕に過ぐるを以て、之を禮拜するものなし、信教者は、大抵ウェイナウァス、即ちウ井スニユー信徒（孟加拉に於て、ボイストツグスと名く）にあらざれば、セイウァス、即ちシーウァ信徒なり、是れウ井スニユーには、化身の妙あり、シーウァには、破滅改新の力あり、世人の信仰多き所以なり、破滅神派中にて、最も著しきものは、リンガヤツ宗、即ちバサウァーー信徒にて、半島及びマ井ソールの西南部に住し、其徒極めて衆し、此の宗派は絕えて婆羅摩教の人等區別、幷に其禮法慣例を遵奉せず、又偶像を拜せず、獨り陰莖の形と牡牛とを拜するのみ、又全く此宗に反對するものは、スマルタス、即ち大改正家サンカラの信徒なり、サンカラは、西洋紀元後、大約第七世紀第八世紀の間に出で、釋教衰微の後、南印度に於て、婆羅摩教を再

興せし人なり

印度人の信心は、初め物を恐怖するの念より發り、次に驚讃の心より生し、終に理義を推求するに至りたるなり、韋陀中の神は、世界の有形現象なりしが、三千年の間、學理思想の進むに隨ひ、哲學上にては、遂に無形の神を立て、宇宙間の萬象は、一神より發するものなることを推求し、印度人の爲に、信仰拜禮の式を制し、且つ物に生活あるの奇象を、沈思研究するに至れり、而して元來世界有形の萬物は、何處より現出せしや、吾曹人類は、抑々何處より發生せしやの疑問起り、婆羅門は種々の解釋を加へ、之を分て、六大派の見解(Darsanas)と爲せり、是れ已に西洋紀元前五百年に發達せし、思想の大體にて、今一言以て之を略述すれば、無形の意思、有形の物體、幷に靈魂の不可思議、又造物主の萬物に對する關係は如何、是れ婆羅門哲學の六派、即ち六敎に於て辯論して止まざる所なり、第一サンキーイヤ派、第二ヨウガ派、第三第四共にウェダンダ派、第五ニヤーヤ派、第六ウェイスシーカ派、之を六派と曰ふ、サンキーヤ派は、カピラ聖人の創思する所にて、有形萬物は、永遠より自ら一元素の在るあり、其漸次に進化せしに由て、成るものなりと說き、パタンシヤーリーのヨウガ派は、一元素の現はる前、已に一元魂の存するあり、此兩元相合して生氣マハーヤートマーを生ぜりと說き、此二派は、其主義同一なりとす、然れどもサンキーヤ派は、眞の無神教に似たり、而してヨウガ派は、眞の有神教なりウェダンダの二派は、プルウア、ミマーンザー教及びウタラミマーンザー教を合して、ウエダンダ派と名く、此派は、韋陀經の主旨を說明するにあり、有形萬物は造化の神力より發し、萬物の成立し現存し、又消滅するは、皆神力全能の然らしむるなりと說き、ニヤーヤ派、一名瞿曇の因明派は、眞理を推求するの法を講明し、外物に對し、自己の感覺を以て、其理を窮むるの根本とし、此派は一に之を論理教と名く、萬物の外面に顯はるゝ形を認めて、其眞相なりと定むるにあり、ウエイスミカ派、即ち第六敎と同趣なるものとす、聖人カナーダの按出せし、此第六派の所說は、眼前に經過し去るの萬象は、永世不朽の元素より、成るものと爲せり、此派は一に又元素教と名け、萬象過眼の世界は、之を搆成する、不朽元素の聚合の異なるより、生するものと定む、此六派の所說の起元は皆同一にして、聖賢の論爭する主眼も、亦同一に歸し、

人間の靈魂は、上帝の神魂、即萬物の一元氣中に吸收されて、始めて滅了し、來世生出の因縁を斷つものと定めたり、故に婆羅門の研究せし哲學は、宗敎の一端にて、現世の終身戒律、來世の引導を指示するにあり、即ち身を愼み、人に施し、神に事ふるを以て、第一の急務とし、更に哲學の理を以て、宇宙間諸般の大難題を解釋することに、心力を竭し、造化の理、並に萬物の排列發達に理を想像して、已に能く其細微を探れり、今日の博物學者の新見と、稱する進化論も、二千五百年前に出でし、大聖カピラ學派の再燃に過ぎず、實に此六敎の所説の一端を見ても、上古印度人思想の鋭敏なること、殊に釋敎原由の微妙を推知するに足るべし、此點に至りては、希臘の理學は、印度に倣ひしや、又之れを彼に傳へしや、容易に確答し難かるべし、或は印度は先覺にて、弟子にはあらずと、

釋敎の起原　釋敎は元哲學の道理に基づき、夫の六敎の一なる、サンキヒーヤ派と、其源を同ふするもの丶如し、故に其起原は、元哲學の一派にて、宗敎にあらざりしなり、但釋迦の出現以來、衆生に向ひ此道を説き、注釋を加へ、衆人の心に了解し易からしめ、加之、婆羅摩敎人等の區別、社會の壓制を禁止し、修身の純粹簡一なる、戒律を設けしに由りて、遂に一宗敎となりしなり、釋敎の傳記に依れば、釋迦はサンキユーヤ敎の開祖なる、カピラ族の一王種にて、其宗門を弘むるが爲め、佛經は大抵當時行はる丶所の言語を以て書し、夫の梵文は、其の頃已に學者にあらざれば、解する能はざりしを以て、之れを用ひず、釋敎南派の（釋敎に南北の兩派あり、南派は、錫蘭 暹羅等に行はるゝもの、北派は西藏に行はるゝものなり、）經典は、パーリー語を以て書せり、パーリー語は、即ち釋敎を始めて傳説せしマガダ國の通語なり、而して西藏の釋典は、克什未爾のサンスクリトを以て記せり、是れ此國に於て釋書を書冊に記せし嚆矢なり、釋敎を一宗門と宣布せし時代は、釋迦般涅槃の時にありとし、或は其前後にありとし、諸説紛々一定の論なし、但錫蘭の釋徒は、佛滅の時を、紀元前大約五百四十四年なりと決定せり、此説は、釋徒上古の傳記と、印度の年契とを對照し、

粗シャンヅラギュプタ王の代に當るを皆、之を正確なるものとして信用せり、

瞿曇佛陀(ゴウタマ、ブッダ)　釋教大聖の傳を釋徒の所說に從ひ、之を略記すれば、紀元前六世紀の初めに當て、烏德の北、意馬拉山の麓なる、尼伯爾國(一にゴラークプール國といふ說あり、)迦毘羅衛國(カピラ)羅利(日氏系統)に一皇子を生ぜり、其名を釋迦牟仁、又一に瞿曇(ゴウタマ)と稱す、其家系は、元より刹帝利族、即王種にて、幼稚の頃より、學問と默念とに身を委ね、次に美女と婚し、十年の後一子を擧げ、富貴榮華を極めしと雖も、一日市街に出で、病者、病者、死者の態を觀て、人果の無情を感じ、嘆じて曰く、人間の幼稚、健康生存は、一場の夢に過ぎず、忽にして老ひ、忽にして疾み、終に死して腐るなりと、元此感は靈魂の輪廻を信ずるより起りしなり、因て妻子を棄て父の王宮を遁れ出で、一心の發願を以て、人界の緣を斷ち、先づ婆羅門の徒弟となり、ラヂヤグリヤの都を徘徊して食を乞ひ、後には遁れて加耶(ガヤ)の林中に入り、幽居すること六年なり、佛陀加耶の寺院は、即ち其苦行の地なり、哲學ヨウガ教の大經典を、ヤージナウアルキイヤと曰ふ、其書中に記す、所に依れば、人生の空誕、夢の如くにして、比丘衆となり、人の施物を乞ふて生存するを、ヨウガ教の本旨とす、而して佛陀一日、菩提樹の下に坐し、終に大悟正覺を成就し、佛號を稱へり、故に此樹は世界五億萬人の拜する靈樹となれり、其後法を鹿苑に說き、次に專ら印度全國に說法することを志し、或時故鄕迦毘羅衛國に還りて、父を省せり、本は玉冠錦衣の皇子、今は行脚の僧となり、身には汚れたる黃衣を着け、手に鉢を持ちし形を見て、衆皆感歎し、父も其說法を聽き、隨て其妻子をも度し、次に己が教門を以て、新宗を唱へり、其教門の要領畧言すれば、人たるものは其志を善にし、其言を善にし、其行を善にすれば、來世の幸福を得べし、人生現世の運命は、不定なるものにて、悉く過去の所業に因緣し、惡を爲せしものは、罰を受けざるなく、善を爲せしものは、賞を受けざるなし、因果應報は、蒔きし種子の實を結ぶが如し、現世の禍福は、過去の應報、現世所行の善

惡は、未來の禍福を生ず、人間の百事、皆自己の一心より生ず、神も亦之を如何ともする能はず、之をカルマ(即ち輪廻)の法とす、各人皆輪廻の範圍中にあり、此範圍を解脱するの一念を以て、功德を積み、信心怠らざるにあらざれば、此運命を免るゝの期なく、若し現世罪障本源なる欲念の絆に羈縛さるゝなきに至れば、始めて能く再生輪廻の緣を脱して、靈魂寂滅般涅槃に入るべしと云ふにあり、此主意は、全く婆羅摩敎の宗義と同一にて、別に新奇の點あるを見ず、但佛陀の、此主義を傳播主張するの手段に至ては、實に非常の新工夫を按出し、婆羅門は、獨り幽居に閑座し、僅に己か等族を集め、敎授したるに過ぎざれども、佛陀は、其徒弟六十人と共に、全國を徘徊し、其宗義を世上一般に演說し、信奉のものは、人等の分別なく、門弟として之を待遇し、(但し過去の所業に因り、賞罰應報の理を以て、人等の別を說くことは、婆羅門の所爲に異なることなし、)其門徒は、年齡と智識とに從て位次を班ち、社會中にては、門地の別を廢し、因て何人にても、族籍の尊卑に拘はらず、獨立すべき道を開けり、故に古來壓抑を受けしもの、爭て之に歸依し、佛陀を以て救世主と尊奉せり、是れ衆民の相率ひて、其宗義に風靡せし所以なり、右の理を以て、婆羅門徒祭司の權の根本を芟鋤せしのみならず、更に拜神の事(拜神の事を司るは、婆羅門の專權なりし、)は、無用無功にて、唯德義德行こそ、眞に死後の解脱を得るの一大秘訣とし、且つ佛陀は、其說の眞實なるに因りて、無上の正覺に達せしことを證し、韋陀の功德を以て、智識の本源と爲すの說を排斥せり、因て釋敎次第に廣布し、婆羅摩敎は、一時衰微したれども、三四百年後、反動の勢を以て、再び世上に顯はれ、ウ井スニユー(保護神)の化身、クリスナ、及びラーマを拜することを主張せしに、大に人心を得て、更に復古の勢を得たり、

釋迦の死　釋迦の般涅槃、即はち其生存の解脱は、紀元前五百四十四年(我安寧天皇五年、支那にては、東周景王元年にては、周穆王五十三年と聞きしが、今此に記する所とは、百七十一年の差あり、孔子の死に先つこと、六十五年、是迄の說)に在りと定むるを、普通の說とす、釋迦其死を豫知して、門徒に向て曰く、正實を守れ、思慮を運らせ、信心を怠る勿れ、己が心を制せよ、戒律を守りて、怯懦の心を生ぜざるものは、

生海を濟りて、憂患を斷つべしと、臨終の前後は、間斷なく說法して、徒弟の悲歎を慰め、其最後の言に曰く、一心に汝の罪を淸めよと、而して後、安然として、拘尸那掲羅（クシナガラ）今のゴラツクフール(地名)のクシヤなり甲谷他を距る我百五六十里の菩提樹の下に寂せり、時に齡八十なり、其生存中の大事に關係ある古跡は、當初より現今に至るまで、諸國無數の信徒の巡拜する處にて、之を略記すれば、喜馬拉山の麓は、釋迦誕生及び幼時成長の地、ラージヤグリーヤは、其宗門の爲に乞食子、即ち比丘衆となりし地、パータリブトラは、摩掲陁王阿育を敎化せし地、加耶（カヤ）の林叢は、其大悟正覺を得て、佛と爲りし地、又ベナレースの鹿苑は、佛道の眞義を說きし地なり、

○故原坦山老師の追吊會

麻布區麻布日ヶ窪曹洞宗大學林にては去月十三日同林大講堂に於て前大學林總監原坦山老師の追吊法會を營みしに當日朝來疾風ありしにも拘らず意外の盛會にして能本山總持寺執事を始め府下同宗寺院幷びに大中學林職員生徒等無慮二百七十餘名の僧侶參列して森田悟由禪師大導師となり夫れ〳〵鄭重なる法要を行ひ了つて島地默雷大内青巒二氏の法話等もあり中々盛んなる事なりしと云へり

○曹洞宗事件に就き

近年佛法界の騷擾種々在る中にも曹洞宗兩本山事件の如きは最も主なるものにして其爭ひの結局果して何れの日に在る乎滴水和尙の仲裁も遂に水泡と爲りたるよし其の由來顚末左の如く日本に見へたり

曹洞宗の起原

曹洞の開祖とも云ふべき道元師は唐土修行より歸りて其の始め山城の宇治に錫を駐めたりしか、當初宗旨の本色は所謂る達磨直傳の禪旨に存せしゆゑ俗人の歸依を迎へるに勉めす、寧ろ寺門の繁閙を避けて師は畿内より越前の山中に移り爰に終焉の地を卜したり、是れ今の永平寺の開基にぞある、世換り星移り宗旨も亦た舊態を變じたり

能本山の創立

道元より四世の後に瑩山と號する和尙あり、夙に時勢

を見て宗教の擴張を思ひ靜寂の舊旨を一變して專ら俗人の歸依を迎へ、爰に曹洞中に一派を立つるに至れり、時正さに後醍醐帝の御宇に當り帝の勅願に因りて起りたるは今の總持寺なり、是に至りて越能兩山互に派を分ちたるが、越山は依然と舊旨を守りたるに因り宗勢遠く能山に及ばず、能山は益々擴張して殆んど曹洞の泰斗たる姿を現じぬ

兩山紛議の初

既にして德川時代に至り當時夫の佐々成政の子は剃髮して僧(宗奕)と爲り能山下なる某寺に住したりしが、家康之れを召して還俗を勸めたるも辭して從はざりしかば、家康之れを永平寺の住職に任じて敎權をば握らせたり、是ぞ能山より越山に轉職せし嚆矢にして且つ兩山爭權の初なりける、兩山紛議は絕へずして明治維新に至りぬ、永平寺の住職に當時さる者ありと見へ、革新の時に乘じ又宗門統一を企つ、

兩本山の規約

政府は舊幕の慣例に因りて兩本山の各個獨立を許さず兩山本支の別を守りて更る〳〵管長を勸むべき旨双方堅く相守るべきを達し、且つ其受書をも政府に取り置きたり、然るに昨今に至り總持寺は屢々獨立を願出づるも政府は固より彼等の自治に任すものなれば、願を聞くも聞かぬもなし唯た越山と協議して申出てよとのみ答へぬ、

永平寺の確執

永平寺は其權執を分つことを甘する筈なし、何となれば利益名譽の念は僧侶反りて俗人よりも深ければなり現に末寺の數より言ふも永平寺は僅かに千餘寺のみ而して總持寺は一萬數千寺を有すとか云ふ、去れば總持寺の獨立は永平寺の衰微となる原因となるや明かなれば、俗僧の念にては中〳〵に思切り兼ぬるも無理ならじ、

臨濟宗の忠告

能山派は殆んど謀窮し、遂に瑩山和尙開基の緣因を繹ねて廣く俗家の應援を求めたりしが、返つて世人の攻擊に遭ふの傾きあるより遂に援を其の兄弟宗たる臨濟

宗に求めぬ、臨濟七本山は京都に協議したる末遂に天龍寺派管長滴水禪師を總代として東京に來らしめたるは去月初の事なり、

忠告は効なし

越能兩本山の住職を列坐せしめ滴水和尙は其の席に臨み、佛門の紛議は僧侶たるもの丶恥辱なる事、越山は開祖の遺訓に基き古の規摸に立ち返へりて能山の分離を諾すべき事、能山は從來の遺恨らしきことを挾まずして歩を讓り獨立を懇議すべき事、本山の多く殖へるは反て宗門の弘まれる徵として喜ぶべき事、などを双方に說きたれど兩住職は遂に從はずして矢張り是迄の通り修羅界に居る決心なりと、是にて滴水和尙は手を引きたり、

滴水老師の喝

滴水老師の意見といふを聞くに、曹洞兩山の爭は宗門の爲めにするか將た寺院の爲めか、寺の爲めなりといはゞ我等固より忠告の勞を取るべき筈もなし、宗門の爲めならんと思へばこそ此の老躰もて爰元まで來りしなり、去れば兩山住職も寺の利益をば別にして兎に角寺の盛衰を念ふべし、三百年來絕へざりし紛議なれば双方五分〳〵の理屈あるへきが偏中正といふこともあれば、此の際互ひに歩を讓りて兩山各管長を置くの舊制に復せよとは我等の忠告なり云々、老師が其忠告の容れられざるを見て兩山へ送りたる喝あり

兩刄交鋒不知避。可憐到底火中運。爲通無裏一條路。
脫出塵埃絕正偏。

曹洞宗の將來

同宗の財產は金額凡そ三十萬圓ほどありて是は重もに能山に屬すといふ、去れば其の敎務員など勤むる僧侶は何れも相當の俸給を食み、管長住職なども五六十圓以上の月俸なり、顧みて臨濟宗を見れば管長凡そ七人もあれど多くは檀家も無き寺にてあれば月給などは思ひも寄らず、質素と勤戒とを以て僅かに生活するのみなりと、曹洞も此の三十萬圓だに竭きたらば斯る爭ひも自から熄みなんか、兎角金が仇の世の中なり云々」

○佛敎圖書館

我國の文明が既往千數百年間概ね佛敎の感化を受けたることとは歴然史冊の證する所なり佛敎は初め印度に起り支那朝鮮を經て我國に傳へたる者なれども今日に至つては朝鮮以西圖書の完全を得る者なし我國獨り經律論釋なる者を保存して殆んど遺漏なし然るに從前之れを蒐集して公衆の閲覽に供するの設あらざるは社會の一大欠典なりとて松本順乘、大内青巒二氏夙に之れを慨し各宗の高僧及び朝野の名士に謀り年來其事に奔走せしが未た完全を見るに至らさりし然し蒐集せる圖書は已に百千萬卷に達したれば之を虛く架上に堆積するに忍びすとて這回大日本敎育會と協議し神田區一橋通町廿一番地なる同會構内に於て假りに閲覽所を開設し公衆の需讀に便すといふ

〇德行美談　（第四回）

〇孝子　石松と云ふは大阪府下和泉國住吉郡南百濟村大字鷹合村の人明治十四年九月三日を以て家に生る幼より父母を尊敬し長じて孝心倍々篤く弟妹を愛育し身壯年なるにも不拘平素家業を勉勵し去る二十三年六月より父吉兵衛が病床に臥したるより一層父に替りて百事に盡力し當時石松は年僅に十才未だ力の役に堪る不能と雖も一方には父吉兵衛の病氣ありて藥石に怠りなく一方には幼年弟妹の生育に困難し母キヨの命に從ひ米糠を買ひ其利得にて一家の煙りを立てたる次第にて一日業を休めば一日の糊口に差支へるを以て家業柄とは云ひながら晴雨の別なく勉勵一日も怠らず然るに父吉兵衛は永年病氣醫藥効なく客年十二月三十日死亡せしも石松は前日に異ならず母に仕へる事父に仕へるが如く二ヶ年の久敷を輕過せし弟妹を友愛し隣友を敬重しつゝあるを以て近隣の老若皆な稱讃せざるものなし又曾つて他に在りて他人より物を惠まる事あれば少しも私に飲食せず家に持歸りて母と弟妹に分與なし共に誰々の恩惠なりと直ちに其人に走つて謝辭を述ぶるとの事終に官に聞へて去月十一日同廳山田知事より金一圓を下賜せられたるよし

〇孝女　大阪府下河内國日根郡市村に橋本ぬい（卅一）とて舅姑へ仕へ孝子者あり同人は夫が死亡の後ち一家

を支へ三人の兒を養育し玆に數年一日の如く近傍にても其譽れ高く昨日大阪府知事より其賞として金一圓下賜せられたるが今同人が平素の品行に付き聞くにぬいが亡夫の寅吉は去る明治廿二年七月中に病痾に罹り父の伊兵衛、母はや及び長女つる、長男作次郎、次男熊太郎と女房おぬいと都合六名の家族を殘し遂に空しく成りぬいは涙の中に佛事を營み其後は何人の勸むるも入夫をなさず本夫寅吉在世の節よりも舅姑への孝道怠らざりしが死後は倚更孝養を盡し朝に星を頂いて野に耕し夕に月を踏みて家に歸り深夜に至る迄婦女の手仕事を怠たらず品行方正く苟にも密夫等にかゝわる風評だに絶へて無く不如意なる一家の生許に孜々として勉め居れるにぞ何時しか近在近郡までも賞めざるものは無きに至れりと云ふ

○貞女と孝女　東京芝區高輪臺町一番地に仕立物をして居る森喜兵衛(六十一)と云ふは五年前より中氣にかゝり身動きさへもまゝならず稼ぎが出來ぬ樣になると素より貯へはなき身なれば忽ち其日の生計も立たざるを女房おかく(四十七)といふもの世に稀なる健氣者にて良人に代て仕立物に精を出し其日のくらし藥り代に小遣錢まで兎もかうもして取まかなひ娘おしづ(十一)といふを苦しき中より三田小學校へ通はせて教育の忽がせにし難きを心得、家に歸れば教へ勵まして其日習ひし處を復習せしむるなど毫塵計りも心屆かぬ隅もなくおしづも子供心に母の切なき胸を酌み世話を燒せず學校へ通ひ家に歸れバ病める父の枕元に附添ひて藥を飲ませ脊を撫で足をさすりて勳はれば父もおしづの孝心を愛で病苦も爲に忘るゝ計り近所の者其子を敎へるにも常に此おしづをいましめの引合に出す程なりと云ふ此母にして此子あり誠に聖世一の美談といふべし

○藍綬褒章下賜　去月八日賞勳局に於て公同の事務に勤勉せし廉を以て藍綬褒章を賜りたる者は左の如し

埼玉縣武藏國秩父郡樋口村長　宮澤直藏

資性温良品行端正明治三年名主役となり尋で副區長戸長等の職を奉じ町村制實施の際村長に擧げられ能く地方制度の主旨を躰認し專ら自治の發達を計り殖

産貯金敎育修路等に盡力し多年公同の事務に誠實勤勉し其勞効顯著なりとす仍て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

埼玉縣武藏國兒玉郡仁手村長　茂木小平

資性溫厚品行方正明治二年名主役となり尋で戶長の職を奉じ町村制實施の際村長に擧げられ能く地方制度の主旨を體認し專ら自治の發達を計り養蠶修河に盡力し多年公同の事務に誠實勤勉し其勞効顯著なりとす仍て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

埼玉縣武藏國大里郡御正村長　柴田忠明

資性廉直明治七年より副戶長戶長等の職を奉じ町村制實施の際村長に擧げられ能く地方制度の主旨を躰認し專ら自治の發達を計り治水架橋敎育殖産等に盡力し多年公同の事務に誠實勤勉し其勞効顯著なりとす仍て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ善行を表彰す

埼玉縣武藏國北葛飾郡田宮村長　田中彥左衛門

資行篤實明治十二年戶長の職を奉じ町村制實施の際村長に擧げられ能く地方制度の主旨を躰認し專ら自治の發達を計り土木敎育衛生に盡力し多年公同の事務に誠實勤勉し其勞効顯著なりとす仍て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

埼玉縣武藏國北足立郡芝村長　須賀保實

資性溫厚事を處する誠實夙に名主役となり尋で副區長戶長等の職を奉じ町村制實施の際村長に擧げられ能く地方制度の主旨を躰認し專ら自治の發達を計り水利に盡力し多年公同の事務に誠實勤勉し其勞効顯著なりとす仍て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

○公　開　狀

人の思想に信仰の自由あるは勿論、去れば我憲法に於ても明かに之れを認めて其自由を許し已に其自由を得たる日本人民は如何なる信仰を有するも發して國安妨害とならざる以上は何人か能く之れを制するを得ん然るところ近頃基督敎徒に關する種々の怪聞を耳にする

折柄左の一篇を得たり事實果して然りとせば讀者は如何の感を爲す其事單に一二の基督教徒に屬すと云へども其の關係の及ぼす所甚だ容易ならず思想社會の苟もすべからざる所あるを信ず

公　開　狀

某等此處に、基督教徒有志を代表し我帝國憲法第二十八條に明示せる信教自由を擁護せんが爲めに此書を我立法者と有司とに呈し併せて我公衆に訴ふ

第一六月中旬熊本縣飽田郡横手村長國寺に於て熊本縣知事松平正直氏は町村長町村會長を集めて演說して曰く、小學校教員に禁止すべき者二、一は政黨政社に關することとなり、二は耶蘇教を信ずることとなり、耶蘇教は外國の教なり決して信ずべきものに非ず、小學校教員は宜しく去年頒布し給へる勅語に洵すべし、若し耶蘇教を信ずるものあらば猶豫なく處分すべしと

第二本年七月二十五日熊本縣山鹿郡山鹿高等小學校長赤星某は警察官の密告に因りて同校生徒佐久間敏彦、高木秀雄、今井義亮、高木友次郎が耶蘇教聖經を研究することを知り四人を譴責して其研究を已めずんば退校を命ずべきが故に三日間に返答すべしと曰ひ佐久間敏彦が之を肯んぜざりしを以て校長の命に背く者なりとなし終に退校を命じたり

第三第一項に掲げし熊本縣知事が爲したる演說は九州自由新聞に掲載せられて既に公衆の知る所なりしのみならず、右の席には熊本縣縣會議員栗津武雄在りて慥かに之を聞取り證憑の歴然たる者ありとす

第四東京府下に於て發行する教育上の新聞教育報知の如きも、亦熊本縣山鹿高等小學校長の擧動を是なりとし、小學校生徒は政黨政會の會に列るべからざるが如く、亦耶蘇教に入るべからずと云へり

第五以上の事實に因りて之を見るに熊本縣知事及び赤星某なる高等小學校長の處置たる我憲法の明文に背戻せしことと明瞭なるのみならず、此事實たる獨り一縣の弊害に止まらずして、各地方亦之に類するの者多く且輦轂の下教育新聞記者たるものすら詭怪の論を逞ふして之を辯護する者ある也

第六若し基督教を信ずる者は小學校生徒たるべからずとせば、基督教信者及基督教信者の子弟は小學校教員たるの資格を奪れたる者にして國民教育を受く能はず從て國民たる完全の資格を備るの機會を失へる者也事情斯くの如し其我信教自由の大權を侵害し國民教育の旨趣に悖りたる者たるを疑ふべからず某等は我立法者が常に其憲法を維持し我有司殊に文部省が其監督する教育部内の過誤を正し、而して聰慧なる我公衆が必らず某等の言の正理たるを認識すべきを信ず、是れ此書を裁して、天下の公衆に質す所以也

植村正久　本多庸一
井原梶之助　竹越與三郎
平岩愃保・早乙女豐秋
横井時雄　渡瀬寅次郎
原田助　山路彌吉

○火星談

科學の宗教に密着の關係あるは今更云ふ迄もなく天文學の如き即ち然りとす恰も今年は火星の我地球に最も接近するの年なりとて各天文學者は之れが觀測に注意を怠たらずと云ふ折柄毎日新聞紙上に掲げたる寺尾博士の火星談は時節柄面白く且つ有益の談なりと思へば玆に轉載して我(宗教)讀者の高覽に供する事とせり

米國リック天文臺に於るが如き大望遠鏡を以て觀察する時は火星の表面は一幅の大畵圖なり「キバミ」たる所あり黑色の所あり白色の所あり而して其の「キバミ」たる所は陸なり黑色なるは水なり白色なるは雪なりとの說あり又地平線上五十二度の點より南極三十度の間に連綿せる皎々たる一條の白線あり是れ雪原なり其の雪原の直下に三箇の大黑點あり是れ則我が地球の如き大陸なりとの說あり誠に火星界には

大陸河海氷原ありや

曰く火星界に大陸河海氷原ありとは已に古き說なり文章上の豪傑は上千古に透徹し下數千年を看破せし烱眼の者ありと雖も天文家は人間なれば精細に幾千萬里の遠を觀る能はず如何なる大望遠鏡の力を藉るも人間は

入間なり彼の河海の中潑溂として躍る鮮魚あるや時に風雲を驅る蛟龍あるや彼の大陸には櫻花に霞む春の上野明月に美人の舫を浮ぶる夏の須磨の如き名所ある大陸河海氷原あるは諸學者の說によりて明かなり但し海は太西太平洋の如き者にあらずして地中海の如き者なりとのことなり

已に此等の者ありとせば運河ありや否運河に關しては種々の說ありスキヤアペラルの發見せしが如く双路運河ありと云ふ者あり否々一筋の運河なりと云ふ者あり或は二筋の運河にあらず黑色にして幅廣き一帶の條路なりと云ふ者あり或は人爲の者にあらず否人爲の者なり其假定的湖水或は海より始りて其の尾假定的湖水及海に注入するを以て見れば人爲の運河なるや疑なしと論ずる者あり或は現今の觀測せし所を以て直に双路運河の說を否定すべからず元來運河は觀測の時期によりて單線たることあり複線たることあり春分より少し以後秋分より少し以前複線に見へ夏及冬には單線に見ゆるなり而して火星の南球は今、中夏にして北球は中冬なり南球の春分は三月二十日より始まり南球の夏至北球の冬至は共に九月十三日より始るなりされば目下の觀測によりて複線に見へざるは不思議ならずと論ずる者あり或は運河の中には水なしと云ひ否水ありと云ふ者ありて其の說一ならず果して

運河ありや否

曰く我が天文臺の望遠鏡は固よりリツク天文臺の者の如く精且大ならず又余は理學的否寧ろ哲學的觀測をなさず專ら運動上の觀測をなし居るなり故に實測せし說として別に新奇の見なし然れども運河に双路ありとは受取り難き話なり假令ありたりとするも果して運河なりや否は測知し難し詮ずるに火星には空氣ありとの說あるより種々の臆測も出るなり人民の棲息するや否の確證もなければ其の人爲なるや否も定め難し然れどもスキヤアペラル氏は天文學者中最も精透なる眼を有し人に先て細微の物を發見すること屢々ありし人なれば其の觀測全く誤りなりとは斷じ難し已に或る人の如きは運河は氷原の裂罅(?)なるべしと論じたることありされ

ば運河的の線あるには相違なきも果して人爲なるや運河なるやは尙幾多の觀測を經て充分の議論を戰はさゝれば斷定する能はざるべし殊に今回觀測に於て双路運河の說を否定する多きに於てをや

大陸河海氷原空氣ありとすれば動物は棲息し得べし動物棲息し得べしとせば次に來るべき者は我が人類に等しき動物火星界に棲息するや否の問題なり已に歐洲天文學家中には火星は月球の如く無人鄕ならずとの說を抱持する者ありと聞く我々素人の量見にて亦斯の如き思想は浮び來るなり實に

人民ありや如何

曰く炊煙を見る必ず家あるを知る嗜香を聽く花あるを曉る花なきに嗜香浮動し家なきに炊煙飛騰すべき筈なし海あれば水あるべし山あれば草木あるべし空氣あり水あり草木あれば人類に等しき動物ありと推測するは猶香を聽て花あるを推し炊煙を見て家あるを推測するが如し好し人類の棲息せる證據なしとするも此推測を以て全く誤れりと謂ふを得ず非人類棲息說も無證據なれば人類棲息說も亦無證據なり等しく無證據なりとすれば其の空氣大陸河海等の人類生活に必須の物の存在するより推繹して人類棲息說を唱ふるも決して無稽のことにあらず今にして非人類棲息說を唱ふるは炊煙を見て家なしとするに仝し故に非人類棲息說の證據を擧ぐるは人類棲息說の證據を擧るより難かるべし‥‥‥然れども是れ余の說にあらずフランマリアン一派の說なり今回の觀測によりて大に其說に變化を來すとあらんも知らず

我々素人の判斷によればフランマリアン派の說大に理あるが如し然れども尙疑なきにあらず所謂空氣なる者も果して我が呼吸する者と仝一なる酸炭素と窒素との抱合なる歟將亦我が人類に有害なる水素より成れる歟若夫れ人類に有害なりとせば

人類は棲息する能はざるべし如何

曰く是は我々人類の考なり假令火星界の空氣をして我が人類に不適當なりとするも我が人類に等しき動物の棲息する能はざる理なかるべし彼の水中に游泳噞喁す

る魚類土中に棲息蟄伏する虫類をして口あらしめば彼等は必ず水中土中の外動物の棲息すべき世界なしと言はん然るに水中土中の外他に大なる世界ありて我が人類は棲息するに非ずや星界の空氣我が地球の空氣の如くならずとするも人類棲息する能はずとは斷定し難し我が人類に有害有毒なる空氣を呼吸して生活し得る人類のあるやも知れず我に有害有毒なるがゆへに火星界の人にも有害有毒なりと斷定するは倘鯉魚蚯蚓の我見のみ……然れども是れ余が說にあらずフランマリアン氏一派の說なり

フランマリアン派の說は理論上誠に面白し然れども倘疑ふべき所あり極寒にして一年三百六十五日紛々として雪花天に翻り氷柱檐に懸り四圍一白の銀世界にして稜峭たる朔風肌膚を刺して四肢爲に龜して凍死するか或は炎熱酷甚八卦爐中にありて蒸さるゝが如く身躰爲めに靡爛するが如き極端の氣候なりとせば人類は棲息する能はざるべし如何

曰く是れ正に起るべき疑問なり火星の氣候は激變するなり我が地球の軌道は稍圓圏的なるがゆへに氣候も激變することなし桃咲き櫻笑ひ梅子黄となりて綠葉陰を成し桐葉落て秋風起り紅葉散りて六花舞ふ而して其の間十二ヶ月決して急激の變なしと雖も火星は然らず火星の軌道は隋圓なり故に寒熱の變化は之を地球に比して甚しきに相違なし然れども之を以て直に非人類棲息說を唱ふるを得ず北極の端赤道の下にも動物は棲息せり火星の人類は其の氣候に堪へ得るの機關を有するやも知れざるなり且人類は必ず土着とのみ限りたる者にあらず雁は寒を逐ふて移り燕は暖を逐ふて移る火星の人類は雁の如く燕の如く漂浪的人類ならんも知らず故に氣候激變を以て直に非人類棲息說を破る能はず……然れども是れフランマリアン派の說なり余が說にあらず

なか〳〵面白き說なりされども倘疑なき能はず火星の人類をして土着的にして而も急激なる氣候の變化に堪へ得るの人民なりとせば固より異論なしと雖も若し之を漂浪的人類なりとせば大に疑訝に堪へざる者あり氣

候徐に變ずる時は甲所より乙所に移ると易し然れども急變するときは甲所より乙所に移ると難かるべし是故に斯くの如き國にありては人類を甲所より乙所に運ぶ極迅の通路なかるべからず火生界には我が地球の者より一層迅速なる

鐵道滊船あるや

曰く鐵道滊船あるや否は知らざるなりされども火星界には我が人類の有せざる便あるやは知れず元來火星は我が地球より引力尠し我が地球に於る一貫目の物も火星界に於ては其より輕く感せらるゝなり我が地球上翠帳紅閨の裡に人となり給ひて綾羅の衣にも堪へ給はぬ姫君も火星界に至れば巴、板額に優る勇力の人となり給ふを得べし地球に於て六尺の墻を飛越す筋力ある人は火星界に至れば――好し泰山を挾て北海を越る能はざるも――革嚢を抱きて小山位は飛越すを得るなり且動物は必ず足を以て歩まざるべからずとの道理なければ火星界の人類は一種特別の搆造を有し兩腋翼ありて飛行自在なるやも知れず唯に鐵道滊船の存在不明なるを以て非人類棲息説の證とならず然れども‥‥是れ余が説にあらず歐米諸學者の説なり

今假りにフランマリアン氏一派の説を信なりとなし火星界中に住民ありとせば之と交通するの道を求むるも全く出來難きとにあらざるべし近着の米國新聞を見るにフランシス、ゴルトンは火星の地球と交通に關し書を倫敦タイムス新聞に寄せ日光の力を藉り以て交通をなすの方法を論じたりと云ふ報あり其の信僞は之を知るを得ずと雖も兎に角斯る空想を抱きたる人あるや明かなり果して斯の如き方法を以て火星と地球の

通信をなし得べきや否

曰く斯る空想を抱くの人其の數尠からず月界に人民棲息せりとの説あるや曰く已に通信の方法を講じたる者あり月球は無人鄕と確定せしより世の空想家は其の方法を以て直に火星に移し喋々交通の出來得べきを論ずるに至りたり然れども其方法たる誠に空漠たる者に過ぎず之を例へば勾股弦の如き簡易なる形を作り電氣叉は日光の力を藉りて之を反射せしめ以て火星界に通信

するにあるなり蓋し勾を三とすれば股は四となり弦は五となる者なりとのことは苟も道理心ある人間の直に理解し得べき簡單なる者なり故に火星界に人間棲息し其の人間は我が人類の如く進歩し我が人類の如き望遠鏡を有せりとせば今や地球と火星と接近するの時なれば亦必ず我が地球の觀測をなすなるべし果して觀測をなすとせば我が地球より示したる勾股弦の圖は彼等の望遠鏡に映ずべき筈なり已に彼等の眼中に映射すれば彼等必ず言はん地球上に斯る物のあるべき筈なしあるべからさるの物の我が眼に映ずるは是れ地球の人類の我々に交通を求むるの意なるや知るべしと於是乎彼等は亦必ず勾股弦の如き簡單なる物を作りて我が人類に應ふるならん我れ彼に挑て彼れ我に應じ彼我互に其の意を通ずるを得ば爰に通信は了りたる者なり然れども：：：是れ歐米諸家の説なり果して斯の如き方法を以て通信し得べき否余は之を知らざるなり況んや此の通信法を以て通信し得るとするも尙一箇の困難あるに於てをや

其の困難とは何ぞや

曰く火星と地球の關係は地球と金星の關係の如き者なり今や火星は地球に接近し其球面太陽の光を以て照耀さるゝが故に身を地球に置けば充分に火星を見るを得可と雖身を火星に轉じて地球を見る時は太陽、地球の背面を照すの故を以て我が地球を觀測するを得ざるなり否見る能はざるに非ずと雖も我が地球にありて宵明星曉明星を見るが如く其時極て短しされば或る一派の人の説の如く火星界には進歩せる人民あり進歩せる望遠鏡あり天文學家あり又彼の通信法を以て通信すべしとするも果して豫想の如く不充分ながらも通信し得るや否知るべからざるなり要するに如斯通信法は唯空想家のユートヒヤに過ぎず彼の空想家も言ふ迄にして之を躬行實施せんと欲するにあらざるべし

天に二日なしとは漢學家の唱ふる所なるが火星には二箇の月(衛星)ありと聞く誠に

二箇の月ありや如何

曰く火星界には二箇の月あり此の月は華聖頓天文臺の

天文家ホール氏の發見せし者なりと雖も我が地球の月の如く大なる物にあらず十五六吋の望遠鏡を以てするも詳に其の位置を知るにあらざれば之を見るを得ず其の周圍の如きは東京市より小なるが故に優に東京市上に載するを得べし

東京天文臺の運動上の
　觀測の目的及方法は如何

曰く火星は其の見る所によりて其の位置を異にす甲所より見るときは彼方に見へ乙所よりすれば此方に見ゆ而して其の位置の定不定は暦書に大なる關係を有するなり今日と雖も其位置畧々一定せるに相違なきも未だ精確ならず故に我天文臺は書をシドニー天文臺に送り相合して運動上の觀測をなさむとを求めたり然るに其後米國華聖頓天文臺は書を我が天文臺に送り諸國相合して共に觀測をなさむとを求む依て相合して觀測をなすに決し目下觀測中なり請ふ是より其の目的方法を語らん

運動上の觀測の目的及方法

本年は火星の最近なるオッポジション（太陽と火星間に地球のあるとき）にある年にして而も星學家には極めて緊要の年なり元來太陽と地球の距離即之を換言すれば太陽のパララックス（太陽から地球を視しときに含む所の角度の一半）を決定するの法は天文學上重要なる問題の一にして又最も困難なる者なり是を以て之を決定せんがため古來星學者が其の腦力を費せしと幾許なるを知らず從て其の方法の如きも種々ありと雖も火星の最近なるオッポジションの時其のパラ、ックスを測定し以て間接に太陽のパラ、ックスを決定するの法其の主要なる者の一に居る而して火星のオッポジションは凡そ二年二ヶ月にして一回ある者なり然れども其の最近なるオッポジションは稀に見る所にして凡そ十六年を一期とす今明治六年以來明治二十七年に至る間の各オッポジション月日及距離を表示せん

　但し太陽と地球との距離を單位とす

明治六年	四月二日	〇、五六
同　八年	六月十九日	〇、四四

同　十年	九月五日	〇、三八
同十二年	十一月十二日	〇、四九
同十四年	十二月廿六日	〇、六一
同十七年	一月三十一日	〇、六七
同十九年	三月六日	〇、六七
同廿一年	四月十日	〇、六一
同廿三年	五月廿七日	〇、四九
同廿五年	八月三日	〇、三八
同廿七年	十月二十日	〇、四四

表中其の距離の最大なる者は〇、六七にして最小なる者は〇、三八なり而して本年は其の最小なる時に當れるなり是を以て火星の觀測より太陽の距離を決定せんとするには明治十年以來最頁の年となす而して火星の測量より太陽の距離を決定するに二種の法あり一は或る地方に於て晨昏兩度の測量より得る者にして一は其の緯度大に違ひ其の經度相近き兩地より火星の子午線經過の時の測量より得る者とす但し第一の方法は頗る便利なりと雖も我が日本に於ては之を用ゆるを得ざる理由あるを以て是非共第二の方法に依賴せざるを得ず已に之に依賴するに於ては豫め其の對手の地方を選み以て其の手筈を定めざる可からず於是乎我が天文臺は濠洲シドニー天文臺を對手の地となし去る五月の初め一書を仝天文臺に送り之れが手筈を定め爾來專ら觀測に從事し今や結了せんとすされば其の結果の如何は他日之を足下に語るべし

〇敎育談

左に掲ぐる一篇は品川氏が今回遊歷中九州熊本の某學校に於て爲したる敎育談の要領なりと云ふ（敎育時論に見へたり）全篇の要旨精神の修養を輕視する敎育の時弊を痛論するや甚だ切なりと云ふべし

余は、到るところに吉田松蔭の事のみ話すが、是れは、其育られたる恩を忘れることが、出來ぬから話すのである、松蔭が、塾を開きしは、丁度二十七歳の時にして、余は、十五歳にてありし。塾は、八疊敷一間と、他に六疊の間と、五六間の土間位にて誠に疎末なる藁葺きであつたが、四方より入塾して、松蔭の弟子となるものが、次第々々に多くなり。生徒の總數三百名內外にも達し。斯かる間狭まの塾舍內に

は、固より詰まる道理もなければ、重立つ門弟の發起にて、廣さ四疊半の小屋を建て繼ぎしが、用材も古き材木にして、建築の勞に至るまで、門弟も力を盡くし、中谷茂十郎と云へるものが、大工の勞を取り、余は、左官となりて、壁を塗れり。此時松蔭は、壁塗りに用ゆる土を投上げしを、余が屋根の上に在りて、之を受け損じたるより、其土が松蔭の顔に落ちて、目を痛める抔の出來事もありて、漸く成就し。伊藤、山縣、山田伯等、皆な此の如き有樣にて、松蔭の敎育を受け、而して、松蔭は、廿九歳の時、獄に繫がれ、翌年三十歳を最後として、死刑に處せられたり。扨て、松蔭の事を話す序でに、今敎員諸君に話し置くとは、松蔭が怒りし顔を現はさゞること是れなり。余は、松蔭が廿七歳の時より廿九歳の時まで松下塾に在りて、朝夕松蔭の左右に居りしが、一度も叱かられしとなかりし。然れども、余を始め、其他皆な小供心非常に松蔭を恐ろしく思ひ居たりし。近來東京にても、敎育に經驗ある人、大概、生徒に對して、怒氣を顯はすより、之れを默制するに若かずと、云ふとを唱ふるが如し、敎員たるもの斯くある方宜しからんと信ず。今又た生徒諸君に話し置くとあり。松蔭は、生徒に向つて、頻りに算術を知らねばならぬと勸め、士農工商、其他總べてのものが、算術を知らずでは、萬事萬端治まりが付かぬと、申聞かせり。又た余等は、歷史と地理とを學ぶことを勸められたが、此時までは、地理書抔は、甚だ不完全にして、極簡略なる萬國地理書三冊ものありしまでにて、余は、十五歳にして、始めて、地理の敎を受け、萬國地理の一端を窺ひ得たり。又た日本、及び支那歷史を讀むには、是れまた簡略なる、歷代沿革地圖に引き合せて、敎へられたり。

右の如く、松蔭の敎方では、歷史と地理とは、別物にせず、歷史中地理を敎へ、地理中歷史を敎へて、兩者必ず相密着せしめ、餘程活きたる敎授の仕方であつた。松蔭甞て、東海道筋で、確かに何處とは記憶せざりしが、何にしろ有名な古戰場であつたが、今の伊藤總理に向ひ、利助よ汝は、日本歷史を讀んで居るから定めて此處は、如何なる舊跡であると云へることを知つて居るならんと、問ひしに、伊藤總理は能く記憶し居らざりしと見へ、知りませんと答へしに、松蔭又た問ふて曰く、利助は、幾度び江戸には行きしかと、伊藤總理は、二度江戸上りを致しま

したと答へたり。松蔭曰く、然らば往復合せて、東海道を四度通りながら、此處を知らぬかと、伊藤總理も此時は一ト縮みになれり。又た松蔭は、手紙抔にてまだ歳も取らぬ門弟を感發さすることが、至極上手であつたが、余にも、屢々獄中より書面にて、訓戒を加へ、安心決定をせよ、悟道を開けよと、申聞かせり。當時余は、まで十五六位ひで、コンナにまだ歳を取らぬに、安心決定が出來、悟道が開けて、たまるものか、併し松蔭の敎方では、小供心にも、能く分る樣に上手に遣つた、斯る工合ひにて、松蔭が、其門弟を育てるさま、我子と毫も異ならず、隨つて、門弟より松蔭を仰ぎ、松蔭を慕ふこと親子啻だならず。近來世は、次第に澆季となり。師弟間の間係抔、餘程輕薄に流れ、東京邊の學校では、悉くとは云はれざるも、槪して。子弟の精神敎育は、甚だ不行屆にて、師弟の間、實に冷々然として、少しの暖まりもなく、敎師は、唯だ授業時間に、一時間か、二時間位、敎場にて、生徒の顏を見る丈けにて、途で逢ふては、其顏も見知らぬ位ひ、敎師はホンの營業主義、生徒の敎師を視ること毫も雇人に異ならず、斯る土地は、まだ腦髓の固まりが付かぬ、幼き子弟の容易に行くべきところにあらず。尤も純粹の專門主義で、深く一科の學問を修めんと欲するものは、東京に行かずして、不都合なり。故に大學校入學希望のものは、上京を勸むるも、それとて、其の土臺丈は、成るべく田舍で作るべし。其他のものは、東京と田舍と、學問の進步の程度を比較したらば、田舍の方、東京より倍も進步するとゝ信ず。これは些と一般の人の考へには、反對し居る樣なれど、東京は、見るもの、聞くもの、一事一物として、青年の奮發心を撓まし、青年の發芽を挫く、妨害物ならざるはなし、一トたび此都會の惡風に感染せしものと、田舍の醇朴なる氣風を受けて生長し、淸淑の空氣を呼吸して育だちしものと、比較せば、其結果霄壤の差を生するに至るは、必然なり。當熊本の如きは、世間の流行に染まず、質素勇敢の氣風大に行はれ、子弟の育だつ場所としては、最も適當なりと信ず。是れは舊藩主細川家二百有餘年間薰陶の遺風今日に至るまで、尙消滅せざるものにして、此遺風こそは、敎育なり實業なり。其他本縣百事の發達進步の基礎根本となり居るものなれば可成其本を忘れず、益々祖先傳來の美風を培養して、敢て忽にすることなく、生徒諸

君は、此愛すべき土地を去りて、みだりに輕薄風を成す東京抔に出掛けずに、此學校に在りて、智を研き、徳を養ひ、躰を練りて、其身を發達せしめ、以つて國家有用の人物となるべし。余の郷藩毛利家の招魂祭に、第一席を占むる、田村四郎左衛門の其の歌に「兩輪の文武の道がかけたらばかたわ者とぞ孔子のたまふ」とありて、諸君は、其學業の進步を圖ると、同時に體育を盛んにして、其身膽を鍛錬すべし。彼の東京抔の學生の如く、如何に其學藝のみ進步しても、其身が肺病や、胃病抔に取り付かれて、顔青ざめて、居つては、迚も其學びし學問の目的を達することは出來ず、數多の財を抛ちて、數年間勉强したる骨折も、無駄な骨折となり。宿年の志望一朝にして、水泡に屬する、なさけなき仕合せに遭ふも、測り難し。是れ諸君の最も注意すべき事なり。羅馬人言へることあり「活溌の精神は健康體に住ふ」と、至言と言ふべし。

彙　報

マッコー、レイー氏は久しく北海道に避暑せられしが去月中旬歸京し爾來孜々敎務に勉勵のよし

ローレンス氏も稍々健康體に復して過日歸京せられたれば是れ又敎務に從事の事なるべし

ゆにてりあん第一協會の說敎は相變らず古莊三郞、佐治實然氏等の盡力にて每會相應の來聽者もありしよし久しく避暑中なりし内外の人々も既に皆々歸京の事なれば自今は益々盛大に赴く事ならんと云ふ

自由神學校も愈々明六日より始業のよしにて入學生徒も大分增加したりと云ふ

明治廿五年十月十八日印刷
仝　年十月十九日出版

定價二十五錢

發行兼印刷人　前川太郎

編輯人　神田佐一郎

東京京橋區加賀町八番地
發行所　日本ゆにてりあん弘道會

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　秀英舍

宗教定價表

一冊		六錢
六冊	(半年分)	三十錢
十二冊	(一年分)	五十錢
凡べて郵税を要せず		

廣告料

一行五號活字廿四字詰	一頁六十二行
一行以上	一回八錢

(注意)

送本幷ニ廣告共一切前金ニテ申受候事本誌幷ニ廣告料ノ代金御拂込ノ節郵券代用ハ御斷ハリ申上候不得止地方ハ五厘券一割増ノコ

郵便爲替ハ東京芝口郵便局へ向ケユニテリアン弘道會宛振込ノコ

前金切レタル節ハ包紙ヲ朱書キニ致シ置候間早速御送金願上候

K288.11
5 1 v.1